

江南町文化財調査報告 第9集

塩 西 遺 跡 II

県道熊谷・小川・秩父線自転車・歩行者道路
設置事業にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書

1 9 8 9

埼玉県大里郡江南町教育委員会

江南町文化財調査報告 第9集

塩 西 遺 跡 II

県道熊谷・小川・秩父線自転車・歩行者道路
設置事業にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書

1 9 8 9

埼玉県大里郡江南町教育委員会

序

江南町にあっては、「塩」と呼ばれる地域を町の「ふるさと」の一つとってよいでしょう。里山の緑と緩やかな斜面に点散する屋並の風景には、変貌の激しい現在でも、千古の歴史を秘めてきた床しさを感じられます。

東西に伝う県道には歩行者、自転車道が設置されました。この工事に先立つ埋蔵文化財の発掘調査では、郷土研究・学校・社会教育に益する多くの記録、資料を得ることができました。

台地をおおう赤土の中より現われた黒燐石製のナイフ型石器は、江南の地に足跡を残す祖先の最も古い証拠です。以来、江南最初の王となり、塩古墳群内の前方後方墳に眠る首長へ、また幾時代を経た人々の生活を示す資料も得ています。開発に伴う文化財の保護は、生活上の利益を否定するものではありませんが、年々増大する開発との競争は続くでしょう。そして気付いた時「ふるさとの姿」は記録の上には無いとしたら、とても悲しいことです。

幸い塩古墳群は、埼玉県の史跡となって保護され、長くその姿に歴史の証言を宿していくでしょう。江南町教育委員会では、生活の豊かさの中に心の豊かさを見失わず、この豊かさを重ねる環境づくりに、生涯教育事業等を通じて努力したい。

おわりに、文化財保護のため調整から、現地作業、事務に精励された方々の労苦と熱意に深く感謝しお礼を申し上げ、本書が広く活用されますことを願うものです。

平成元年 3 月 31 日

江南町教育委員会

教育長 細 井 多

例 言

- 1 本書は、県道熊谷・小川・秩父線自転車歩行者道路設置事業に伴い、事前調査された塩西遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、埼玉県教育局指導部文化財保護課の指導のもと、埼玉県より委託を受け江南町教育委員会が主体となって実施した。
- 3 発掘調査から報告書作成に至るまでは、江南町の直営事業とし次の年度計画により実施した。

発掘調査 1987年（昭和62年）1月 7日～昭和62年3月25日

整理報告 1988年（昭和62年）10月 1日～平成元年3月31日

- 4 発掘調査にかかる遺跡の名称と所在は、次のとおりである。

塩西（しおにし）遺跡 埼玉県遺跡No.65-60

江南町大字塩字塩西 460番地 他

なお、塩西遺跡は、1983年（昭和58年度）の調査があり、今回はⅡ次として区別した。

- 5 発掘調査の組織は次のとおりである。

調査主体者	江南町教育委員会	教育長	細井 多
		教育次長	高橋 正
		社会教育主事	岡田 恒雄（前任）
		〃	大島 栄（後任）
		〃	大久保 達雄
		主 事	鹿庭 栄子
			森田 幹雄（前任）

- 6 発掘調査の担当は、新井 端（江南町教育委員会主事）が当たった。

調査員として新島 喜久雄（立正大学卒業生）、内間 靖（立生大学卒業生）の協力を得た。

- 7 整理報告は担当者の指導のもと、江南町教育委員会で行い、次の者の協力を得た。

（水洗、復元、トレース、版組、他）	神谷 君子
	福島 和子
	志村 もと子
	橋本 紀子

- 8 遺構、遺物の写真撮影、遺物の実測図作成・本文執筆は新井 端が行った。

挿図の縮尺は、遺構 60分の1、80分の1、遺物は4分の1、1分の1を基準としている。

- 9 本書中の地形図は、国土地理院発行の5万分の1地形図（熊谷）を使用したものである。

目 次

1989 塩西Ⅱ

序

例 言

I 発掘調査の契機と経過

1 発掘調査の契機	1
2 発掘調査の方法と経過	2

II 遺跡の立地と環境

1 遺跡の立地	4
2 歴史的環境	6

III 塩西Ⅱ遺跡の遺構と出土遺物

1 検出された遺構の概要	13
2 旧石器時代ユニット	15
3 旧石器時代の遺物	17
4 縄文時代の遺物	18
5 調査区に接する古墳について	23
6 古墳・歴史時代住居群	
第1号住居跡 S J 1	24
第2号住居跡 S J 2	25
第3号住居跡 S J 3	25
第4号住居跡 S J 4	25
第5号住居跡 S J 5	29
第6号住居跡 S J 6	29
第7号住居跡 S J 7	29
第8号住居跡 S J 8	31
第9号住居跡 S J 9	31
第10号住居跡 S J 10	33
第11号住居跡 S J 11	33
第12号住居跡 S J 12	35
第13号住居跡 S J 13	35
第14号住居跡 S J 14	35
第15号住居跡 S J 15	35
第16号住居跡 S J 16	37

第17号住居跡	S J 17		37
第18号住居跡	S J 18		37
第19号住居跡	S J 19		40
第20号住居跡	S J 20		41
第21号住居跡	S J 21		41
第22号住居跡	S J 22		43
第23号住居跡	S J 23		45
第24号住居跡	S J 24		49
第25号住居跡	S J 25		49
第26号住居跡	S J 26		45
土壇・溝・井戸・近世住居跡・埋没谷			51・55
7 常安寺館の現況			62
8 塩西Ⅱ遺跡の出土遺物			
住居跡			65
溝・土壇・井戸			67
埋没谷			67
IV 考察			
1 住居跡と出土遺物			119
2 墨書土器			122
3 塩西遺跡 火山灰同定報告			123
V 結語			129
参考文献			
図版			

挿 図 目 次

	江南町の位置	
第2図	塩西遺跡の位置	
第3図	塩西Ⅱ遺構配置図	3
第4図	江南町の地質図	4
第5図	塩西遺跡鉦物分析試料採取地点模式柱状図	5
第6図	塩西遺跡と周辺の遺跡分布	8
第7図	塩西Ⅱ旧石器時代遺物分布	14
第8図	塩西遺跡Ⅱ 第1ユニット出土石器	16
第9図	塩西Ⅱ出土縄文土器	19
第10図	塩西Ⅱ出土縄文土器 他	20
第11図	塩西Ⅱ出土石器	21
第12図	塩古墳群、第Ⅱ支群 第14号墳測量図	22
第13図	塩西Ⅱ第1号住居跡	24
第14図	塩西Ⅱ第2号住居跡 第3号住居跡 第4号住居跡	26
第15図	塩西Ⅱ第5号住居跡 第6号住居跡 第7号住居跡	28
第16図	塩西Ⅱ第9号住居跡 堀立柱建物跡	30
第17図	塩西Ⅱ第10号住居跡 第11号住居跡	32
第18図	塩西Ⅱ第12号住居跡	34
第19図	塩西Ⅱ第13号住居跡 第14号住居跡 第15号住居跡	36
第20図	塩西Ⅱ第16号住居跡	38
第21図	塩西Ⅱ第18号住居跡 第19号住居跡 堀	39
第22図	塩西Ⅱ第21号住居跡	40
第23図	塩西Ⅱ第22号住居跡 井戸	42
第24図	塩西Ⅱ第23号住居跡	44
第25図	塩西Ⅱ第23号住居跡 カマド跡	46
第26図	塩西Ⅱ第23号住居跡 カマド跡	47
第27図	塩西Ⅱ第24号住居跡 第25号住居跡 焼土壇	48
第28図	塩西Ⅱ 井戸	50
第29図	塩西Ⅱ 近世住居跡と井戸	52
第30図	塩西Ⅱ 溝 A12～A15 土層図	53
第31図	塩西Ⅱ B21～B26 土層図	54
第32図	塩西Ⅱ 包含層埋没谷	56
第33図	塩西Ⅱ 埋没谷	57
第34図	塩西Ⅱ A23～A29 土層図	58

第35図	塩西Ⅱ B26～B37 土層図	59
第36図	塩西Ⅱ A33～A37 土層図	60
第37図	塩西Ⅱ A50～A52 土層図	61
第38図	常安寺館 概略図	63
第39図	塩西Ⅱ 旧文殊尊祠跡	64
第40図	塩西Ⅱ 第1、3、4号住居跡出土遺物	71
第41図	塩西Ⅱ 第6号住居跡出土遺物	72
第42図	塩西Ⅱ 第6号住居跡出土遺物	73
第43図	塩西Ⅱ 第7号住居跡出土遺物	74
第44図	塩西Ⅱ 第9、11、16、17、18号住居跡出土遺物	75
第45図	塩西Ⅱ 第19、20、21号住居跡出土遺物	76
第46図	塩西Ⅱ 第21、22号住居跡出土遺物	77
第47図	塩西Ⅱ 第23号住居跡出土遺物	78
第48図	塩西Ⅱ 第23、24、25号住居跡出土遺物	79
第49図	塩西Ⅱ 埋没谷1 出土遺物	80
第50図	塩西Ⅱ 埋没谷1 出土遺物	81
第51図	塩西Ⅱ 埋没谷1 出土遺物	82
第52図	塩西Ⅱ 埋没谷1～2 出土遺物	83
第53図	塩西Ⅱ 埋没谷1～4 出土遺物	84
第54図	塩西Ⅱ 井戸 1～4 埋没谷出土遺物	85
第55図	塩西Ⅱ 出土須恵器	86
第56図	塩西Ⅱ 出土須恵器	87
第57図	塩西Ⅱ 出土須恵器	88
第58図	塩西Ⅱ 常安寺裏ステ場出土遺物	89
第59図	塩西Ⅱ 常安寺裏ステ場出土遺物	90
第60図	塩西Ⅱ 常安寺裏ステ場出土遺物	91
第61図	塩西Ⅱ 常安寺裏ステ場出土遺物	92
第62図	塩西Ⅱ 常安寺裏ステ場出土遺物	93
第63図	塩西Ⅱ 鉄滓 貝巢穴泥岩等	94
第64図	常安寺館出土 宝篋印塔基部	95
第65図	塩西Ⅱ 出土古銭 (1/1)	96
第66図	塩西Ⅱ 近世住居1号跡出土遺物 3号井戸跡陶製筒	97
第67図	塩西遺跡Ⅱ 主軸方位	119

図 版 目 次

(モノクロ図版)

- 図版 1 塩西Ⅱ遺跡周辺空中写真
- 図版 2 塩西Ⅱ 第 1 号住居跡
- 図版 3 塩西Ⅱ 第 4 号住居跡・第 3 号住居跡
- 図版 4 塩西Ⅱ 第 4 号住居跡・埋没谷 1
- 図版 5 塩西Ⅱ 溝・第 11 号住居跡完掘状態
- 図版 6 塩西Ⅱ 埋没谷 1・祠跡完掘状況
- 図版 7 塩西Ⅱ 第 1 号住居床下土壌土層・掘立柱痕跡
- 図版 8 塩西Ⅱ 第 9 号住居跡・第 13～15 号住居跡
- 図版 9 塩西Ⅱ 第 17 号住居跡～20 号住居跡トレンチ・第 18 号～20 号住居跡
- 図版 10 塩西Ⅱ 常安寺館土塁
- 図版 11 塩西Ⅱ 2 号井戸トレンチ 埋没谷 1 遺物出土状態
- 図版 12 塩西Ⅱ 2 号井戸裏込石組 土層
- 図版 13 塩西Ⅱ 第 21～22 号住居跡 発掘作業風景
- 図版 14 塩西Ⅱ 第 21 号住居跡・遺物出土状態
- 図版 15 塩西Ⅱ 第 16 号住居跡・22 号住居跡
- 図版 16 塩西Ⅱ 第 23 号住居跡
- 図版 17 塩西Ⅱ 第 23 号住居跡・カマド跡
- 図版 18 塩西Ⅱ 第 23 号住居跡・カマド跡
- 図版 19 塩西Ⅱ 第 23 号住居跡・カマド跡 発掘作業風景
- 図版 20 塩西Ⅱ 第 24 号住居跡・焼土墳
- 図版 21 塩西Ⅱ 第 25 号住居跡・埋没谷 4
- 図版 22 塩古墳群Ⅱ－4 号墳・埋没谷Ⅳトレンチ
- 図版 23 塩西Ⅱ 第 1 号～4 号住居跡の調査・防護柵の効果
- 図版 24 塩西Ⅱ 第 5 号～6 号住居跡
- 図版 25 塩西Ⅱ遺跡出土黒耀石・剥片
- 図版 26 塩西Ⅱ遺跡出土石器
- 図版 27 塩西Ⅱ遺跡出土縄文土器
- 図版 28 塩西Ⅱ遺跡出土土器
- 図版 29 塩西Ⅱ遺跡出土土器
- 図版 30 塩西Ⅱ遺跡出土土器
- 図版 31 塩西Ⅱ遺跡出土遺物
- 図版 32 塩西Ⅱ遺跡出土土器
- 図版 33 塩西Ⅱ遺跡出土土器

- 図版34 塩西Ⅱ 遺跡出土土器
図版35 塩西Ⅱ 遺跡出土土器底部
図版36 塩西Ⅱ 第23号住居跡出土石材
図版37 塩西Ⅱ 遺跡出土陶磁器
図版38 塩西Ⅱ 遺跡出土陶磁器
図版39 塩西Ⅱ 遺跡出土陶磁器
図版40 常安寺館出土 宝篋印塔基部
図版41 塩西Ⅱ遺跡出土遺物・作業風景
図版42 塩西Ⅱ遺跡出土火山灰・電子顕微鏡写真

カラー図版

- 1 塩西遺跡上空写真
- 2 第23号住居跡・同カマド跡

付 図

- 塩西Ⅱ遺跡グリット配置図 西半
塩西Ⅱ遺跡グリット配置図 東半
常安寺館周辺地形実測図
塩八幡神社周辺地形実測図

調査関係者名簿

(敬称 略)

(発掘調査)

新井 竹子	飯島 ひろ	飯島 しの	飯島 清子	内田 しづ
大沢 玉江	小林 勝子	小林 廣子	鈴木 てる	相馬 良道
国田 秀子	富田 米子	利根田 あい	利根田 すい子	
増田 つる	中島 文恵	吉野 君枝		
新井 健司	新井 勤	井上 進	市川 一彦	小久保 聡
柴田 金夫	柴田 清	高橋 史朗	水野 貴徳	持田 秀樹
橋本 克之	渡辺 信明			

(整理作業)

久保 信幸	関本 正彦	斉藤 和行	田端 辰己	橋本 克之
西原 崇浩				

(指導・教示をいただいた方・機関)

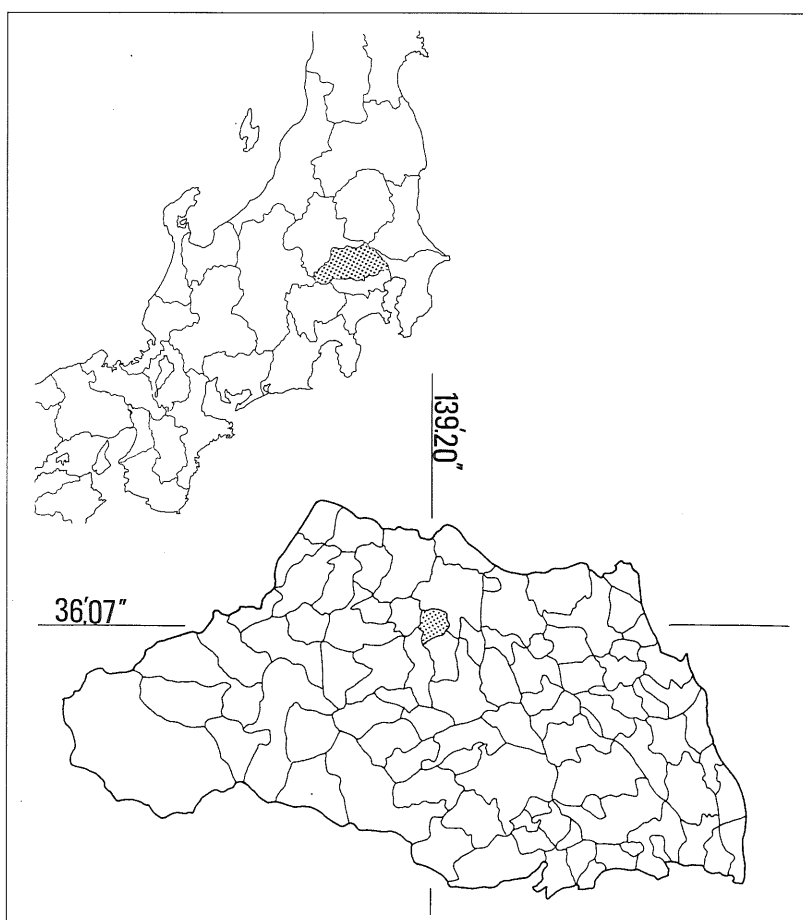
荒川 弘	井上 肇	今井 宏	出縄 康行	梅沢 太久夫
金子 正之	川口 潤	酒井 清治	関口 和男	沢出 晃越
高橋 一夫	高木 義和	鳥羽 正之	板野 和信	昼間 孝次
宮崎 朝雄	村松 篤	森下 昌市郎		
小林 得治	利根田 正吉	中島 武平	増田 喜重	
久保田 浩二	須藤 英敬	山中 伸之		

埼玉県熊谷土木事務所	埼玉県立歴史資料館	常安寺	八幡神社
------------	-----------	-----	------

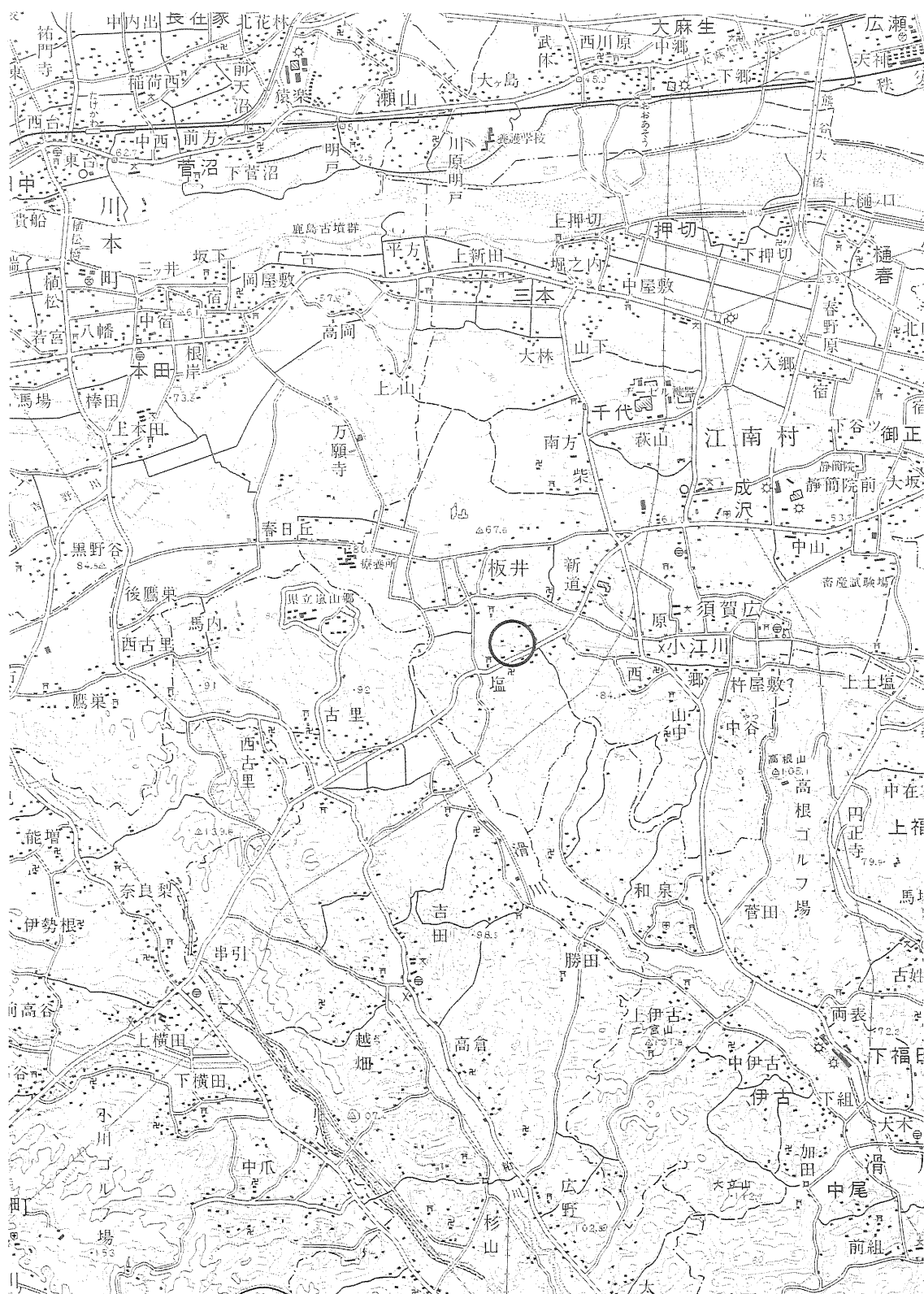
立正大学古代文化研究会	立正大学考古学研究会
-------------	------------

塩西遺跡Ⅱ

— 本文編 —



江南町の位置



第2図 塩西遺跡の位置

I 発掘調査の契機と経過

1. 発掘調査の契機

埼玉県江南町では増大する交通量に対処するため歩行者自転車専用道の設置について順次計画実施してきたところであるが、県道熊谷・小川・秩父線についても工事を実施するに当たり埋蔵文化財の所在と取り扱いについて県の土木部道路維持課、県教育局指導部文化財保護課は江南町教育委員会と協議を進めてきた。今回該当となった塩地区は、埼玉県史跡塩古墳群が立地しており、道路予定地も集落址である塩西遺跡を縦断していたことから当然工事予定地区内にも埋蔵文化財等が存在することが予想された。

埼玉県教育局指導部文化財保護課による試掘調査の依頼を受け、昭和61年2月24日に江南町教育委員会が試掘調査を行ったところ工事予定箇所の工事予定地区の大部分にわたって古墳および奈良・平安時代の住居址等の所在が明らかとなった。この結果にもとづき再度、先の三者による協議会をもち、工事予定箇所に当る約3000㎡の部分を発掘調査の対象区とすることが了解された。

発掘調査の実施主体については協議のうえ江南町が埼玉県より事業実施の委託を受け、町の直営事業として行う方針が合意された。調査の年度計画と内容については、初年度発掘調査、次年度遺物整理作業、3年度報告書作成作業とし、埼玉県知事との委託契約を締結した。

江南町教育委員会では、県による用地の買収等の進行をふまえ、昭和62年1月7日より同年3月末日までを発掘調査の期間として予定・実施した。

委託契約後、調査の実施および事業の実施にあたっては埼玉県熊谷土木事務所等の連絡を計り進めていくことにした。文化財保護法第57条の3に基づく埋蔵文化財発掘通知は埼玉県知事より出され、江南町教育委員会教育長からは、同法第98条の2に基づく埋蔵文化財発掘調査通知が文化庁長官へ提出された。文化庁長官からは62委保記第2-3289号をもって調査通知を受理したとの通知があった。整理報告書作成作業は江南町教育委員会が他の事業と並行してすすめ、多大の労力の上に完成された。

なお次年度工期分にかかる発掘調査については埼玉県埋蔵文化財調査事業団がこれを実施している。

2. 発掘調査の方法と経過

調査区は3000㎡の面積を有しているが、幅1m、しかも交通量の激しい道路の両側縁を、延々と掘り進むため調査の進め方、安全対策には十分な配慮をしなければならなかった。

調査方法については幅1mの調査区の表土除去を小型のバックホーで行い、路肩に停車した車で未調査部分の調査区に廃土を運び順次これを約1kmにわたってくりかえした。基準杭については国家座標にのっとり県道の直線部分にあわせたグリットを設定した。

調査の進行は熊谷から小川へ、東より西へ移行する進め方で発見遺構順にNo.をふり、発掘を終了後、先へ進むことにした。安全面についてはガードレールのない部分では防護フェンスを設け、道路から進入を防ぐようにした。しかし冬期のことで、大風による転倒もあり、凍結によるスリップのため車が防護フェンスをつき破って飛び込むなど、全く気づかれず調査であった。

夜間は常に工事用のランプを点灯していた。1月から2月初頭までの発掘調査は1m幅の調査区であるが、60cm程しか掘削できない箇所もあり遺構の性格、把握は困難を極めた。特に1～4号住居、6～7号住居、9～12号住居、13～16号住居など住居形態や規模など全くつかめていない。

常安寺館の場所では、全体の地形測量を行った。1月～2月はたびたびの雪にみまわれ、作業条件の悪化した日が続いた。2月末から3月には調査の後半より終末にさしかかり調査区は遺跡の最頂部、八幡神社周辺へ移ってきた。神社部分は大きなカーブのゆがみを矯正するため調査区が幅広くとられており、第23号住居跡をほぼ完掘することができた。又、調査区に隣接した古墳等の地形測量も行った。

今回の発掘調査は幅1m未満という作業条件の悪さから能率が悪く、遺構の性格、規模を把握することがむずかしいものであった。又、交通量の多い道路脇での作業のため安全面での気づかいが絶えないことも事実であった。遺跡の把握にかける慎重さと同様、安全対策にも十分な用意をすべきことは県事業の点からもずいぶんと参考になった。今後の調査にはこの方式や経験を生かしたいと思う。

最後に1件の事故もなく調査を終了できたことについて関係者の皆様に厚く感謝したい。

Ⅱ 遺跡の立地と環境

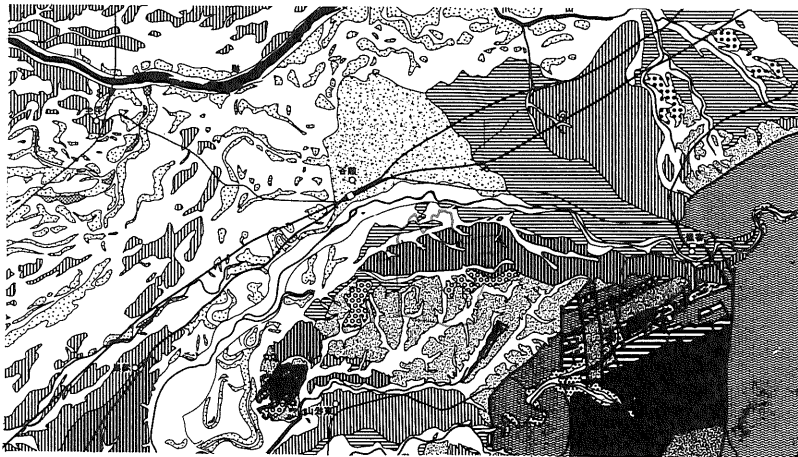
1. 遺跡の立地

塩西遺跡は荒川の右岸扇状地である江南台地上の南縁辺に立地している。台地の起源、地質についてはようやく研究が進められ、いくつかの報告がある。それによると江南台地を基盤とする第三紀層上には秩父古世層を起源とする砂礫層を乗せ、荒川中位段丘に相当する。そして、この砂礫層上の堆積面が台地面の基本となっている。東西17km、南北3kmの長方形をした地域である。

荒川に面する北縁は10mから20mの急崖となって沖積低地へと続く。南側は比企丘陵と接するが地形、地質的に判然と区別される。この境界部分を流れる和田川は台地長軸と並行して走る台地内でもっとも大きい河川である。江南台地の海拔高度は100m～40m、西部から東部へと漸次低下する起伏の少ない平坦な地形面を形成しているが、台地内には小規模な開析谷がいくつも発達している。

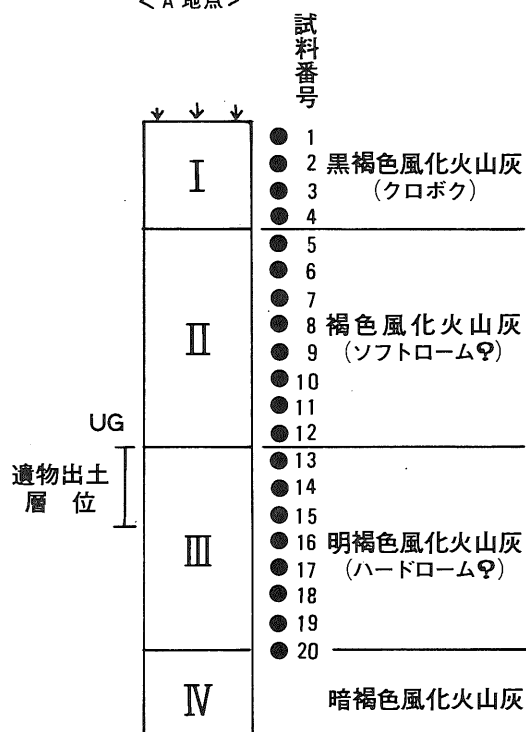
塩西遺跡は、この開析谷にはさまれた半島状の台地面に位置し、最頂部に塩古墳群が所在している。今回の調査は、この台地斜面を東西に縦断する形で実施された。江南台地の地質概要は表層部に腐植土を乗せ以下ローム層が堆積し、ローム層の下に粘土層、粘土層の下に台地の基本となる砂礫層が発達している。砂礫層の層厚は8m～20m程と推定されており江南台地北縁の姥ヶ沢地点での露頭中にはシルト層をはさんでいる部分もある。表層部の黒ボク土は耕作土とまざる部分もあるが、埋没谷部分で確認される。又、ローム層も下位の粘土層と整合する堆積で台地全域に見られる。このローム層は上部を大里ローム層に、下部は新期ローム層に対比され大里ローム層は南関東の立川ローム層との対比が考えられている。灰白色の粘土層は川本粘土層とされ、台地全域によく発達しており2m～5mの層厚を測る。これは下末吉ロームに対比されるが粘土化の成因については未だ良く分っていない。櫛引台地では、本層は砂礫層との互層、粘土混じり砂礫層とやや異なったあり方を見せている。

微地形についてであるが、塩西遺跡地点では、和田川に通ずる主要な浸食谷である正木谷で南面を、和田川沖積地で北側を、界されている。

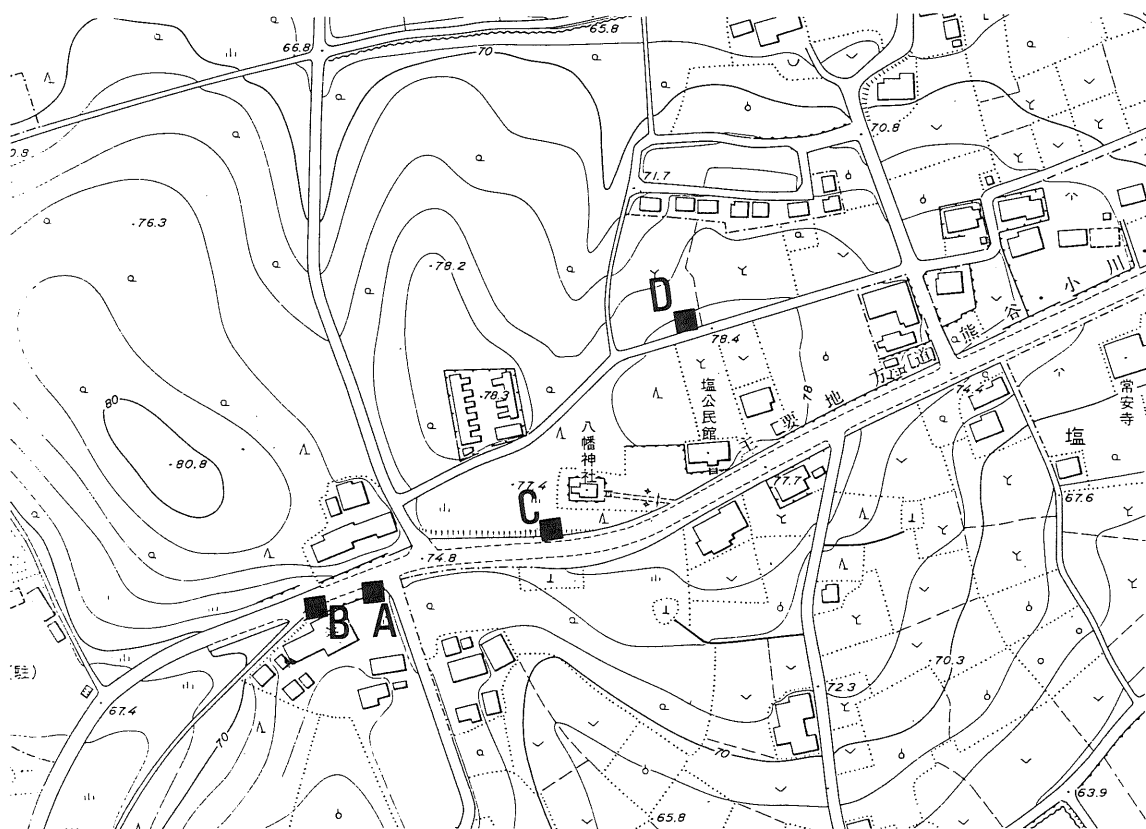
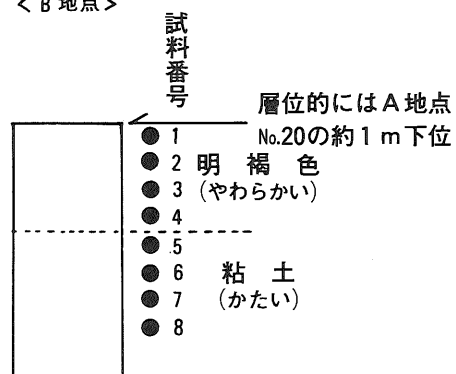


第4図 江南町の地質図

< A 地点 >



< B 地点 >



第 5 図 塩西遺跡鉦物分析試料採取地点模式柱状図

2. 歴 史 的 環 境

江南町の歴史を語るとき対象となる地域はどこまでか。この範囲を決めること自体が一つの解明すべき問題となってしまう。埋れた人々の営みの広がりや現在の私達の生活のものさしで決めてしまうことはできない。これは、はっきりしている。従来から採られているように自然環境によって区分される地域の上に、証拠としての遺跡、遺物を1つ1つ重ね合わせ総合的に把握することが妥当であろう。このためどんな小さな遺跡の断片でもおろそかにできない理由がここにある。

人々の生活は時代と共に栄枯盛衰を繰り返していた。遺跡の断絶、出現をたびたび見ることかできる。周辺地域との比較は時代の推移、特色を考える上で重要だ。当然江南町の各時代の姿を考える時、この範囲には時代によって差がある。本文では縄文・古墳時代を取り上げ江南町を考える一例としたい。

旧石器時代～縄文時代の遺構、遺物は本田・東台・上前原両遺跡で出土しており、周辺地域での発見例も増加している。本田東台遺跡からはいわゆる茂呂型ナイフ形石器が出土したが、フク土中のため層位的確認はされていない。このようなナイフ形石器は他に荒神脇遺跡（文1）、氷川遺跡、宮脇遺跡（文2）、南大塚遺跡（文3）、大岡遺跡（文4）、打越遺跡（文5）で採取されている。

牛無俱利遺跡（文6）、塩西Ⅱ遺跡からは、発掘調査によってナイフ形石器の出土層位が明らかとなった。牛無俱利遺跡、塩西遺跡では石器集中箇所が2地点確認され、旧石器文化の生活が江南台地上に営まれていたことが明らかとなってきた。

縄文時代草創期の資料は、宮林遺跡、打越遺跡に質・量とも豊富な出土例がある。江南町では尖頭器、有舌尖頭器等が採取されており該期の遺跡が見つかる可能性が高い。花見堂遺跡（文7）、向原遺跡（文8）等でも採取例があり比企丘陵、松山台地域にも旧石器～縄文草創期遺跡の増加が予想される。縄文早期の調査例は江南町内に多い、井草、夏島、稲荷台式の撚糸文系土器群と共存する多量の礫器、押型文土器の出土は、塩前遺跡（文9）、南方遺跡、宮脇遺跡、上前原遺跡、船川遺跡、原谷遺跡にある。表採例を加えるとさらに倍増する。周辺では打越遺跡、寺山遺跡（文10）とがある。本期の遺跡は江南台地域にかなりまとまっていたようで、南方、船川遺跡では住居跡も検出されている。また押型文土器もこれらの遺跡に多量に伴う例があり、客体的にしか出土しないと言われる状況と差異を感じられる。沈線文系土器は田戸下層式が本田・東台遺跡、越畑城跡（文11）にあり、三戸式は船川遺跡に検出されている。三戸式例は周辺では稲荷原遺跡（文12）にあり、旧石器時代以来、押型文系土器のあり方においても大宮台地周辺と類似する様相を示す。条痕文系土器群は本田・東台、上前原遺跡の他南方遺跡、舟山遺跡（文13）があり、野島期の住居跡は金平遺跡（文14）、虫草山遺跡（文15）にそれぞれ検出されている。前期にかかる遺跡は江南町内では採取資料のみで住居跡の調査例は無い。関山期は、平松台遺跡（文16）以外に調査例がほとんど無く、黒浜～諸磯期にかかる遺跡の増加、増大が指摘されている。前期後半～末には遺跡の調査・遺物の採取が無くなるが、上前原遺跡から前期終末に位置付けられる十三菩提式が出土している。本期の特徴として出土土器の分量は極わずかであるが直後型式の五領ヶ台式、下小野式の中期初頭の土器群を伴出しており、本地域では希少例であった。調査例の良好な例が大宮台地にあり、江南台地で

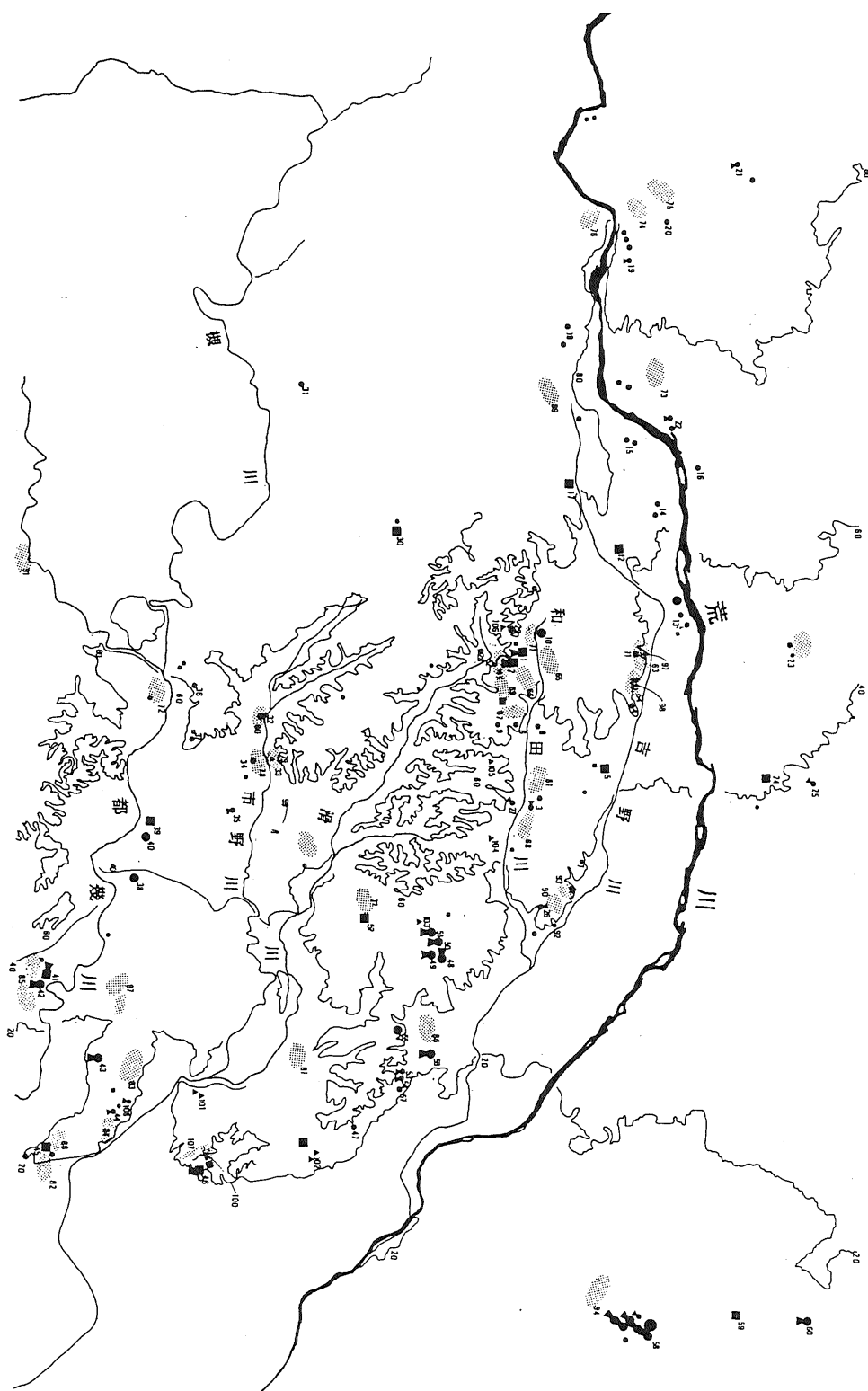
のあり方を考える上でたいへん参考になる。前期までの遺跡のあり方は中期になると全く異なり、広場を持つ集落がそこここに現われ、さらに拠点集落と言える例も出てくる。行司免遺跡（文17）、上本田遺跡（文18）は良い例で勝坂期～加曽利E期にかかる大集落である。一般的集落は上前原遺跡・南方遺跡・中郷遺跡（文19）・舟山遺跡・台耕地遺跡（文20）・衆生ヶ谷戸遺跡（文21）・神山遺跡（文22）・平倉東国寺遺跡（文23）がある。また沖積地の自然堤防上では万吉西浦遺跡（文24）に加曽利E式土器の埋甕がある。

江南町内でも勝坂式～加曽利E式期の土器が最も多く散布しているようだ。しかし、中期終末以降遺跡は減少傾向を示し、続く後期も同様である。上前原遺跡で称名寺式・堀之内式土器が検出される以外ほとんどない。わずかに橋屋遺跡（文25）花見堂遺跡・屋田遺跡（文26）・北田遺跡（文27）がある。北田遺跡は和田川の右岸台地に位置し、下流の塩西遺跡でも同時期の土器が出土しているため増加を予想できるが規模は小さいだろう。一方、台地下の大里沖積地の中から後、晩期遺跡が検出される例が熊谷市・深谷市等にあり、遺跡の台地下の進出はさらに明らかにされるだろう。

東西に伸びる起伏の少ない台地上には南側に連なる外秩山地・比企丘陵の山陵より涵養される地下水・雨水により、開析谷を開け、湧水は豊かである。この江南台地上での生活に加え、北に広がる荒川と氾濫原と化する沖積地に島状に出来上がった自然堤防地での活躍と、縄文人の生活舞台は考える以上に広範に及んだろう。

江南台地上と周辺地域の古墳時代初頭の集落は現在のところ塩西遺跡・丸山遺跡・吉岡配水場内遺跡（文28）等の発掘例があるにすぎない。隣接する比企丘陵や、松山台地の発掘例より少ない。比企丘陵・松山台地では北田遺跡・花見堂遺跡・沢口遺跡（文29）・番清水遺跡（文30）・五領遺跡（文31）・下道添遺跡（文32）等から集落の調査例が蓄積されている。これら4世紀～5世紀までの集落・墳墓からは、非在地系土器とされる近畿地方・東海地方系統の土器が多数出土している。特に五領遺跡では、器台・埴・坏・台付甕などの古式土師器の型式名となっただけでなく、周辺地域に例を見ない大規模な集落をつくり上げており、出土土器も近畿地方的な要素を強く持っている。

きわ立った墳墓として五領遺跡の北方、市野川を挟んだ丘陵上に山ノ根古墳（文33）が立地しているが、本墳は当地方で最も古く遡る古墳であり、しかも全長65mを測る前方後方墳である。古式の前方後方墳は高坂台地に立地する諏訪山29号墳（文34）も知られ東海系の大廊式土器を出土していた。山ノ根古墳は市野川・滑川が比企丘陵より抜け出す位置の丘陵頂部に立地し、この滑川を溯った最奥部の丘陵上に前方後方墳を主体に持つ塩古墳群が立地する。近辺の調査からS字口縁台付甕、小型器台など非在地系土器を出土する塩西遺跡・丸山遺跡・正木遺跡・船川遺跡・北田遺跡・行人塚遺跡等が蓄積されつつある。5世紀以降の集落は前代ほど検出されていないが、久米田遺跡（文35）・屋田遺跡・塩前遺跡・行司免遺跡が前代の集落圏外に広がっている。しかし、まだ少数と言える。塩前遺跡の場合、和泉期のカマドを持つ住居跡の発見があり、前代からの発展的な集落の継続を考えたい。しかし塩地域に集中して見られる4世紀～5世紀代の遺跡から6世紀代の集落を出現させる前に少なからず希薄な時期がある。あるいは主体となった集団が異なっているのかもしれない。本田・東台遺跡は、塩古墳より東に2km離れた和田川右岸に位置するが、和田川はさらに流下し雷電山古墳（文36）の丘陵裾を洗い吉野川と合流し現在の荒川へそそぐ。



第6図 塩西遺跡と周辺の遺跡分布

本田・東台遺跡は大規模な遺跡であり、対面する野原古墳群の被葬者たちの集落にはほぼ間違いのないと考えられる。現在のところ、塩古墳群の首長と野原古墳群の首長との間にただちに集団・世代の連続性をみることはできないが、塩西遺跡でも6世紀代の集落が現われつつあり、この問題は今後の調査によって塩古墳群、野原古墳群、本田東台遺跡等の造営開始時期・終末時期を広範囲に考える必要がある。

6世紀～7世紀代の集落は、本田・東台遺跡を始めとして江南地域には岩比田遺跡（文37）、塩西遺跡、野原久保遺跡・宮脇遺跡に調査例がある。しかし、まとまった住居跡の発掘例は本田・東台遺跡の他に例がなく、当地方鬼高期の集落の実態が明らかとなった。比企丘陵・松山台地・高坂台地では鬼高期の住居群は多数調査され、舞台遺跡（文38）では100軒に及ぶ住居群が発掘され、出土した多量の土師器は比企地方の土器編年の資料として重要である。この他に五領遺跡、番清水遺跡等にも良好な資料がある。荒川右岸地域では、江南町に隣接した鹿島遺跡（文39）、平方遺跡（文40）にも鬼高期の住居跡が現われ、さらに今後の増加が予想される。

集落に見合う古墳群は本田・東台遺跡の場合、野原古墳群である。野原古墳群は前方後円墳を含む20数基の円墳で構成されている。この前方後円墳を含め、過去2回の発掘調査が行われており、前方後円墳から2箇所の石室が確認された。前方部から片袖型胴張をもつ横穴式石室が、後円部からは凝灰岩の切石を用いた片袖型横穴式石室が明らかとなった。両石室はすでに盗掘を受けていたが鉄鏃等の若干の遺物が出土した。金井塚良一氏（文41）は前方部の石室は後円部の石室より新しいとし、6世紀末の築造を考えられているが、亀井正道氏（文42）は7世紀前半としている。周辺に2～3基を単位として分布する円墳群については発掘調査を行った坂詰秀一氏（文43）により、主体部構造の変遷と共に7世紀前半代から8世紀前半代にかかる築造と考えている。しかし正式な報告は未だ無く、詳細な検討を望みたい。江南地域には6世紀終末とされる伊勢塚古墳が知られ、野原古墳群と同様の規模を持つ前方後円墳であった。同様に、野原古墳群に対面する円照寺古墳群中にも前方後円墳がありほぼ同時代と考えられている。これらの前方後円墳築後、比企丘陵でも江南台地でも前方後円墳の築造は行われていない。かわりに鹿島古墳群、立野古墳群など円墳群と吉見、黒岩等の横穴墓群（文44）等が築造されていく。塩古墳群中にも本期に当る円墳群が存在し、切石組、胴張横穴式石室が確認されている。一方7世紀前半にはすでに滑川町に寺谷廃寺が建立されていた。和田川、滑川流域の開拓は4世紀前半より塩地域から始まっており、和田川流域へと広がり、6世紀代より本田東台遺跡の集落が開かれる。これは、前代からの不断の開拓が続けられていたのであり、農業生産の進展や、家父長層の台頭など在地での自立、発展を考えることができる。

本田・東台の集落に現れた小鍛冶跡はそのような実例だろう。金井塚良一氏はこの時期に渡来系氏族の活躍とその文化・産業的な影響力を考えており、具体的には宅の設置以来、また推古期以降の東国経営に中核として当った壬生吉志氏派遣の時期に当るなど、北武蔵的な目でみても大きな変化のあった時期と重なっており、その後の大里郡大領壬生吉志氏の本拠地として、発展を迎えることになる。

遺跡地名表（縄文時代）

番号	名 称	所 在 地	種 別	時 期 そ の 他
1	荒 神 脇	江南町野原	集落跡	撚糸文、ナイフ型石器
2	打 越	滑川町打越		爪形文、微隆起線
3	雉 子 山	東松山市石坂		称名寺式
4	西 浦	熊谷市万吉西浦	埋カメ	縄文、加曽利E式
5	宮 脇	江南町野原宮脇	住居跡1	旧石器、縄文、古墳、スクレイパー
6	本 田 東 台	江南町須賀広本田・東台		ナイフ、田戸式
7	上 前 原	江南町千代上前原	住居跡1	撚糸文、五領ヶ台、下小野、勝坂、加曽利E、 堀之内式
8	屋 田	滑川町月輪		撚糸文、押型文、晩期
9	南 方	江南町千代	住居跡3	撚糸文、押型文、住居2、勝坂式住居1
10	船 川	江南町小江川	住居2	押型文、三戸式
11	花 見 堂	嵐山町川島		晩期、千網式
12	中 郷	嵐山町広野	住居跡	加曽利E式
13	行 司 免	嵐山町大蔵	住居跡106	勝坂～加曽利E式
14	塩 西	江南町塩西		先土器、ユニット2、ナイフ型石器
15	塩 前	江南町塩		撚糸文、押型文
16	金 平	嵐山町志賀	住居跡	野島式、加曽利E式
17	舟 山	川本町本田高岡	住居跡	諸磯式、勝坂式
18	北 田	嵐山町古里		晩期
19	越 畑 城	嵐山町越畑		早期 沈線文、条痕文
20	山 根	嵐山町遠山	住居跡7	黒浜式、諸磯式
21	上 本 田	川本町本田	住居跡	加曽利E式
22	橋 屋	花園町小前田		晩期
23	牛 無 俱 利	寄居町赤浜		先土器、ユニット2
24	南 大 塚	寄居町折原	住居跡	先土器、スクレイパー
25	台 耕 地	花園町黒田	住居跡	加曽利E式
26	平 松 台	小川町小川	住居跡	関山、黒浜式
27	衆生ヶ谷戸	都幾川村番匠	住居跡1	加曽利E式
28	八 幡	都幾川村	住居跡	黒浜式
29	宮 ノ 前	寄居町富田		
30	む じ な 塚	寄居町	住居跡1	諸磯式
31	上 郷 西	寄居町		諸磯式
32	甘 粕 原	寄居町	住居跡	諸磯式、加曽利E式
33	宮 林	花園町永田	住居跡1	草創期、多縄文、爪形文
34	露 梨 子	寄居町		諸磯式
35	神 山	嵐山町古里	住居跡1	加曽利E式

遺跡地名表（縄文時代）

番号	名 称	所 在 地	種 別	時 期 そ の 他
36	上 鶴 巻	寄居町大字赤浜字鶴巻	住居跡 1	
37	鶴 田，竈 田	東松山市上野本		堀之内式
38	日 野 原	玉川村玉川	住居跡 1	加曽利 E 式
39	金 獄	寄居町桜沢	住居跡 3	
40	大 林	川本町上原大林		堀之内式
41	寺 山	嵐山町菅谷		撚糸文
42	虫 草 山	鳩山町大橋	住居跡 1	鶴ヶ島台式
43	冑 山	大里村冑山	住居跡 1	黒浜式
44	平倉,東国寺	寄居町立原	住居跡 4	加曽利 E 式
45	稲 荷 久 保	寄居町今市		スクレイパー
46	打 越	滑川町月輪		ナイフ型石器

遺跡地名表（古墳時代遺跡）

図No.	名 称	所 在 地	備 考	図No.	名 称	所 在 地	備 考
1	塩狸塚 1 号墳	江南町塩	塩古墳群	22	黒 田 2 号 墳	花園町黒田	黒田古墳群
2	塩狸塚 2 号墳	江南町塩	塩古墳群	23	三ヶ尻古墳群	熊谷市三ヶ尻	
3	野 原 1 号 墳	江南町野原	野原古墳群	24	宮 塚 古 墳	熊谷市広瀬	広瀬古墳群
4	千 代 古 墳 群	江南町千代		25	八 幡 山 古 墳	熊谷市玉井	玉井古墳群
5	行 人 塚 古 墳	江南町成沢	行人塚古墳群	26	伊 勢 塚 古 墳	熊谷市吉岡	瀬戸山古墳群
6	西 古 墳 群	江南町小江川		27	円 照 寺 古 墳	滑川町薬王寺	円照寺古墳群
7	天 神 山 古 墳	江南町御正新田		28	陣 屋 古 墳 群	嵐山町吉田	
8	小江川古墳群	江南町小江川		29	尾 根 古 墳 群	嵐山町古里	
9	釜 場 古 墳 群	江南町小江川		30	行 人 塚 古 墳	小川町上横田	行人塚古墳群
10	立 野 古 墳 群	江南町阪井		31	穴八幡山古墳	小川町増尾	
11	姥ヶ沢古墳	江南町千代		32	花 見 堂 古 墳	嵐山町川島	
12	ます塚古墳	川本町本田		33	寺 ノ 台 古 墳	滑川町水房	
13	鹿 島 古 墳 群	川本町本田		34	屋 田 古 墳	滑川町月輪	
14	塚 原 古 墳 群	川本町畠山		35	月輪神社古墳	滑川町月輪	
15	箱 崎 古 墳 群	川本町畠山		36	稲 荷 塚 古 墳	嵐山町菅谷	
16	見 目 古 墳 群	川本町田中		37	西 原 古 墳 群	東松山上唐子	
17	赤 浜 古 墳 群	寄居町赤浜	方墳	38	若宮八幡神社古墳	東松山市石橋	唐子古墳群
18	伊勢原古墳群	寄居町伊勢原		39	御 獄 山 古 墳	東松山市下唐子	
19	小前田古墳群	寄居町小前田		40	冑 山 古 墳	東松山市唐子	
20	大 塚 山 古 墳	寄居町桜沢		41	諏訪山 29 号墳	東松山市高坂	諏訪山古墳群
21	金 獄 古 墳	寄居町桜沢		42	諏訪山 1 号墳	東松山市西本宿	

遺跡地名表（古墳時代遺跡）

図No.	名 称	所 在 地	備 考
43	野本將軍塚古墳	東松山市下野本	
44	おくま山古墳	東松山市柏崎	柏崎古墳群
45	古 凍 古 墳 群	東松山市古凍	
46	山ノ根古墳	吉見町久米田	
47	かぶと塚古墳	吉見町田甲	田甲古墳群
48	雷 電 山 古 墳	東松山市大谷	三千塚古墳群
49	弁天山古墳	東松山市大谷	〃
50	秋葉塚古墳	東松山市大谷	〃
51	長 塚 古 墳	東松山市大谷	〃
52	鴻ノ面1号墳	東松山市大谷	
53	東 山 古 墳	大里村冑山	
54	楓 山 古 墳	大里村冑山	
55	冑 塚 古 墳	大里村冑山	
56	とうかん山古墳	大里村冑山	
57	丸 山 古 墳 群	大里村冑山	
58	さきたま古墳	行田市埼玉	さきたま古墳群
59	八幡山古墳	行田市埼玉	〃
60	小見真観寺古墳	行田市埼玉	〃
61	本 田 ・ 東 台	江南町須賀広	後期
62	塩 前	江南町塩	前期
63	姥ヶ沢	江南町千代	
64	権 現 坂	江南町千代	中～後期
65	鹿 島	江南町塩	前～後期
66	塩 西	江南町塩	前期
67	船 川 ・ 新 山	江南町小江川	前期
68	宮 脇	江南町野原	後期
69	丸 山	江南町塩	前期
70	明 賀	江南町小江川	前期地図上、欠番
71	北 田	嵐山町古里	前期
72	行 司 免	嵐山町大蔵	中～後期
73	花園町No.50	花園町荒川	
74	中 小 前 田	寄居町桜沢	後期
75	金 獄	寄居町桜沢	後期
76	東	寄居町鉢形	
77	追 越	滑川町山田	前期

図No.	名 称	所 在 地	備 考
78	屋 田	滑川町月輪	前期
79	寺 ノ 台	滑川町水房	前期
80	花 見 堂	嵐山町川島	前期
81	沢 口	東松山市東平	後期
82	古 吉 海 道	東松山市今泉	
83	五 領	東松山市柏崎	前期
84	番 清 水	東松山市柏崎	前期 - 後期
85	大 門	東松山市西本宿	
86	鹿 島	東松山市大岡	
87	鶴 田 ・ 籠 田	東松山市上野本	前期
88	下 道 添	東松山市古凍	前期
89	塚 田 遺 跡	寄居町大字赤浜	
90	吉岡配水場	熊谷市吉岡	前期
91	衆生ヶ谷戸	都幾川村番匠	
92	薬師塚古墳	熊谷市吉岡	
93	下原古墳群	熊谷市吉岡	
94	高 畑	行田市下忍	
	武 良 内	行田市	
	鴻 池	行田市	
95	舟 木	大里村冑山	地図上欠番
96	円 山	大里村冑山	
97	姥ヶ沢埴輪窯	江南町千代	
98	権現坂埴輪窯	江南町千代	
99	羽尾須恵器窯	滑川町羽尾	
100	和名埴輪窯	吉見町和名	
101	吉見横穴墓群	吉見町北吉見	
102	黒岩横穴墓群	吉見町前山	
103	比丘尼山横穴墓群	東松山市大谷	
104	天神山横穴墓群	滑川町福田	
105	高根横穴墓群	江南町小江川	
106	尾根横穴墓群	嵐山町古里	
107	久 米 田	吉見町久米田	前期
108	天 神 山 古 墳	東松山市柏崎	
109	竜原裏古墳群	熊谷市竜原	

Ⅲ 塩西遺跡Ⅱの遺構と出土遺物

1. 検出された遺構の概要

調査区内に現われた遺構の全体を完掘できたものはわずかだが、遺構の性格、種類は多様で、次のとおりであった。

住居跡	25軒	(古墳時代・平安時代)
井戸	3	(平安時代・近世)
旧石器時代石器集中箇所	1	
近世住居跡	3	(近代)
中世館	1	
埋没谷	4	(古墳時代・平安時代)
掘立柱建物	1	(平安時代)
土壇・溝・堀		(古墳時代・中世・近世)
祠跡	1	(近代)

これらの遺構は1～4の埋没谷によって、遺構群の分布がまとまっており、集落の経営も制約されていたと考えられる。調査の手順によって遺構の概要を説明すると和田川の沖積地に面した台地上から埋没谷1までの約60mの高度範囲には6軒の住居跡が検出された。互いに切り合っているが平安時代の一群である。ローム層までの堆積が浅く遺構の残りがあまりよくない。

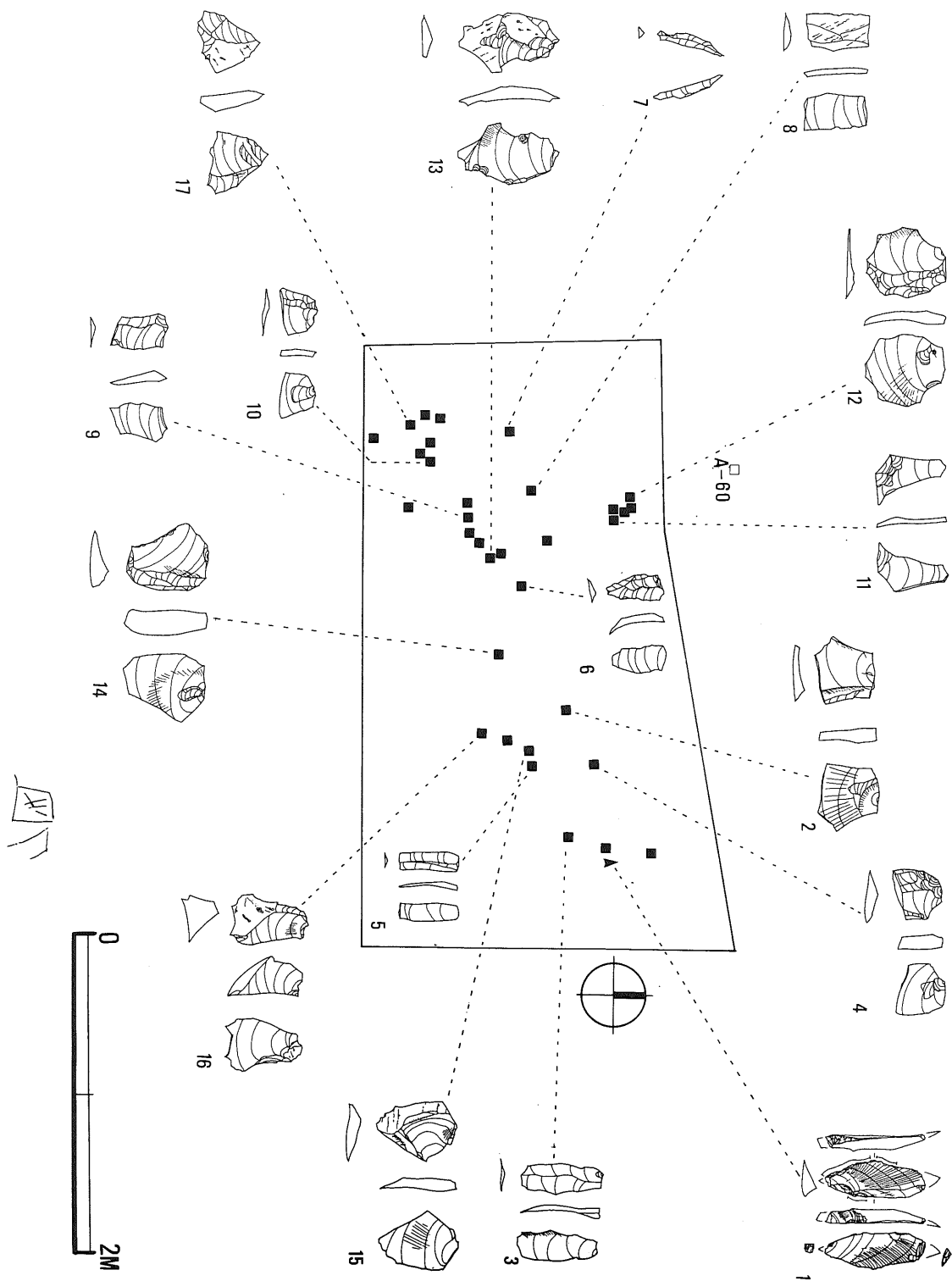
埋没谷1には集落より投棄された遺物が多量に出土した。埋没谷1と埋没谷2の間64m高度付近には8軒の住居跡と井戸、近世住居、祠跡、土壇、溝が検出されている。黒色土の堆積が厚く、遺構はよく残っている。住居跡からの遺物の出土も多く、奈良平安時代が主体を占めた。

近代の住居跡は県道の舗装化に伴い、家屋を移設した付近の旧屋敷跡であり、当事者に確認できた。埋没谷2から埋没谷3にかけての68～72m高度の付近では住居跡5、井戸1、近世住居1、中世館1が検出された。ローム層までの堆積は浅く黒色土の堆積は少ないが、遺構はローム層を切込でよく残っている。中世館は常安寺の背後に土塁が遺存していた。住居跡は古墳時代後期から平安時代の時期で古墳時代が集中していた。埋没谷2からは縄文時代後期の遺物の出土があった。

埋没谷3から埋没谷4にはさまれた70m～78mの高度範囲は遺跡の最頂部にあたり調査区外には3基の古墳が現存している。調査区からは住居跡6、井戸1、旧石器時代石器集中箇所が検出された。住居跡は古墳時代前期、平安時代以降のものであった。井戸は近代の井戸である。

埋没谷3からはほとんど遺物の出土はなかったが、黒色土の堆積は厚く深い。埋没谷4からは、古墳時代前期の遺物が多く出土しており、塩古墳群に近い位置を占めるだけに境界を区画するものであったかも知れない。出土した遺物はコンテナ箱8箱ほどであったが、復元、実測可能な遺物は、古墳、平安時代を中心とし二百個体にのぼった。今回の調査は、塩西遺跡をいわば東西方向に設定したトレンチと同様であるが集落の推移を考える上で良い資料をもたらしたといえよう。

未報告であるが1983年に県道北側に並行する農道の調査を行った際にも、今回の調査と相似た結果を得ており、長期に渡り集落の場であったことがうかがえる。



第7図 塩西Ⅱ旧石器時代遺物分布

2. 旧石器時代ユニット

明らかに旧石器時代に属するものとして、本調査区からは石器の集中箇所一ヶ所よりナイフ型石器1点が出土している。1983年の調査では（第5図D地点）より石器集中箇所が検出されている。江南台地での旧石器時代の発掘調査は層位的な条件に恵まれた調査がなかったが、今回はこれを埋めるものとして土壌の分析を別に行っている。

位 置

石器集中跡の検出は杭60付近を中心としている。（第5図）（第5図）第3図Cが本報告に該当する。D地点は1983年の検出地点であり、A、Bは土壌サンプル採取地点である。検出地点Cは、塩西遺跡でも最上部に当る台地面であり、東西南北方向へ4つの支台を伸している。

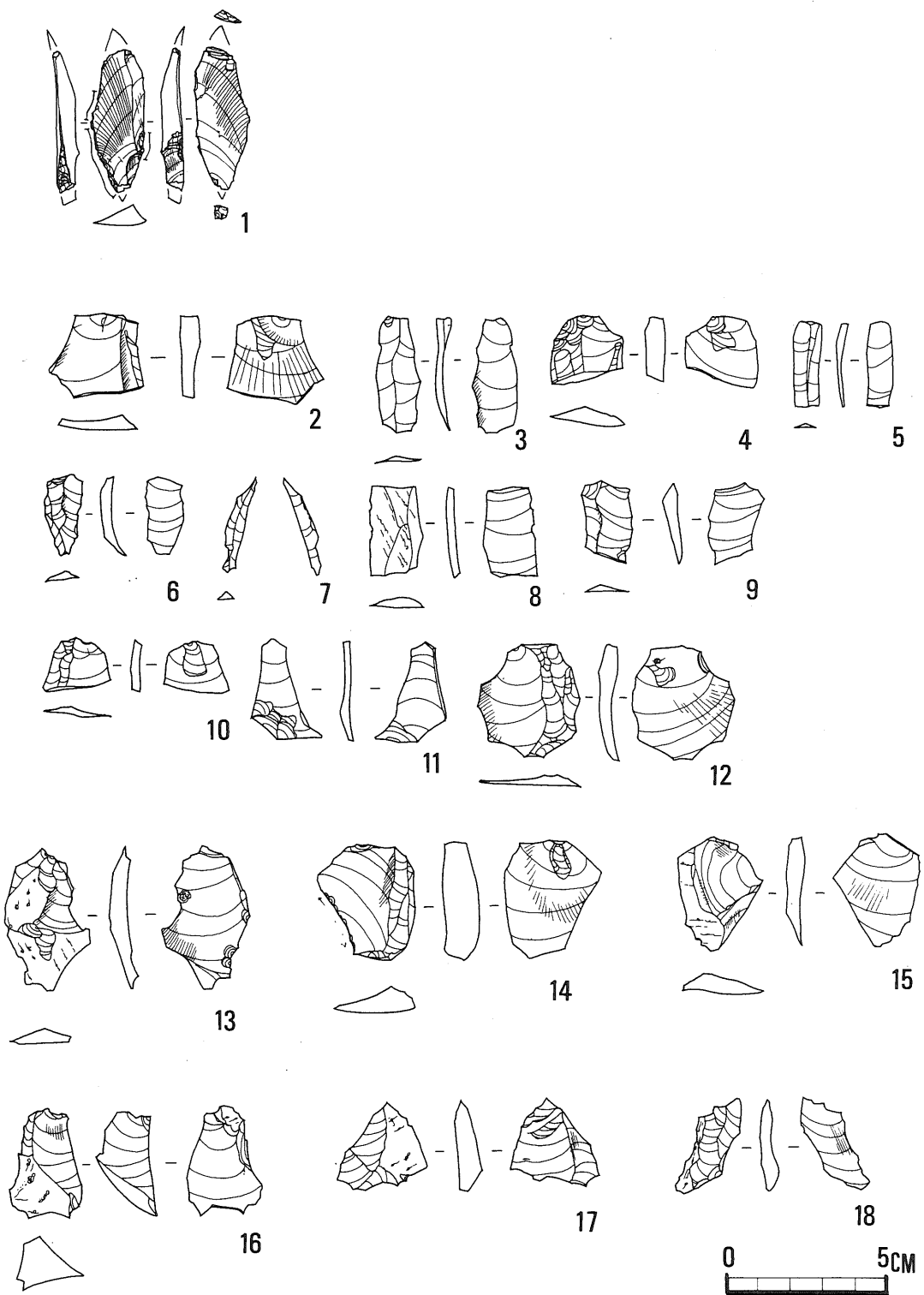
南は埋没谷4と、埋没谷3にはさまれる緩斜面に連結し、東は東面へひろがる遺跡の傾斜面に連結している。北はD地点をのせる緩斜面に連結し、南は北西方向に別の頂部をもつ台地への接続部となっている。C地点の西方には、さらに北西にひろがる支台と南西にひろがる支台がつらなりこの支台間には駒込沼にいたる大支谷が開析している。前述のとおりC、D地点をのせる塩八幡神社の支台は東の和田川、西の滑川からも共に最奥部に位置しており、南関東に通有な遺跡立地ではみられないパターンに属する。さらに最近の調査では塩西遺跡の南面を大きく開析し、正木沼に至る最奥部の台地上でもエンドスクレイパーが採取されており、塩西遺跡と同様な丘陵台地上に広がる遺跡のあり方を示している。

検出部分の表土は浅く60cm程しか掘り下げていない。層位は第3層にあたり、明茶褐色土で塩前遺跡の報告では第V層に当る。（文9）この土層は硬くしまり白色粒子や炭化物粒子を含んでいる。

検出された範囲は杭60の東側に広がる。3×4mの広がりを持つ、この小規模な集中部には遺構はなくカク乱を受けていないと考えられる。南北のひろがり調査区外のため把握できない。

石器の分布は南東側の緩斜面上に集中散布を示していた。総数34点の石片が検出され、材質は全て黒曜石であった。石器はナイフ型石器1点の他、全て剥片類であった。

83年度調査のD地点では同一層と思われるが、約120点の石器類が出土し、材質は全てチャート製であった。大型の剥片がかなりを占め、接合資料も多い。C地点、D地点の直線距離は約110mで双方とも他の石材の混入は認められない。炭化物については発掘調査に時間的な制約があり、充分な調査を実施できなかった。



第8図 塩西遺跡Ⅱ 第1ユニット出土石器

3. 旧石器時代の遺物 (第8図)

ナイフ型石器 (1)

先端と基部の一部を欠失しているが遺存状態は良好である。現存長4.4 cm、巾1.6 cmを測る。縦長剥片を素材とし、主要剥離面は全て基部方向からの打撃により剥離されている。これらの剥離面はバルブを残していない。左側縁から基部、右側縁の一部にかけて、ブランディングが施される。断面は三角形状を呈する。材質は黒燐石である。

折損面を持つ剥片 (2. 4. 10)

すべて黒燐石製、2は下半を欠失する大型の剥片である。背面にはバルブを除去した跡があり、加工の途中で折損したものであろう。

4は先端部に調整を加えられる。背面のバルブを除去しており、やはり加工の途中か使用中の欠損品であらう。

縦長剥片 (3. 5～9. 11)

すべて黒燐石製、バルブをもたない縦長の剥片である。3. 5. 8は石刃状を呈している。

剥片 (12～18)

背面を1回の打撃によって剥離されたものである。14はバルブを取り去っており、薄く鋭利な斜縁部分に使用痕を残している。ナイフに近い使用である。

他に図示していないが12点の微細な剥片がある。本遺跡の石器集中箇所出土の石器は全て黒燐石製で石質は同一と思われる。石質については鑑定を経ていないが、透明度が高い割に小石状の夾雑物が多く混入しており霧ヶ峰、和田峠周辺にみられる信州系の石材に近いようだ。

本遺跡の石器群の位置する時期については、周辺での調査例が少ないだけに南関東地方の成果に対比せざるを得ない。しかし江南台地周辺でのローム層の解明はあまり進んでいないため簡単に対比できる状況にない。詳細は第IV章を参照されたいが、塩西遺跡第2層下半のソフトローム層中には、B・C型の火山ガラス(UG)が多量に認められ、これは南関東の立川ロームの第3層に比定される。本層は約1～2万年前に相当するとされる。塩西遺跡第3層中には全般的にA'、A型の火山ガラス(A・T)が認められ、これは2.1～2.2万年前に相当する南関東地方の立川ローム第6層に比定される。しかしこの間の層厚は、南関東地方とは比較にならない程うすく、第一黒色帯も不明瞭であり塩西遺跡では立川ローム第4層、5層、6層の区分は難しい。本遺跡のナイフ型石器は、本遺跡の第3層中より出土していること、又石刃状の剥片を素材としていることなどから立川ローム第6層に対比して考えたい。江南台地域での旧石器時代文化層の内容や編年的位置付については全く端緒についたばかりで今後資料の増加を待ってさらに検討を進めたい。

4. 縄文時代の遺物

〔概要〕

塩西遺跡より出土した縄文時代の遺物は、縄文土器片29点、石器11点である。遺構に伴って出土したものは無く、調査区や他の時期の遺構、フク土に混在して検出された。

縄文土器 （第9図、第10図）

No.1～5は、縄文の施された土器片であり、縄文時代草期にかかる条痕文系土器群である。No.6～10は、LR縄文、LR斜縄文を地文とし、No.7, 8, 9はさらに細い粘土ひもを貼りつけて刻み目を加えている。口縁部は内側へ折り曲げており、全体としては深鉢形をなすものであろう。縄文時代前期に相当する時期と考えられる。

No.11～28は縄文時代中期後半に属する加曽利EⅡ、Ⅲ式土器群であり、21～28は地文を櫛描で施文する。

No.29は埋没谷4より唯一の出土例であるが、黒褐色で精選された胎土をもち、集合沈線や渦巻文で飾られた注口土器の破片ではないかと思われる。縄文時代後期に属するだろう。

石 器 （第11図）

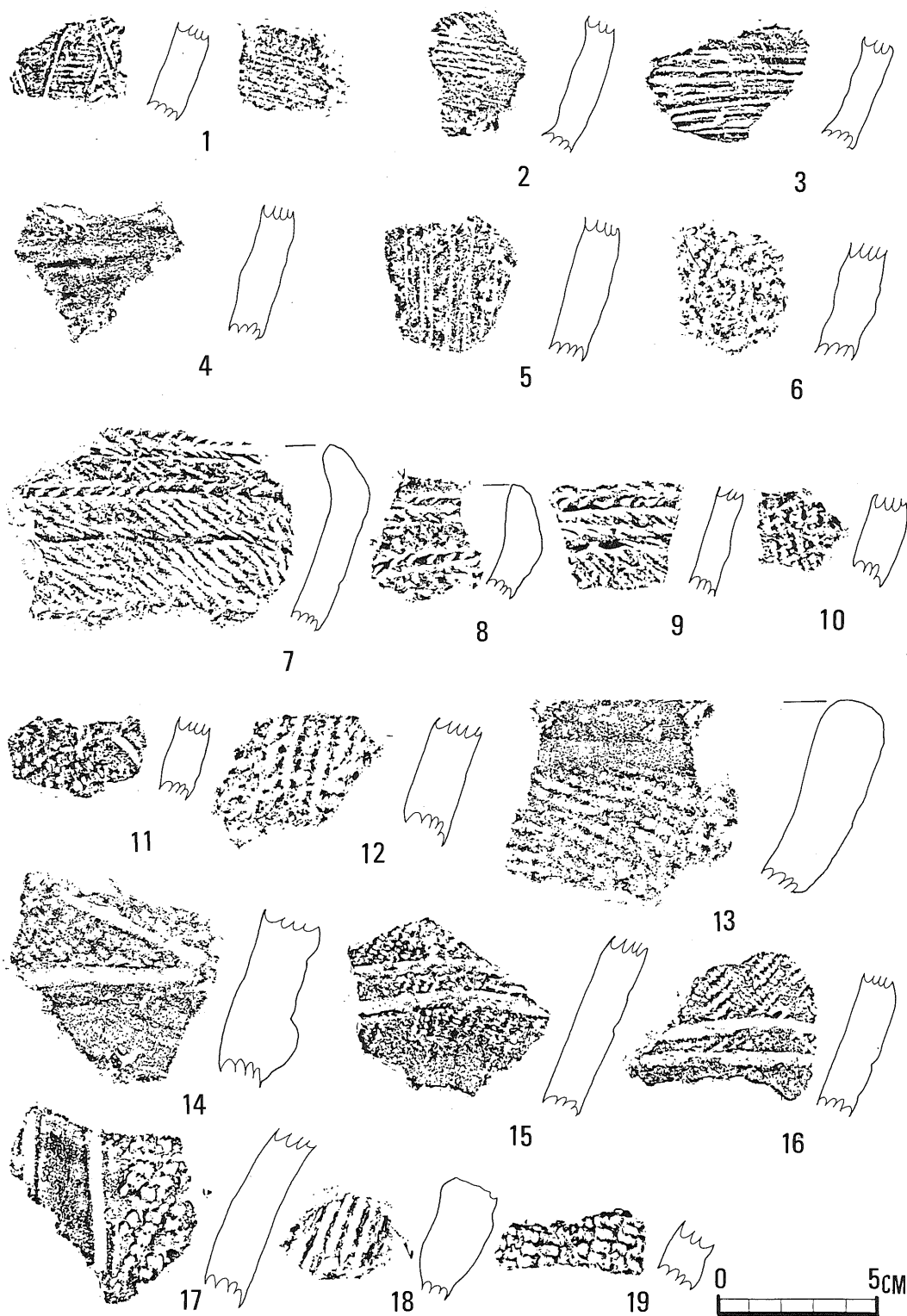
1は礫器である。三角形の2辺を刃部としている。2, 3は打製石斧である。

4は長軸面の三面を砥面とした砥石である。5, 6, 7, 10, 11は磨石である。5, 6は完存しており偏平・楕円形を呈する。7, 10, 11は一部を欠失しており、11は加熱を受け赤化している。

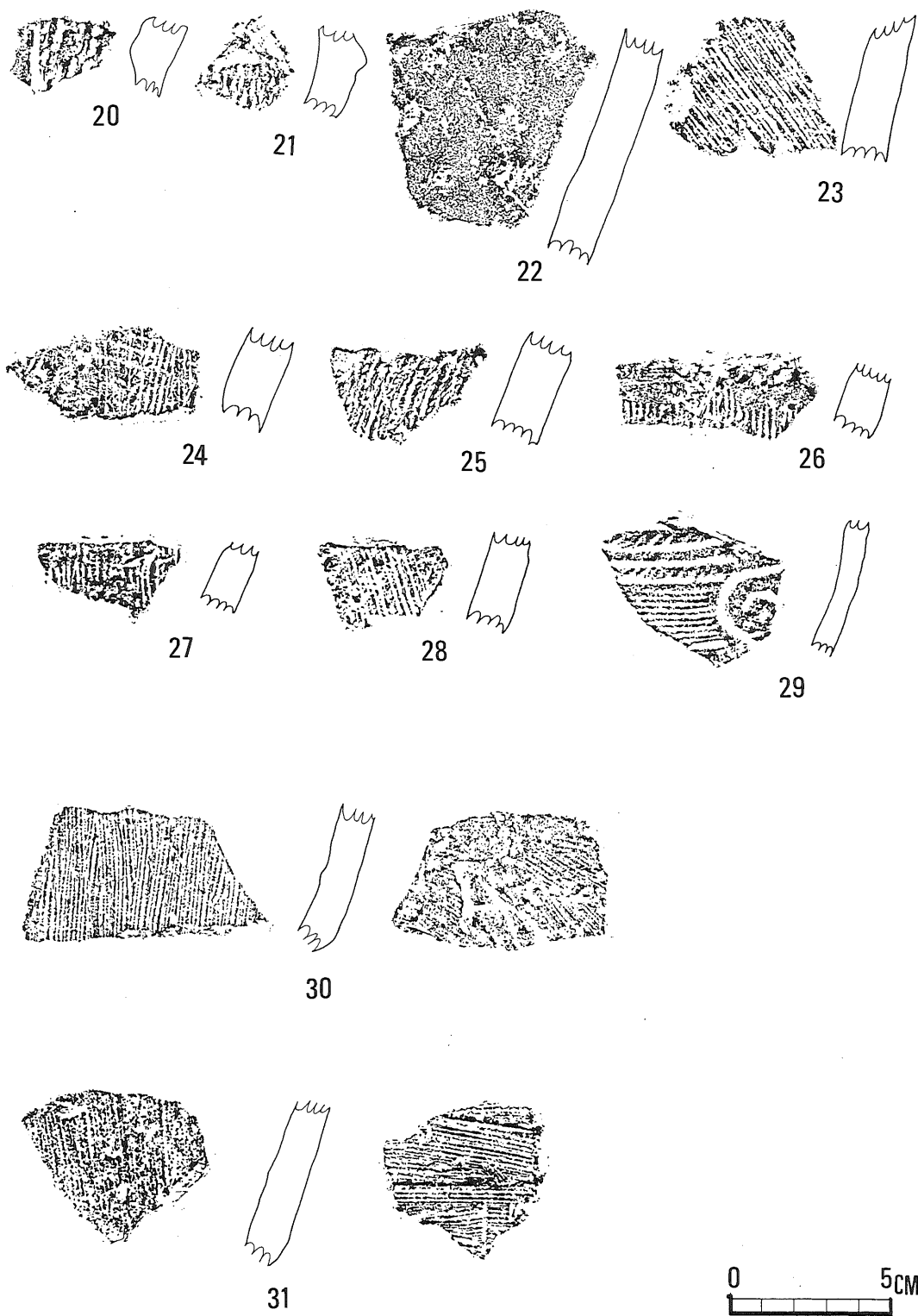
12は石棒の基部と思われる。最大径12.5cmを破損面にもち、約35cmが遺存する。石材は緑泥片岩を使用し、全体に張りのある丸みを持ち、下端面は丸く仕上げている。表面には凹み穴が3ヶ所認められる。

第10図, 30, 31は埴輪片である。縦位のハケが施される。30は2cmあたりの櫛目が17～18本で、31は18～19本である。焼成、胎土とも相似ており同一個体であろう。

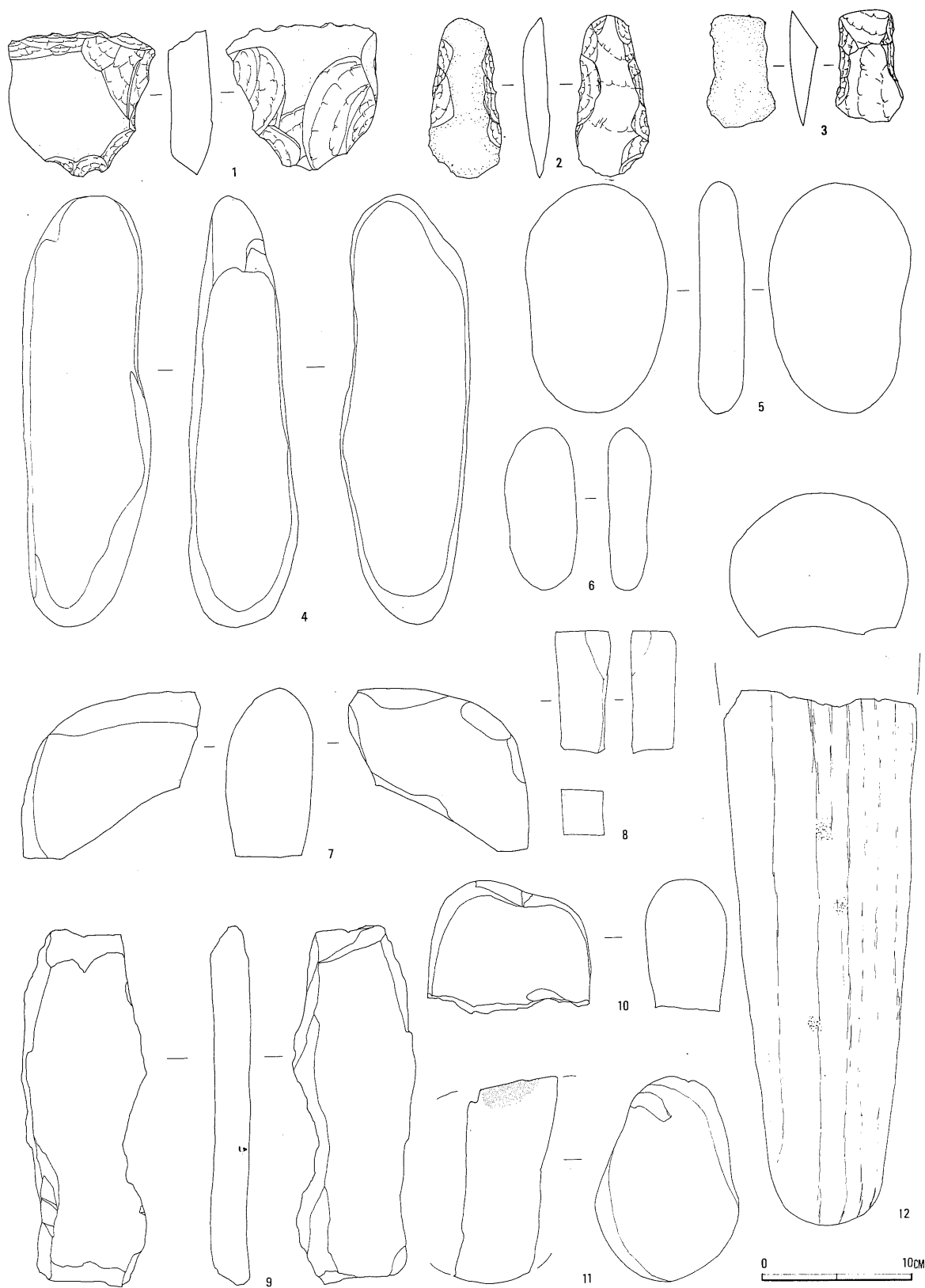
第11図, 8は凝灰質砂岩の砥石である。4面を砥面としており、中程で折損している。9は第6号住居跡より出土した緑泥片岩製の加工の加えられた、偏平石である。基部左側に鋭い工具によるキザミ目をもっており加熱の為、一部赤化している。



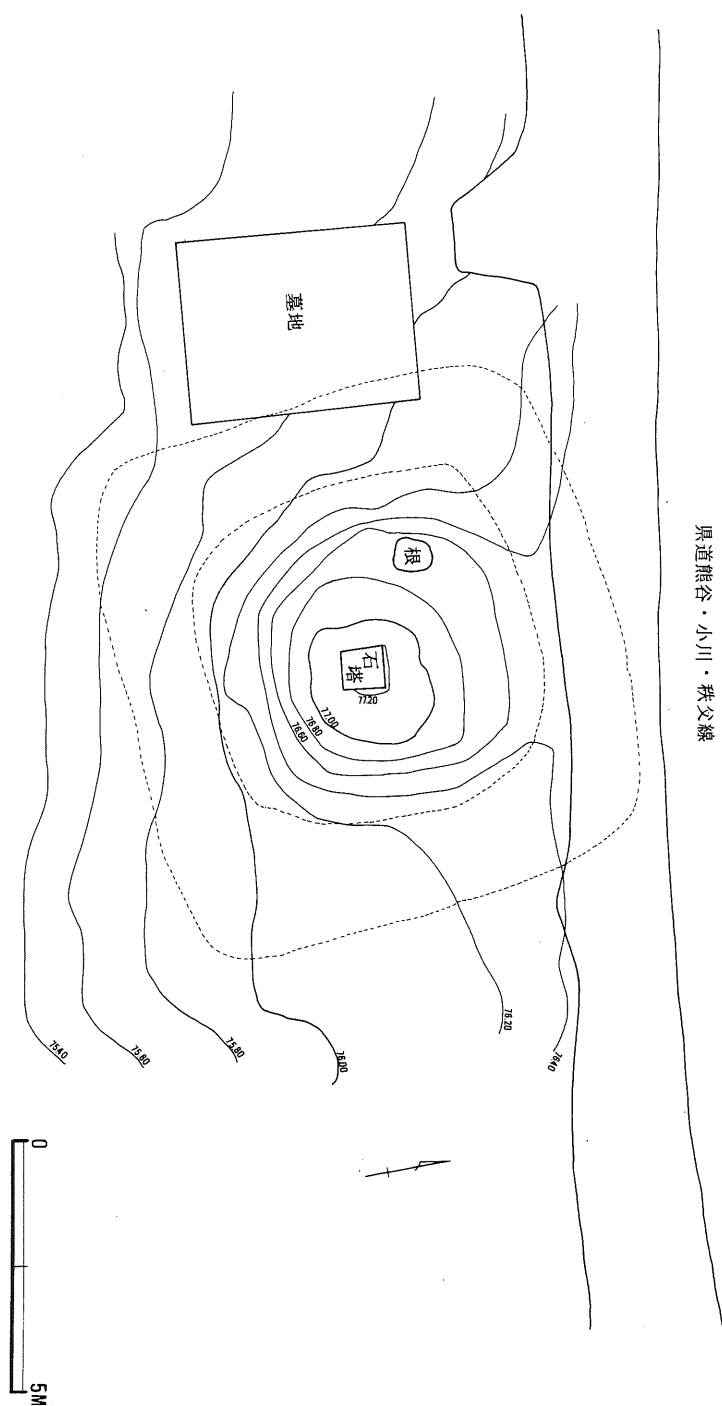
第9図 塩西Ⅱ出土縄文土器



第10図 塩西Ⅱ出土縄文土器 他



第11图 塩西Ⅱ出土石器



第12図 塩古墳群・第Ⅱ支群・第14号墳測量図

5. 調査区に接する古墳について

今回の調査は県史跡塩古墳群に接して行われ、古墳と思われる遺構については、特に慎重に対処してきた。そのため調査区に接する古墳と思われるマウンドについては、工事により周辺部が改変を受けるため、地形測量等の基礎的な資料の作成を行った。

塩古墳群 第Ⅱ支群 第14号墳

県道南側、塩八幡神社をのせる台地頂部より南へ派生する支台上に位置し、76.0～76.4m付近に、高さ1.0から1.2mの直径8m程を測る円墳上の高まりとして残っていた。K家の墓地に接し墳上には同家の管理による祠が設置されている。古墳をのせる台地面は、15×12mの平坦な緩斜面であり、この緩斜面中央付近に墳丘が遺存している。ボーリングでは石室等の当りはないが、周溝部に推定される。位置では黒色土の堆積が認められ、周溝は恐らく巾2m程で1辺、10m近くの方形を呈すると予想される。

近接する埋没谷5より多量の五領式土器が出土しており、本墳も同時期に近い方形墳と推定される。一部北側にめぐると予想される周溝は県道下に埋没しているだろう。墳丘上の石製の祠は、(寛文六年十一月十七日 武州男衾郡塩村、行海)の銘文を有している。K家では入定塚であるとの伝承を伝えている。

塩古墳群 第Ⅲ支群 第17号墳

県道北側 第14号墳の上位斜面77～78m付近に位置する。現在墳頂と考えられる範囲には塩八幡神社が鎮座しており、北半部分は境内の地面よりやや高まりをみせる程で明瞭な形を残していない。南から西側へかけて墳丘と思われる高まりが残っており、当初の墳形を円墳とすると直径20m位を測ったであろう。

第10図 30, 31の埴輪片は本墳の下位調査区より出土しており6世紀代の特徴をもつ埴輪であったかもしれない。同時に多くの五領式土器も調査区より出土しており築造時期については判断しかねる状況である。

6. 古墳・歴史時代住居群

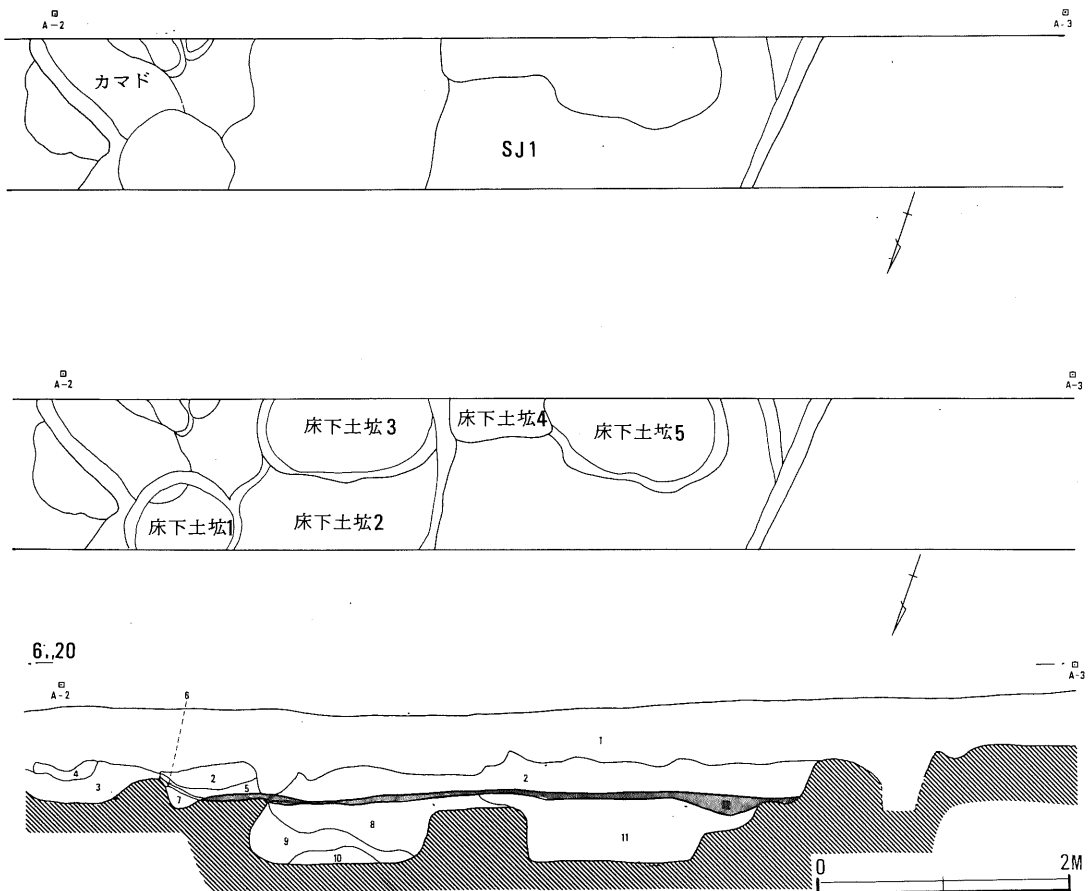
第1号住居跡（SJ1）

遺構（第13図）

A-2、A-3間に位置する。カマドと西壁の部分を検出した。約4.2×—の方形プランを呈し、カマドを東壁に持つ。カマドを通る住居主軸方位はN-107°-Eを示す。フク土は2層確認され、住居床面は茶褐色土とローム粒子を含む充填上で全面5~10cm貼床されていた。貯蔵穴、柱穴等は調査区内では確認できていない。床面はカマド前面へかけて低く緩傾斜しているが、床面は硬くしまっている。貼床面下には床下土壇5基が確認された。不整楕円形を呈し、互いに切り合っている。

東から1号を径約90cm、深さ30cm、2号長軸1.6m、深さ20cm、底面は平坦面、3号長軸1.4m、深さ45cm、床面は平坦面、4号長軸70cm、深さ10cm、3号と4号にも切られる。5号、長軸1.4m、深さ50cm、底面は平坦面である。フク土は1号、4号が焼土粒子を含むなど「フク土B」を示す。

5号は黄褐色土とロームブロックを多量に含んだ「フク土A」を示し、同一住居内で3号と5号のフク土は明瞭に異なっている。（文45）



第13図 塩西Ⅱ第1号住居跡

カマドは袖を屋内に持たず、燃焼部を壁外に出している。燃焼部から煙道へ15～20°で緩やかに立ち上っている。現存確認長は1.1 m、燃焼部幅0.7 mを測る。燃焼部は地山面のままで良く赤変していた。カマド右側、壁に沿って周溝の存在をうかがわせる一部周溝の検出があった。

遺物は土師器甕、坏の破片、須恵器蓋・坏等の破片がフク土2層から床上にかけて出土している。

第2号住居跡（S J 2）

遺 構 （第14図）

A-3、A-4間に位置する。住居の北東コーナ部をわずかに検出した。略方形プランを呈すると思われる。壁は北壁、東壁とも25～28cmの高さに立ち上る。フク土は3層確認された。土師・須恵器破片がわずかに出土しているが、図化できるものは無い。

第3号住居跡（S J 3）

遺 構 （第14図）

A-4、A-5間に位置する。住居南辺部分を検出した。南辺は約3.4 mを測る方形を呈する住居跡である。壁のたち上りは東壁25cm、南壁23cm、西壁18cmを測る。床面は地山面で硬くしまっている。床下土壌は2基確認され、貼床はされていない。茶褐色土を主体としたフク土で充填されていた。2号からは土師器が出土している。1号は0.85×0.5 m、深さ20cm、底面は平坦である。2号は0.7×0.5 m、底面は平坦である。

遺物は第6、7層から土師器、須恵器等の破片が出土している。床上からは完形の須恵器蓋が出土している。

第4号住居跡（S J 4）

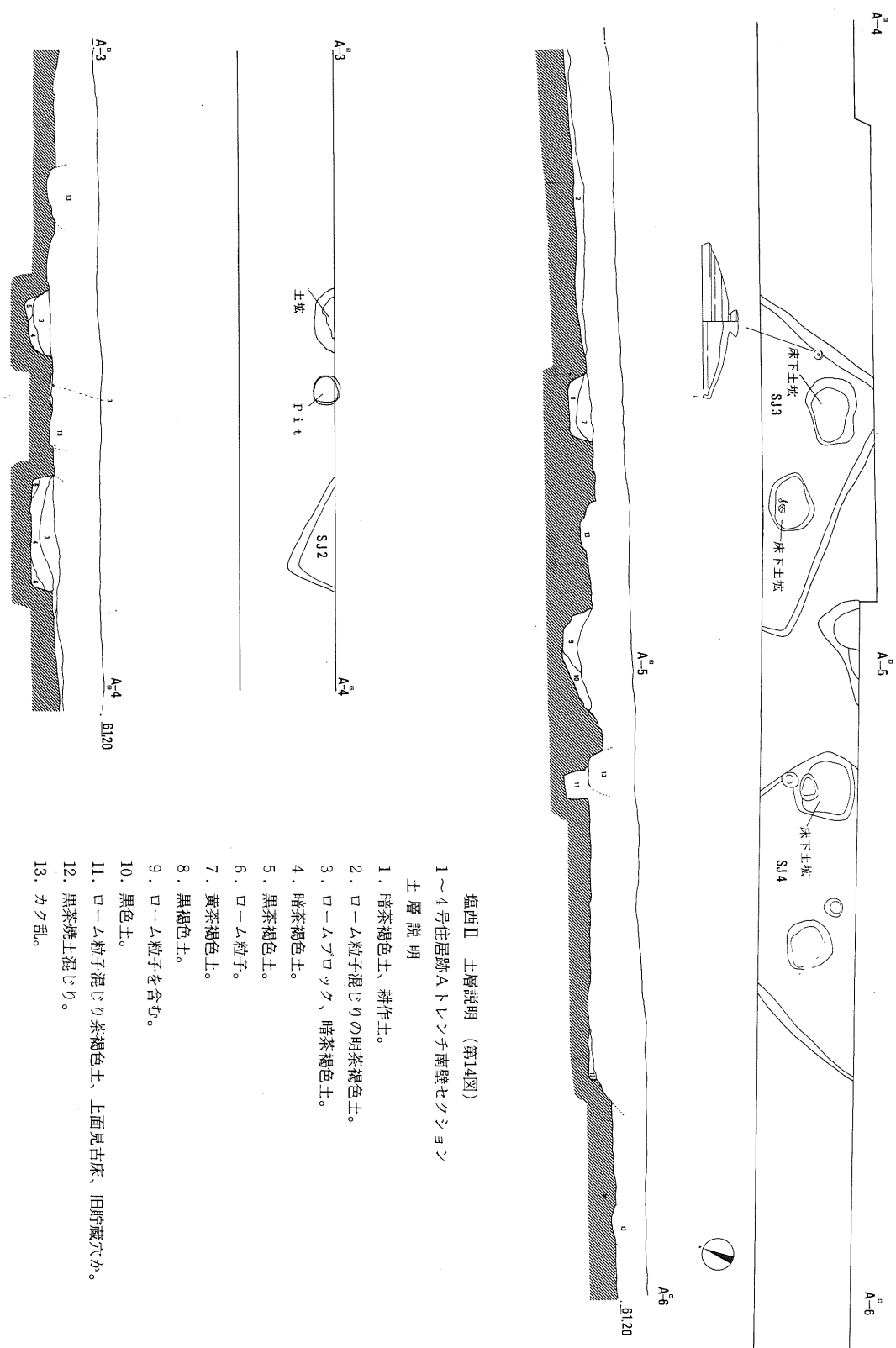
遺 構 （第14図）

A-5、A-6間に位置する。住居北半部分を検出した。北東コーナ、西壁の一部を確認している。3×-の長方形プランを呈すると思われる。ほとんどカク乱が住居床面まで及んでおり、住居フク土は薄い。壁のたち上りは北壁、8 cm、西壁6 cmである。床面は地山面で堅い。小ピット3があるが柱穴か不明、床下土壌は2基検出され、1号はコーナ部分に位置し上面を貼床される。1辺60cmのはば方形を呈し、深さ60cmを測る。廃絶された貯蔵穴跡かもしれない。

2号は0.55×0.6 m、深さ20cmを測る。底面は平坦であった。貼床は無く、フク土は茶褐色である。カク乱であるかもしれない。

遺物の出土は少なくほとんどがフク土及び床面からである。土師器・須恵器が主体であった。

A-3、A-5間にはS J 1～S J 4の住居跡に接して、土壌2基、小ピットが検出されているが、全体を調査していない。A-3、A-4間の土壌以外は後世のカク乱に起因すると推定される。



第14図 塩西Ⅱ第2号住居跡・第3号住居跡・第4号住居跡

第1号住跡土層説明 (第13図)

- | | |
|----------------------------------|---------------------------------------|
| 1. 耕作土、暗茶褐色土 | 10. 茶褐色土、焼土粒子含む。ロームブロック多量に含む。 |
| 2. 茶褐色土、焼土、ローム粒子少量を含む。 | 11. 暗茶褐色土、ロームブロック多量に含む。 |
| 3. ローム層 | 12. 暗茶褐色土、ロームブロック含む。
かたくしまっている。一貼床 |
| 4. 焼土 | 13. ローム層 |
| 5. 黄褐色土、焼土粒子含む。 | |
| 6. 茶褐色土、ロームブロックを含む。 | |
| 7. 暗茶褐色土、焼土、ローム粒子含む。 | |
| 8. 茶褐色土、焼土粒子含む。
ロームブロック多量に含む。 | |
| 9. 暗茶褐色土、焼土粒子、ローム粒子及び
粒子含む。 | |

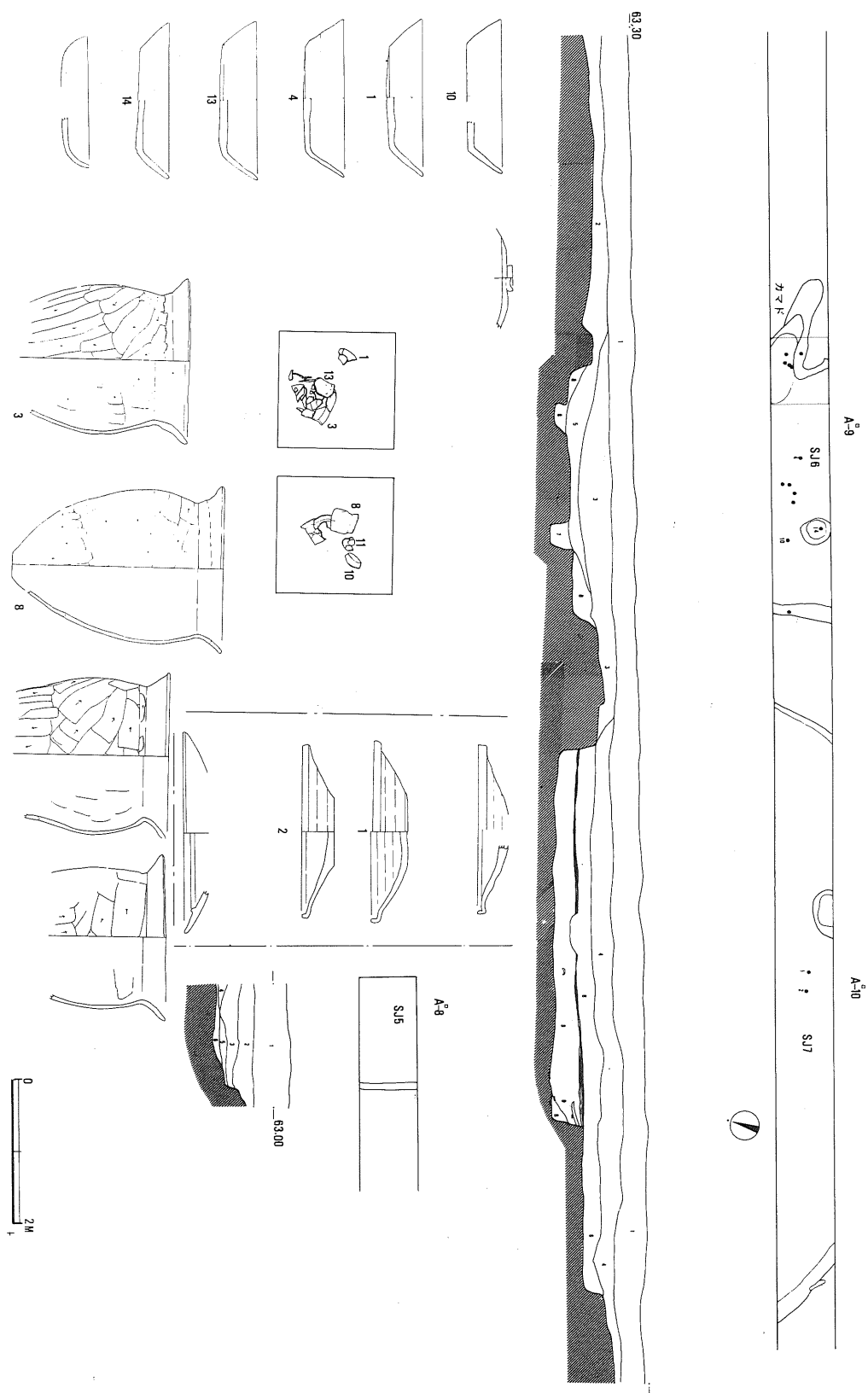
土層説明 (第15図)

第5号住居跡 (S J 5) 土層説明

1. 耕作土(褐色土層)
2. 茶褐色土、ローム微粒子をわずかに含む。
3. 暗褐色土、粘性あり下層にロームを含む。
4. 暗茶褐色土、粘性あり粒子が細かい。
5. 黒褐色土、ロームを若干含む。粒子は荒い。
6. 黒色土、一部ロームを含む。

第6, 7号住居跡 (S J 6, S J 7) 土層説明

1. 暗茶褐色土(耕作土)
2. 黄褐色土
3. 黄茶褐色土
4. 黄茶褐色土
5. 茶褐色土
6. 暗茶褐色土
7. 黒褐色土
8. ローム塊
9. ローム塊、焼土粒子、炭化物粒子を多量に含む。



第15図 塩西Ⅱ第5号住居跡・第6号住居跡・第7号住居跡

第5号住居跡 (S J 5)

遺 構 (第15図)

A-8周辺に位置する。東側に電柱を埋設しているため、トレンチが中断した。西壁部分を検出したに過ぎない。本住居周辺には埋没谷の緩斜面に当るため、住居床面までの堆積土が厚く、1.0 mを測る。フク土は5層に分けられ、貼床を施している。住居の規模、形態については不明とせざるを得ない。西部の立ち上りは15cmを測る。出土遺物は土師器、須恵器片である。

第6号住居跡 (S J 6)

遺 構 (第15図)

A-9周辺に位置する。カマドを中心とした東壁、西壁を検出した。ほぼ方形プランを呈すると思われ、3.5×-mの規模を持つだろう。壁の立ち上りは西壁で25cmを測る。

カマドを通る住居主軸方位はN-68°-Eを示す。フク土は4層確認され、住居跡床面は地山面であった。硬くしまり、土師器甕、須恵器坏等がカマド前面、住居中央付近より出土した。小ピットが2検出されたが、1は区外に当り、2は直径35cm、深さ30cmを測るが柱穴に当るか不明である。

床下土壌は調査区では検出されなかった。

カマドの右側袖部分は地山面を掘り残して構築される。燃烧部は、西壁ライン上に位置すると思われ、奥行80cm、幅60cmを測るだろう。火床となる地山面は良く焼けており、土師器甕が横倒しの状態で出土している。煙道は燃烧部より30°前後の段差を持って立ち上り、先端部にかけて緩やかな傾斜を持って移行する。現存長で55cmを測る。カマド前面の焚口部は半分を検出したただけだが、長さ45×幅70cmを測る浅い凹みとなるだろう。遺物は完存品を含む土師器甕、須恵器坏が10個体ほど出土した。

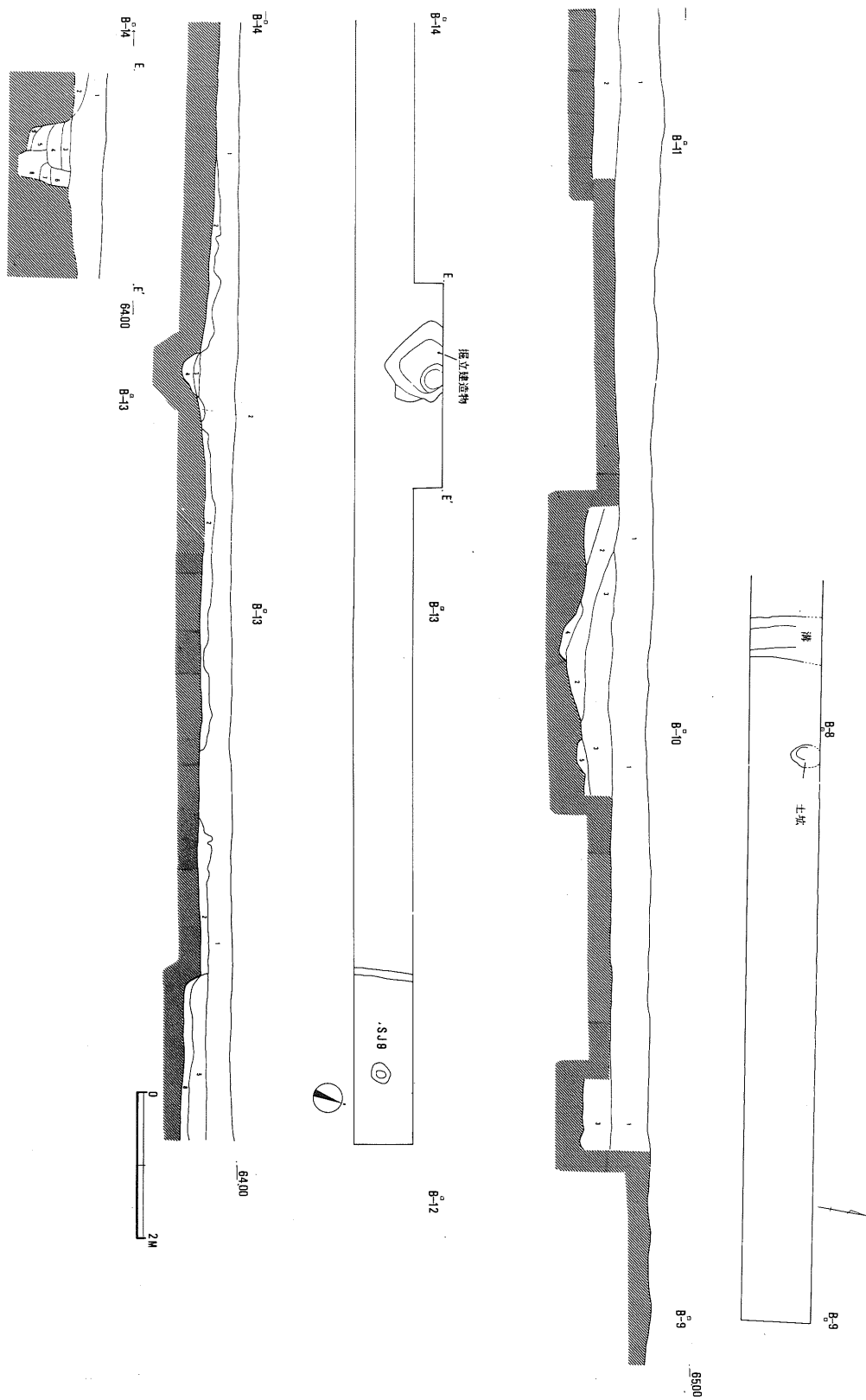
第7号住居跡 (S J 7)

遺 構 (第15図)

A-10付近に位置する。住居跡東壁、南壁部分を検出した。方形プランを呈すると考えられるが、一辺の規模8 m以上の大型住居となるだろう。壁の立ち上りは東壁22cm、南壁20cmを測るが、ほぼ垂直に立ち上る。フク土は3層に分けられるが、一部カク乱が床面まで入る。床面は、地山部分と貼床におおわれた部分があり、貼床土は、ローム粒子を含む茶褐色粘質土であった。

貼床面は地山面と同様硬くしまり、床密着で(第15図) 2, 1の須恵器蓋が出土した。貼床面下にはローム塊、茶褐色土、焼土粒子などを混在した土層が充填されており、わずかにかえりを持った須恵器蓋が出土した。また南壁に接して第11図, 9の結晶片岩製の石材が出土している。貼床面下のプランはほぼ方形をすると思われ、東壁の一部はS J 7と一致し立ち上りは26cmを測る。南あるいは東壁は40cmを測る。底面は平坦な地山面であり、住居床面の状態をしている。

S J 6下部の貼床におおわれた範囲は当初想定した床下土壌ではなく、S J 6拡張前の住居跡であった可能性が高く、その規模は一辺が約5 mの方形を呈するだろう。出土遺物はS J 7、下部住居とも土師器片、須恵器片が多い。特に土師器片は須恵器片と等しく出土するが、細片のため図化していない。



第16图 塩西Ⅱ第9号住居跡・堀立柱建物跡

第8号住居跡 (S J8)

調査途中で井戸であることが確定したため、井戸1号とし、本跡は欠番とした。

第9号住居跡 (S J9)

遺 構 (第16図)

B-12付近に位置する。東側に道路があるため、西壁部分のみを検出した。方形プランを呈すると思われる。西壁は30cmの立ち上りを持つ。フク土は3層に分けられ、床面は地山面であった。直径25cm、深さ20cmの小ピットが検出された以外床下土壌等も調査区より検出されていない。遺物は土師器、須恵器破片等が出土している。

掘立柱建物跡

遺 構 (第16図)

B-13、B-14間に位置する。掘立の柱痕1箇所しか検出されていない。方位、規模は不明である。時期についても不明だが、平安期に属するものと考えたい。

掘方は一辺95×85の長方形を呈し下面の規模は60×60cmである。また深さは70cmを測る。柱痕は直径35cmで掘方の東隅に寄せている。大規模な建造物の存在がうかがえる。

溝

遺 構 (第16図)

B-10付近に位置する。上面の幅は2m以上を推定できるが、底面だけが良く残っている。幅50cmを測り、南北方向に走り南へ流下すると考えられる。付近に直径30cm、深さ10cm土壌が存在している。出土遺物は無い。

B-11～B-9 坑セクション土層説明 (第16図)

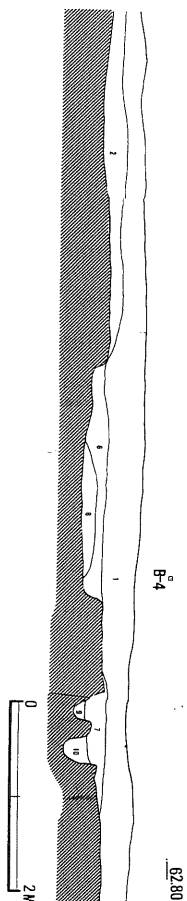
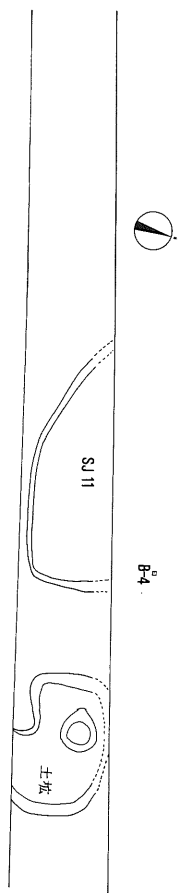
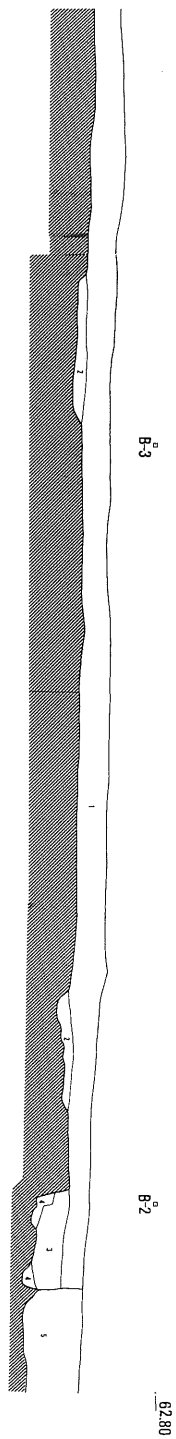
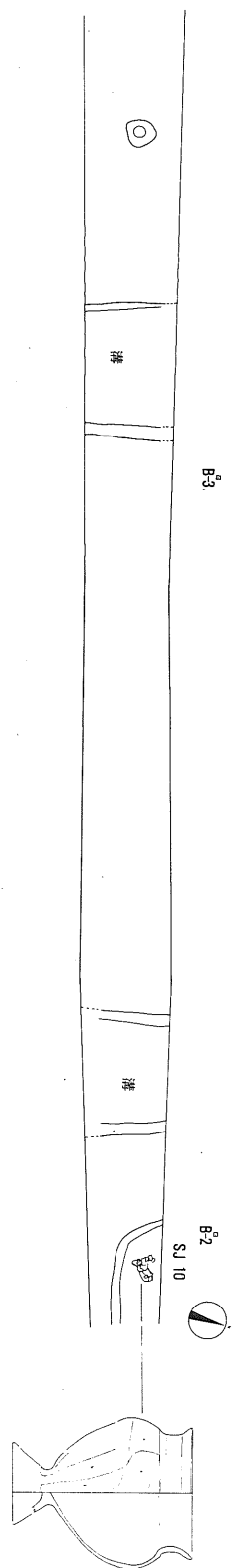
- | | |
|-----------------------------|---------------|
| 1. 茶褐色土。 | 4. 黒茶褐色土、粘性有。 |
| 2. 暗褐色土、若干黒褐色土がまじる。 | 5. ソフトローム。 |
| 3. 茶褐色土、ローム粒子、ロームブロックを若干含む。 | |

土層断面説明 (9号住居) (第16図)

- | | |
|--------------------------|--------------------------|
| 1. 耕作土、茶褐色土。 | 5. 暗褐色土、ローム粒子が極くわずかが混じる。 |
| 2. 明褐色、ソフトローム。 | 一部炭化物を含む。粒子は荒い。 |
| 3. 暗褐色土、ローム粒子が混じる。粒子は荒い。 | |
| 4. 黒褐色土、ローム粒子が混じる。粒子は荒い。 | |

柱穴部分拡張セクション柱穴1 (B-12～B-13坑) 土層説明 (第16図)

- | | |
|---|--|
| 1. 耕作土、茶褐色土。 | 流れ込んだと思われる。 |
| 2. ソフトローム | 6. 明褐色土、ロームブロック、ローム粒子を含む。 |
| 3. 暗褐色土と茶褐色土が混じる層。わずかにロームブロック、ローム粒子を含む。 | 7. ソフトローム (流れ込み) |
| 4. 褐色土、ロームブロック、ローム粒子を含む。 | 8. 黒褐色土、ロームブロックを若干含む。暗褐色土、粒子が荒くローム粒子を含む。 |
| 5. ロームブロックを多量に含む暗褐色土、(ロームが下へ | 9. ソフトローム (流れ込みと思われる) |



Ｂ-２～Ｂ-４セクション
土層説明 (第17図)

1. 茶褐色。
2. 茶褐色土、ローム粒子、フロツクを少量含む。
3. 褐色土、ロームフロツクを若干含む。
4. ソフトローム、ロームフロツクを多量に含む。
5. カク乱。
6. 褐色土、ローム、フロツク粒子を含む。
7. 明褐色土、ローム、粒子を含む。
8. ローム。
9. ソフトローム。
10. 黄褐色土。

Ｂ-７～Ｂ-２セクション
土層説明 (第17図)

1. 茶褐色土、粒子は細い。若干焼土が混じる。
2. 黒色土。
3. カク乱。
4. 暗褐色土、焼土粒子を若干含む。ロームフロツクを若干含む。包含層？ 住居址の土を捨てたと思われる？
5. 暗褐色土。
6. 褐色土、ロームフロツク粒子を含む。
7. 明褐色土、ローム粒子を含む。
8. ローム。
9. ソフトローム。
10. 黄褐色土。

埋没谷 遺物出土状態 (No1～No10)

1. 茶褐色土。
2. 漆黒色土。

第17図 塩西Ⅱ第10号住居跡・第11号住居跡

第10号住居跡 (S J 1 0)

遺 構 (第17図)

B-1, B-2間に位置する。南西コーナ部を検出した。東半は土採取により完全に削平され消滅していた。方形プランを呈するだろう。壁の立ち上りは、西壁36cm、南壁40cmを測る。フク土は3層に分かれ凹凸のある地山床面を填土して平坦な床面としている。床上より台付甕が出土した。

第11号住居跡 (S J 1 1)

遺 構 (第17図)

B-4, B-5間に位置する。南半部を検出している。プランが不整形となり、掘り込みも浅いため、一般的な住居でないかもしれない。長軸3.6mで、東壁、南壁の立ち上りは15~18cmを測る。フク土は3層に分けられる。遺物は土師器、須恵器細片で図化できるものは無い。

溝 (第17図)

B-2付近に位置する。南北方向に走ると考えられる。幅1.3m、深さ10cmを測る。底面は平坦で断面形は幅広の箱形を呈している。出土遺物は土師器の細片があった。

溝 (第17図)

B-3付近に位置する。南北方向に走ると考えられる。幅1.4m、深さ12cmを測る。底面は平坦で断面形は幅広の箱形を呈し、B-2付近の溝と良く似ている。出土遺物は、流入の土師器、須恵器片がある。両者の溝は同一の方位を示していると見ても良く、規模形態も良く似ていることから一辺約6m方形の墳丘をとり囲む方形周溝の溝であるかもしれない。しかし、これを特定できる資料を得ていないため、性格不明の溝としておく。

土 壌 (第17図)

B-4付近に位置する。不定形プラン、不整形の掘方で長軸1.5mの規模を持つ。フク土は4層に分けることができる。遺物は無く、性格、時期等は不明である。

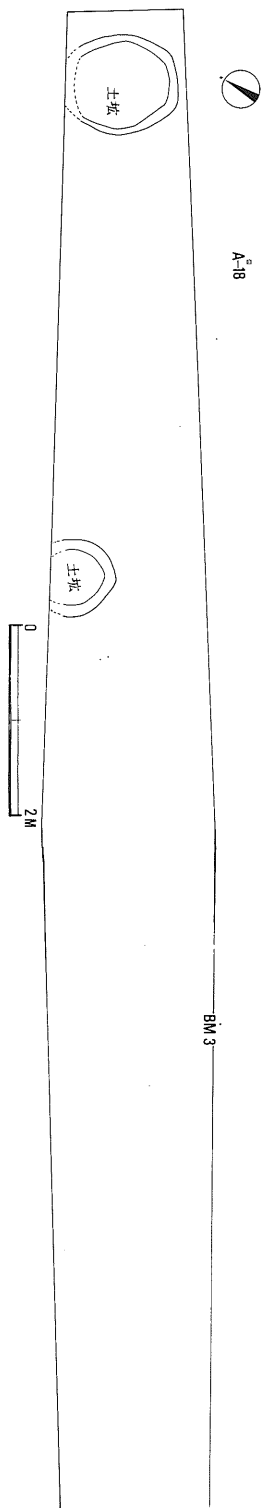
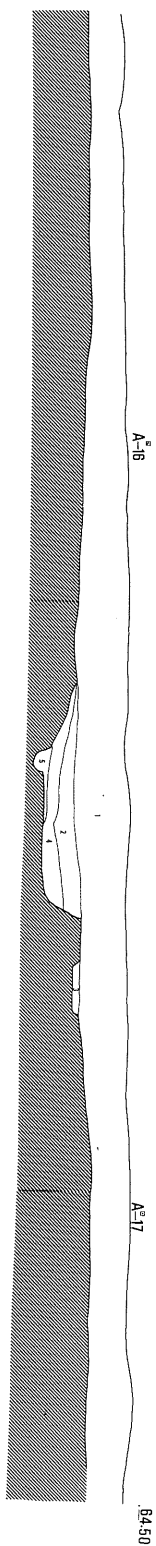
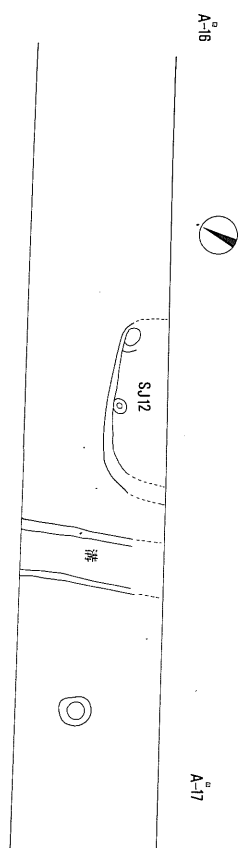
ピット (第17図)

B-3、溝、西側に一箇所だけ検出された直径30cm、深さ32cmのほぼ円形のピットである。遺物は無く、性格、時期は不明である。

A-16~A-17トレンチ

土層説明 (第18図)

1. 茶褐色土。
2. 褐色土、焼土? 粒子がわずかに混じる。
ローム粒子が少量混じる。
3. ソフトローム。
4. 黒褐色土、ロームブロック、ローム粒子
を多く含む。
5. ソフトローム、若干黒色土が混じる。



第18図 塩西Ⅱ第12号住居跡

第12号住居跡 (S J 1 2)

遺 構 (第18図)

A-16, A-17間に位置する。北壁部分を検出している。北壁の規模は1.8 mを測る。小形の住居跡か大型の土壌であるかもしれない。西壁は38cm掘り込んであるが東壁に至ってゆるやかに立ち上ってしまう。フク土は4層に分けられるが床面は地山面である。遺物は土師器、須恵器片の他に無い。

溝 (第18図)

S J 12の西側にある。南北方向に走る。幅は57cm、深さ8 cmと浅く箱形の断面形をしている。さらに西側に直径32cm、深さ28cmの小ピットがあるが、共に時期、性格は不明である。

土 壌 (第18図)

A-18付近に位置する。東西に1基ずつ存在する。東側の土壌は直径80cm、深さ18cmの円形プランを呈する。フク土は1層茶褐色土が充填される。西側の土壌は直径100cm、深さ25cmの円形プランを呈する。フク土はロームブロックを主体とした茶褐色土で充填されるが、前者と同様遺物の出土は無い。

第13号住居跡 (S J 1 3)

遺 構 (第19図)

A-20, A-21間に位置する。北東コーナ・西壁の一部を検出している。方形プランを呈する。東西壁間の距離は3.1 mを測る。壁の立ち上りは、東壁11cm、西壁14cmを測る。フク土は4層に分けることができる。床面は地山面を平坦にしており、硬くしまっている。床面上には小ピットが確認された。出土遺物は土師器、須恵器の細片のみで図化できる資料は無い。

第14号住居跡 (S J 1 4)

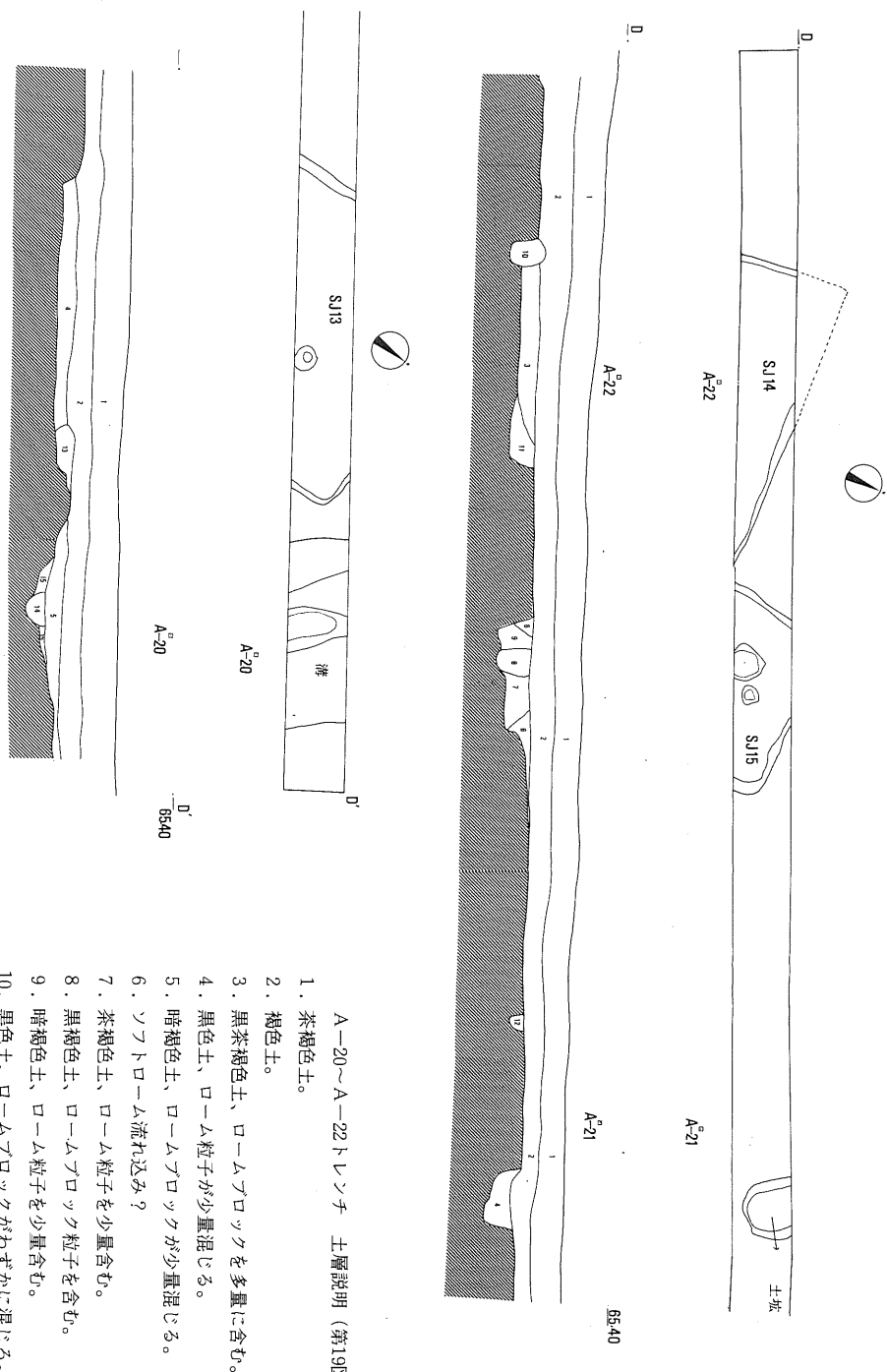
遺 構 (第19図)

A-22付近に位置する。西壁と北壁の一部を検出している。方形プランを呈するだろう。S J 15と重複すると思われるが、新旧関係は不明である。壁の立ち上りは西壁21cm、北壁25cmを測る。フク土は4層に分けられる。床面は地山面を平坦にしており、硬くしまっている。出土遺物は土師器、須恵器の細片で図化できる資料はない。

第15号住居跡 (S J 1 5)

遺 構 (第19図)

A-21, A-22間に位置する。西部から東北コーナ周辺を検出している。北壁の規模は約2 mを測ると思われ、方形プランを有する小形の住居となろう。壁の立ち上りは西壁30cm、北壁20cmを測る。フク土は5層に分けられるが自然堆積ではなく埋め戻されている。床面は地山面を平坦にして



第19図 塩西Ⅱ第13号住居跡・第14号住居跡・第15号住居跡

いる。出土遺物はほとんど無い。

溝 (第19図)

A-20付近に位置する。南東方向に走ると思われる。幅2m、深さ35cmを測る。フク土は4層に分けられる。土師器、須恵器片が出土している。

第16号住居跡 (S J 16)

遺 構 (第20図)

A-30付近に位置する。住居跡の南半部分を検出している。南壁の規模は3mを測る。方形プランを呈し、カマドが東壁に位置する。カマドを通る住居主軸方位はN-86°-Wを示す。フク土は15層に分けることができる。その観察の結果本住居は西壁側を拡張して造られており、下層の住居跡に貼床をして新たな床面を造っていることがわかる。上層の住居は、壁の立ち上り南壁30cm、西壁40cm、東壁30cmを測る。東西コーナにかけて幅20cm、深さ5cmの周溝が巡る。床は貼床で硬くしまる。柱穴は確認されなかった。この上層貼床を除去すると下層の床面が現われた。東壁は同一面を利用し、西壁側では拡張により削平された壁の立ち上りが5cmほど認められた。下層床の貼床下には床下土壌2基が検出された。1号は1.2×0.7mの深さ20cmを、2号は1.2×0.8m、深さ40cmを測る。カマドは、東壁ライン上に燃烧部中心が乗る。袖はわずかに15cmほど造り付けており、焚口部より直に燃烧部へ至る。燃烧部の幅60cm、奥行95cmを測る。奥部はしだいに幅を狭ばめ、60°前後で立ち上り煙道部へ移行する。煙道は34cmしか残っていない。遺物は上面床上より出土した須恵器と、下層床面より出土した須恵器の他は、図化できるものがない。

第17号住居跡 (S J 17)

A-40付近に位置する北西コーナ部がわずかに検出された。フク土中より須恵器坏破片が出土した。

第18号住居跡 (S J 18)

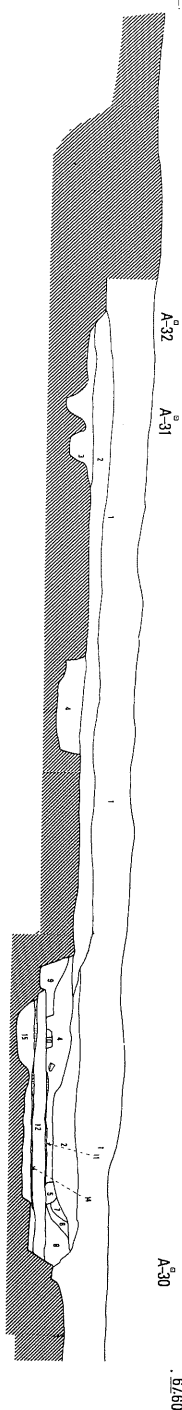
遺 構 (第21図)

A-42, A-43付近に位置する。東壁、西壁の一部を検出している。S J 19と重複すると考えられるが、切り合い関係は不明である。東壁にはカマドが位置している。方形プランを呈すると思われる。東西壁の規模は5.6mを測るだろう。カマドを通る住居主軸方位はN-°-Eを示す。住居フク土は5層に分けられ、下層に不定形の床下土壌を持つ。

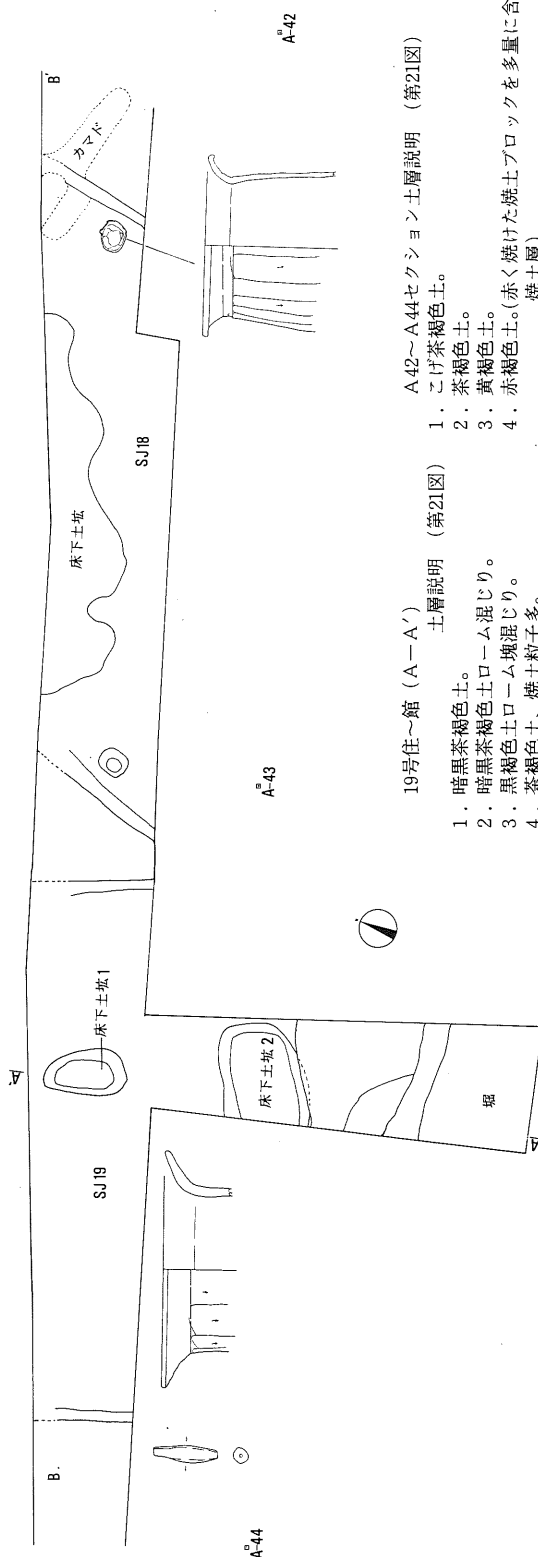
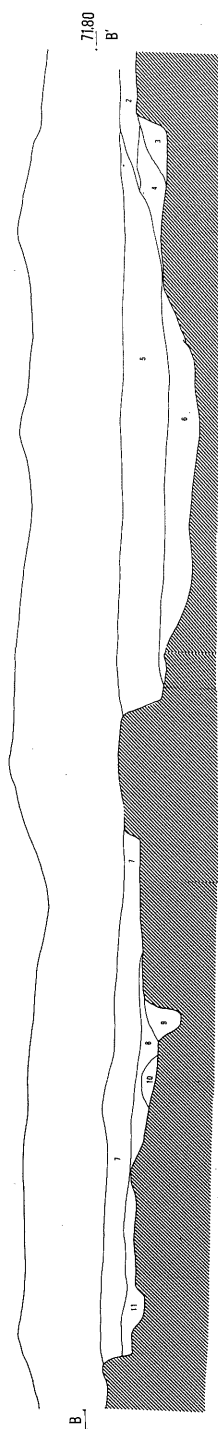
床面は硬くしまるが土壌上は凹んでいる。西壁側に小ピット25×30cm、深さ20cmが1箇所検出された。壁の立ち上りは西壁42cm、東壁33cmを測るしっかりとした掘込みの住居である。床下土壌は不定形で、掘方状を呈しており、他の床下土壌とは異なるようだ。

カマドは袖を造り付けており、燃烧部は住居屋内に位置する。燃烧部の規模は35×60cmを測るだろう。煙道は燃烧部より直に立ち上っており長さ1m、幅33cmを測る。焚口部等は不明であるが、

1. 灰—29—A 31 焼トレンチ、セクシヨソ土層説明 (第20図)
作土、ローム粒子を若干含む。緑褐色土、砂質を少量含む。
2. 暗褐色土、ローム粒子を若干含む。緑褐色土、砂質を少量含む。
3. 暗褐色土、ローム粒子を若干含む。緑褐色土、砂質を少量含む。
4. 暗褐色土、ローム粒子を若干含む。緑褐色土、砂質を少量含む。
5. 暗褐色土、ローム粒子を若干含む。緑褐色土、砂質を少量含む。
6. 暗褐色土、ローム粒子を若干含む。緑褐色土、砂質を少量含む。
7. 暗褐色土、ローム粒子を若干含む。緑褐色土、砂質を少量含む。
8. 暗褐色土、ローム粒子を若干含む。緑褐色土、砂質を少量含む。
9. 暗褐色土、ローム粒子を若干含む。緑褐色土、砂質を少量含む。
10. 暗褐色土、ローム粒子、焼土粒子、炭化物をわずかに含む。
11. 暗褐色土、ローム粒子、焼土粒子、炭化物をわずかに含む。
12. 暗褐色土、ローム粒子、焼土粒子、炭化物をわずかに含む。
13. 暗褐色土、ローム粒子、焼土粒子、炭化物をわずかに含む。
14. 暗褐色土、ローム粒子、焼土粒子、炭化物をわずかに含む。
15. 暗褐色土、ローム粒子、焼土粒子、炭化物をわずかに含む。



第20図 塩西Ⅱ第16号住居跡

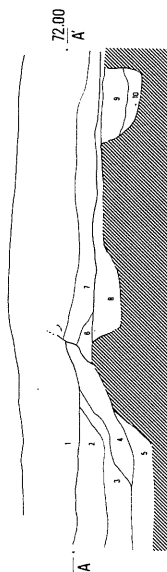


19号住居～館 (A-A') 土層説明 (第21図)

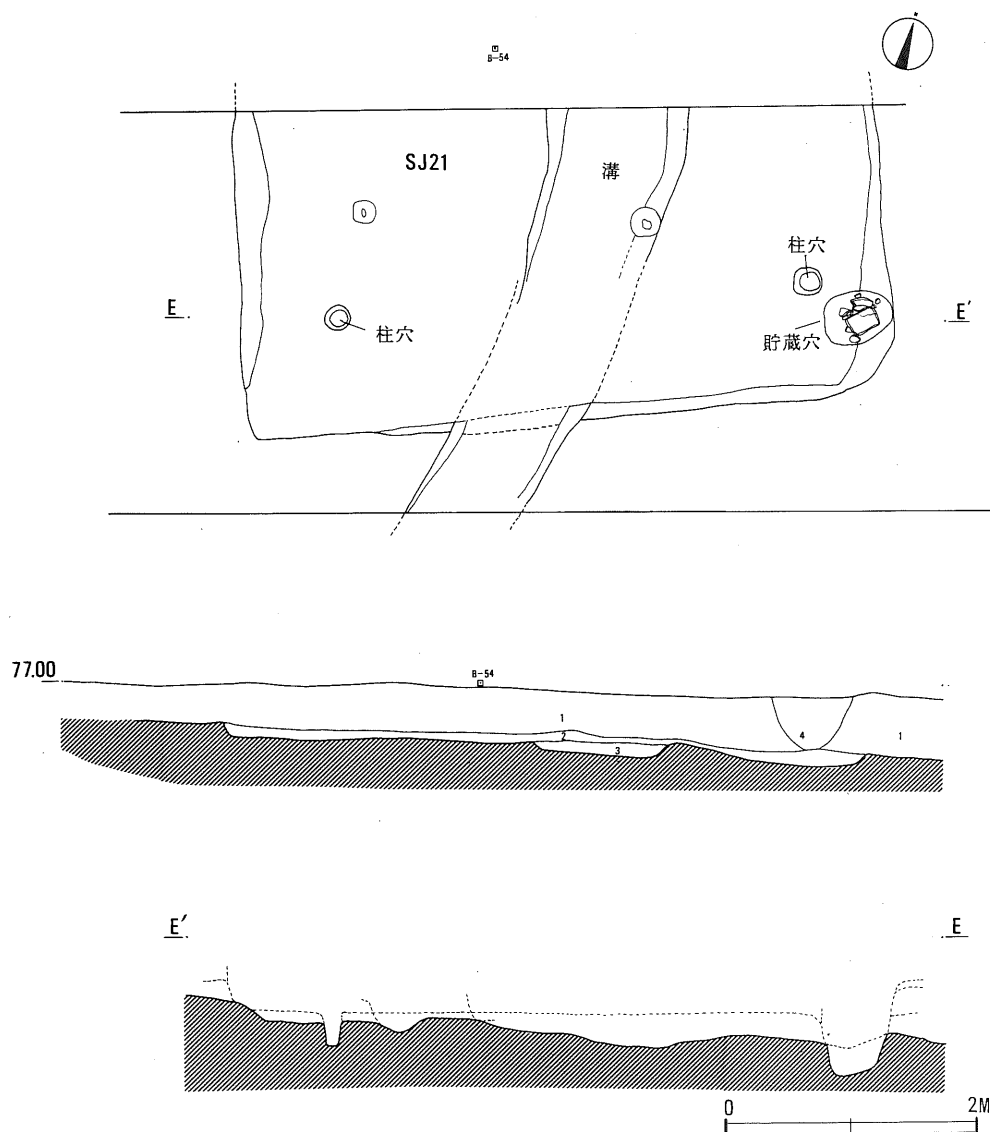
1. 暗黒茶褐色土。
2. 暗黒茶褐色土ローム混じり。
3. 黒褐色土ローム塊混じり。
4. 茶褐色土、焼土粒子多。
5. 茶褐色土、焼土、土師器片炭化物多。
6. 茶褐色土。
7. 暗茶褐色土。
8. 暗茶褐色土、ローム塊多。
9. 暗茶褐色土。
10. 暗茶褐色土、ローム塊含む。

A42～A44セクション土層説明 (第21図)

1. こげ茶褐色土。
2. 茶褐色土。
3. 黄褐色土。
4. 赤褐色土。(赤く焼けた焼土ブロックを多量に含む焼土層)
5. 褐色土、焼土ブロック、炭化物を少量含む。
6. 茶褐色土、ロームブロックを多く含む。
7. 黒茶褐色土、ロームブロックを少量含む。
8. 暗茶褐色土。
9. ロームを多く含む黄褐色土。
10. 黄色ローム。
11. ロームを含む黒褐色土。



第21図 塩西Ⅱ第18号住居跡・第19号住居跡・堀



第22図 塩西Ⅱ第21号住居跡

燃焼部周辺は焼土化が強い。カマド右側では土師器長甕が倒立状態で出土している。
遺物は土師器、須恵器片が多い。

第19号住居跡 (S J 1 9)

遺 構 (第21図)

A-43, A-44付近に位置する。東壁と西壁の一部を検出している。南壁は館堀により切られている。S J 18とも重複すると思われるが、今回の限られた調査では把握できなかった。方形プランを呈すると思われ、東西壁の規模は5.7mを測る。フク土は2層に分けることができる。床面は一部地山、一部貼床とし、硬く踏み固められている。壁の立ち上りは東壁20cm、西壁22cmを測る。堀方面は凹凸があり、床下土壌2基が確認された。1号は90×45cm、深さ40cmを、2号は0.9×(1.2)m、深さ21cmの長楕円形を呈する。本住居からは土師器甕、土錘等が出土している。

堀

遺 構 (第21図)

常安寺館の土塁前面の堀の存在を確認した。S J 19号を切っており、横断面形態は箱葉研形を呈すると思われる。深さは0.76mと浅い。土塁の遺存状況より堀の上面幅は3m、下面幅は1.5mを測るだろう。フク土は5層に分けられる。フク土下層からは、青磁片が出土した。また、上層からは応安二年銘を持つ宝篋印塔基部が出土した。

第20号住居跡 欠番

第21号住居跡 (S J 2 1)

遺 構 (第22図)

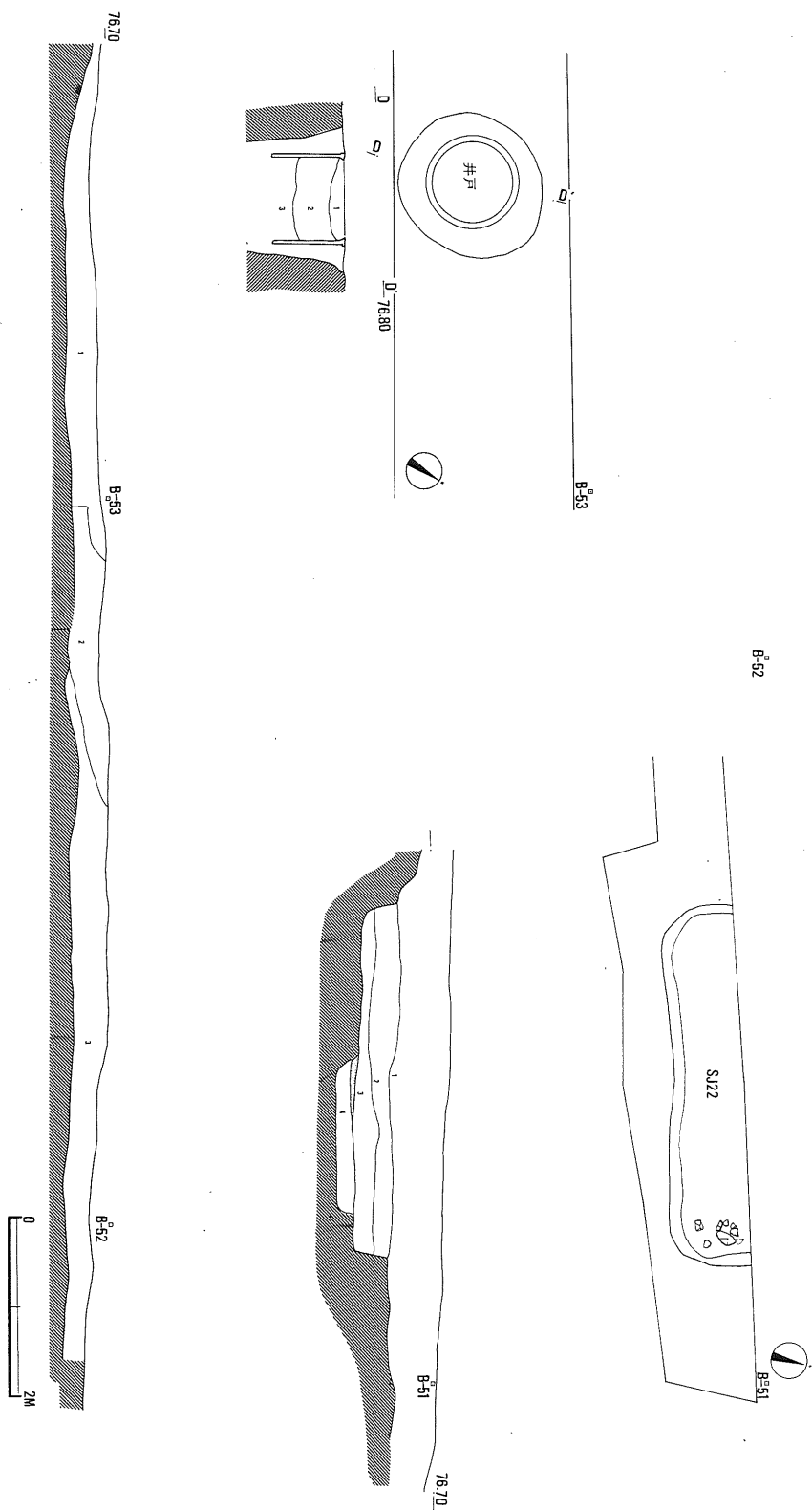
B-54付近に位置する。南半部を検出している。フク土が浅く、カク乱が床面まで達しているため遺存状況は不良である。また溝が重複しており、新旧関係は溝が新しい。住居の平面形は隅丸の方形プランを呈すると思われる。東西壁の規模は5.2mを測る。壁のたち上りは東壁8cm、南壁10cmを測る。フク土は3層確認されたが、カク乱が深く住居をおおうフク土はわずかであった。床面は地山で硬くしまっている。柱穴は2基検出された。東は直径24cm、深さ10cm、西は直径20cm、深さ19cmを測る。他に小ピット2基が確認された。南壁側から南西コーナへかけ大きくカク乱が及んでいるため、床面は遺存していない。南東コーナ部には貯蔵穴があり、大型壺が横倒状態で検出された。貯蔵穴の規模は50×45cm、深さ25cmを測る。貯蔵穴内からは高坏等の破片も出土している。

塩西Ⅱ 21号住居土層説明 (第22図)

1. 黄褐色土
2. 茶褐色土 ロームブロックを少量含む。
3. 褐色土 ロームを多量に含む。
4. カク乱

溝 (第22図)

S J 21を切る。南北方向に走っており、やや弧状を呈する。幅1.1m、深さ8cmを測る。底面は平坦である。古墳周溝等の可能性も充分考えられるが、遺物が全く出土していないため、性格は不明とせざるを得ない。



第23図 塩西Ⅱ第22号住居跡・井戸

第22号住居跡 (S J 2 2)

遺 構 (第23図)

B-51, B-52間に位置する。住居の南壁部分を検出している。南東、南西コーナは隅丸を呈しているが方形プランを呈すると思われ、南壁の規模は4mを測る。フク土は3層に分けられ、住居床面は地山面と一部貼床面からなる。貼床下には床下土壌が確認されている。住居の掘り込みは深くしっかりしており、壁の立ち上りは東壁40cm、南壁45cm、西壁40cmを測る。床下土壌は長軸1.7m、深さ16cmの長楕円形を呈している。遺物は、南東コーナ部に小破片がまとまって出土している。土師器坏、甕等が主体である。

第3号井戸 (第23図)

B-53, B-54間に位置する。現状で確認できた井戸で、近傍のM家が昭和40年代まで使用していた井戸であった。上面をわずかに凹ませているだけでほとんど埋めたということであった。完掘はせず上層部の掘り下げを行ったのみである。上面には陶製の井筒(第66図)が埋めこまれており、これに相当する井戸直径は1mであった。井戸の掘方は直径、約1.6mで、深さは使用者の話によると約9mはあったということで、周囲を切り石組で構築したという。

塩西Ⅱ 22号住居跡土層説明 (第23図)

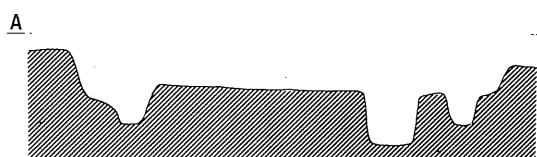
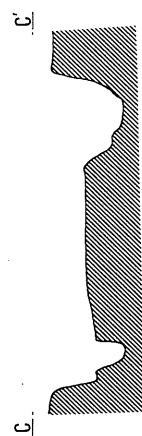
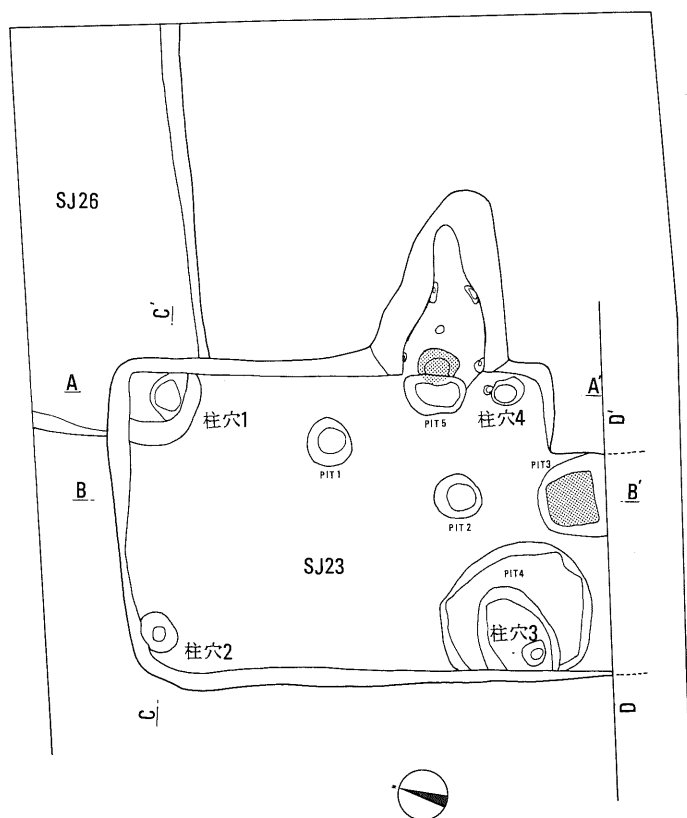
1. 明褐色土
2. 茶褐色土
3. 暗茶褐色土 土器片が若干混じる。
4. 暗褐色土 焼土とロームブロックを少量含む。

塩西Ⅱ 3号井戸土層説明 (第23図)

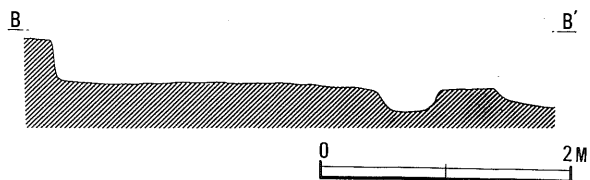
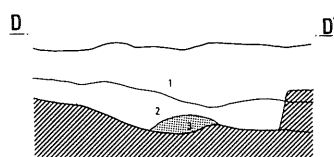
1. 褐色土 ロームを多く含む。
2. 茶褐色土
3. 暗褐色土

塩西Ⅱ B-52～B-53土層説明 (第23図)

1. カク乱、暗茶褐色、ロームブロックなどが混じる。
2. 黄褐色土(ソフトローム)と茶褐色とが混じる層。
3. 明茶褐色土(ソフトロームが若干混じる。)



A' 76.40



土層説明(第24図)

1. 黄茶褐色土、細粒、軟質ローム。
2. 暗茶褐色土、焼土粒子、ローム粒子を含む細粒。
3. 焼土粒子、ブロックを含む暗茶褐色土、粘質。

第24図 塩西Ⅱ第23号住居跡

第23号住居跡 (S J 2 3)

遺 構 (第25図)

B-57付近に位置する。ほぼ全体を検出している。S J 26と重複するが本跡が前者を切っている。2.6×3.5mの長方形プランを呈し、カマドは東壁南コーナ寄に位置している。カマドを通る住居主軸方位はN-88°-Eを示す。南壁側が外方へ張り出す特異な形態をとる。フク土は3層に分けることができ、床面は地山面を硬く踏み固めている。床面は平坦である。壁の立ち上りは、北壁32cm、東壁28cm、西壁32cmを測るしっかりした掘込みをしている。各コーナには柱穴に当るピットがそれぞれ検出され、柱穴1は直径28cm、深さ32cm、柱穴2は直径30cm、深さ22cm、柱穴3は直径20cm、深さ25cm、柱穴4は直径22cm、深さ30cm、を測る。他に小ピット、大型ピットがカマド前面から張出部にかけて検出された。張り出し部は、南東コーナより65cmの場所から南側へ直角に張り出す。西側は西壁の延長がこれに相当する。南壁は約40cm程区外へのびる。

張出部のピット3は65×(70)cmの規模を持ち、40×40の赤変した結晶片岩の平扁材や、砂岩塊が入っていた。ピット4にも同様の石材片が検出された。遺物はカマド周辺のフク土中やカマド内より須恵器坏、土師器片が、またカマド前面の床上からは羽釜型の土器が出土している。他に鉄滓がカマド中より検出している。

カマド (第26図)

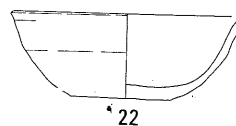
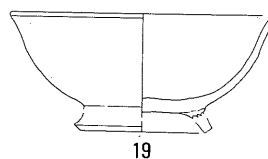
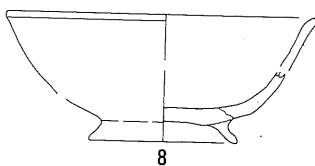
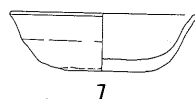
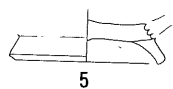
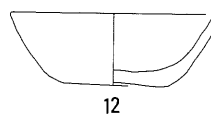
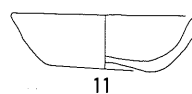
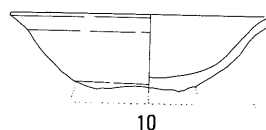
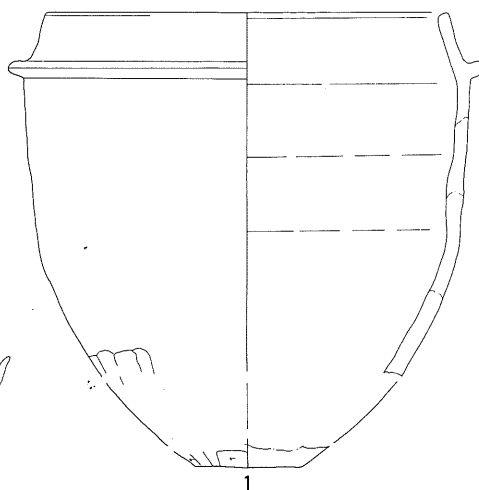
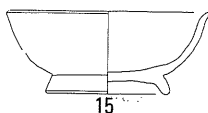
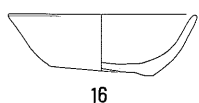
カマドは袖を持たず、燃焼部を屋外へ出している。掘方面に緑泥片岩を縦に打ち込み、さらに横長の石材を構架させ石組によるカマドを構築していた。燃焼部は幅120cm、奥行150cmを測る。石組の範囲は石材打ち込み痕のピット範囲と一致すると考えられ1.2×1.3mの規模である。燃焼部下面には直径90×70cm、深さ80cmのピットが穿たれていた。燃焼部より煙道へは15°～20°の緩やかな傾斜を持って移行する。焚口部は90×65cmの規模をもって住居屋内に位置する。

第26号住居跡 (S J 2 6)

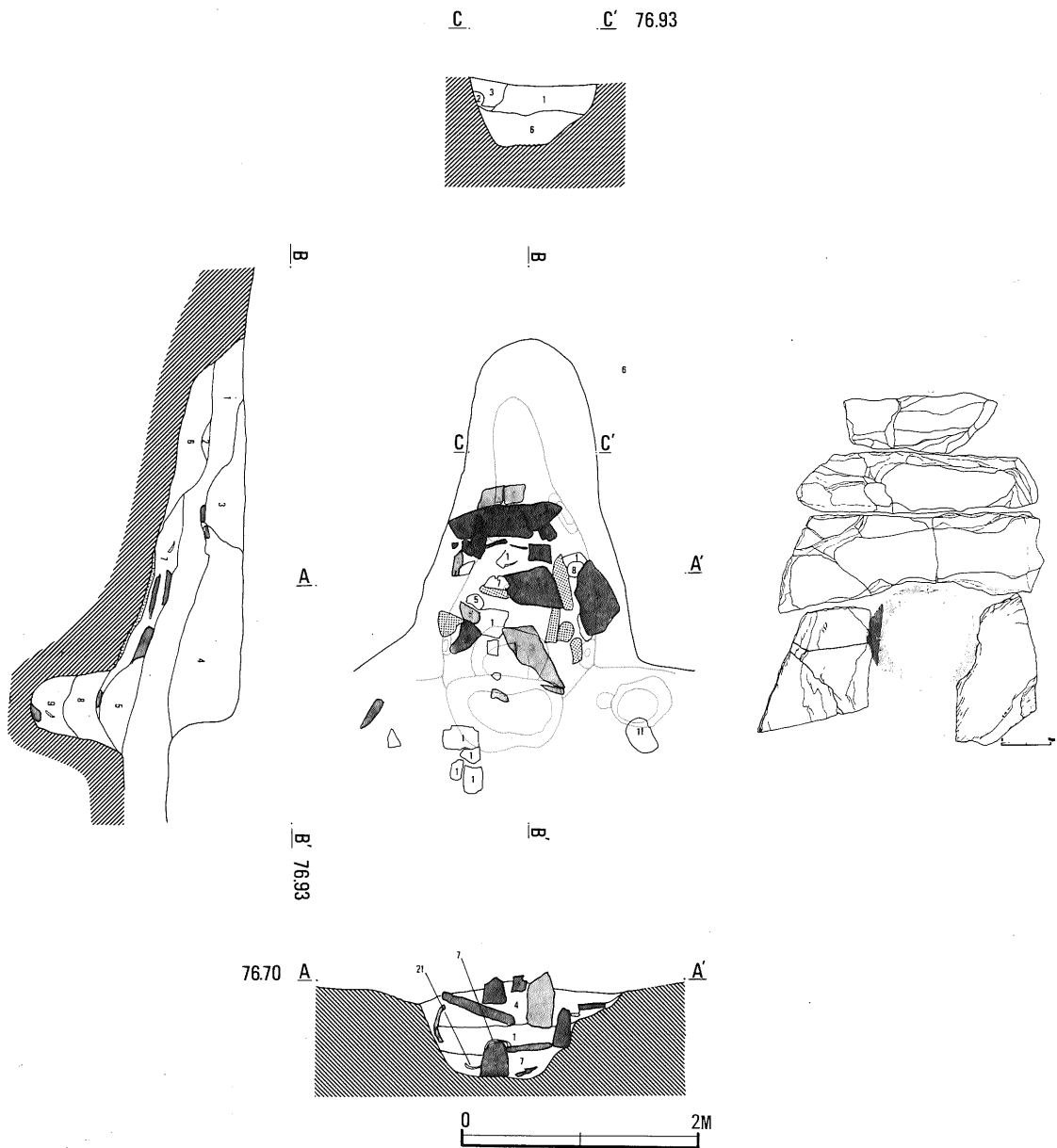
遺 構 (第25図)

B- 付近に位置する。住居跡南西コーナを検出している。S J 23号住居跡に切られる。方形プランを呈する。南壁3.4m、西壁1.4mを調査しているが大部分は区域外に位置している。フク土は4層に分けられ、地山面を床面としている。床は平坦だが硬くしまっている。壁の立ち上りは南壁15cm、西壁20cmを測る。出土遺物は土師器細片の他ほとんどなく、図化できる資料も見当らなかった。

1. 暗茶褐色
2. 黑茶色
3. 燒土



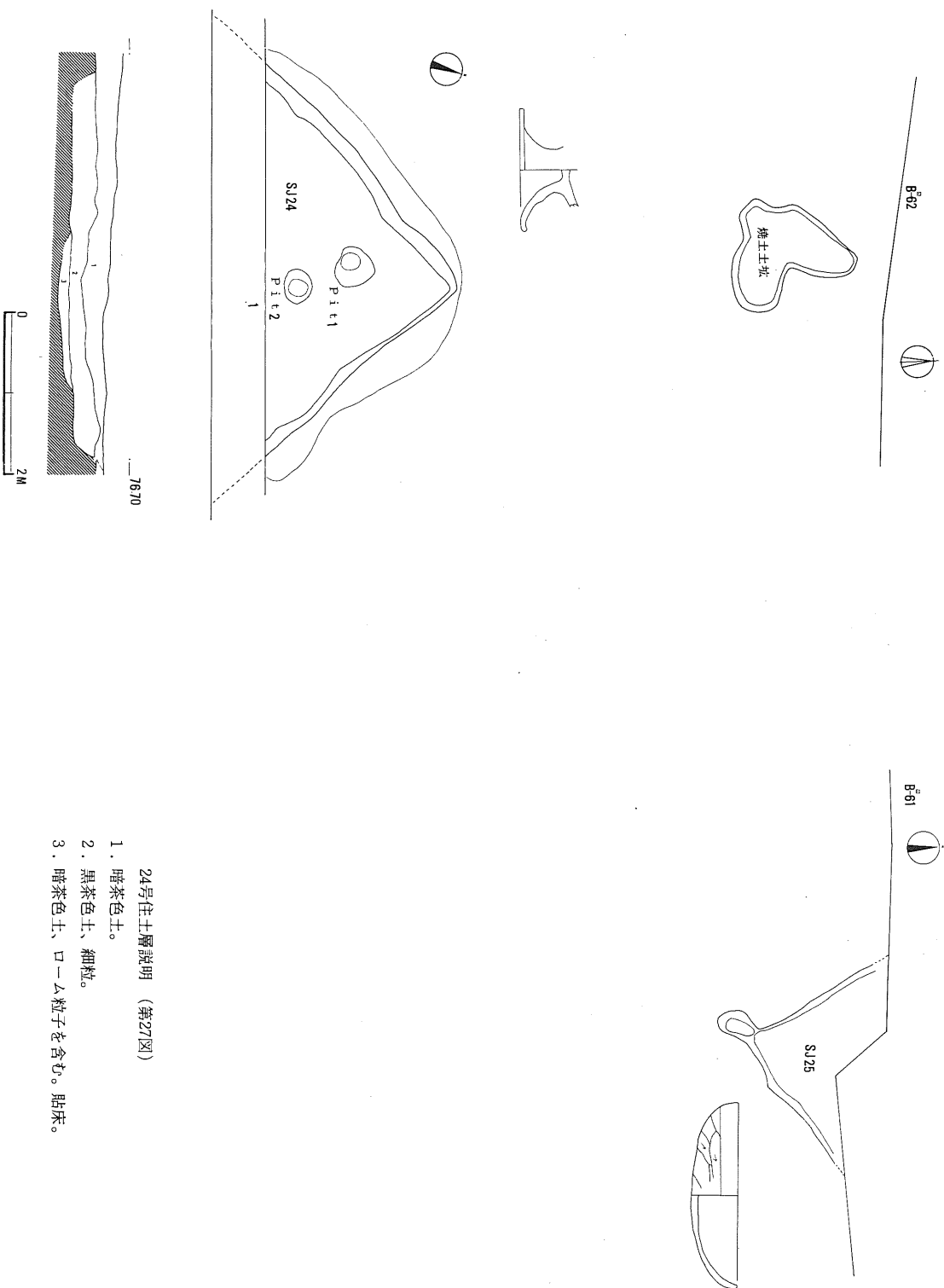
— 46 —



第23号住居カマド土層説明 (第26図)

- | | |
|-------------------|--------------------|
| 1. 黄褐色土。 | 6. 焼土を含む、暗茶褐色土。 |
| 2. 黄褐色土、焼土が混じる。 | 7. 焼土を多く含む、暗茶褐色土。 |
| 3. 茶褐色土、若干焼土が混じる。 | 8. 炭化物を多く含む、暗茶褐色土。 |
| 4. 黄褐色土、茶褐色土が混じる。 | 9. 焼土粒子、茶褐色土。 |
| 5. 黒褐色土。 | |

第26図 塩西Ⅱ第23号住居跡・カマド跡



24号住土層説明 (第27図)

1. 暗茶色土。
2. 黒茶色土、細粒。
3. 暗茶色土、ローム粒子を含む。貼床。

第27図 塩西Ⅱ第24号住居跡・第25号住居跡・焼土坑

第24号住居跡 (S J 2 4)

遺 構 (第27図)

B-60付近に位置する。住居北隅を中心とした東西壁を検出している。方形プランを呈するが、確認面では隅丸状のプランが現われた。おそらく住居構築面が地山ローム面より上位にあったか、住居周囲に周堤帯状の高まりがあったのではないかと考えられる。東壁は3 m、西壁は3.5 mを検出した。壁の立ち上りは、東壁27cm、西壁22cmである。フク土は2層に分けられ床面は地山面と一部貼床を施す。床面にはピットが2ヶ所検出されたが、おそらく柱穴に当るだろう。Pit 1は直径45cm、深さ30cm、Pit 2は直径40cm、深さ32cmを測る。

出土遺物はフク土、床上より須恵器坏、土師器坏、甕等の破片等が少量出土している。

第25号住居跡 (S J 2 5)

遺 構 (第27図)

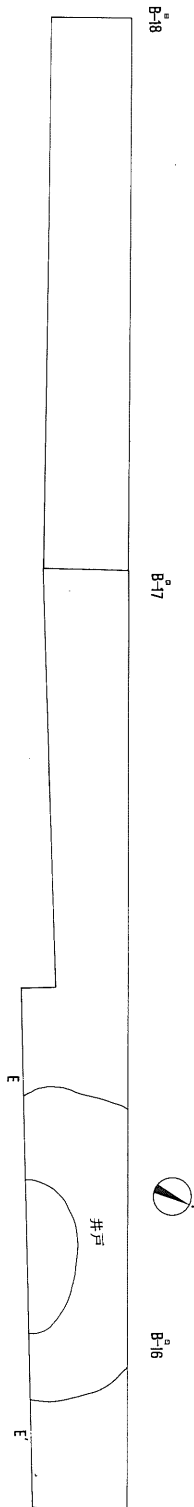
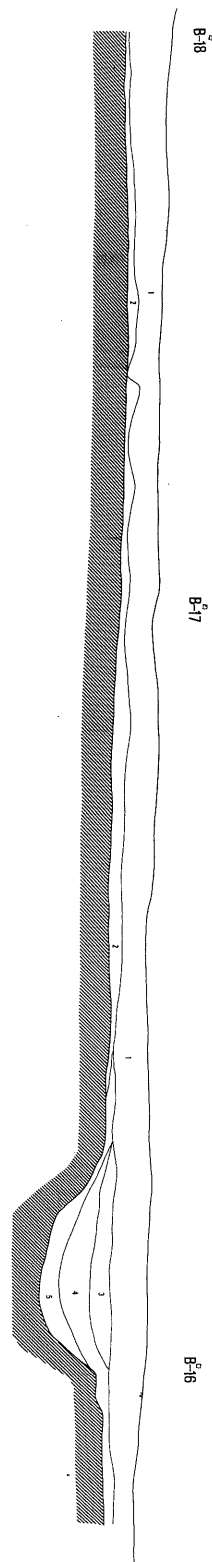
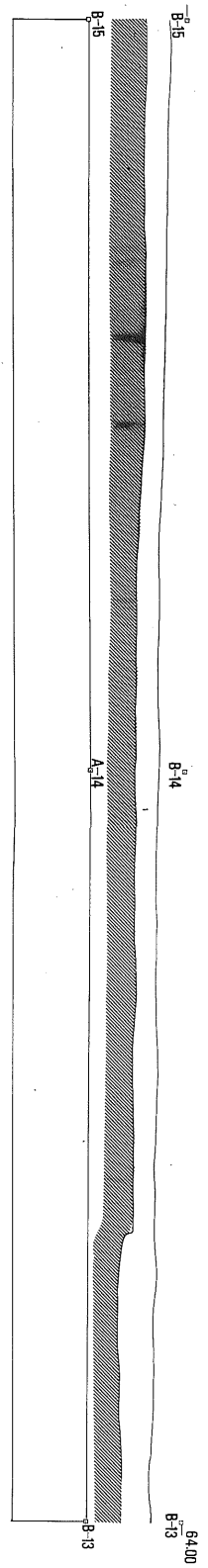
B-60, B-61間に位置する。住居南コーナー部を検出している。住居は方形プランを呈すると考えられるがほとんど区域外にある。東壁2 m、西壁1.8 mを検出した。壁の立ち上りは東壁20cm、西壁16cmを測る。コーナー部には小ピットがある。直径30cm、深さ25cmを測る。住居に付属するものか不明。フク土は5層に分けられ、床上面には焼土粒子の分布が多く認められた。床面は地山面である。

遺物は土師器細片等が出土している。

焼土土壌 (第27図)

B-62付近に位置する。不整なハート型のプランを呈している。上面に焼土ブロックを多量に含んでおり、掘方面までこの焼土塊、焼土粒子が充満していた。南北1.5 m、東西1.4 mを測り2つの長楕円の掘込みが重複するようだ。深さは30~50cmの凹面の形態をしている。

出土遺物は無く、時期性格は不明である。



土層説明 (第28図)

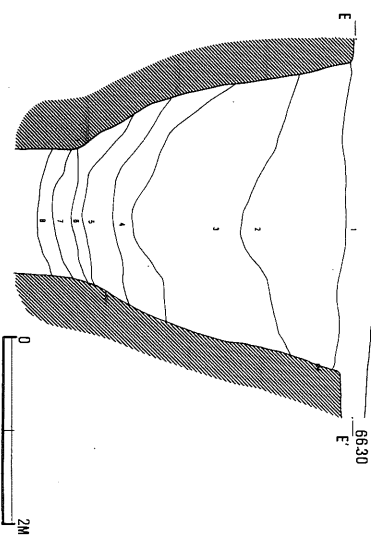
トレンセクション

1. 耕作土、暗茶褐色土。

B-18~B-17~B-16

土層説明 (第28図)

1. 耕作土、茶褐色土。
2. ソフトローム、さらさらしている。粒子は荒い。
3. 褐色土、黒褐色土が多く混じる。粒子は細かい。
4. 茶褐色土にローム粒子が混じる層。粒子は荒い。
5. 暗褐色土、若干ロームブロックを含む。
6. 漆黒色土。
7. 茶褐色土。
8. 黒色土、や、褐色味をおびる。遺物包含層。
9. 黒褐色土、ローム粒子を多量に含む。
10. 黄白色砂層。
11. 砂質黒色土、一泥水層。
12. 青灰色層。
13. 青灰色砂質土層。



第28図 堀西II井戸

井戸 1号

遺構 (第28図)

B-16付近に位置する。限定された調査区のため1/3程度しか検出していない。また南側は道路下のため井底まで調査が達していない。上面形はほぼ3.4 mの円形を呈すると思われる、3 m降下した位置で直径1.3 mを測る。壁面の崩落によるためであろうが断面形はこの変換点まで楕円形をしている。フク土は、調査可能な部分まで9層に分けられたが、さらに2 m以上堆積しているようだ。4～6層中に土師器、須恵器を多く含んでいた。

構造、形態、又出土遺物などから中近世の井戸ではなく、奈良・平安期のものであろう。

井戸 2号

遺構 (第29図)

B-47付近に位置する。全体の約1/2を検出している。南半部分は道路下に遺存している。B-47からB-49付近は昭和初年まで屋敷地であったらしく、県道の改良に伴って移転したのだという。付近の住民も家屋と井戸が存在していたことを記憶していた。フク土はカク乱のため東側は良好でないが、1～3層までが埋没土で、21層がタタキ面となっているため、井戸が使用されていた当時の家屋の土間、又はタタキであったと考えられる。以下の4～6、9～10、12～24までは井戸の裏込めに当る。掘方の上面形はほぼ3.6 mの円形を呈すると考えられ南西に寄った場所に井筒を設定している。井筒は、小江川山中より切り出された白色凝灰質砂岩で約21×18×30cmの長方形の切石を小口面を壁面とするよう、下位から上位にゆるやかな右らせん方向に積み上げている。

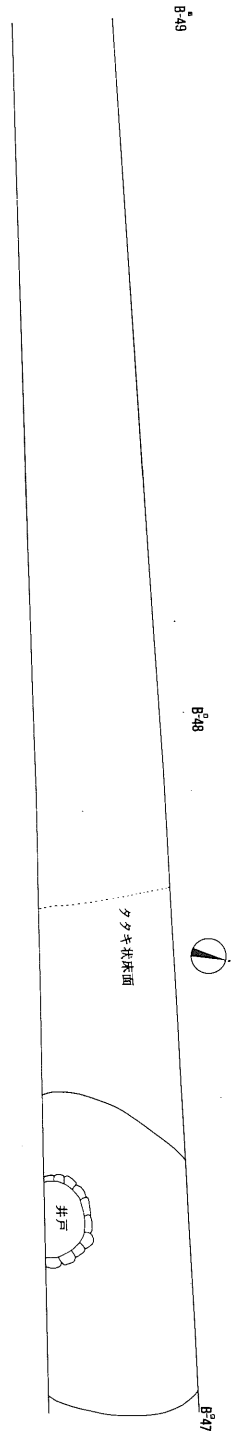
裏面は、成形くずを組石間に詰め込み、さらに白色粘土でおおっていた。この裏込土中より陶器底部が出土している。近世～近代にかけての時期に構築、使用されたものであろう。

溝 (第30図)

A-13付近に位置している。ほぼ南北方向に走る。南方へ向けて幅を広くしている。最大幅は、1.5 m、深さ12cmの規模を持つ。浅い箱形をしている。東側に直径約1.2 mの深さ30cmの土壌が位置している。

溝 (第30図)

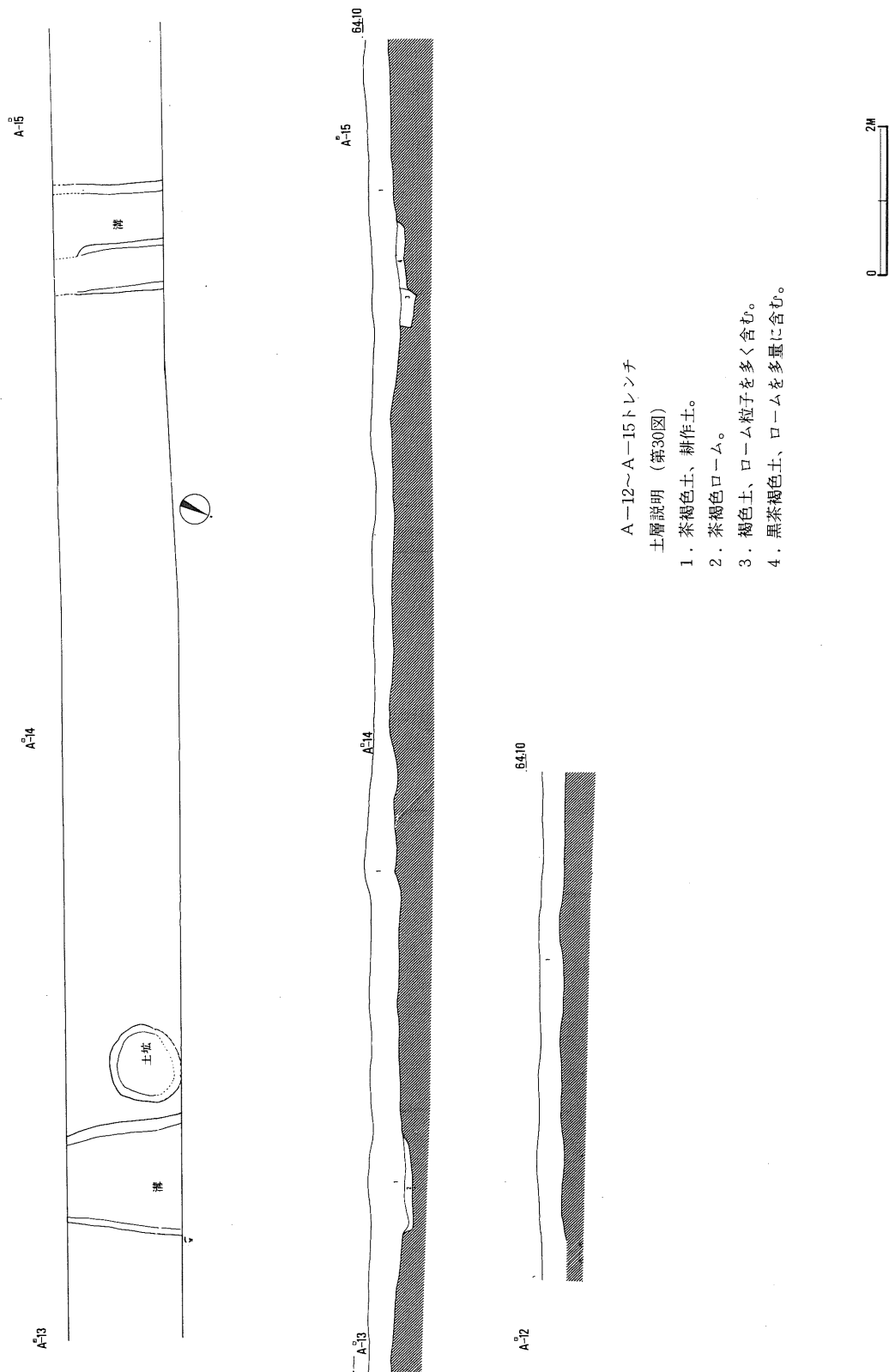
A-15付近に位置している。ほぼ南北方向に走る。幅1.4 m、深さ20cmを測る。断面形は一段下りの箱形をしている。

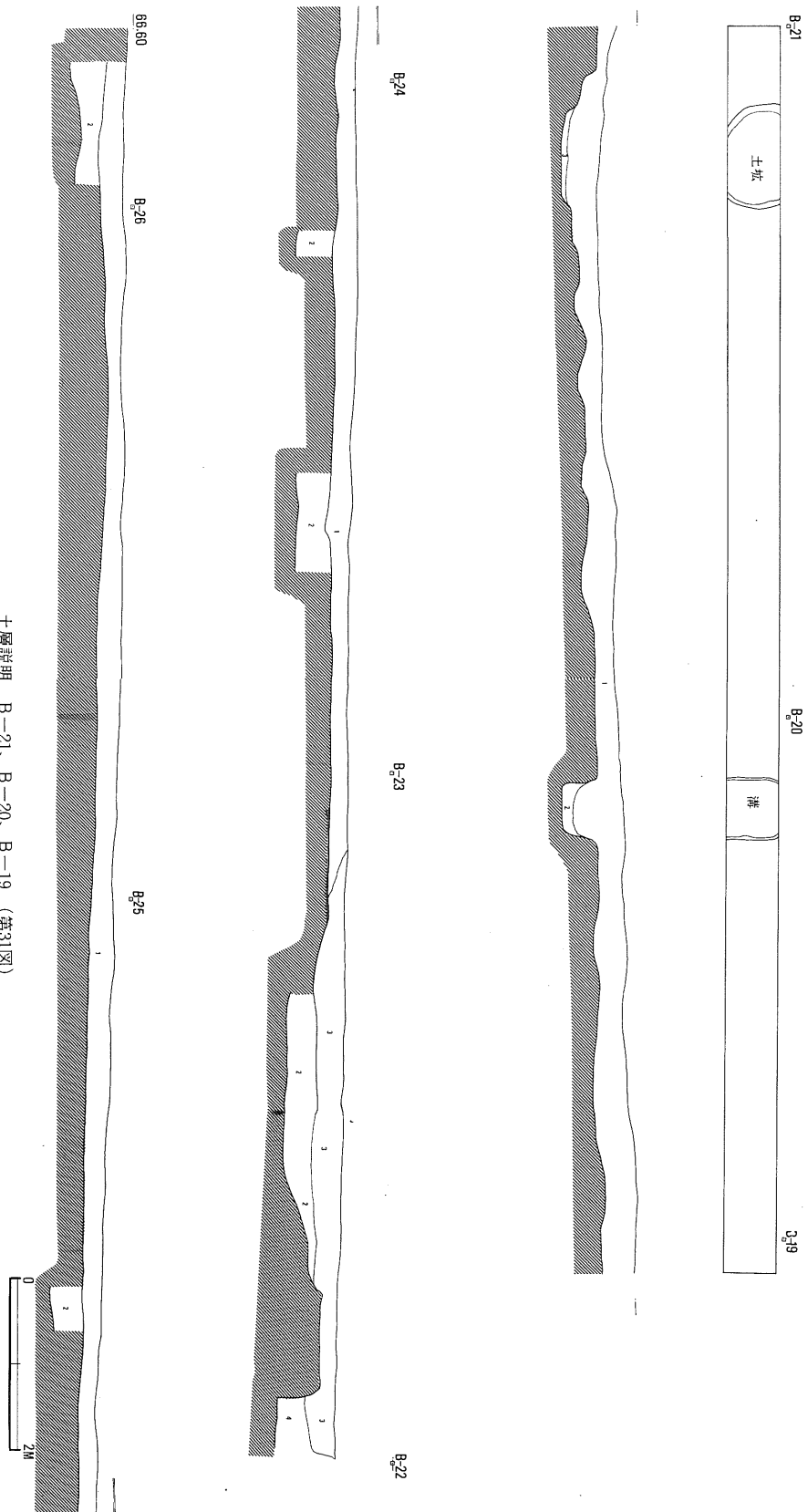


井戸 2号 土層説明 (第29図)

1. 褐色土。
2. こげ茶褐色土。
3. 茶褐色土、ロームゾロツクを若干含む。
4. ソフトローム。(褐色)
5. 黄茶褐色土、岩盤の石を少量含む。
6. 暗茶褐色土。
7. 黄色ローム。
8. こげ茶褐色土、ソフトロームが若干混じる。
9. 茶褐色土、岩盤の石を多く含む。
10. わずかに暗茶褐色土が混じる。
11. 茶褐色ローム
12. 暗茶褐色土、岩盤の石を多く含む。
13. 茶色土。
14. 黒茶褐色土、ロームゾロツクを若干含む。
15. 茶褐色ローム。
16. 黄褐色ローム。
17. 黒茶褐色土、茶色ロームを若干含む。
18. 黄色ローム。
19. 黒褐色土。
20. 茶色ローム。
21. (4層上) 床面、灰色土、かたい。
22. こげ茶色土。
23. 茶色土、茶色ロームを少量含む。
24. 茶褐色土、ロームゾロツクを多く含む。
25. カク乱。
26. 岩盤の石の層。
27. 碎石層。
28. 明茶褐色土。

第29図 塩西Ⅱ近世住居跡と井戸





第31図 塩西Ⅱ・B21～B26・土層図

土 壙 （第31図）

B-21付近に位置する。プランは全体を調査できないが、円形を呈すると思われる。直径約1.2 m、深さ10cmを測る。

溝 （第31図）

B-20付近に位置する。南北方向に主軸を持つ。溝・土壙であるのか決めかねる。幅70cm、深さ30cmを測る。断面は箱形を呈する。

埋没谷 1 （第32、33図）

BM-7, B-5 付近に位置している。埋没谷は全体を掘り下げていない。BM7, B-5 付近で遺物のまとまりがあったことから、この周辺を掘り下げた。耕作土下に黒色土が広く、厚く堆積し、この下位から下層の茶褐色土中にかけて土師器、須恵器等の遺物が出土している。B-5 付近は埋没谷の東側縁に当たると考えられ、この位置で谷の深さは1.2 m程を測る。この部分から出土する土師器、須恵器は、大型の破片が多く、炭化物、茶褐色土、焼土の混在から、一括で廃棄されたと考えられる。このB-5 付近の一括廃棄土のレベルは東側に立ち上る地山ラインとほぼ等しく、谷を一部埋めたものと考えられる。

埋没谷 2 （第31、34、35図）

B-19からB-26付近には埋没谷2が侵入している。検出された遺構は少なく、遺物も少量であった。フク土は黒色土が良く発達しており、A-25付近で約1 mの層厚を測る。遺物は縄文土器から土師器、須恵器片を混じえている。

B-36付近には近世住居が存在していた。これは同一地番内のT家の旧家敷跡だという。土間であった硬質の土層面が約3.6 mに渡って確認された。

A-35, A-38間土層 （第36図）

地山面は凹凸が認められたが、明確な遺構はほとんど存在していない。

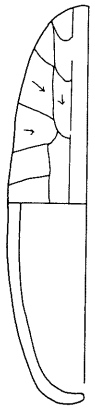
埋没谷 3 （第37図）

A-49, A-53付近に位置する。常安寺西側A-47付近より谷に移行し、A-50付近で立ち上る。緩やかな傾斜をもち、堆積土のカク乱は少ない。遺物の出土も少ない。

埋没谷 4

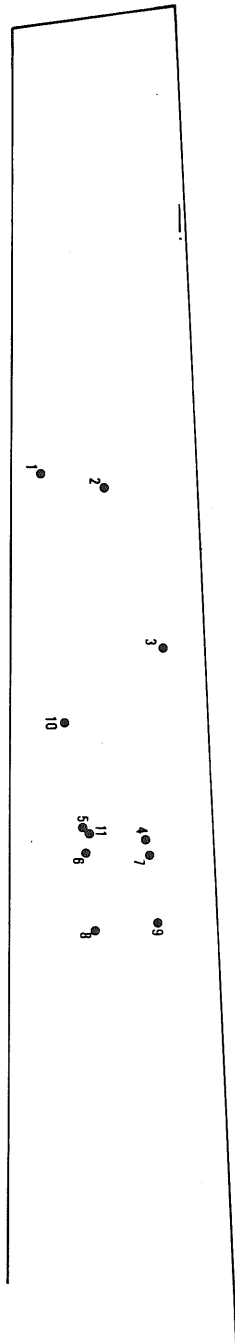
BM, A 付近に位置する。もっとも落差の大きい谷で上部と底部の差は3.5 m程を測る。

黒色土の堆積が厚く、地山面まで1.3 mの層厚を測る。遺物は、この黒色土中より出土しており、古式土師器片が主体を占める。

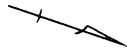


3

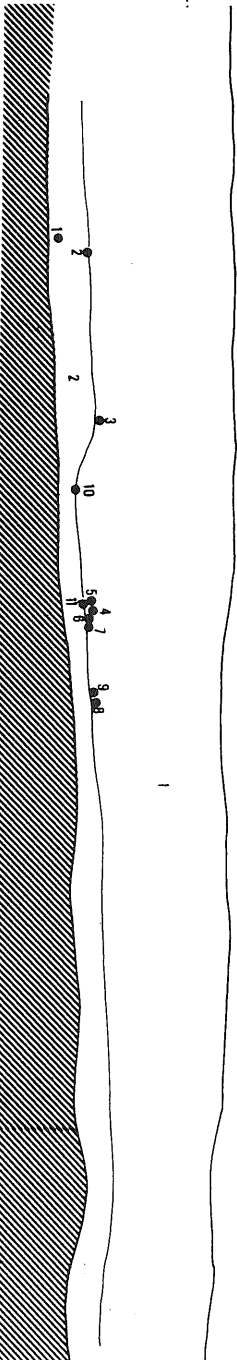
BM-2



BM-7

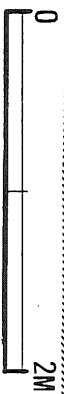


62.50

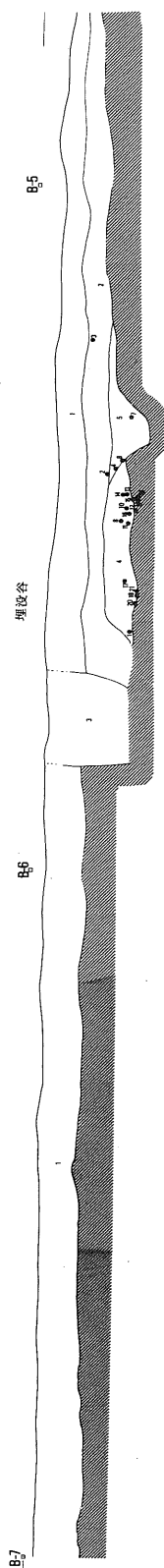


BM-2 ~ B-7 土層説明 (第32図)

1. 暗茶褐色土。 2. 黒色土。



第32図 塩西Ⅱ包含層埋没谷



第33図 塩西Ⅱ埋没谷

土層説明

1. 茶褐色土、粒子は細かい。若干焼土粒子が混じる。

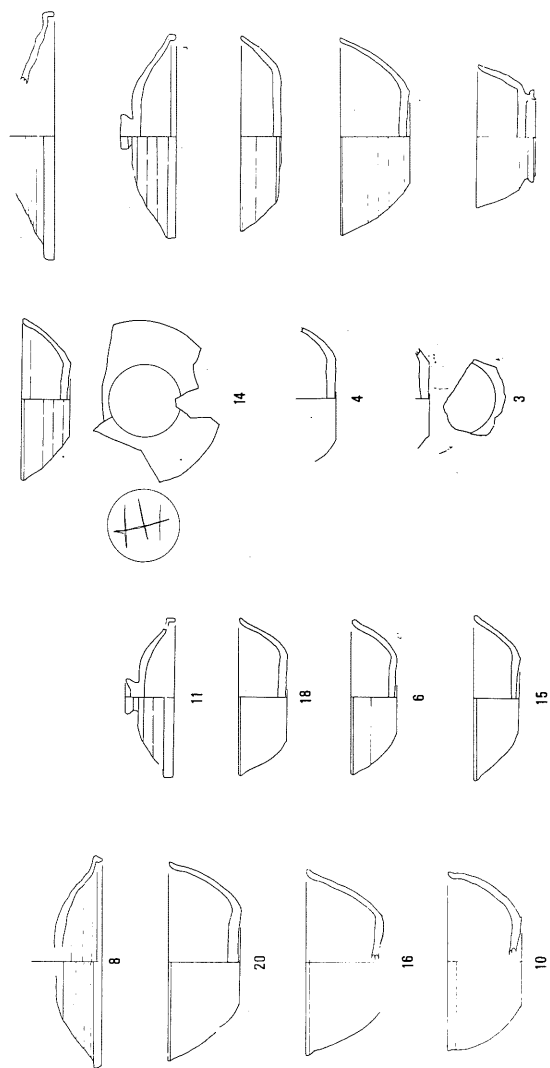
2. 黒色土。

3. カク乱。

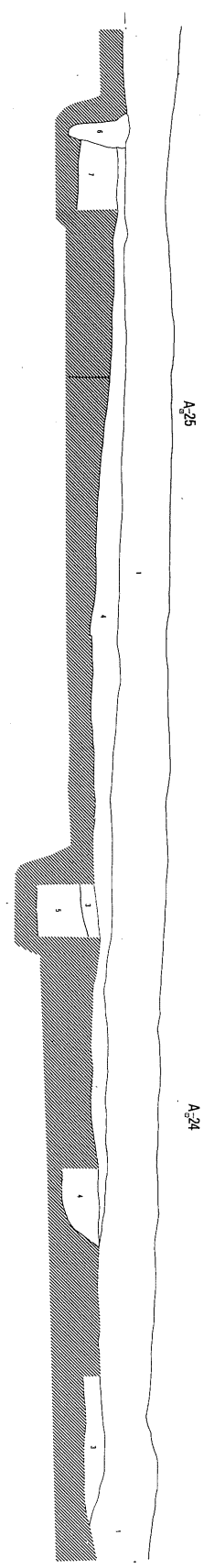
4. 谷の埋没土？ 暗褐色土、焼土粒子を若干含む。

ロームブロックを若干含む。包含層？ 住居址の土を捨てたと思われる。

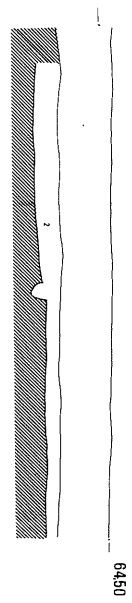
5. 暗褐色土。



第33図 塩西Ⅱ埋没谷



A₂₃

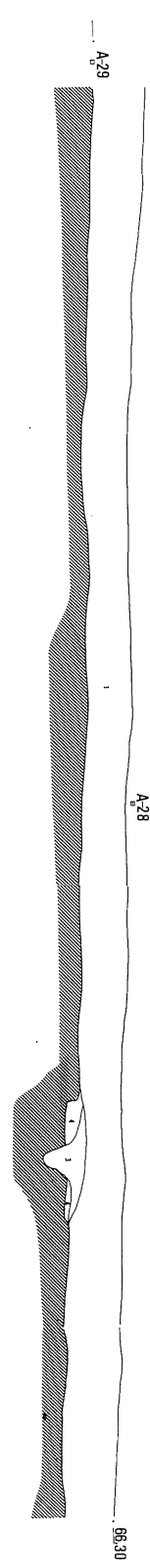


6450

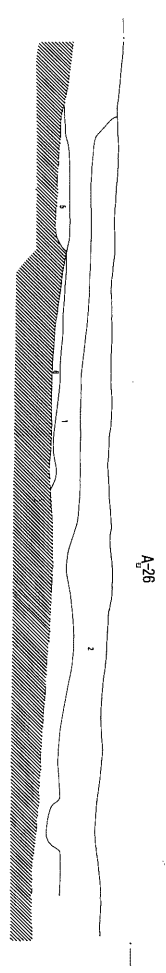
- A-23~A-25 土層説明 (第34図)
1. 茶褐色土。
 2. 褐色土、ローム粒子を若干含む。
 3. 黒褐色土に茶褐色土が、多く混じる。
 4. 暗褐色土、ローム粒子が少し混じる。
 5. 漆黒色土。
 6. 黒色土、ロームフロックが、少量混じる。
 7. 茶褐色土、赤褐色土が、少量混じる。

A-27~A-26~A-25 土層説明 (第34図)

1. 茶褐色土。
2. カクレ。
3. 黒茶褐色土、ローム粒子が少量混じる。
4. ソフトローム、黒褐色土がかなり混じる。
5. ソフトローム、褐色土が少量混じる。
6. 黄褐色土。



A₂₉

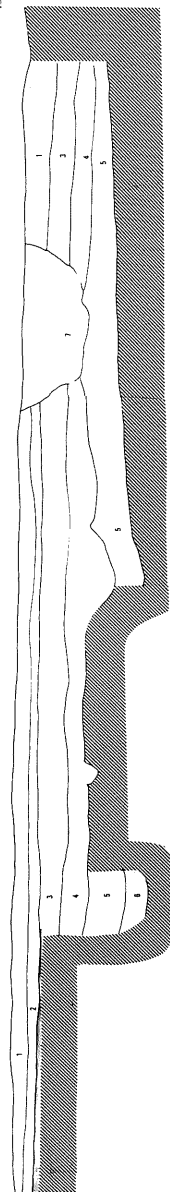
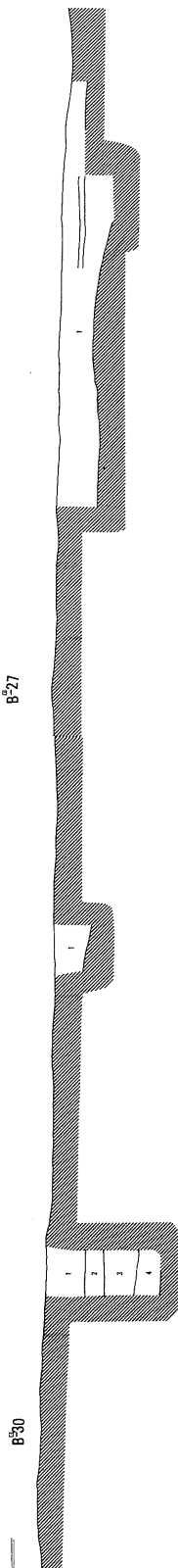


A₂₆



第34図 塩西Ⅱ・A23~A29・土層図

68.40

B²⁶B²⁷B²⁷B³⁰B²⁸

B-27~B-26土層説明 (第35図)

1. 明茶褐色土。
2. 褐色土、ロームが混じる。かなりつきかためてある。土間?
3. 茶褐色土、(焼土、ローム) 粒子を少量含む、粘質有。
4. 暗茶褐色土、粒子は荒い。
5. 漆黒色土、粘性有。
6. 黒褐色土、粘性有。
7. カク乱。

B-35~B-37杭

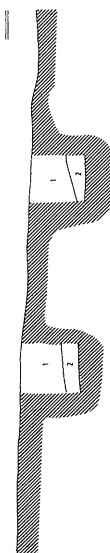
土層説明 (第35図)

1. 暗褐色土、ローム粒子をわずかに含む。
2. 暗緑色粘土とソフトロームが混じる。
3. 暗緑色粘土。
4. ソフトローム。
5. 褐色土、(砂を多く含む)
6. (黒) 茶褐色土。
7. ローム、つきかためてあり貼床状。
8. 黒茶褐色土、ローム粒子を若干含む。
9. (黄) 褐色土。
10. ソフトローム。

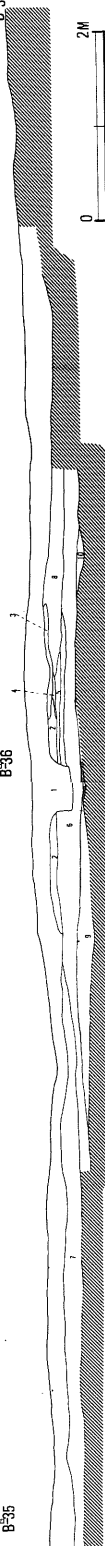
B-31、B-29、B-28、B-30土層説明 (第35図)

1. 耕作土。
2. 茶褐色土。
3. 黒色土。
4. 湧水、ローム。

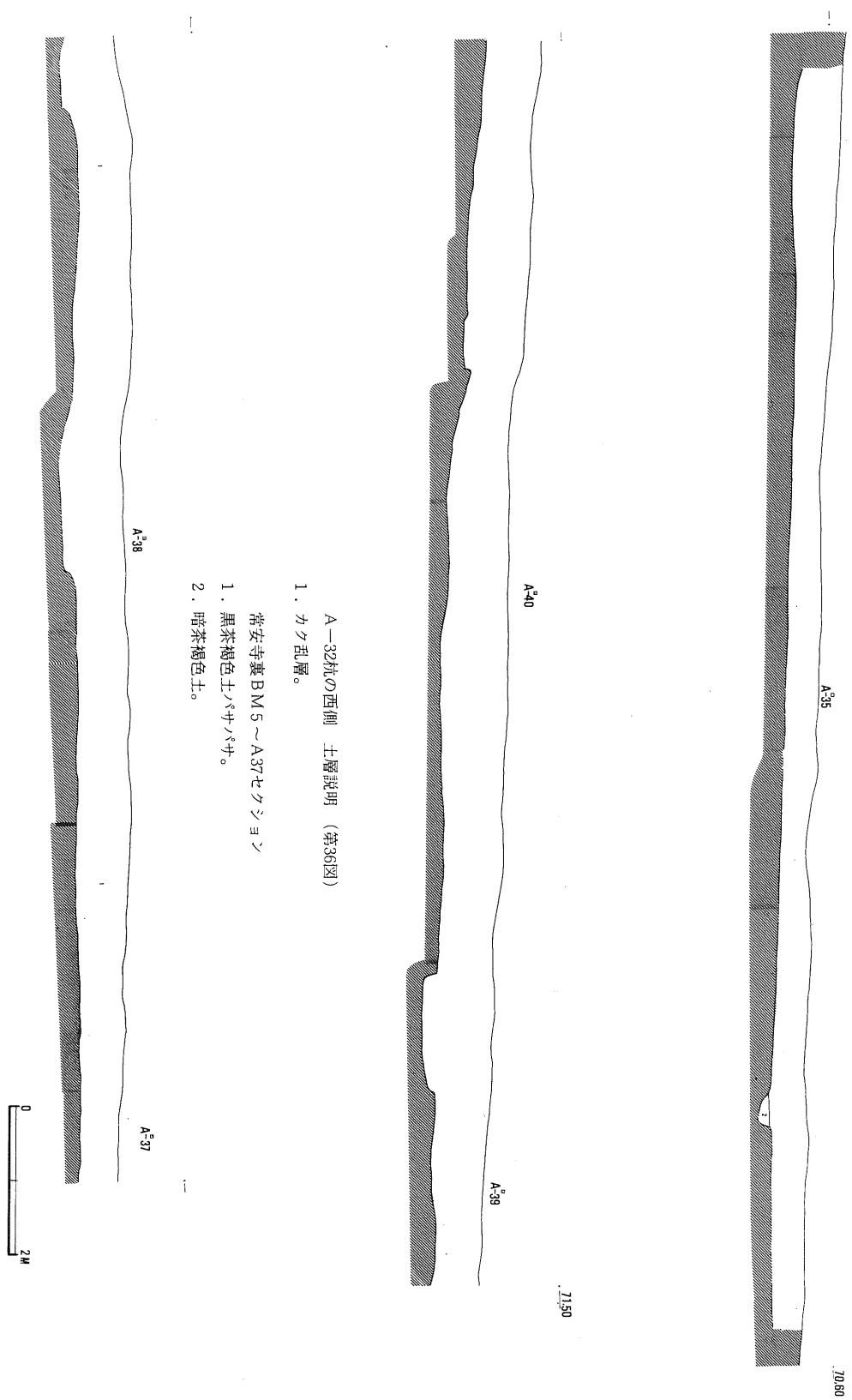
69.30

B³¹

70.90

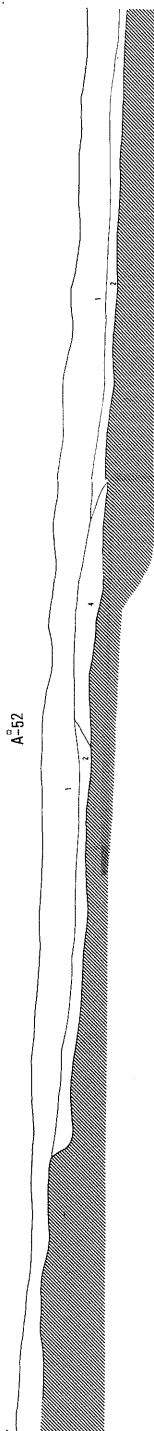
B³⁵B³⁶B³⁷

第35図 塩西Ⅱ・B26~B37・土層図



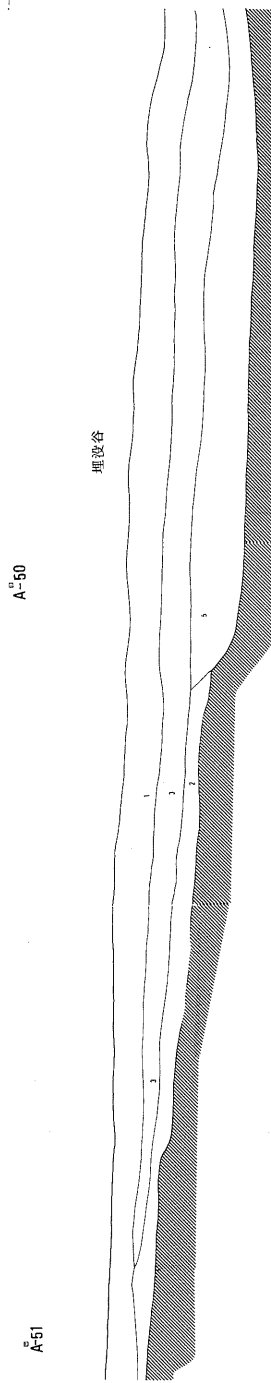
第36図 塩西Ⅱ・A33～A37・土層図

76.52



A-52

76.52



A-50

A-51

埋設谷

A-50～A-53トレンチセクション土層説明 (第37図)

1. 茶褐色土。
2. 暗褐色土、ロームが少量混じる。
3. 暗褐色土、褐色土が少量混じる。
4. ソフトローム。
5. 漆黒色土。



第37図 塩西Ⅱ・A50～A52・土層図

7. 常安寺館の現況

現在の常安寺地域に所在していた館跡と考えられる遺構は、北側と西側を残すのみで東・南はほとんど削平されたと考えられる。東は庫裡、道路に、南は庭、墓地となっている。現状で残る遺構である北面の土塁上の地ぶくれは、長さ45m、幅3m、高さ0.6~1.0mではほぼ東西方向へ伸びている。そして北西の方向でL字型に南へ折れ、南端で方形の土壇状となっている。この土壇は1辺の長さ4m、高さ1.8mをはかる。又、北西のコーナー付近は幅2mにわたり入口状に土塁のたかまりがなくなっている。又、北側の土塁から北西コーナー部へかけて土塁外側に堀状の凹みが続いている。北側の土塁は東端部が折れ曲る寸前で、失なわれており、この位置を越えて北縁の土塁が延びていたと考えられる。

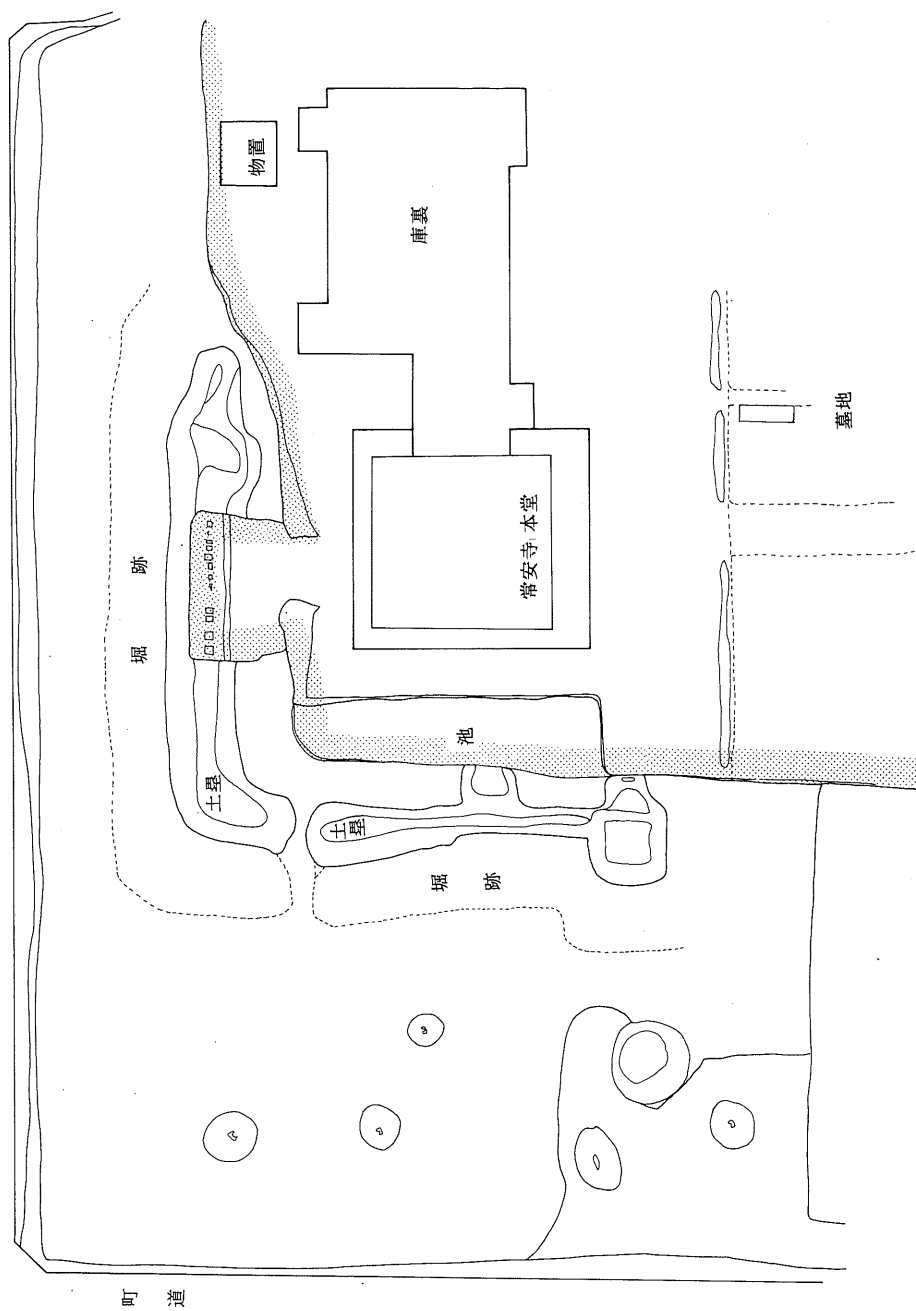
北縁での土塁コーナー部での長さを西側の土塁に延長すると竹林と畑との土地境に相当し、古い旧地割にあたりと考えられ、土塁に囲まれた部分の規模は60×60mの方形を呈するだろう。発掘区より延長したトレンチの所見によると、堀は箱葉研型の形態をもっており、幅3m×深さ1.2mを測るようだ。

現在西側の土塁は、土壇以南は残っておらず、竹林、畑地となっている。土塁上には住職の墓地がいとなまれ石塔、墓碑が十数基建並んでいるが、3基の板碑が含まれ2基は完存している。

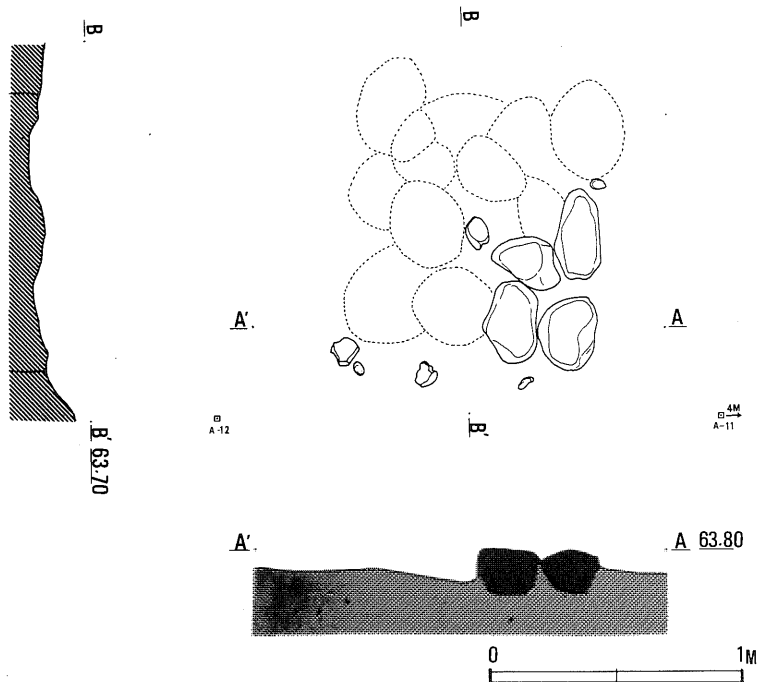
この板碑は元享年間（1321~1324年）の紀年と「一念弥陀仏 即滅無量罪 現受無比楽 後生清浄土」の偈頌がある。他のひとつは、貞和元年（1345年）の紀年と「其仏本願力 聞名欲往生 皆悉到彼国 自致不退転」の偈頌をもつ、さらに土塁南端の土壇上には宝篋印塔の基部、笠部分等が残されており板碑は文明（1469~1488年）の紀年を有している。

宝篋印塔は板碑と同じく室町期のものと考えられる。又、北側の堀トレンチからは青磁片と共に応安2年の紀年をもつ宝篋印塔の基部が出土している。これら中世石造物が多く残されていることは、この地が中世以来のゆかりをもつ場所であることの証左であり、在地領主の居館地に寺院を建立した結果であるかも知れない。本寺は寺伝によると大永年間（1521~1529）の創建とされている。

中世には自己の居館地に寺堂を建立することがあったらしく、これらの寺院には堀・土塁を巡らす例を掲げることができ、江南にも、平山館（平山家）・上杉館（小久保家）・成沢館（静簡院）・増田館（文殊寺）などがある。いずれも常安寺館より規模大と考えられ、時期的には降ると思われる。上述の例は、戦国期末の館主の隠棲地との伝承を伝えており、土塁、堀にしても防御的な構築物というより、敷地・寺域を界する施設との意味合いの方が強いと思われる。江南町の中世にどのような在地有力者が居たのか全く未知と云って良いが、出土遺物から考えられる本跡の存在した14~15世紀の様相は、今後の調査に待つところが大きい。



第38図 常安寺館概略図



第39図 塩西Ⅱ旧文殊尊祠跡

文殊尊祠跡 (第39図)

A-11付近に位置している。祠敷地の全体を検出している。近傍のN家が祭祠、管理していたというが、第二次大戦後屋敷地への移転に伴って廃絶されたという。道路脇と畑地境界部に位置しており塞神的性格もあったと伝えている。遺構としては人頭大の河原石4個が南東隅に当る基壇石として残っていた。他の石は抜き去られたようで河原石を敷いた痕跡だけが凹面として認められた。基壇は地山に石を敷くための成形しかされてない。

河原石は全体として16個程が使用されていたらしく、一辺が約1mの方形プランを呈していた。このことは上に乗る建造物が伝承の伝えるとおり、3尺の幅と奥行、高さ4尺、切妻屋根であったことと矛盾しない。付近より燈明皿が出土しているが本跡に伴ってさしつかえない。

8. 塩西Ⅱ遺跡の出土遺物

詳細は観察表に別記してあるので、形態・成形・整形手法の特徴等を概述したい。なお遺物番号は1-1を例にとると1号住居No.1という意味を表わしている。

第1号住居跡（第40図）

1. 蓋はかえりの高さが口縁とほぼ等しい。2, 3は口縁をわずかにつまみ上げているだけで、かえりは全く形だけのものとなっている。4. 土師器坏は口径：器高＝3：1の比を示すが、口辺の稜線は認められず、口縁端部もつまみ上られたままである。15, 16は器内面に暗文の施された土師器坏で、中心より放射状に直線文が施されている。

第3号住居跡（第40図）

1. 須恵器蓋は良く焼きしまっているが黄灰色を呈する。かえりは口縁端部を内側へ折り曲げている。5の須恵器坏は口径：底径＝2：1の比を示す。わずかに内弯を見せ外方へ開く。体部外面のロクロ目は大きく荒い。6の須恵器碗は底面に直交するヘラ描きを残す。7. 土師器坏は内面に暗文を残している。

第6号住居跡（第41, 42図）

2～6. 須恵器坏は口径：底径＝2：1.5の比を示す。口径は15cmに集中する。口縁は上外方へほぼ真直に開く口縁部を強くおさえ薄くする。そのため口縁内面中位が盛り上がった感じになる。2, 6は底部にわずかに糸切痕を残す。3, 4は底部から体部にかけてヘラ削を施している。8. 土師器坏は器高が2cmと浅く、底部周辺にわずかにヘラ削を施している。10～14. 土師器・甕は、最大径を口縁に持ち、八の字状に外返する。胴上半は右下方より削り上げている斜削りである。胴下半より底部は下方に削り下げている。口頸部付近はほぼ横位のヘラ削となっている。

第7号住居跡（第43図）

1～2. 須恵器蓋は、つまみを付さず、糸切のままである。かえりは下位へ折り曲げる。1は肩部をヘラ削整形するが、2は稜を残している。4. 須恵器坏は口径：底部＝2：1.7を示す。10. はわずかにかえりを残している。11. は底面に十字状のヘラ描を施す。14. 土師器甕はコの字状の口縁に近づいている。

第9号住居跡（第44図）

1. 須恵器坏は口縁部を強くナデ付け、小さな稜を付して外反させている。

第10号住居跡（第44図）

1. 土師器台付甕は器高20cmに満たない小型品である。最大径を胴部上半に持つ、コの字口縁である。

第16号住居跡 (第44図)

1. 須恵器坏は口径：底径＝2：1.7を示す。底面外周から体部にかけてヘラ削を施す。
2. 土師器坏は浅く、底部周辺だけにヘラ削を施している。

第17号住居跡 (第44図)

1. 須恵器坏底部のみであるが、底面にN字状のヘラ描を施している。

第18号住居跡 (第44図)

3. 土師器甕は、口縁部に最大径を持つ長胴形の甕であり、口縁部より垂下するヘラ削を施している。

第21号住居跡 (第45図)

- 2 3. 土師器高坏は、口縁が大きく外反する形態を有し、赤彩も施されている。5. 土師器壺は最大径26.8cmを胴部中央に持った膨みのある形態をしている。器面は、ハケナデ後、良くナデられており、体部下はヘラナデが丹念に施されている。

第22号住居跡 (第46図)

6. 土師器坏は、半球形を呈し、身が深い。口縁は内方へかるく折り曲げられ、稜を持たせている。3. 4. 土師器甕は長胴形をする甕と思われ、口縁端部の形状がそれぞれ異なる。

第23号住居跡 (第47, 48図)

1～5は高台を有する土師質の埴である。5を除き口径：底径＝2：1はほぼ等しい。1. 2は身が深く、3はやや浅い。いずれも内面は丹念にヘラ磨きされている。5は7. 8. 9. 10に形態が近く、体部下半に張を持たせ、口縁端部を外反させている。1～5は高台を別に貼り付けているが、1. 2. 5は糸切痕を残している。また5は内面黒彩されており、口縁に炭化物が固着している。出土位置も壁際の検出で燈明皿の用途に使用されたい。

6～10はほぼ同一形態だが、6は中型、他は小型である。体部は張り出さず、直線的に外反し、端部へ至る。底部は糸切離しのままであるが糸切の形状が7. 8. 9では大きく異なっており、特に8については糸切痕かどうか疑わしい。14羽釜は体部の成形痕が良く残っている。つばの貼付に指先、爪跡も残っている。

第24号住居跡 (第48図)

1. 須恵器高坏は、脚部のみが残る。脚部は丸く撓められ、やや上方に外反させている。

第25号住居跡 (第48図)

1. 2. 土師器坏は、口縁部の稜をほとんど持たない。口縁は上方へつまみ上げている。体部下半はヘラ削が施されている。

埋没谷 1 (第49～53図)

須恵器蓋は、口径16.5cm以上の1. 2. 3と13cm前後の5. 6に2分類できる。かえりは口縁端部を内方、下方へ折り曲げている。つまみは2.5～3cm前後ボタン状を呈している。3. 4はつまみ剥離面に糸切痕が残っている。

7. 8. 54. 須恵器坏は、盤状の坏といわれる例に近い。9. 10. 11. 12須恵器碗は、体部に張を持って外反する。口径：底径＝2：1を示す。12は体部の張りが大きく、口縁端部をつまみ上げ外反させている。内面は端部に傾斜する平面を持っている。14は高台を有する碗で口縁は八字に外反する。16. 25須恵器坏は12～13cmに口径が集まる。底径は6～7cmに集中する。底部はすべて糸切のままである。口縁はやや張りのある体部から口縁に至り、わずかに端部を外反させている。

29. 30須恵器坏は口径、底径は前者の一群と相似ているが、口縁端部を外方につまみ出している。

17. 26. 33. 34は底部にヘラ描の線を残している。42～46土師器坏は身の高い42. 46と、身の浅く口径の大きい43. 44. 46がある。47. は内面に布目圧痕を残している。48～52は土師器甕、台付甕脚部である。49は、コの字状口縁をしている。

埋没谷 3 (第54図)

2は赤彩の施された高坏脚部である。内面に絞り目が残る。

埋没谷 4 (第54図)

1. 2. 3は複合口縁を有する。1は甑に当るか。2. 3は口縁を折りかえして肥厚させ、頸部にも粘土帯を貼り付けている。9は赤彩された器台片でよく研磨された精製品である。

11は網目状撚糸文の残る土器破片である。

井戸 1号 (第54図)

1. 須恵器坏は口径15.1cmに底径11.4cmの盤状の坏である。他に須恵器甕破片が出土している。

常安寺裏捨場一括出土遺物 (第58. 59図)

常安寺北側、BM 4 付近より一括して出土した。皿形土壙状の浅い凹みに廃棄されていた。明治期～現代まで陶磁器、染付碗等が混在している。

1. 3は蓋物で、3は急須に合ったものであう。1は続井桁と草花文を、2は将棋駒と三ウロコ、菱形文、3はかたばみ花文を描く。4～7. 9は盛茶碗である。8は大形の碗でいわゆる丼物である。10～14. 17. 18の碗は口縁が外反する。15. 16は直立する口縁をしている。これらの製品はほとんど瀬戸、美濃系の日常雑器と考えられるが、判別困難なものが多い。

染付皿 (第66. 61図)

22は、松竹梅文が内面に見られ、外面には唐草文と紀年銘が見られる。23は口紅を施した型染の皿で内面中心に松竹梅繫文様があり、口径に比して器高の高い碗型を呈している。外面には唐草文がある。24は松竹梅文が内面に見られる。22と同様の皿である。25. 26. 30は、小皿で内面に風景、草木の文様がある。27は内面筏流しの絵を描く。28. 29は腰の張らない皿で28は口紅を有し内面に蕪の文様を描く、29は鶴の姿を浮き彫風に浮き立たせ彩色を加えている。

その他

44の燈明皿は口縁内側に受けを巡らせ一端を切り取り芯置きとする。45の火鉢は瓦質で外面に櫛描による波状文で陰刻押印による菊花文を施している。46～48はガラス製の器である。これらのガラス器は器体中に多くの気泡を含み、器面に鋳型の接合痕を残している。これらの用途は46は化粧水の容器(みやこ染)、47は薬容器(晴眼水)、48がサイダービン(三矢サイダー)である。

これらのガラス器は昭和時代にかかる物と考えられる。

43の燈明皿は44より底径が小さいが、内面は同一の形態である。

鉄 滓 （第63図）

- 1 は、S J 23より出土。重さ32.5 g、碗形、偏平である。黒褐色を呈する。
2 は、S J 23周辺より出土。重さ15 g、偏平、茶褐色を呈する。
3 は、S J 13周辺より出土。重さ20 g、偏平、紫黒褐色を呈する。
4 は、S J 13周辺より出土。重さ5 g、偏平、楕円形、茶灰色を呈する。

貝窠穴泥岩 （第63図）

5～12がある。5はS J 13周辺より出土。白灰色、紫赤色を呈する。6はS J 13周辺より出土、紫赤色を呈する。7はS J 24より出土。紫桃色を呈する。8はS J 23より出土。白桃色を呈する。9はS J 23より出土。白桃色をする。10はS J 23より出土。白桃色をする。11はS J 13周辺より出土。黄褐色を呈する。12はS J 19より出土。白灰色を呈する。

羽 口 （第63図）

13は、S J 13より出土した。羽口先端部分は還元され、黒灰青色となっている。器厚は薄く、0.9 cmほどである。

土壌・館堀の遺物 （第62, 64図）

31は、青磁内面鐫文鉢の口縁部破片である。折損を接着（漆）で補修している。釉は厚目で、やや深みのある天青色を呈する。口縁部は体部からの折りにより、菊花状を呈する。13～14 C 代の渡来品であろう。

34は、青磁花入で、完形品である。卵形の体部より口頸部がラッパ状に広がる。口縁端部は上方へつまみ上げる。耳は肩部の左右に貼り付けられている。耳の形状は、はねを広げた鳥状である。釉は厚みがあり、緑灰色を呈するが釉むらと黒点が所々に見える。日本産伊万里窯などの青磁であろう。

35は、瓦器で、内耳鍋の口縁部破片である。

宝篋印塔 （第64図）

基礎のみが出土している。稜線部に多少の欠失が認められるが、全体として保存状態が良く、整美な仕上である。花崗岩製で24.5 cmの正方形を呈し、上面に2段の塔身受部分を彫り出し、底面は2 cmほど内ぐりを行っている。高さ18.2 cm、塔身までは22.6 cmを測る。側面は束により2窓に区分し、4面で8窓とする。縦11 cm×横9 cmの各窓にすべて銘文を刻んでいる。窓の縁取幅は2 cm前後で内部の凹みは5 mm前後を測る。銘文は、第1面より右廻りに記されており梵字による光明真言の後に第2面左側より以下の銘文が記されている。「右志者為 過去栄寿 聖霊相当 第四十九日 生楽苦死 頓證菩提 乃至法界 平等利益也 応安二年酉乙七月廿八日」である。

応安2年は北朝の年号で1369年に当る。

鉄やかん （第66図）

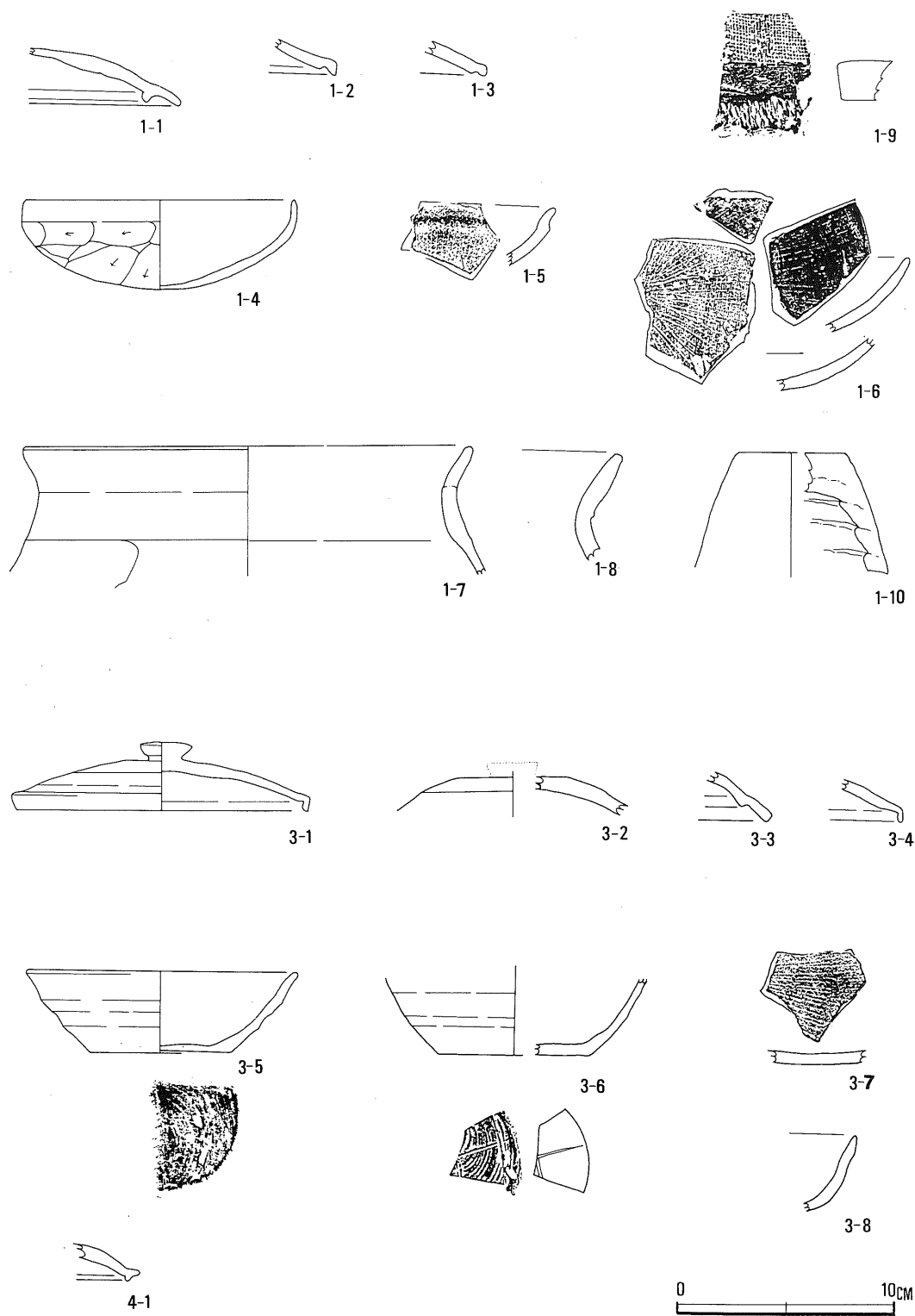
B 2 3 付近の近世住居跡より出土した鉄製のやかんである。この地域では現在でも使用されており一般に「鉄びん」と言われている。茶褐色に錆化しており、底体部には破損孔が開いている。底径、12.5cm、裾径20.4cm、口径9.6cm、器高13cmを測る。体部下半より裾部にかけて、菊花とかたばみ花文が上下に配され、一巡する。対になると思われる蓋も出土しており、直径10cm、つまみ高2cmを測る。昭和時代のものであろう。

古 銭 （第65図）

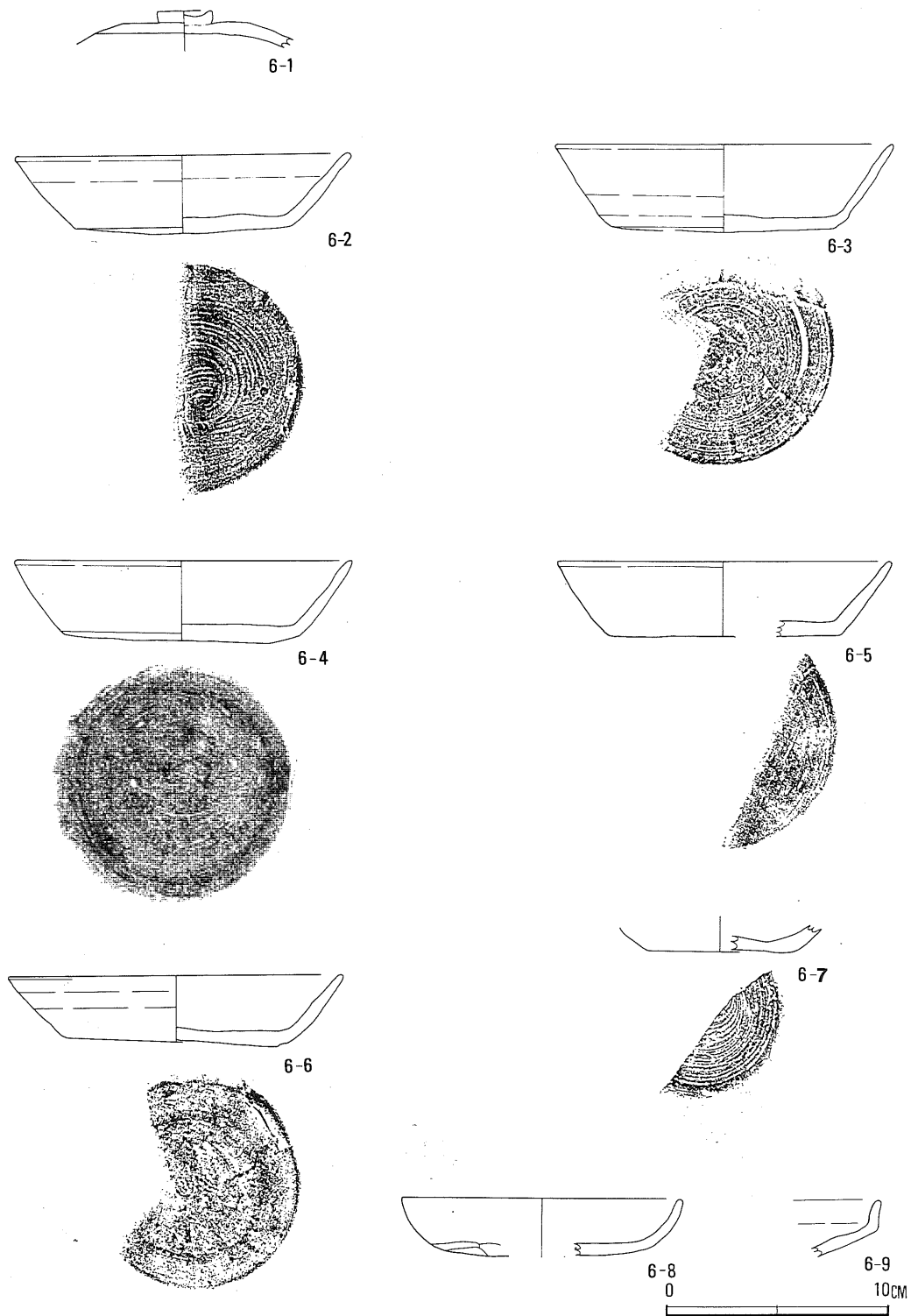
調査区フク土中の検出物である。1、2は寛永通宝で背文はない。3は文久永宝（1863年初鑄）で書体は草文である。4は明治9年発行の竜1銭銅貨である。

井 筒 （第66図）

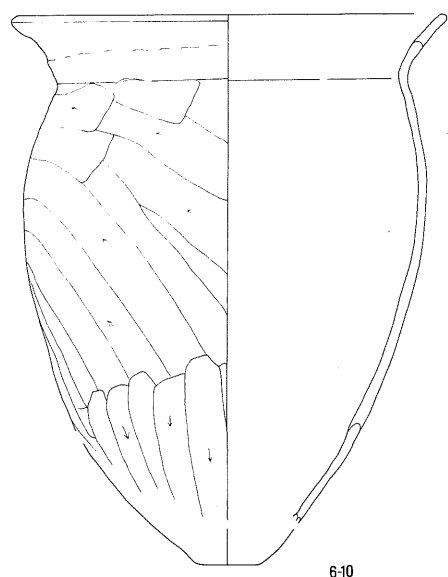
第3号井戸に使用されていた。口縁を段アゴ状に張り出し体部は円筒状を呈する。口縁直径は91cm、井筒径84cm、器高77.2cmを測る。黒茶褐色の焼きしめられた器膚をしている。口縁部外面と、口頸部に文様帯を有しており、口縁部は連続する三重の菱形を、口頸部は押型による連続かたばみ花文を施している。完形品である。



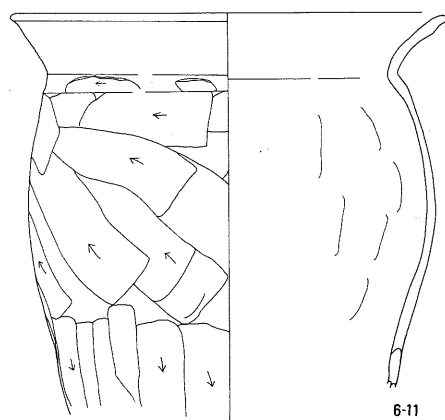
第40図 塩西Ⅱ第1、3、4号住居跡出土遺物



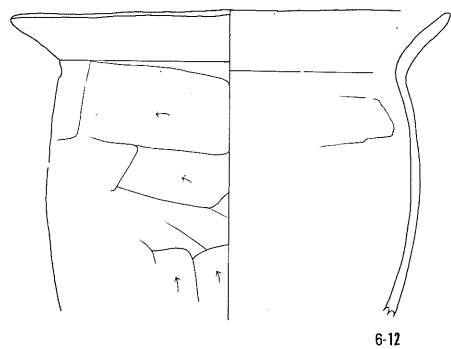
第41図 塩西Ⅱ第6号住居跡出土遺物



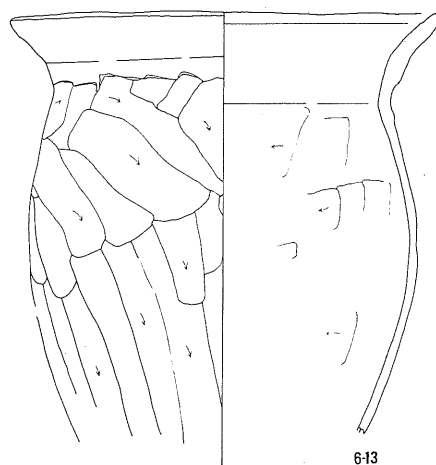
6-10



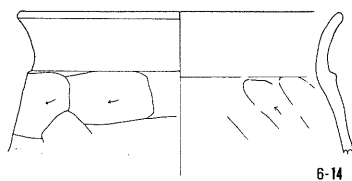
6-11



6-12



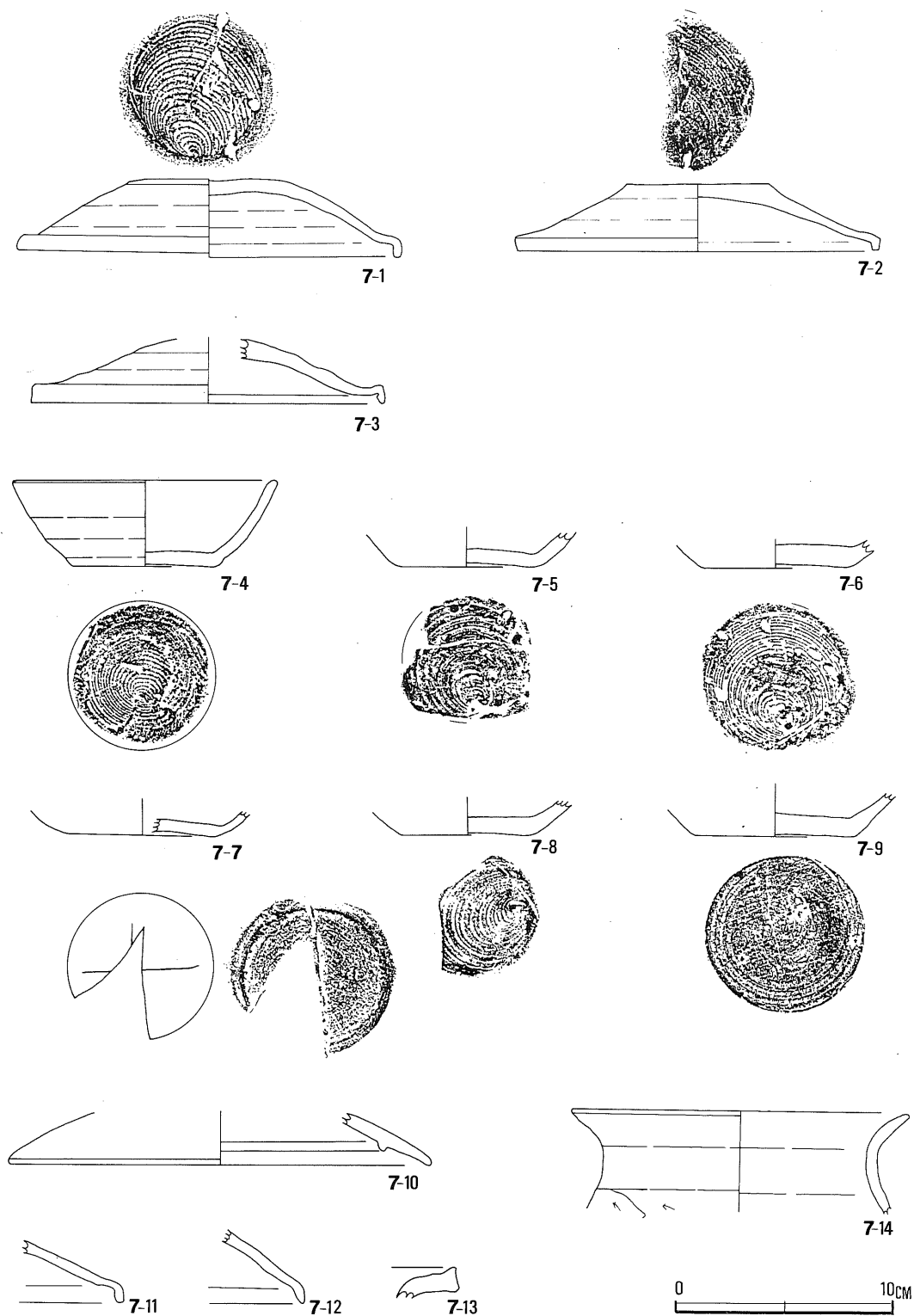
6-13



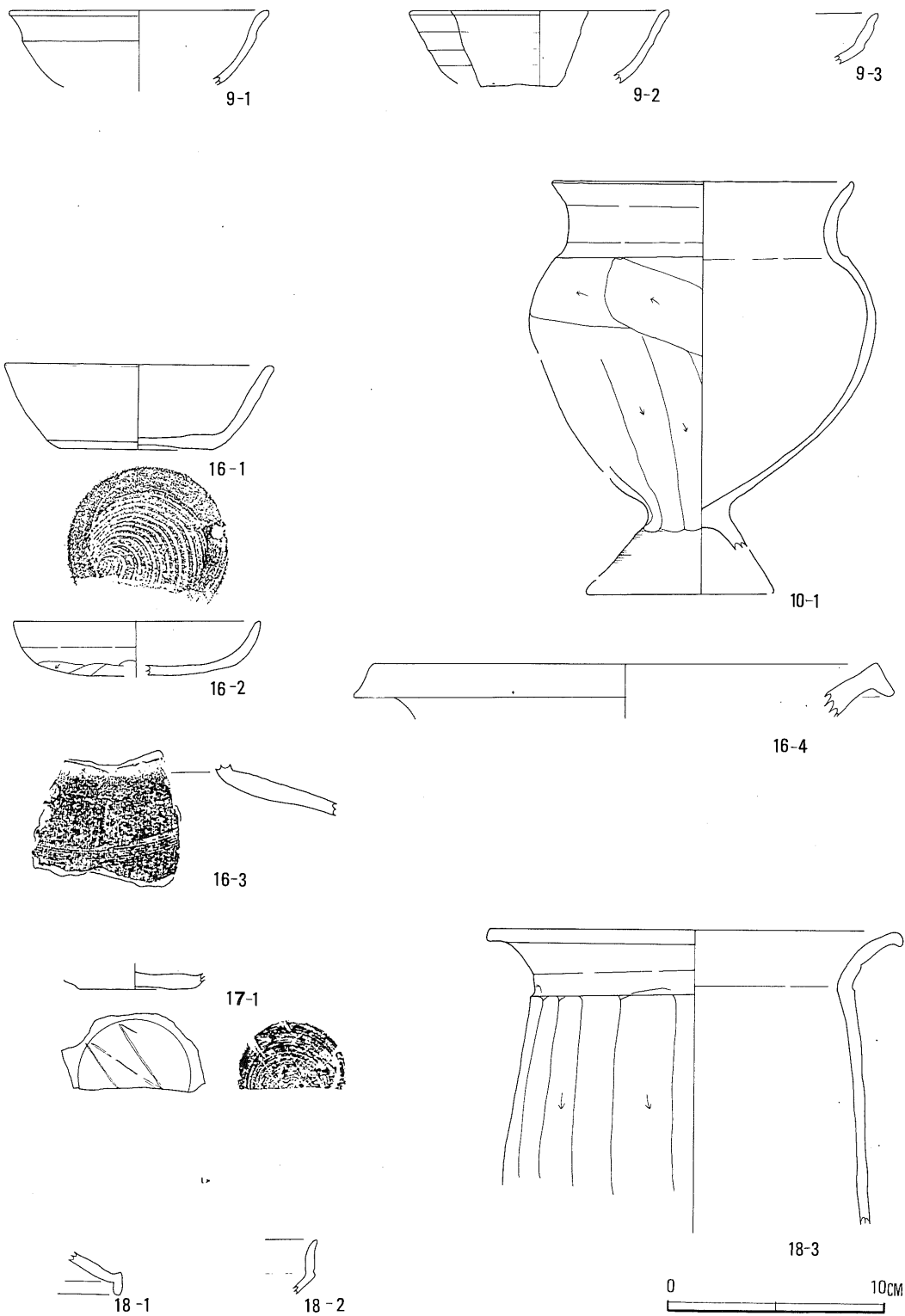
6-14



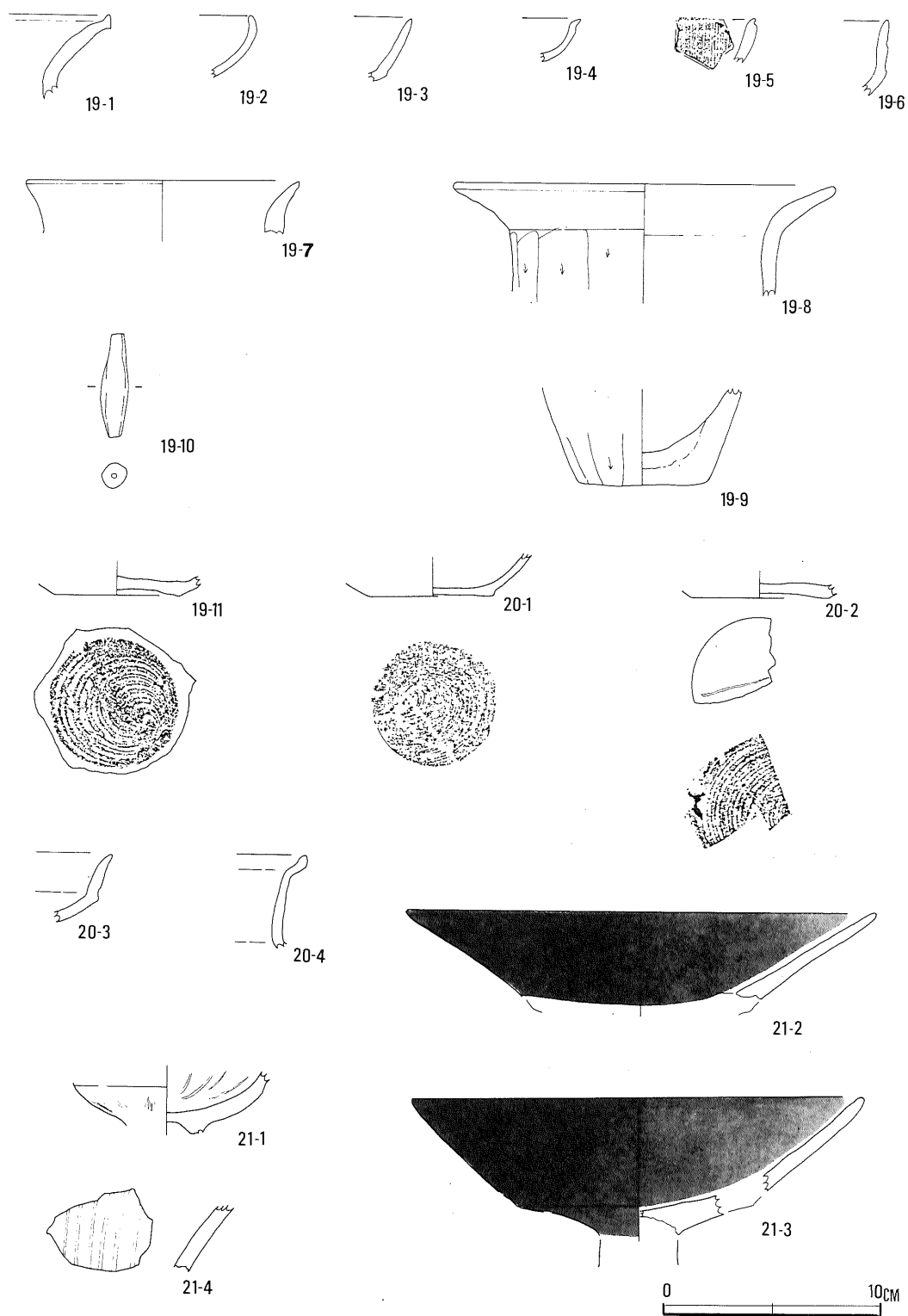
第42図 塩西Ⅱ第6号住居跡出土遺物



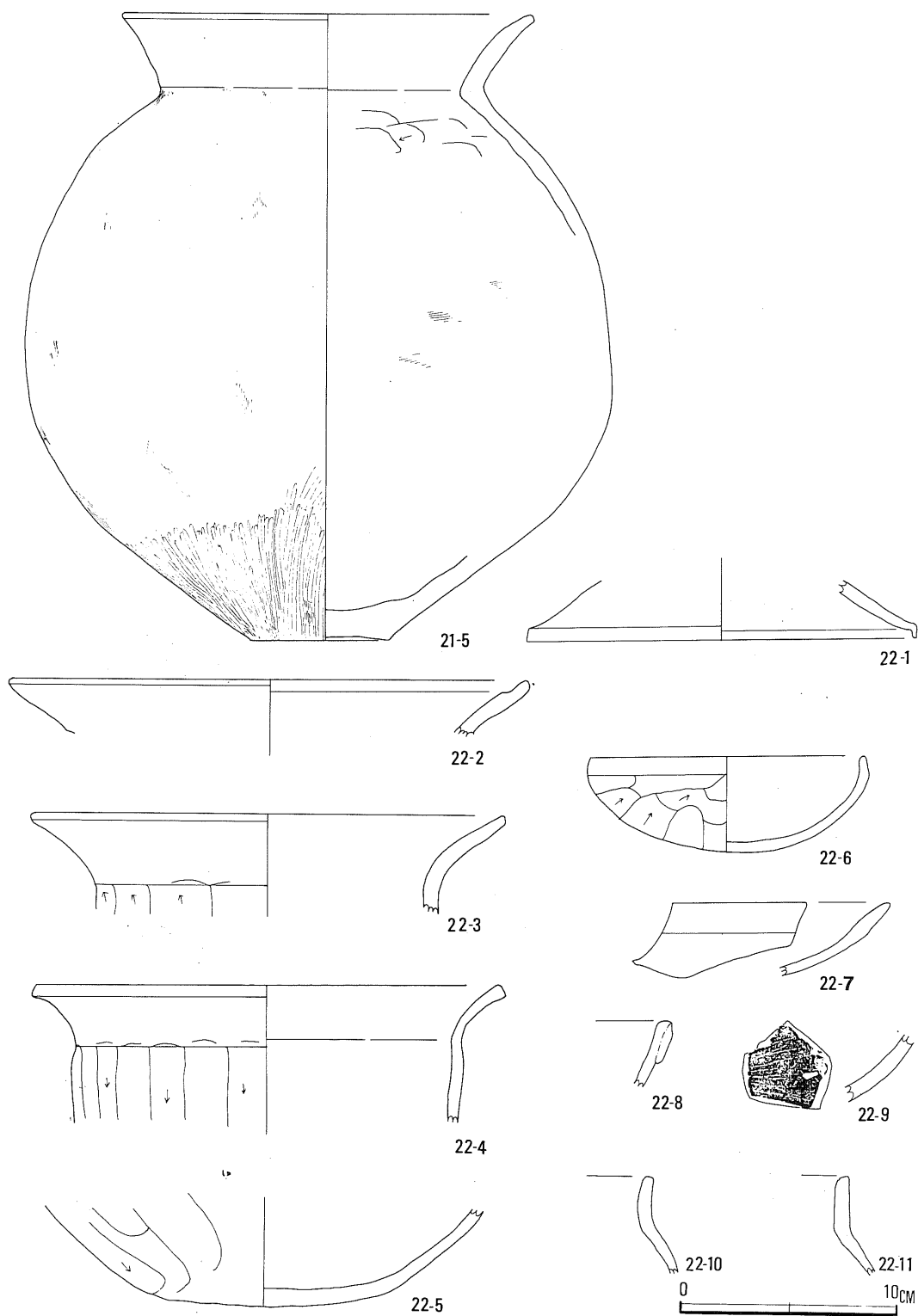
第43図 塩西Ⅱ第7号住居跡出土遺物



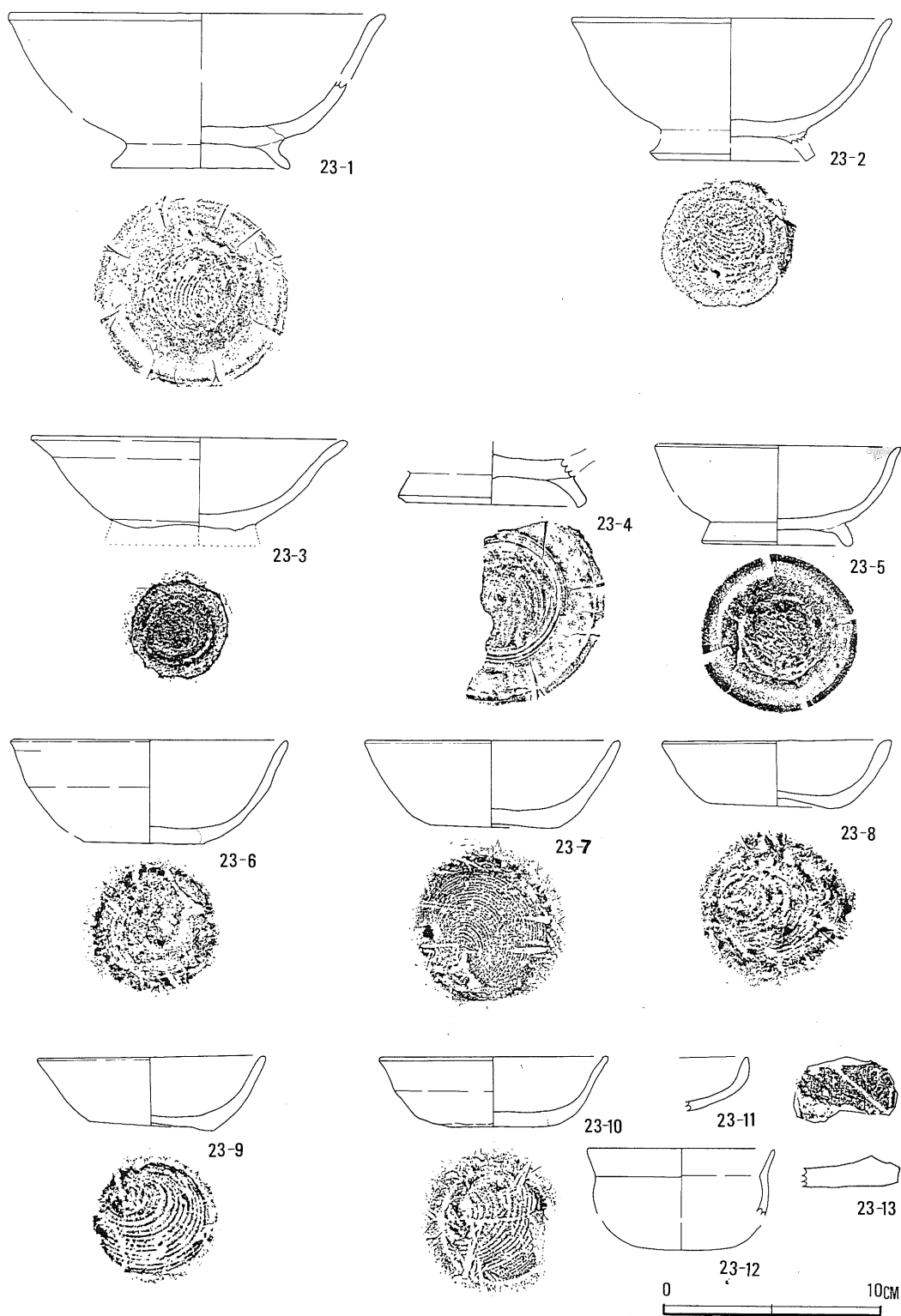
第44図 塩西Ⅱ第9、11、16、17、18号住居跡出土遺物



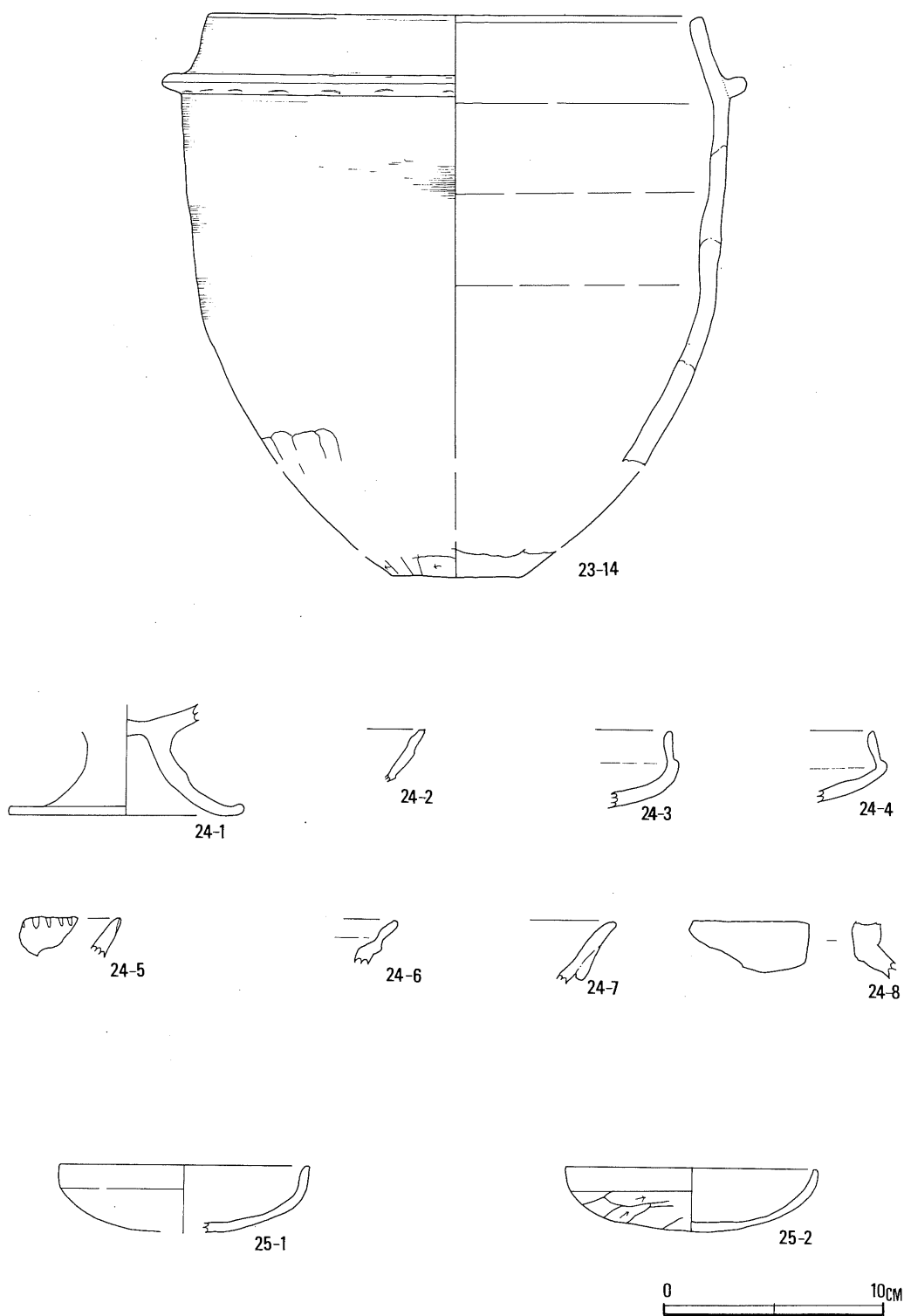
第45図 塩西Ⅱ第19、20、21号住居跡出土遺物



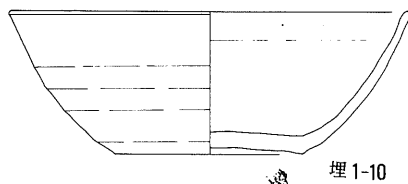
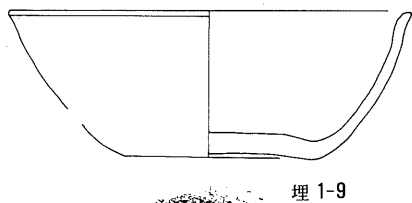
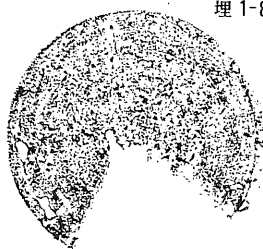
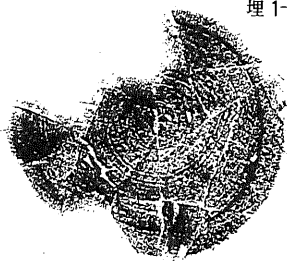
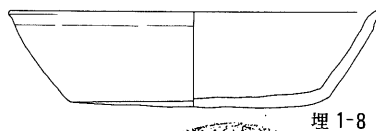
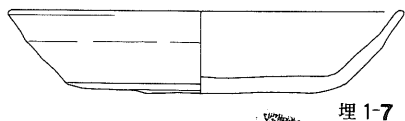
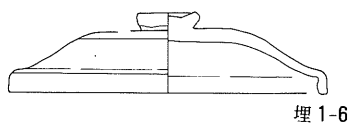
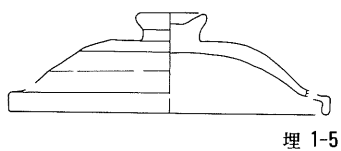
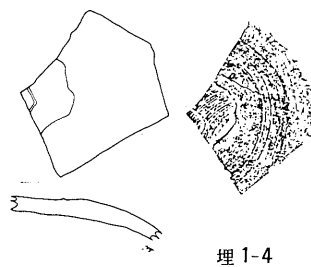
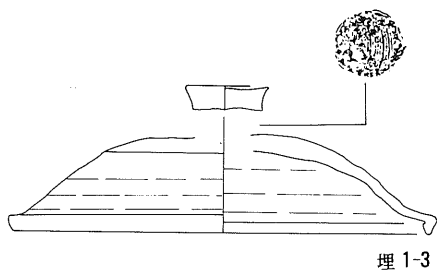
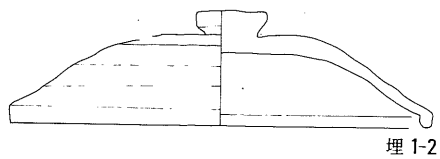
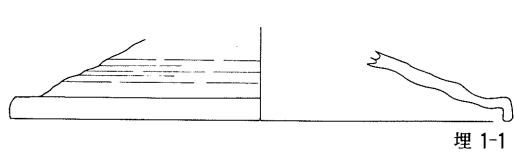
第46図 塩西Ⅱ第21、22号住居跡出土遺物



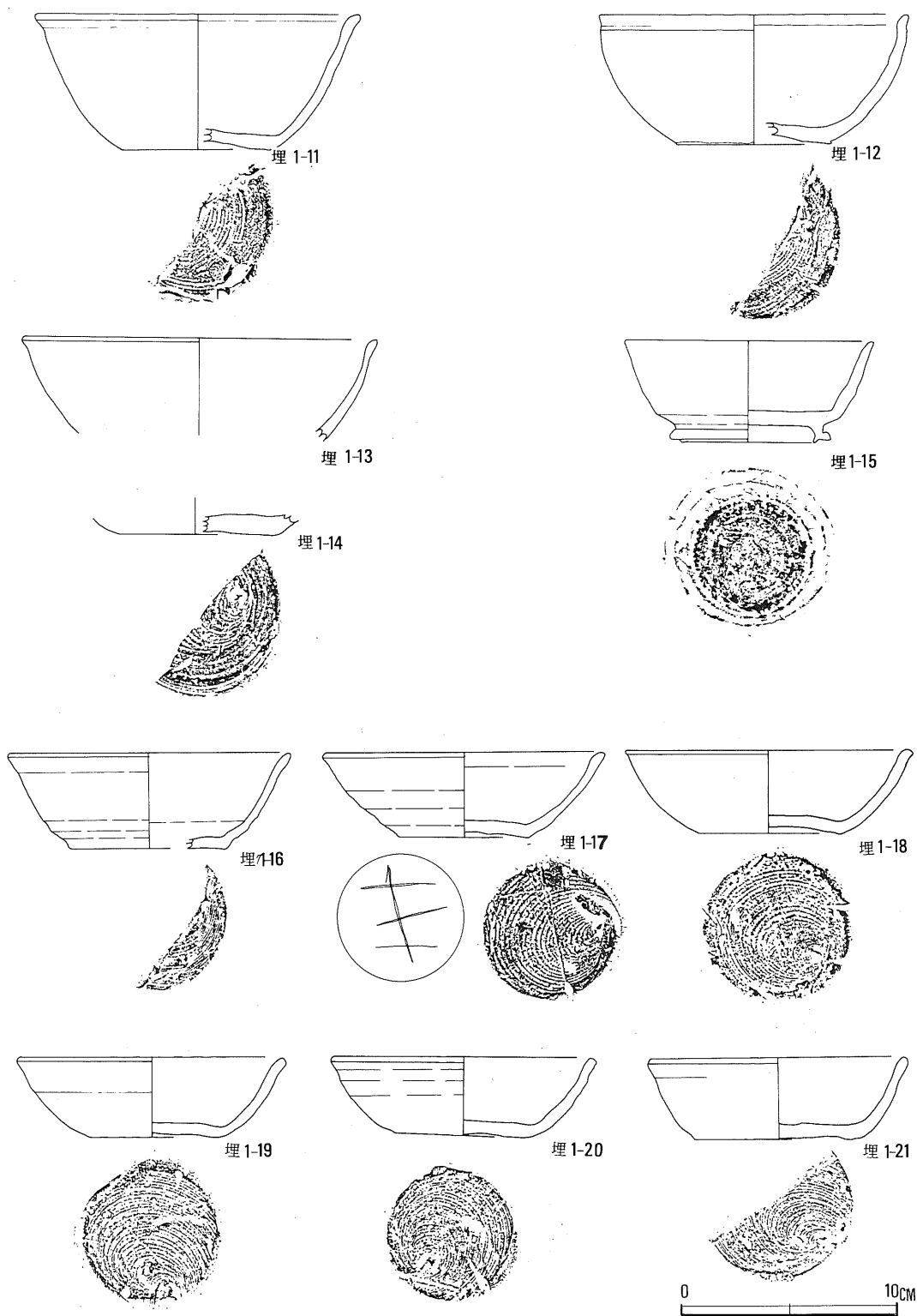
第47図 塩西Ⅱ第23号住居跡出土遺物



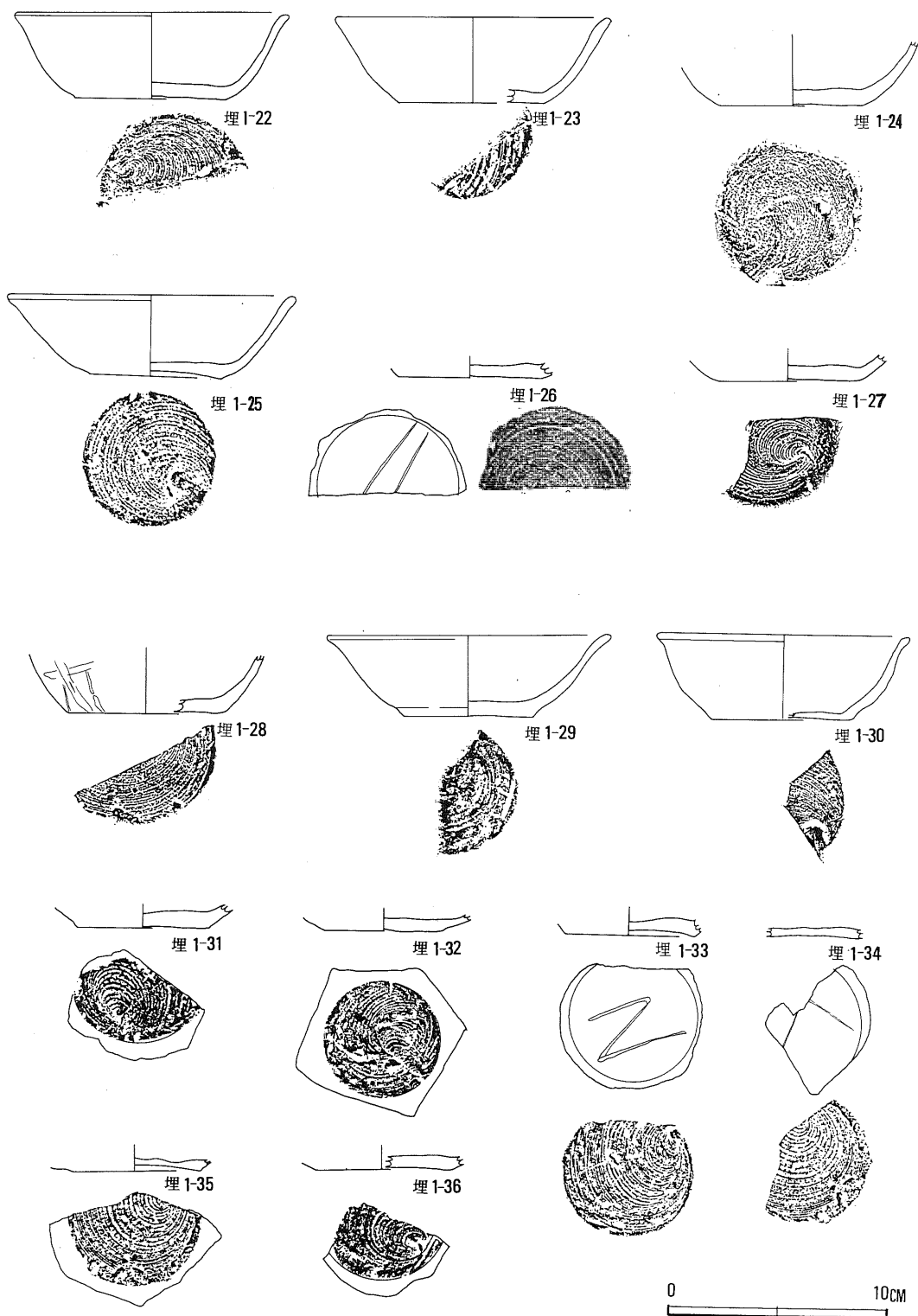
第48図 塩西Ⅱ第23、24、25号住居跡出土遺物



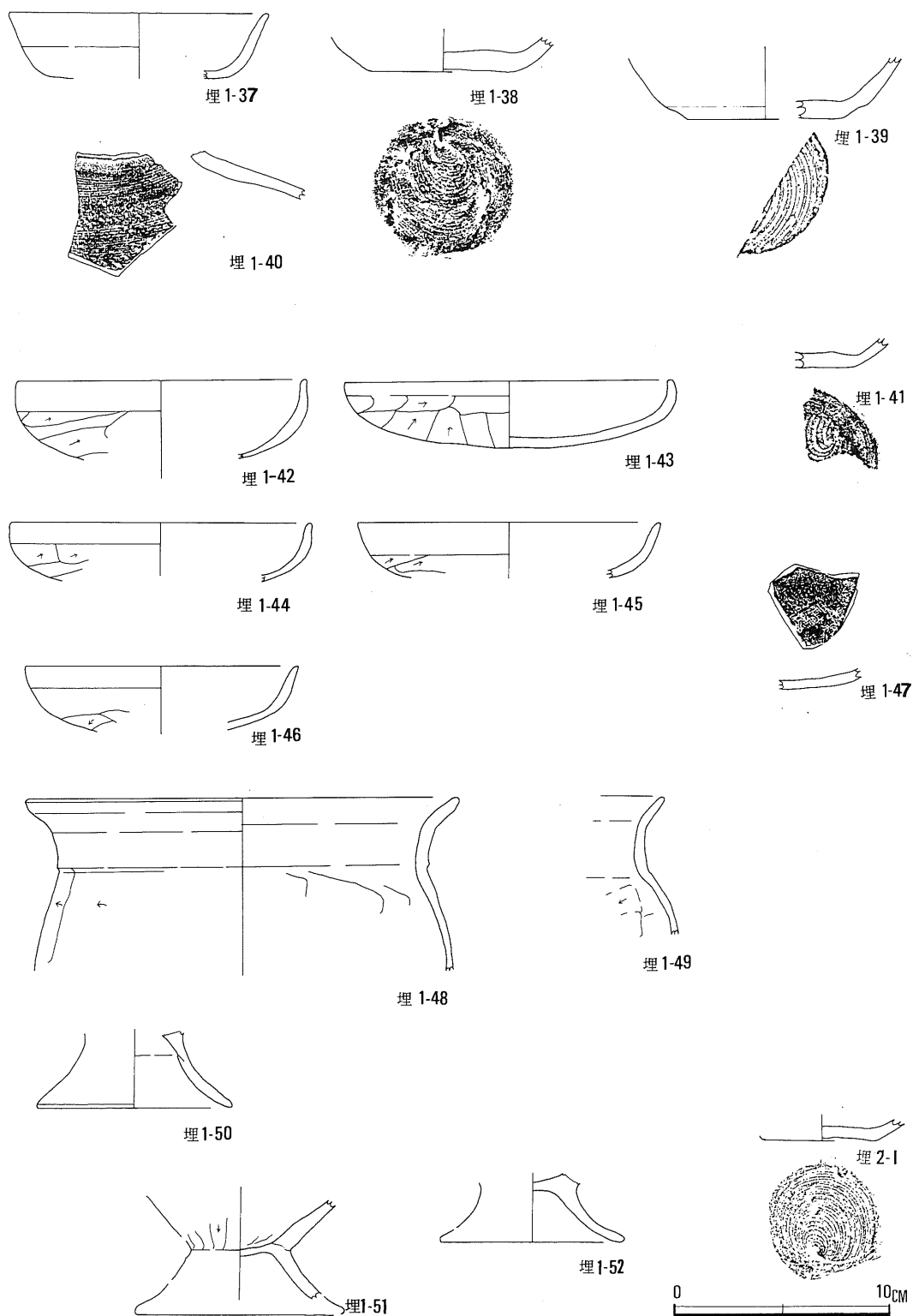
第49図 塩西Ⅱ埋没谷1 出土遺物



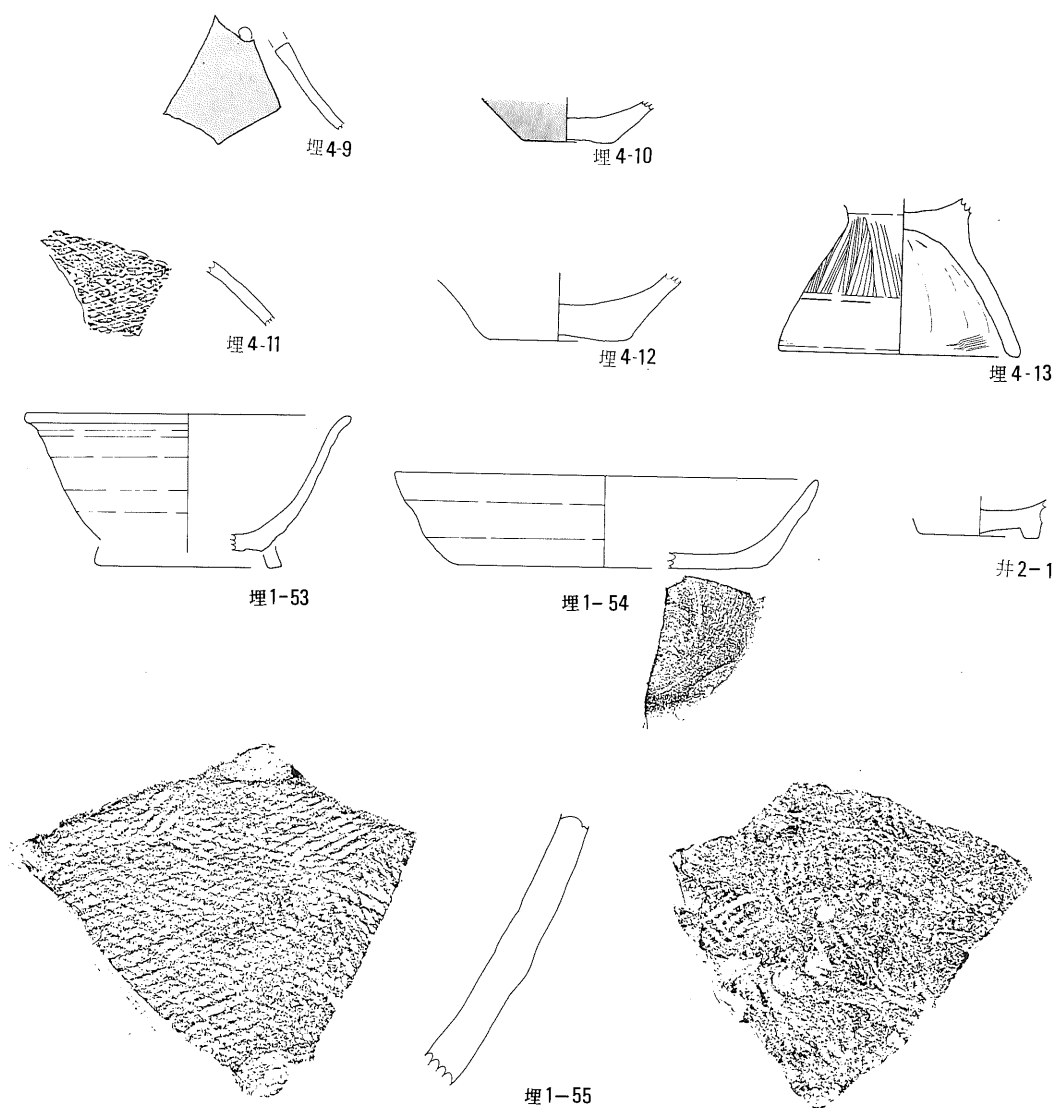
第50図 塩西Ⅱ埋没谷1 出土遺物



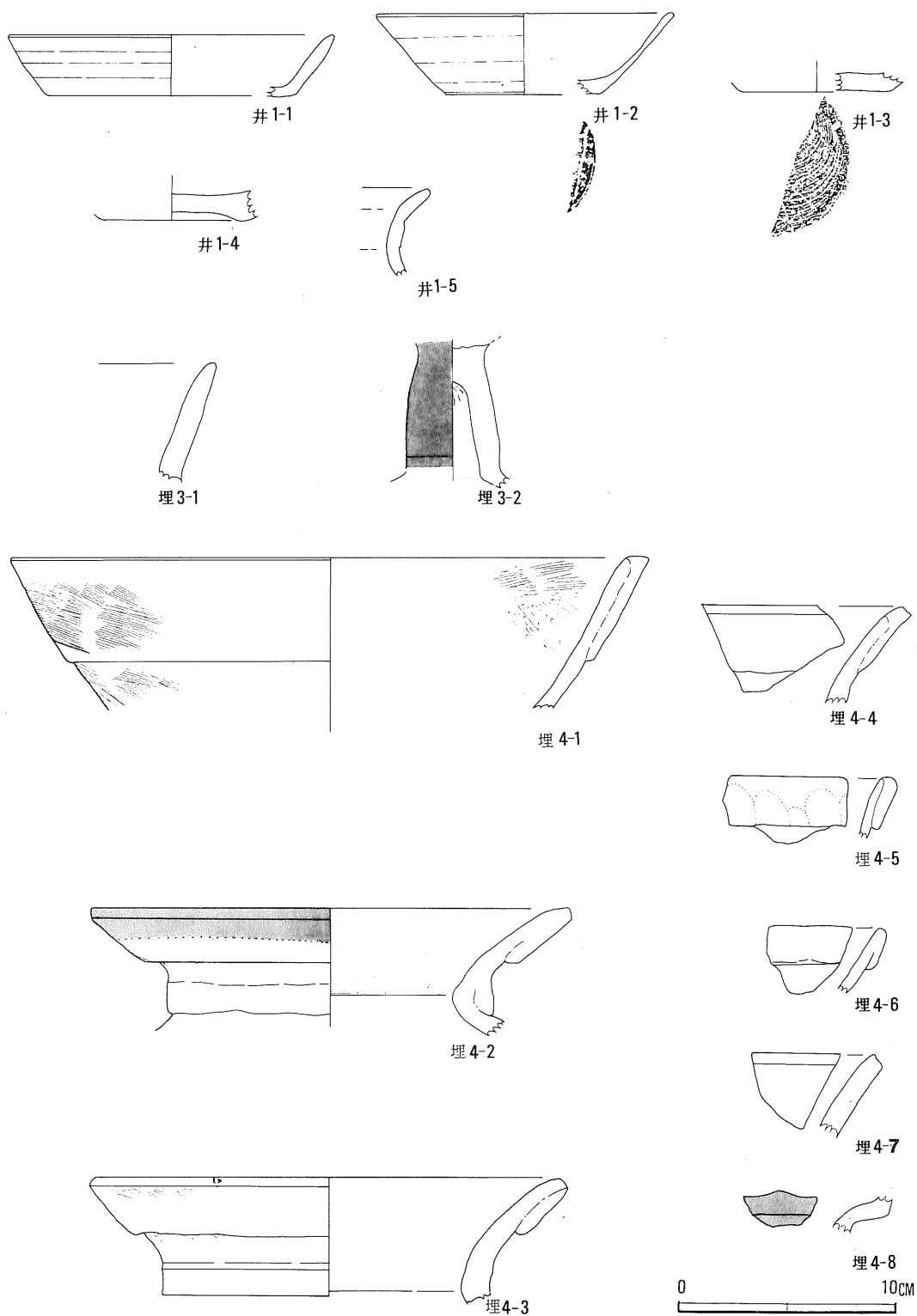
第51図 塩西Ⅱ埋没谷 1 出土遺物



第52図 塩西Ⅱ埋没谷1～2 出土遺物



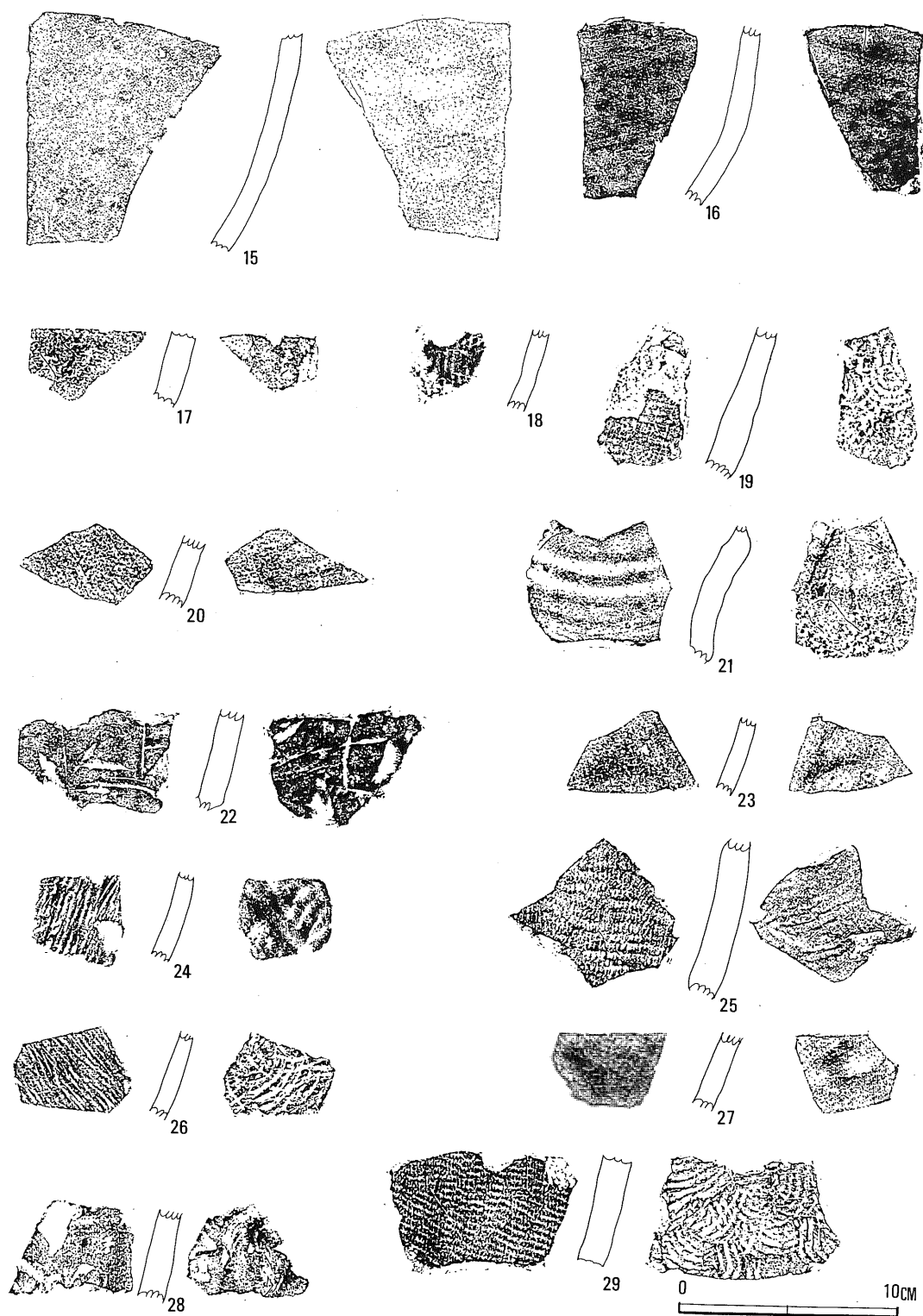
第53図 塩西Ⅱ埋没谷1～4 出土遺物



第54図 塩西Ⅱ井戸1～4 埋没谷出土遺物



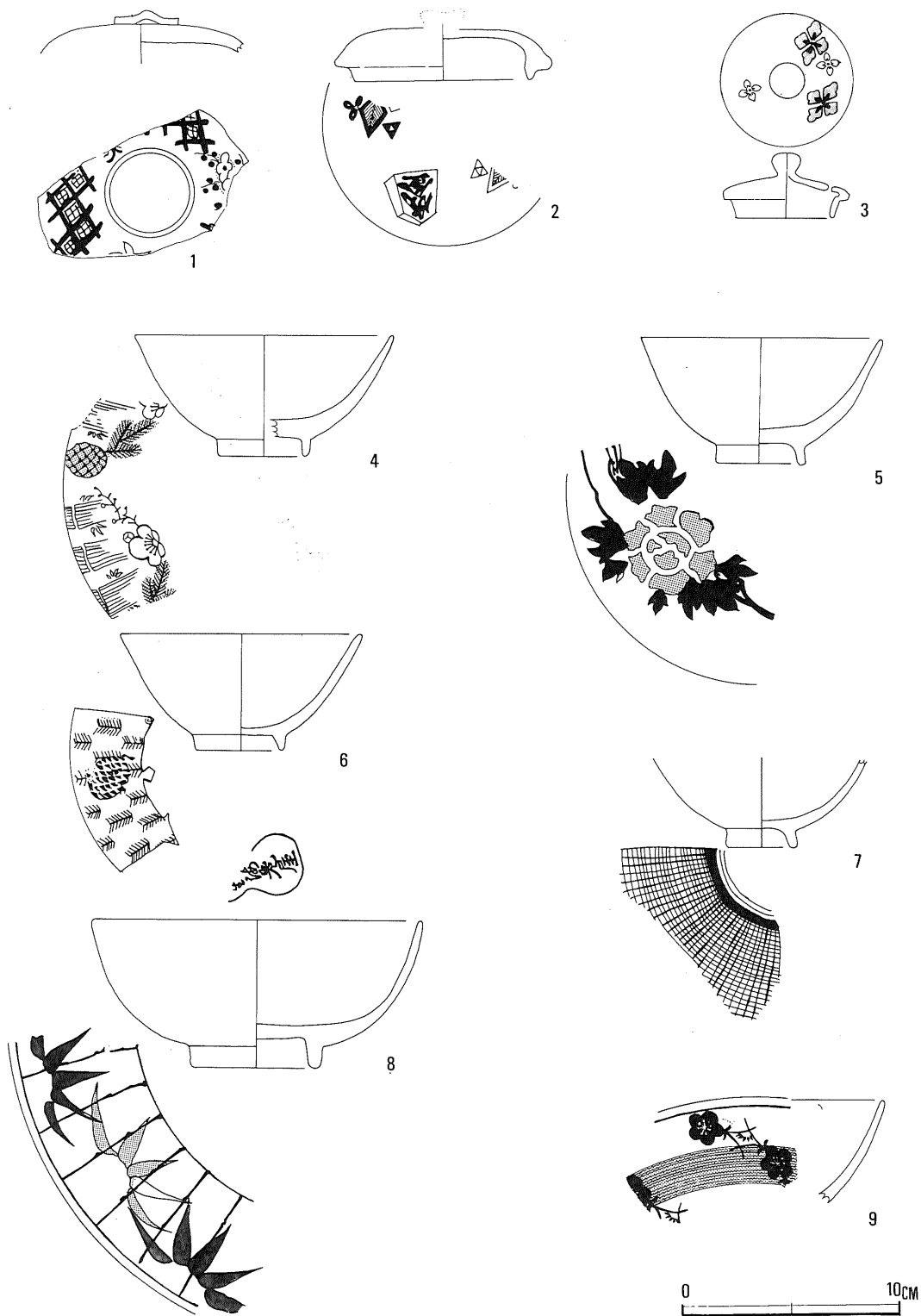
第55図 塩西Ⅱ出土須恵器



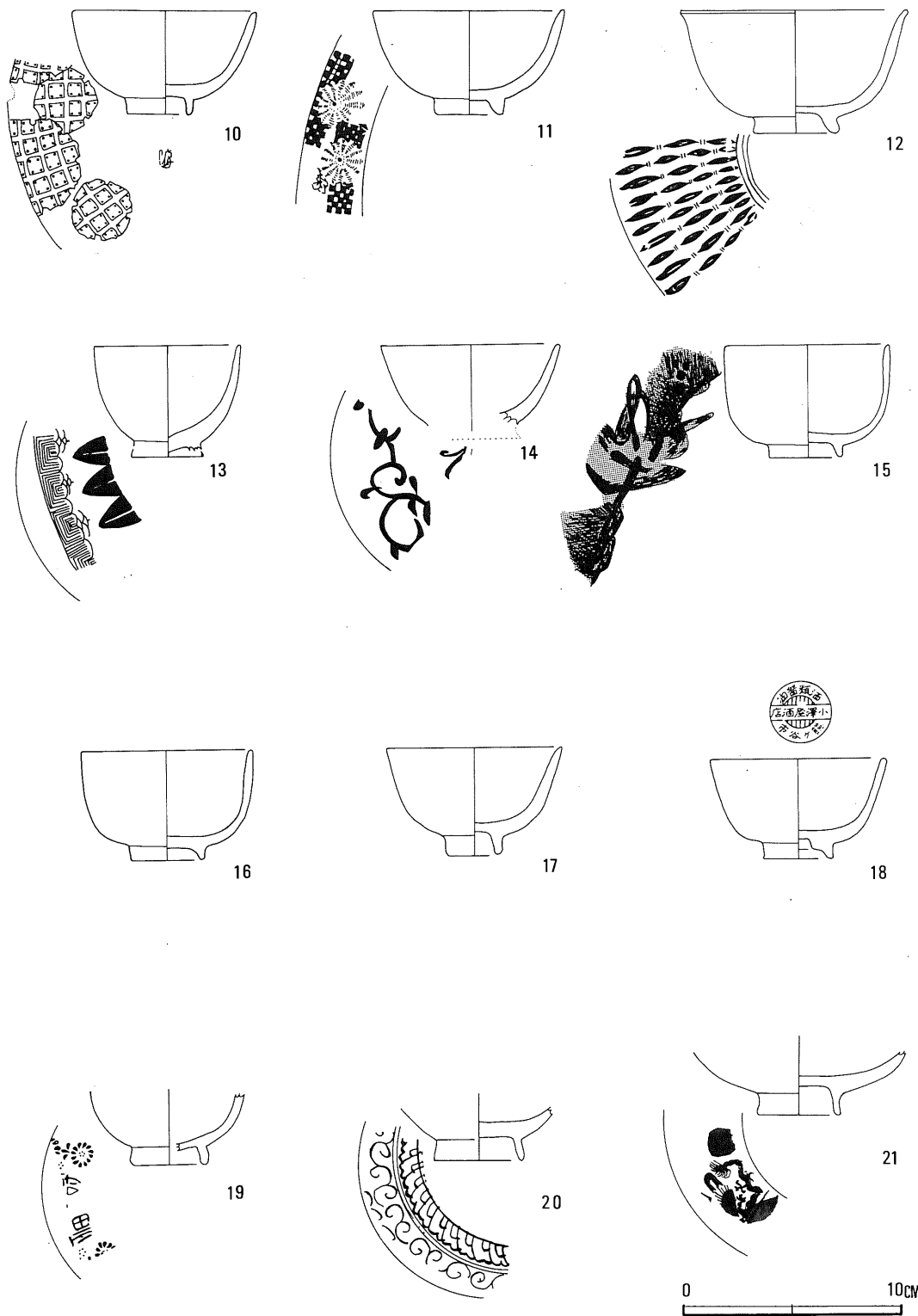
第56图 塩西Ⅱ出土須恵器



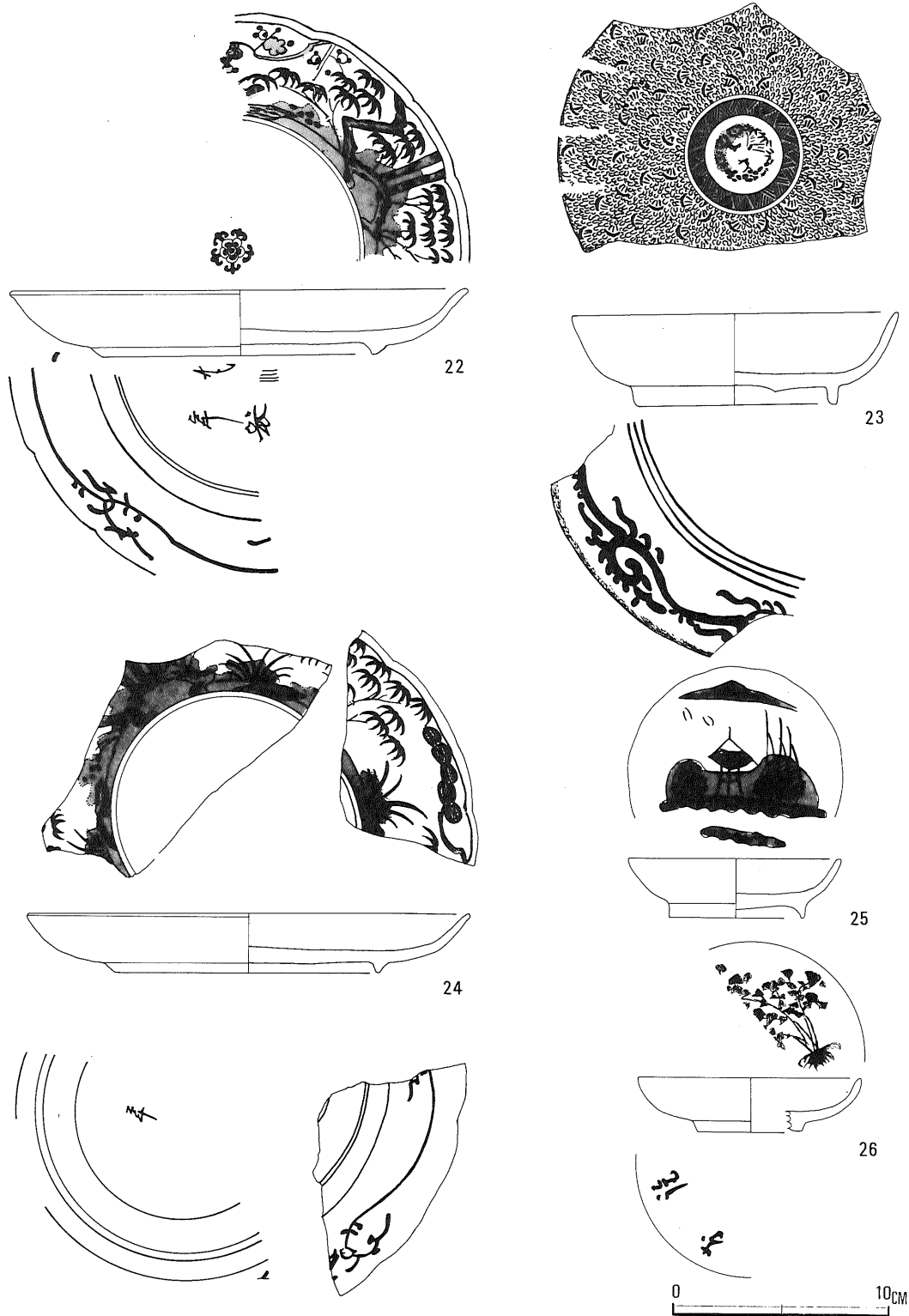
第57図 塩西Ⅱ出土須恵器



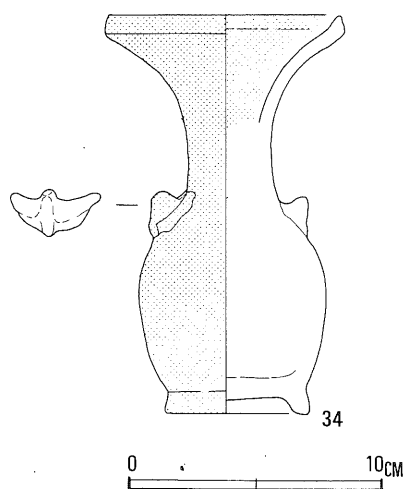
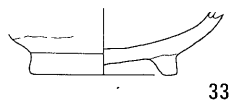
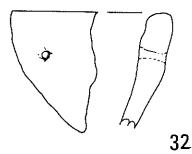
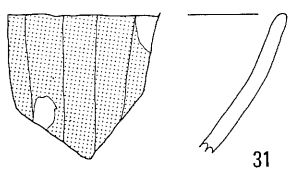
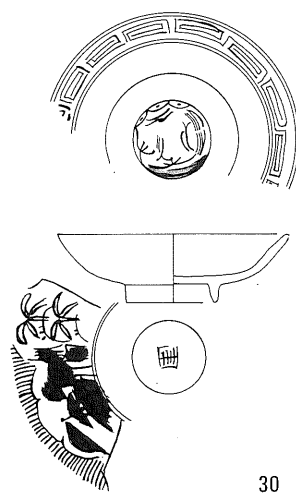
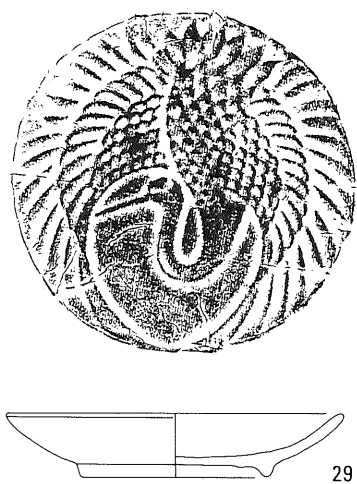
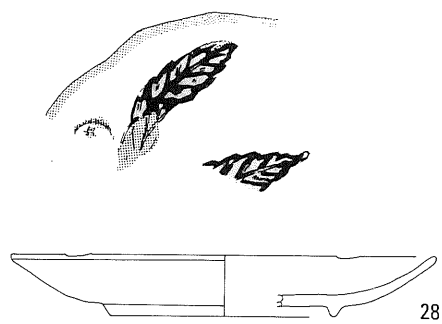
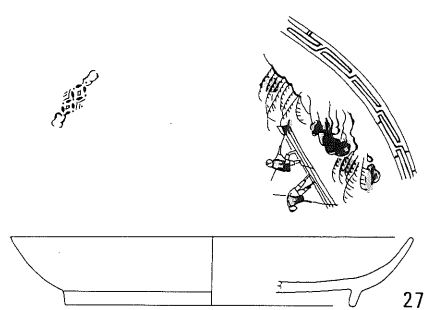
第58図 塩西Ⅱ 常安寺裏ステ場出土遺物



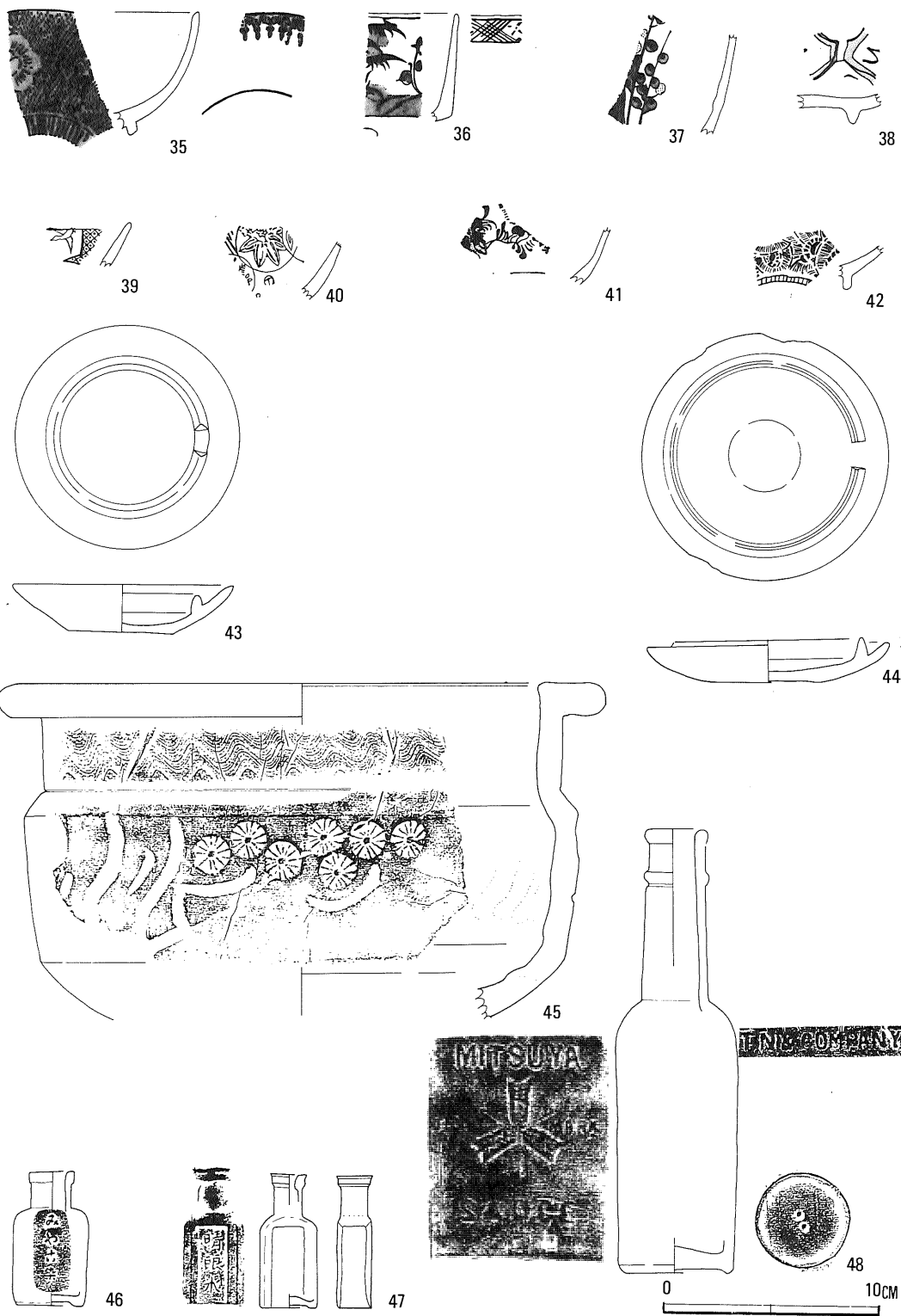
第59図 塩西Ⅱ 常安寺裏ステ場出土遺物



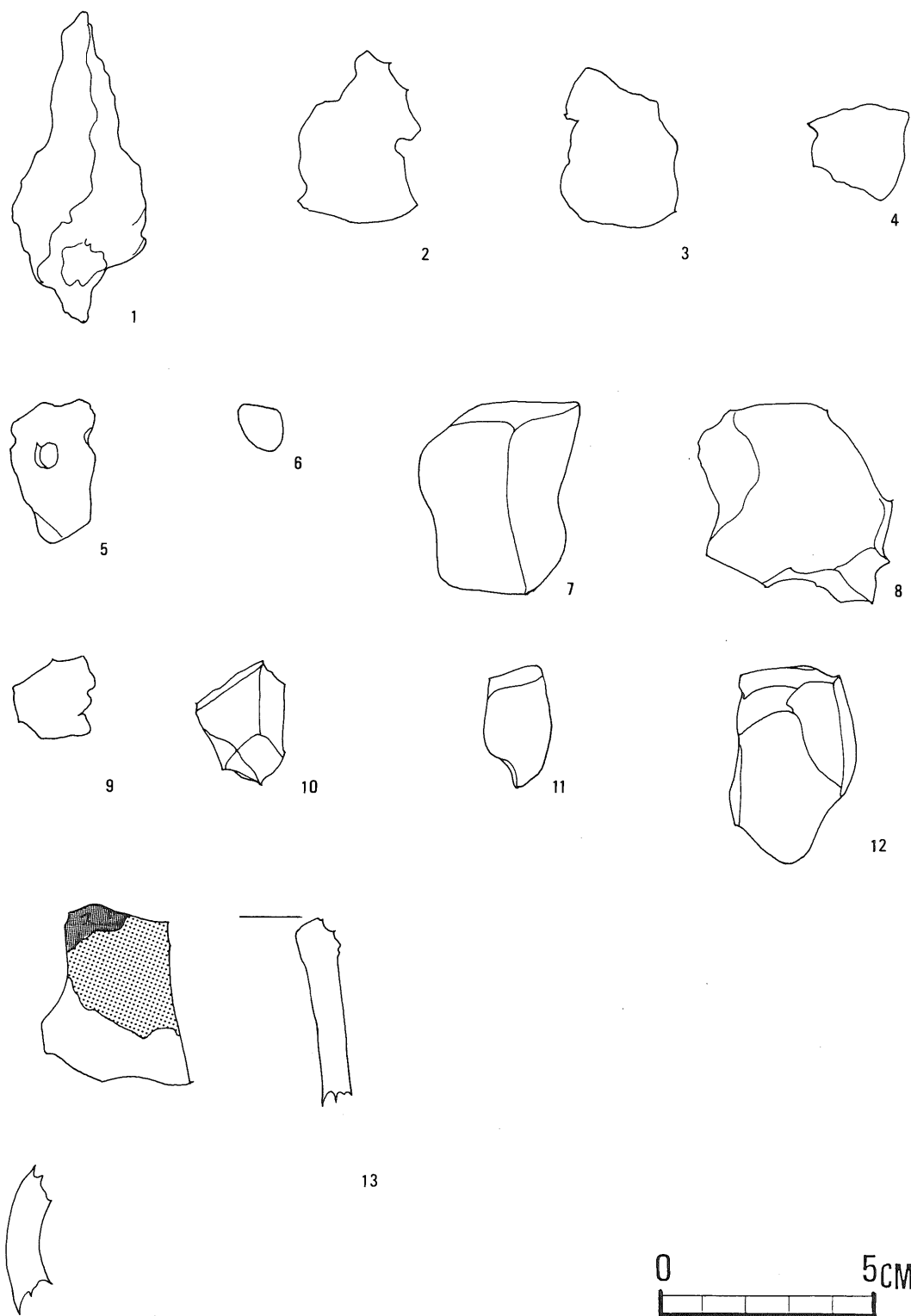
第60図 塩西Ⅱ常安寺裏ステ場出土遺物



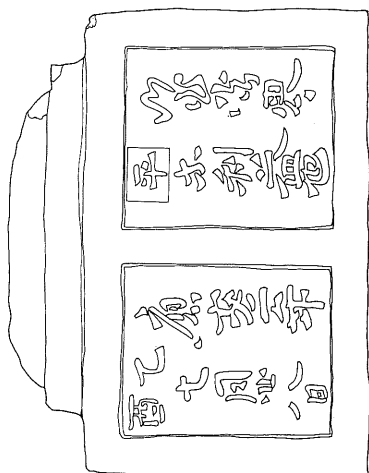
第61図 塩西Ⅱ常安寺裏ステ場出土遺物



第62図 塩西Ⅱ常安寺裏ステ場出土遺物



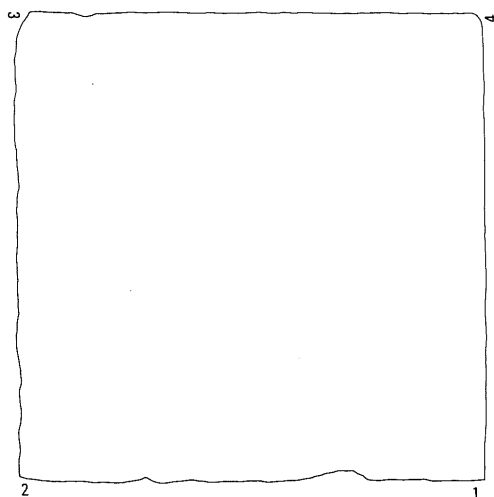
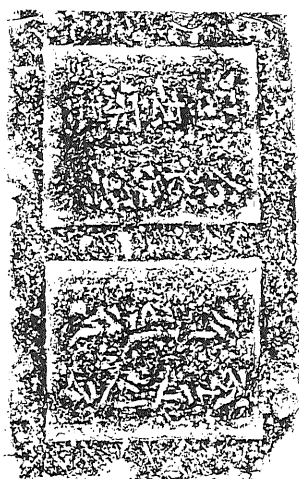
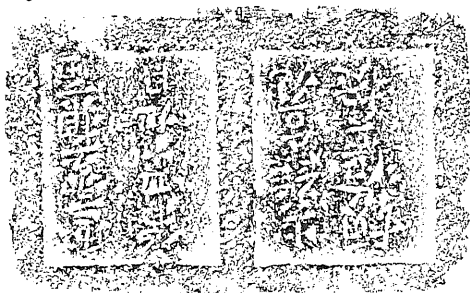
第63図 塩西Ⅱ鉄滓 貝巢穴泥岩等



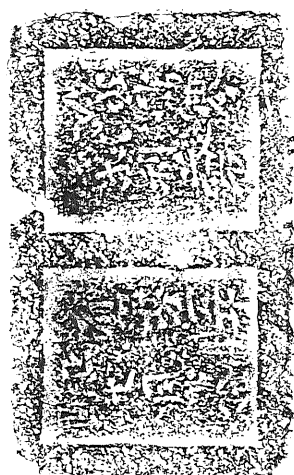
4

東晉永和七年
常安寺
西

8



2

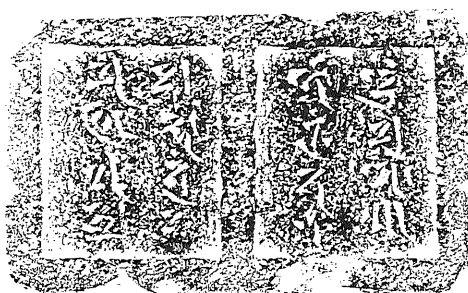


東晉永和七年

常安寺

東晉永和七年
常安寺

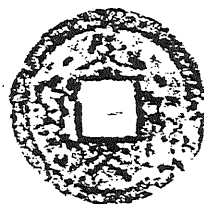
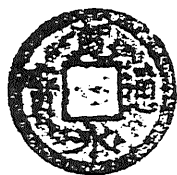
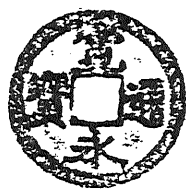
2



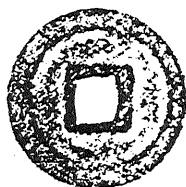
東晉永和七年
常安寺

1

第64圖 常安寺館出土 宝篋印塔基部



1



2

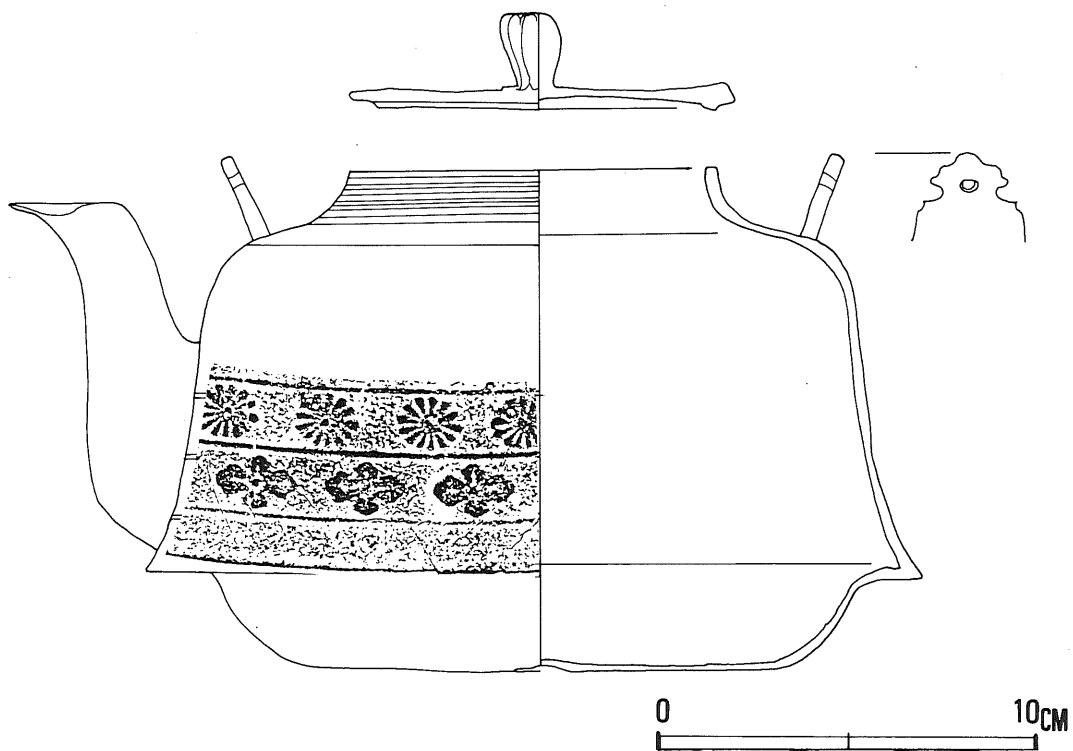


3

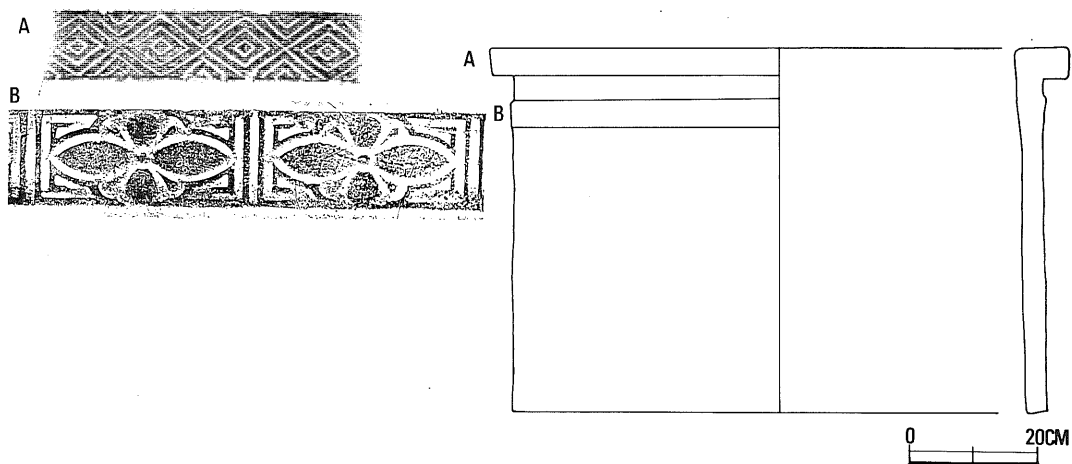


4

第65図 塩西Ⅱ出土古銭 (1/1)



近世住居 1 号跡出土遺物



第66図 塩西Ⅱ近世住居 1 号跡出土遺物 3 号井戸跡陶製筒

第 1 表 塩西Ⅱ. 石器集中跡出土石器観察表

図版 No.	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石 材	備 考
1	B-60	4.4	1.6	0.6	4.1	黒 燐 石	No. 6
2	B-60	2.5	2.9	0.6	3.8	〃	No.17
3	B-60	3.6	1.3	0.4	1.2	〃	No. 3
4	B-60	2.0	2.2	0.6	2.9	〃	No.10
5	B-60	2.5	0.9	0.2	0.8	〃	No. 4
6	B-60	2.4	1.1	0.35	1.2	〃	No.24
7	B-60	3.0	0.5	0.4	0.5	〃	No.13
8	B-60	2.8	1.6	0.25	2.0	〃	No. 5
9	B-60	2.5	1.5	0.5	1.5	〃	No.22
10	B-60	1.5	2.1	0.3	1.25	〃	No.26
11	B-60	3.0	1.7	0.3	1.5	〃	No.20
12	B-60	3.6	3.2	0.6	6.0	〃	No. 2
13	B-60	4.4	2.4	0.6	5.75	〃	No.15
14	60.Ⅱ. フク土	3.6	3.0	1.1	8.5	〃	No. 1
15	B-60	3.3	2.6	0.5	5.0	〃	No. 8
16	B-60	3.3	2.3	1.6	8.25	〃	No.16
17	B-60	2.7	2.8	0.7	4.2	〃	No. 7
18	B-60	2.8	1.3	0.4	2.0	〃	No.11

第2表 塩西Ⅱ. 出土縄文土器観察表

No.	出土地点	部位	文様表現	内面調整	胎土色調	備考
1	3号	体部	櫛目	条痕	長石、茶褐色	
2	A12~A17	体部	櫛目	条痕	長石、茶褐色(赤褐色粒子)	
3	表	体部	櫛目	条痕	小石、長石、茶褐色	
4	3号	体部	条痕	条痕	小石、茶褐色(赤褐色粒子)	
5	調査区内	体部	櫛目	条痕	長石、褐色(赤褐色粒子)	
6	調査区内	体部	縄文	ナデ(黒色)	長石、茶褐色	
7	B57~58	口縁部	縄文	縄文	小石、黒茶褐色	
8	B57~58	口縁部	縄文	ナデ	小石、黒茶褐色	
9	B57~58	体部	縄文	ナデ(黒色)	小石、茶褐色	
10	調査区内	体部	縄文	ナデ(黒色)	長石、茶褐色	
11	18~19号	体部	沈線縄文	ナデ	茶褐色	中、黒色
12	3号No.12	体部	縄文	ナデ	長石、黒褐色、金雲母	中、黒色
13	調査区内	口縁部	縄文	条痕	小石、茶褐色、金雲母	
14	井戸、中層	体部	縄文、隆線沈線	ナデ	小石、長石、茶褐色	
15	3号	体部	沈線縄文	ナデ	長石、茶褐色、金雲母	外、黒色
16	A12~A17	体部	沈線縄文	ナデ	小石、茶褐色、金雲母	外、黒色
17	7号	体部	沈線縄文	ナデ	小石、茶褐色	
18	調査区内	体部	沈線	ナデ	小石、茶褐色	中一部黒色
19	1号	体部	縄文	ナデ	茶褐色	中、灰色
20	調査区内	体部	隆沈線縄文		茶褐色、長石、黒雲母	
21	調査区内	体部	隆沈線縄文	ヘラナデ	長石、茶褐色	
22	調査区内	体部	縄文	ナデ	長石、茶褐色、金雲母	
23	調査区内	体部	櫛目	ナデ	長石、赤褐色	
24	1号	体部	櫛目	ナデ	長石、茶褐色	
25	調査区内	体部	縄文	ナデ	長石、茶褐色	
26	調査区内	体部	櫛目	ナデ	長石、茶褐色	
27	調査区内	体部	櫛目	ナデ	長石、茶褐色	
28	調査区内	体部	櫛目	ナデ	長石、黒茶褐色	
29	32~33、埋	体部	沈線、櫛目、 うずまき文	ナデ	長石、黒褐色	
30	調査区内	体部	刷毛目	刷毛目	小石、長石、茶褐色	
31	調査区内	体部	刷毛目	刷毛目	茶褐色、赤褐色粒子	

第3表 塩西Ⅱ. 出土遺物観察表

図版 番号	出土地点	器種	大きさ (cm)	色調・胎土	その他
1-1	1H、フク土	須恵器蓋	蓋破片	黄灰色 石英雲母砂	1/8 残存
1-2	1H、フク土	須恵器蓋	蓋破片	青灰色 石英、長石	1/10残存
1-3	1H、フク土	須恵器蓋	蓋破片	黒色砂	1/10残存、末野産
1-4	1H、No.4	坏	口径-12.5	赤黄褐色 微妙、砂多	90%残存
1-5	1H、フク土	坏		茶褐色 砂、小破片	暗文
1-6	1H、床上	坏		赤褐色 長石、微砂	同一個体、小破片 暗文
1-7	1H、No.1	甕	口径-20.6	茶褐色 細砂	1/5 残存
1-8	1H	甕		茶褐色 細砂	1/10残存
1-9	1H、フク土	瓦		黒灰色 細砂、白色針状物	
1-10	1H、フク土	支脚	器高-5.6	長石、粒子多	1/3 残存
3-1	3H、No.1床上	須恵器蓋	口径-13.5 高-3.1	黄灰色 細砂、白色針状物多	99%ほぼ完形 南比企産
3-2	3H、土壇	須恵器蓋		赤茶褐色 白色針状物	南比企産
3-3	3H、フク土	須恵器蓋		石英、黒色砂	1/10残存、末野産
3-4	3H、フク土	須恵器蓋		黒灰色 細砂	
3-5	3H	須恵器坏	口径-12.5 底径-6.5	内面-白灰色 外面-黒灰色 石英、長石、赤褐色粒子	結晶片岩、末野産
3-6	3H、フク土	須恵器碗	底-7.0	内面-淡灰色 外面-淡灰色 断面-褐色	1/8 残存 ヘラ記号 南比企産?

図版 番号	出土地点	器種	大きさ (cm)	色調・胎土	その他
3-7	3H、フク土	坏	部分	橙褐色 細砂	
3-8	3H、フク土	坏	部分	黄茶色 細砂	1/6 残存
4-1	4H、フク土	須恵器蓋		赤茶褐色 長石、砂	1/10残存
6-1	6H、フク土	須恵器蓋		黒褐色 白色針状物	南比企産
6-2	6H、No.1	須恵器蓋	口径-15.3 底径-9.7	内面-黄灰色 外面-黄灰色 黒色斑、白色針状物	南比企産
6-3	6H、No.4	坏	口径-15.2 底径-10.3	内面-青灰色 外面-淡青灰色 石英、砂白色針状物	南比企産
6-4	6H、No.13	坏	口径-15.5 底径-10.5	内面-黄灰色、茶褐色 外面-黄灰色、茶褐色 細砂、白色針状物	南比企産 3/4 残存率
6-5	6H、No.10	坏	口径-15.2 底径-10.3	内面-白灰色 外面-白灰色 黒色斑、白色針状物	南比企産 口、体1/4 残存率
6-6	6H、柱穴	坏	口径-15.1 底径-9.5	内面-黄灰色 外面-白色針状物	南比企産 口縁 2/5
6-7	6H、No.5	坏	底径-6.5	細砂、石英	底部 1/4
6-8	6H	坏	口径-12.5	内面-灰褐色 外面-黄茶褐色 砂、細砂	4/5 残存率
6-9	6H(床下土壌)	坏		黄茶色 細砂	1/8 残存率
6-10	6H、No.3	甕	口径-23.0 器高-29.0	暗茶褐色、焼成良 細砂、長石多	
6-11	6H、No.3. B	甕	口径-23.0 器高-19.1	茶褐色 細砂、長石粒子、 小石赤褐色粒子	体部 3/4遺存
6-12	6H、No.3, 9, 8, 11	甕	口径-22.9 器高-16.0	茶褐色、堅緻 細砂、長石、小石	1/2 残存率
6-13	6H、No.3 A	甕	口径-22.5 器高-22.0	橙茶褐色、良堅緻 細砂、長石、赤褐色粒子	体部上半口縁完存

図版 番号	出土地点	器種	大きさ (cm)	色調・胎土	その他
6-14	6 H、床下土壌	甕	口径-17.0 器高- 7.5	橙茶褐色 細砂、長石	1/3 遺存
7-1	7 H、床上No.1	蓋	口径-17.5 器高- 3.5	外面-灰色 内面-灰色 砂、石英、白色針状物	南比企産 ほぼ完全
7-2	7 H、床上	蓋	口径-17.0 器高- 3.1	内面-黄灰色 外面-黄灰色 細砂、長石	1/5 残存率
7-3	7 H、フク土	蓋	口径-16.2	灰色 白色針状物	南比企産 1/4 良
7-4	7 H、床下土壌	坏	口径-12.2 底径- 6.5	内面-白灰色 外面-白灰色 長石、細砂、白色針状物	南比企産 70%残存
7-5	7 H、フク土	坏	底径- 6.1	黄灰色 白色針状物 2次加熱	南比企産
7-6	7 H、床下土壌	坏	底径- 6.9	内面-淡灰色 外面-淡灰色 砂、白色針状物	南比企産
7-7	7 H、フク土	坏	底径- 6.8	内面-赤褐色 外面-赤褐色 赤色砂、白色針状物	南比企産 底部のみ
7-8	7 H、フク土 床上、No.1	坏	底径- 6.0	内面-黄灰色 外面-黄灰色 石英、白色針状物	南比企産 底部のみ 墨書
7-9	7 H、床下	甕 ?	底径- 7.5	内面-青灰色 外面-青灰色 石英砂、白色針状物	南比企産 墨書、ヘラ記号
7-10	7 H、床下土壌	蓋	口径-19.5	赤褐色粒子 長石	1/8 残存
7-11	7 H、床下土壌	蓋		青灰色 白色針状物	南比企産
7-12	7 H、床下土壌	蓋		灰色 良、石英	南比企産
7-13	7 H、床下土壌			灰色 良、石英、白色針状物	南比企産
7-14	7 H、床下土壌	甕	口径-15.5 底径- 4.5	黒茶褐色 雲母、長石粒子多	1/4 遺存
9-1	9 H、フク土	坏	口径-11.9	白灰色 白色針状物	南比企産 1/4 遺存

図版 番号	出土地点	器種	大きさ (cm)	色調・胎土	その他
9-2	9H、フク土	坏	口径-11.9	白灰色 白色針状物	南比企産 墨書
9-3	9H、フク土	坏		茶色 細砂	
10-1	10H	台付甕	口径-13.9 器高-18.8 底径-8.5	内面-黒茶褐色 外面-黒茶褐色 細砂、粘土	50%残存
16-1	16H、床上	坏	口径-12.3 底径-7.0	内面-黄灰色 外面-黄灰色 石英、小石、砂、白色針状物	南比企産 1/2 残存
16-2	16H下層床	坏	口径-11.3	茶褐色 細砂	1/5 遺存
16-3	16H、フク土	平甕?		内面-紫灰色 外面-紫灰色 石英、砂	
16-4	16H、フク土		口径-23.4	石英、黒色砂	1/12
17-1	17H、フク土	坏		長石、石英、白色針状物 ヘラ記号「N」黄灰色	南比企産
18-1	18H、フク土	蓋		白色針状物	南比企産
18-2	18H、フク土			微砂	赤彩
18-3	18H、カマド	甕	口径-19.2	茶褐色 細砂多量	上部完存
19-1	18~19H フク土			茶褐色 細砂	
19-2	18~19H フク土	坏		黄茶褐色 細砂	
19-3	18~19H フク土	坏		茶褐色 細砂	
19-4	18~19H フク土			赤褐色 微砂	
19-5	18~19H フク土	坏		暗文	

図版 番号	出土地点	器種	大きさ (cm)	色調・胎土	その他
19-6	18~19H フク土	坏		茶褐色 細砂	
19-7	18~19H フク土	甕	口径-12.5	茶褐色 細砂	
19-8	18~19H フク土	甕	口径-17.5	茶褐色 長石粒子、細砂	1/4 遺存
19-9	18~19H フク土	甕	底径- 5.8	長石、小石多	底部のみ1/2
19-10	18~19H フク土	土 錘	器高-4.8	黄茶色 細砂	完存
19-11	19H、フク土	坏	底径- 5.8	内面-赤茶褐色 外面-赤茶褐色 砂、茶褐色粒子	底部のみ
20-1	堀、フク土	坏	底径- 5.6	暗黄灰色 黑色砂、結晶片岩	未野産
20-2	堀、フク土	坏	底径- 6.5	青灰色 小石、白色針状物	南比企産 底部1/4 残存 ヘラ記号
20-3	堀、フク土	坏		黄茶褐色 微砂	口縁片
20-4	堀、フク土			茶褐色 細砂	
21-1	21H、No.8 (貯蔵穴内)	高 坏	口径-21.5	赤茶褐色 微砂	坏部のみ 暗文
21-2	21H、No.4 (貯蔵穴内)	高 坏	口径-20.6	赤褐色粒子、小石、長石	1/8 残存
21-3	21H、貯蔵穴	高 坏	口径-20.8	黄茶褐色 赤褐色粒子、長石粒子多	1/5 残存 赤彩
21-4	21H、貯蔵穴 No.1	高 坏		赤茶褐色 微砂	
21-5	21H、貯蔵穴内	壺	口径-19.0 器高-28.8 底径- 6.3	黄茶褐色 小石、細砂	完存
22-1	22H、フク土	蓋	口径-18.0	赤褐色 赤褐色粒子、細砂	1/8 残存

図版 番号	出土地点	器種	大きさ (cm)	色調・胎土	その他
22-2	22H、No.4	甕	口径-23.8	茶褐色 雲母、微砂	1/8 残存
22-3	22H、フク土	甕	口径-21.8	茶褐色 長石、細砂	1/6 残存
22-4	22H、フク土	甕	口径-21.8	茶褐色 茶褐色粒子、細砂	体、口縁部 1/2 残存
22-5	22H、No.3		底径-10.0	茶褐色 細砂	底部のみ
22-6	22H、No.5	坏	口径-12.8	茶褐色 長石、細砂	2/3 残存
22-7	22H	坏		黄褐色 細砂	1/6 残存
22-8	22H	坏		黄茶色 細砂、雲母	1/10残存
22-9	22H			橙褐色 長石粒子	小片、暗文有り
22-10	22H	小 壺		黒茶褐色 細砂多し	口縁部片
22-11	22H、No.6	小 壺		黒褐色 微砂、雲母、赤褐色粒子	口縁部片
23-1	23HカNo.8	高台付 埴	口径-17.3 底径- 8.3	内面-黒色 外面-黄茶褐色 石英、砂	底部のみ完存
23-2	23HカNo.19	高台付 埴	口径-14.8 底径- 6.8	内面-茶褐色 外面-茶褐色 石英、細砂	4/5 残存
23-3	23H、No.10 フク土上層	埴	口径-14.7 底径- 4.5	内面-黒茶褐色 外面-黒茶褐色 長石、石英、細砂	高台欠失
23-4	23Hカ、No.5	高台付 埴	底径- 8.6	内面-黒茶褐色 内面-暗茶褐色 赤色粒子、細砂、石英、金雲母	底部2/3 残存
23-5	23H床、No.15	高台付 埴	口径-11.4 底径- 5.5	内面-黒彩 外面-黒彩 細砂、小石、赤褐色粒子	4/5 残存
23-6	23H、No.22	坏	口径-12.8 底径- 5.5	内面-茶褐色 外面-暗褐色 細砂、石英、赤褐色粒子多し	口縁部1/4 残存 底部完存

図版 番号	出土地点	器種	大きさ (cm)	色調・胎土	その他
23-7	23H、No.12	坏	口径-11.8 底径-6.0	内面-黄茶褐色 外面-黄茶褐色 細砂多し	1/2 残存 底部完存
23-8	23H、No.11	坏	口径-10.6 底径-6.0	内面-黄茶褐色 外面-黄茶褐色 細砂、石英	完存、完形
23-9	23Hカ、No.16	坏	口径-10.6 底径-5.5	内面-灰茶褐色 外面-灰茶褐色 細砂、赤褐色粒子	口縁 3/4残存
23-10	23H、No.7	坏	口径-10.6 底径-4.5	内面-黒茶褐色 外面-暗茶褐色 石英、結晶片岩、細砂	4/5 残存
23-11	23H、フク土	坏		黄茶色 微砂	口縁部小片
23-12	23H、フク土	碗	口径-8.6	茶褐色 細砂	口縁部
23-13	23H、フク土	甕		赤褐色粒子 細砂	底部1/2 残存 木葉痕有り
23-14	カマド中、底部 No.4, No.2, No.3, No.9, No.1, No.18 (床) No.9, No.14 No.17	羽 釜	口径-22.5 器高-20.0	茶褐色 小石大の石英、赤褐色粒子、 細砂、多し	体部4/5 残存
24-1	24H	高 坏	器高-5.0 底径-10.5	内面-灰色 外面-黒灰色 長石、砂、小石	脚部のみ残存
24-2	24H、フク土	坏		黒色 微砂	
24-3	24H、フク土	坏		黄褐色 長石粒子多し	1/8 残存
24-4	24H、フク土	坏		橙茶色 長石	1/8 残存
24-5	24H、フク土			黄茶褐色 細砂	口縁小片
24-6	24H、フク土	甕		黄茶色 微砂、雲母	口縁小片
24-7	24H、フク土	甕		黄褐色 長石粒子	
24-8	24H、フク土			黄茶色 細砂多し	
25-1	25H、フク土	坏	口径-11.3	茶褐色 微砂	1/4 残存
25-2	25H、フク土	坏	口径-11.4	茶褐色 細砂	1/4 残存

図版 番号	出土地点	器種	大きさ (cm)	色調・胎土	その他
埋没谷 1-1	埋、溝西IV	須恵器蓋	口径-20.0	青灰色 白色針状物	1/6 残存 南比企産
1-2	埋、溝IV下	須恵器蓋	口径-16.6	内面-黒灰色 外面-黒灰色 石英、砂多し、白色針状物	2/3 残存 南比企産
1-3	埋、溝西IVNo.8	須恵器蓋	口径-16.7	内面-黄灰色 外面-黄灰色 細砂、白色針状物	4/5 残存 南比企産 蓋つまみ墨書有り
1-4	B 9~B11 フク土	須恵器蓋		青灰色 石英、白色針状物	へう先痕有り
1-5	B 7~BM 2 溝西IVNo.11	須恵器蓋	口径-12.5	内面-黒灰色 外面-黒灰色 石英、白色針状物	1/2 残存 南比企産
1-6	埋、溝西IV	須恵器蓋	口径(12.6)	内面-黒灰色 外面-黒灰色 石英、砂、白色針状物	1/2 残存 南比企産
1-7	B 7~BM 2 埋、フク土	坏	口径(15.8) 底径- 9.0	内面-白灰色 外面-白灰色 石英、長石、白色針状物少量	1/2 残存 南比企産
1-8	B 7~BM 2 No.4、No.3	坏	口径-14.7 底径-10.2	内面-黒灰色 外面-黒灰色 石英、長石多、白色針状物	3/4 残存 南比企産
1-9	埋、溝西IVNo.20	碗	口径-16.0 底径- 7.5	内面-淡灰色 外面-淡灰色 石英、黒色班、白色針状物	2/3 残存 南比企産 墨書有り
1-10	埋、溝西IV下	碗	口径(15.8) 底径- 7.5	内面-黒青灰色 外面-黒青灰色 石英、細砂、白色針状物	1/3 残存 南比企産
1-11	埋、溝西IV下 No.16	碗	口径(15.0) 底径- 7.0	内面-黄灰色 外面-黄灰色、白色針状物 石英、赤褐色粒子、砂、	1/3 残存 南比企産
1-12	埋、溝西IV下 No.10	碗	口径(14.3) 底径- 7.0	内面-青灰色 外面-黒灰色 石英、小石、白色針状物	1/2 残存 南比企産
1-13	溝、西IV下	坏	口径-16.2	内面-灰色 外面-灰色 白色針状物	1/6 残存 南比企産
1-14	B 9~B11 フク土	坏	底径- 7.2	内面-青灰色 外面-青灰色 石英、砂	1/4 残存
1-15	埋、溝西IV下	高台付碗	口径-11.4 底径- 7.4	内面-暗青灰色 外面-暗青灰色	5/6 底部完存 南比企産 底部へう記号
1-16	埋、溝西IV	坏	口径(13.0) 底径- 7.2	内面-赤褐色 外面-青灰色 砂、白色針状物	1/4 残存 南比企産

図版 番号	出土地点	器種	大きさ (cm)	色調・胎土	その他
埋没谷 1-17	埋、溝西IV No.14	坏	口径-13.0 底径- 6.0	内面-青灰色 外面-青灰色 石英、白色針状物	1/2 残存 南比企産 ヘラ記号有り
1-18	埋、溝西IV下	坏	口径-13.2 底径- 6.5	内面-淡灰色 外面-黒灰色、炭化物付着 長石、小石、砂、白色針状物	4/5 残存 南比企産 ヘラオコシ痕有り
1-19	埋、溝IVフク土 No.6	坏	口径(12.6) 底径- 6.0	内面-灰色 外面-灰色 砂、白色針状物	1/2 残存 南比企産
1-20	トレンチ 8	坏	口径-12.2 底径- 6.1	内面-淡黄灰色 外面-灰色 小石、砂、白色針状物	5/6 残存 南比企産
1-21	埋、溝西IV	坏	口径(12.0) 底径- 7.9	内面-黄青灰色 外面-黄青灰色 石英、砂、白色針状物	1/2 残存 南比企産
1-22	埋、溝西IV No.18	坏	口径(12.6) 底径- 7.0	内面-淡灰色 外面-淡灰色 石英、砂、白色針状物	1/2 残存 南比企産
1-23	埋、溝西IV	坏	口径(12.6) 底径- 6.6	内面-灰色 外面-灰色 砂、白色針状物	1/3 残存 南比企産
1-24	埋、溝西IV No.4	坏	底径- 6.5	内面-灰色 外面-灰色、石英、長石、 細砂、白色針状物	口縁体部の一部と 底部 南比企産
1-25	埋、溝西IV No.15	坏	口径(13.2) 底径- 6.0	内面-暗灰色 外面-暗灰色 石英、砂、白色針状物	2/3 残存 南比企産
1-26	埋、溝西IV下	坏	底径- 6.5	黒褐色 白色針状物	底部1/2 残存 南比企産 ヘラ記号
1-27	A7~A8埋	坏	底径(6.5)	内面-青灰色 外面-青灰色 砂、白色針状物	底部1/3 残存 南比企産 墨書
1-28	埋、溝西IV下	坏	底径- 7.0	内面-青灰色 外面-青灰色 白色針状物	南比企産 火だすき痕
1-29	埋、溝西IV下	坏	口径(13.0) 底径- 5.9	内面-暗灰色 外面-暗灰色 細砂、石英、結晶片岩	1/3 残存 末野産
1-30	溝、埋	坏	口径(11.5) 底径- 6.5	内面-赤灰色 外面- 白色針状物	1/4 残存 南比企産 敷ワラ痕
1-31	埋、溝東 No.3	坏	底径(6.1)	灰色 白色針状物	底部1/3 残存 南比企産
1-32	埋、溝西IV下	坏	底径 5.3	内面-淡黄灰色 外面-淡黄灰色 石英、砂	底部のみ

図版 番号	出土地点	器種	大きさ (cm)	色調・胎土	その他
1-33	埋、溝西IV下	坏	底径- 6.0	内面-灰色 外面-灰色 石英、白色針状物	底部のみ残存 南比企産 ヘラ記号
1-34	埋、溝西IV	坏		青灰色 白色針状物	底部1/4 残存 南比企産 ヘラ記号
1-35	埋、溝西IV下	坏	底径- 6.0	青灰色 白色針状物	底部1/2 残存
1-36	B 6~B 7埋II	坏	底径 (6.2)	灰色 白色針状物	底部1/3 残存 南比企産
1-37	埋、溝西IV No.19	坏	口径-11.9 底径- 8.5	茶褐色 細砂	1/4 残存
1-38	埋、溝西IV No. 7	坏	底径- 6.5	内面-灰色 外面-灰色 石英、白色針状物	底部のみ 南比企産 墨書有り
1-39	A 7~A 8埋	埴	底径- 7.2	灰色 白色針状物	底部のみ 南比企産
1-40	A 7~A 8埋I	平瓶		青灰色 細砂、長石、雲母	頸部小破片 暗文有り
1-41	埋、溝西IV下	坏		黄灰色 白色針状物	南比企産 墨書有り
1-42	B 7~BM 7埋I No.11	坏	口径-13.4	黄茶色 細砂多し	
1-43	B 7~BM 2 埋没谷 No. 3	土師器坏	口径-15.1 器高- 3.1	内面-灰褐色 外面-黄茶褐色 砂、細砂	4/5 残存
1-44	B 7~BM 7埋II	坏	口径-13.9	黄茶色	1/4 残存
1-45	B 7~BM 2埋II	坏	口径-13.9	黄茶褐色 細砂、小石	1/5 残存
1-46	埋、溝西IV No.19	坏	口径-12.6	茶褐色 細砂	1/4 残存
1-47	埋、溝西IV	坏		茶褐色 微砂	小片 布目圧痕有り
1-48	埋、溝西IV下 No.12	甕	口径-20.0 器高- 8.0	茶褐色 長石粒子、細砂多し	1/4 残存

図版 番号	出土地点	器種	大きさ (cm)	色調・胎土	その他
1-49	埋、溝西IV下	甕	器高- 6.4	茶褐色 長石、細砂	口縁一部残存
1-50	埋、溝西IV下	台付甕	器高- 3.5 底径- 9.0	茶褐色 細砂	1/2 残存
1-51	埋、溝西IV下	台付甕	底径- 9.5	茶褐色 細砂、雲母	脚部のみ
1-52	埋、溝西IV下	台付甕	底径- 8.4	茶褐色 微砂	脚部のみ
2-1	A12~A17 フク土	坏	底径- 5.2	黄灰色 石英、白色針状物	底部のみ 南比企産 墨書有り
井戸 1-1	井戸	坏	口径-15.1 底径-11.4	黒灰色 長石、黒色砂、白色針状物	1/10残存 南比企産
1-2	埋、溝、フク土	坏	口径-13.7 底径- 7.0	内面-暗灰色 外面-暗灰色 石英、細砂、白色針状物	1/3 残存 南比企産
1-3	井戸 下層	坏	底径- 7.0	内面-黒灰色 外面-赤褐色 赤褐色粒子、白色針状物	底部 1/4残存 南比企産
1-4	井戸 1号	坏	底径- 6.2	黒色 細砂	
1-5	井戸 フク土	甕	器高- 4.0	赤茶褐色 細砂、小石	口縁部小片
埋没谷 3-1	B28~B30 フク土		器高- 5.0	黄茶色 細砂	
3-2	B28~B30 フク土	高 坏	口径- 3.0 器高- 6.5	黄茶褐色 細砂	脚部のみ赤彩有り
4-1	BM7~B60T フク土	甗	口径-29.5 器高- 7.0	黄茶褐色 長石、赤褐色粒子	1/8 残存
4-2	A56~A58 埋没谷	壺	口径-22.0 器高- 6.0	黄茶褐色 石英、細砂	1/8 残存 赤彩有り
4-3	A56~A58 埋没谷	壺	口径-21.5 器高- 5.6	黄茶褐色 長石、石英	1/10残存
4-4	B58トレンチ フク土		口径- 5.4 器高- 4.5	赤茶褐色 小石、細砂	口縁小片

図版 番号	出土地点	器種	大きさ (cm)	色調・胎土	その他
埋没谷 4-5	B58トレンチ フク土		口径- 5.5 器高- 3.0	赤茶褐色 小石	
4-6	B61~B62 トレンチ	壺	口径- 4.0 器高- 3.1	石英、細砂	壺口縁一部
4-7	B61~B62 トレンチ		口径- 4.0 器高- 3.5	赤茶褐色 細砂	口縁一部
4-8	B61~B62 トレンチ	壺		茶褐色 細砂	有段口縁一部 赤彩有り
4-9	BM7~B60 トレンチ	精製器台		暗褐色	小片一部 赤彩有り
4-10	B57~B58	埴	口径- 6.4 底径- 3.6	細砂、赤褐色粒子	底部のみ赤彩有り
4-11	B61~B62	壺		茶褐色 細砂	小片 網目状撚糸文
4-12	B57~B58	甕	口径- 9.0 底径- 5.5	小石、長石多し	
4-13	A52~A53トレンチ フク土	高台付甕	器高- 6.2 底径- 9.5	茶褐色 長石、石英、砂	脚部のみ90%残存
1-53	B7~BM2 埋没谷 No.1	台付埴	口径-13.0 底径- 6.8	灰色、焼成良 長石粒子、小石多し	未野産
1-54	B7~BM2 埋没谷 No.5	須恵器坏	口径-16.7 底径-12.3	灰色、焼成良 細砂、白色針状物	南比企産
井戸 2-1	B47、48	碗	底径- 4.7	白灰色 堅微、微砂	天目茶碗
埋没谷 1-55	B7~BM2 埋没谷1 No.1	須恵器大甕		茶褐色、やや風化している 長石粒子、石英、小石	

第4表 塩西Ⅱ出土陶器観察表

登録 番号	出土地点	器種	文様表現	地紋	大きさ (cm)	備考
1	常安寺裏 土墳	蓋	井桁と草花文	染付	高径 1.9 口径 底径 9.7	1/3 遺存
2	常安寺裏 土墳	蓋	菱形 将棋の駒と三うろこ	彩色	高径 (2.5) 直径 10.0 口径 8.0	1/2 遺存
3	常安寺裏 土墳	蓋	かたばみ花文	彩色	高径 3.0 直径 5.8 口径 4.5	完存
4	常安寺裏 土墳	碗	松竹梅	染付	高径 5.5 口径 (12.0) 底径 (4.2)	1/3 遺存
5	常安寺裏 土墳	碗	ぼたん花文	彩色	高径 6.0 口径 11.2 底径 4.2	1/2 遺存
6	常安寺裏 土墳	碗	松と松ぼっくり	染付	高径 5.3 口径 (11.0) 底径 4.0	1/3 遺存
7	常安寺裏 土墳	碗	網目文	染付	高径 4.0 底径 3.2	1/4 遺存
8	常安寺裏 土墳	碗	笹、竹	染付	高径 (6.7) 口径 (15.2) 底径 (6.0)	1/3 遺存 内側に屋号
9	常安寺裏 土墳	碗	梅と横縞文	染付	一部分	1/5 遺存
10	常安寺裏 土墳	茶碗	色一 { 藍 灰		高径 4.5 口径 8.4 底径 3.0	95% 遺存 底に銘
11	常安寺裏 土墳	茶碗	菊と市松格子	染付	高径 4.7 口径 8.2 底径 3.0	2/3 遺存
12	常安寺裏 土墳	碗	葉状摺絵	染付	高径 5.6 口径 10.5 底径 4.0	1/2 遺存
13	常安寺裏 土墳	茶碗	葉と雷文		高径 (5.1) 口径 (6.8) 底径 3.4	2/3 遺存
14	常安寺裏 土墳	茶碗	唐草文	染付 青磁	高径 (4.3) 口径 (8.2)	1/4 遺存
15	常安寺裏 土墳	茶碗	針状の抽象文	染付	高径 5.1 口径 (7.6) 底径 3.2	2/3 遺存
16	常安寺裏 土墳	茶碗	白地草花文		高径 5.0 口径 7.9 底径 3.4	2/3 遺存

登 録 番 号	出 土 地 点	器 種	文 様 表 現	地 紋	大 き さ (cm)	そ の 他
17	常 安 寺 裏 土 墳	茶 碗		青 磁 淡緑色	高径 5.0 口径 8.1 底径 2.6	2/5 遺存
18	常 安 寺 裏 土 墳	茶 碗	白地、文様なし		高径 4.6 口径 8.1 底径 3.2	98%遺存 内側に屋号
19	常 安 寺 裏 土 墳	茶 碗	文字と花文	染 付 青 磁	高径 3.2 底径 3.6	1/5 遺存
20	常 安 寺 裏 土 墳	碗	唐草と花卉文		高径 2.5 底径 4.2	1/5 遺存 底部のみ
21	常 安 寺 裏 土 墳	碗	龍の文様	染 付	高径 2.9 底径 3.8	1/6 遺存 底部のみ
22	常 安 寺 裏 土 墳	皿	竹笹、草花文 裏側に唐草文	染 付	高径 3.0 口径(21.2) 底径(12.6)	1/3 遺存 底部に銘
23	常 安 寺 裏 土 墳	皿	摺絵 裏側に唐草文	染 付	高径 4.2 口径(15.0) 底径 9.2	80%遺存
24	常 安 寺 裏 土 墳	皿	竹笹、草花文 裏側に線	染 付	高径 2.7 口径(20.4) 底径(12.2)	底部に銘
25	常 安 寺 裏 土 墳	皿	山、島、叢林、苔屋 風 景 文	染 付	高径 2.7 口径 9.9 底径 6.3	90%遺存 輪花
26	常 安 寺 裏 土 墳	皿	草花文	染 付	高径 2.5 口径(10.3) 底径 (4.3)	1/5 遺存 裏側に銘
27	常 安 寺 裏 土 墳	皿	筏流し 裏側に花文	染 付	高径 2.7 口径(16.0) 底径(11.5)	1/6 遺存
28	常 安 寺 裏 土 墳	皿	枇杷文	染 付	高径 (2.4) 口径 16.9 底径 9.0	1/5 遺存 輪花
29	常 安 寺 裏 土 墳	皿	鶴、半円浮彫		高径 2.4 口径 13.2 底径 7.4	完形 輪花
30	常 安 寺 裏 土 墳	皿	山水様 裏側、竹松、苔屋、島	染 付	高径 2.7 口径 9.1 底径 3.7	70%遺存
31	常 安 寺 館 堀フク土			青 磁 淡緑色	高径 5.5 一部分	口縁小片 補修有り
32	常 安 寺 館 堀フク土	内 耳 鍋			高 5.2 一部分	口縁小片

登 録 番 号	出 土 地 点	器 種	文 様 表 現	地 紋	大 き さ (cm)	そ の 他
33	60Ⅱ B5～B67		朽葉色、長石	釉	高径 2.5 底径 5.8	底部完存
34	常安寺館 堀フク土	花 瓶	鳥型 手付、灰青	青 磁 淡緑色	高径 15.8 口径 9.1 底径 5.7	完形
35	60Ⅱ 埋溝西Ⅳ	碗	摺絵 梅	染 付	高径 5.6 一部分	小片
36	常安寺裏 土 壙	茶 碗	草花文	染 付	高 5.0 一部分	小片
37	常安寺裏 土 壙	碗	草花文	染 付 彩 色	高 4.6 一部分	小片
38	常安寺裏 土 壙	皿	線画文	染 付	底 3.9 一部分	底部小片
39	常安寺裏 土 壙	碗	鶴、鹿の子文	染 付	高 3.0 一部分	フチ小片
40	埋、溝西Ⅳ	碗	丸、草花文	染 付	一部分	小片
41	常安寺裏 土 壙	碗	草花文	染 付	一部分	小片
42	常安寺裏 土 壙	碗	摺絵牡丹様花文	染 付	一部分	小片
43	B12～B137	燈 明 皿	内面－茶褐色 外面－黄褐色		高径 2.2 口径 10.2 底径 4.9	完形
44	常安寺裏 土 壙	燈 明 皿	内面－茶褐色 外面－黄褐色		高径 1.9 口径 11.2 底径 5.0	完形
45	常安寺裏 土 壙	火 鉢	波文－線彫り 草花文－彫りこみ		高径 15.5 口径 28.0	30%遺存
46	常安寺裏 土 壙	ガ ラ ス 小 ビ ン			高径 6.2 口径 2.1 底径 3.0	完形 目薬
47	常安寺裏 土 壙	ガ ラ ス 小 ビ ン			高径 6.1 口径 1.6 底径 3.0	完形 髪染
48	常安寺裏 土 壙	ガ ラ ス 小 ビ ン			高径 20.4 口径 2.9 底径 4.7	完形 サイダー

第5表 塩西Ⅱ遺跡 須恵器 観察表

図版 No.	出土位置	色調
1	1 H フク土表採	内面－暗灰色 表面－黒色
2	1 H フク土	内面－暗灰色 表面－黒色
3	1 H フク土	内面－暗灰色 表面－黒色
4	1 H フク土	暗灰色
5	1 H フク土	灰色
6	3 H フク土	内面－灰色 表面－黒色
7	3 H 2 土壌	内面－灰色 表面－黒色
8	3 H フク土	内面－灰色 表面－黒灰色
9	3 H フク土	黒灰色
10	4 H No. 1	内面－灰色 表面－黒、灰色
11	4 H フク土	黒灰色
12	4 H フク土	内面－暗灰色 表面－灰色
13	4 H フク土	内面－暗灰色 表面－黒色
14	5 H フク土	灰黄色
15	7 H フク土	暗灰色
16	7 H	内面－黄灰色 表面－黒灰色
17	7 H フク土	黒灰色
18	7 H フク土	灰色
19	7 H	内側－黒灰色 表面－橙灰色
20	9 H フク土	内側－灰色 表面－黒灰色

図版 No.	出土位置	色調
21	17H フク土	内側－灰色 表面－黒色
22	18H フク土	灰褐色
23	19H フク土	内面－灰茶色 表面－灰紫色
24	19H フク土	灰茶色
25	19H フク土	内面－灰色 表面－灰褐色
26	21H フク土	灰黄色
27	27H	内面－暗褐色 表面－黒色
28	27H	暗灰色
29	27H	内面－橙茶褐色 外面－灰黄色
30	A 7～A 8 埋	暗灰色
31	井戸フク土	灰色
32	A 56～A 58埋	内側－灰茶色 表面－黒灰色
33	B 6～B 3 埋Ⅱ	内側－灰茶色 表面－黄灰色
34	B 6～B 7 埋Ⅱ	内側－灰色 表面－黒灰色
35	B 4～B 5 ローム上No. 5	灰色
36	埋、溝西Ⅳ下 No. 19	内面－灰黒色 外面－黒色
37	埋、溝西Ⅳ No. 9	灰黒色
38	J、北、フク土	灰色
39	井戸 1 号	内面－灰紫色 外面－黒色
40	井戸 1 号	灰茶色

第6表 塩西Ⅱ出土石材・石器観察表

図版 No.	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	備考
	S J 2 3 カマドNo.リ	36	12	3		緑泥片岩	焼
	S J 2 3 カマドNo.ヤ	35	15.2	3.8		緑泥片岩	焼
	S J 2 3 カマドNo.ケ	41	12	4.6		緑泥片岩	焼
	S J 2 3 カマドNo.ロ	25.5	14	4.5		緑泥片岩	焼 接合
	S J 2 3 カマドNo.ハ	14.3	15.1	2		緑泥片岩	焼
	S J 2 3 カマドNo.ハ	13.3	14.5	2		緑泥片岩	焼
	S J 2 3 カマド支脚No.ニ	25	10.5	5.4		緑泥片岩	焼
	S J 2 3 カマドNo.ト	7.5	4.5	0.9		緑泥片岩	焼
	S J 2 3 カマドNo.リ	16	9	4		緑泥片岩	焼
	S J 2 3 床 No. E	14	4.5	1.3		緑泥片岩	
	S J 2 3 カマドNo.ホ	9.5	3	0.6		緑泥片岩	焼
	S J 2 3 カマドNo.ナ	12.5	8	2		緑泥片岩	焼
	S J 2 3 カマドNo.ロ	22.5	16.5	4.6		緑泥片岩	焼 接合
	S J 2 3 床 No. B	30	14.3	5.6		緑泥片岩	焼
	S J 2 3 カマドNo.フ	30	17	4.8		緑泥片岩	焼
	S J 2 3 カマドNo.フ	23	18	5.4		緑泥片岩	焼
	S J 2 3 床柱穴周辺	32	25	5.		緑泥片岩	
	S J 2 3 カマドNo.カ	22.5	12	2.5		緑泥片岩	焼

図版 No.	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	備考
	S J 2 3 カマドNo.イ	31.5	16.3	2.6		緑泥片岩	焼
	S J 2 3 カマドNo.ヨ	16.5	7.7	3		緑泥片岩	焼
	S J 2 3 カマドNo.ネ	16.7	8.5	2.5		緑泥片岩	焼
	S J 2 3 カマドNo.ネ	15.5	7.7	2		緑泥片岩	焼
	S J 2 3 カマドNo.チ	14.3	9	1.4		緑泥片岩	焼
	S J 2 3 カマドNo.チ	17	9	1		緑泥片岩	焼
	カマドNo.リ	10	6	2		緑泥片岩	焼
	カマドNo.リ	8.5	4	1.5		緑泥片岩	焼
	S J 2 3 カマドNo.タ	12	6.6	0.8		緑泥片岩	焼
	S J 2 3 カマドNo.ツ	15.5	8.5	0.6		緑泥片岩	焼
	S J 2 3 カマドNo.ツ	7	3.5	0.4		緑泥片岩	焼
	S J 2 3 カマドNo.ツ	2.4	1.7	0.4		緑泥片岩	焼
	S J 2 3 カマドNo.フ	34.5	15	5		緑泥片岩	焼
	S J 2 3 カマドNo.ヘ	10.2	4.5	1.3			焼
	S J 2 3 カマドNo.レ	10	8	2.7			
	S J 2 3 No. ロ	16	8	3.4			
	S J 2 3 床 No. C	12.5	8.5	7.5			焼
	S J 2 2 No. 1	10	6	5			

図版 No.	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石 材	備 考
	S J 2 3 カマドNo.ソ	23.5	10	2		緑泥片岩	焼
	S J 2 3 カマドNo.3	5.2	4.3	0.7		緑泥片岩	焼
	S J 2 3 カ マ ド	7.8	4.5	1		緑泥片岩	焼 ①
	S J 2 3 カ マ ド	7.3	4.5	1.2		緑泥片岩	焼 ②
	S J 2 3 カ マ ド	3.2	2	0.5		緑泥片岩	焼 ③
	S J 2 3 カ マ ド	5.4	2	0.3		緑泥片岩	焼 ④
	S J 2 3 カマドNo.ム	15.5	12.5	2.3		緑泥片岩	焼
	S J 2 3 カマドNo.ル	11	10.3	0.9		緑泥片岩	焼
	S J 2 3 No. ウ	8.5	11	5.5			焼
	S J 2 3 ピ ッ ト	10	9.5	2.3		緑泥片岩	焼
	A-12 杭 文殊尊 跡 フク土	9.5	9.2	1.4		緑泥片岩	
	A55～A58 埋 没 谷	12	6.5	2		緑泥片岩	1
	A55～A58 埋 没 谷	7.2	5	1.4		緑泥片岩	2
	B10～B11 溝 S I	20	11.5	4.4		緑泥片岩	焼
	S J 1 フ ク 土	7.5	4	1.7			石 斧
	A25～A26 No. 2	10	10	3			
	S J 1 フ ク 土	6	4.5	1.5		緑泥片岩	

IV. 考 察

1. 住居跡と出土遺物

塩西遺跡第Ⅱ次発掘調査の結果検出された住居跡は26軒であった。これを時期別にわけると古墳時代より平安時代末までに当たる。互いの重複関係は不明とせざるを得ない部分があり、細部の時期区分は行える状況にない。カマドの検出された住居跡はS J 1、6、16、19、23の5軒である。これらのカマド跡はすべて東向きで各時代ともカマドの設置方向に大差がない。

本遺跡の場合低平な台地を渡ってきた冬期の季節風は、最初の障害物である塩西遺跡をのせる丘陵面に直接当たるため冬期に多い西高東低型の気圧配置では、北又は北西の風が多い。北東にカマドを配置する点はこの土地の風土に良く合っていると言える。現在でも屋敷地の北面に遮蔽物となる叢林を配した家々が多く広く比企丘陵地で一般的に見うけられる。

出土土器は、住居を全掘しているわけではないので、およそ住居の存続期間を示すものとして考えたい。

和泉期の住居跡

S J 21が掲られる。貯蔵穴より壺、高坏がある。本時期に属する代表例で塩前遺跡、北田遺跡に類例をあげることができる。本住居のものは胴の張り方や口縁部の形態などからやや後出的である。

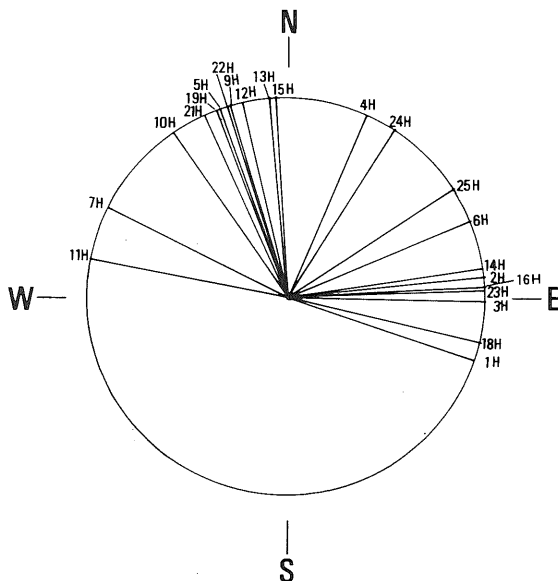
鬼高期より真間期にかけての住居跡

S J 18、19、22、24、25があげられる。S J 18、22のくの字状に外反する長甕は、本田・東台Ⅱ次S J 12等にある。これらの長甕は全て縦へう削のままであるが、胴部の膨らみを失い直線的になってきている。S J 22の坏は半球型を呈するが、口縁内側に内反させるなど鬼高期終末から真間期

にかけての特徴をみせている。

S J 25は鬼高期末にもっとも小型化し消滅していく一群の坏であろう。

S J 24の坏は須恵器坏で受身の形態をよく留めており、前者の一群より古い段階に比定できる。



第67図 塩西遺跡Ⅱ主軸方位

真間期の住居跡

SJ1、SJ6、SJ7が掲げられる。SJ6からは甕5個体が出土しているが、この甕は胴上半部に膨らみを持つ球胴形を呈するもので、ヘラ削も横ヘラ削へ移行している。本期の特徴的な甕といえよう。須恵器はSJ6からまとまって出土しており時期判定の決め手になる。この口径15cmに集中する平底の坏は底部に回転ヘラ削調整を施しており、南比企窯跡群中の山下6号窯（文46）に後続する小谷B第4号窯（文47）に対比でき赤沼14号窯（文48）より前に位置すると思われる。山下6号窯は8世紀第1四半期に比定されており、小谷B第四号窯は山下窯に後続する8世紀第1四半期の後半から第2四半期にかかるものと考えられている。それぞれの窯からの出土遺物分布をみると、本遺跡出土の平底の須恵器は小谷B第4号窯より出土する一群により近いと思われる。これらは底部の張り、底部より体部へかけての腰囲りの調整などにうかがうことができる。

蓋はSJ1に破片があるが、まだかえりを失っていない点など本期より遡る。SJ6、SJ7より出土する蓋はすべてかえりを失っており、端部を折り曲げてかえりとするものである。

SJ6の須恵器坏、土師器甕は8世紀第1四半期の後半に位置づけられる良好な一括資料と思われる。

国分期の住居跡

SJ3、4、7、9、10、16が掲げられる。SJ16の須恵器坏は、底部を回転糸切りの後、周辺部を回転ヘラ削調整する。南比企窯跡群中の虫草山窯、東金子窯跡群中の前内手1号窯期に当てられよう。前内手1号窯は金子真土氏（文49）の再検討以来740～760年に当る第2四半期から第3四半期に当たると考えられている。

国分期終末の住居跡

SJ23を掲げることができる。本住居跡から出土する一括の遺物には羽釜の他に土師質の須恵器がある。土師器坏の出土は無く本時期にはすでに消滅しているようだ。他に須恵器甕片が出土する他、灰釉陶器等は検出されていない。

土師質土器は便宜的な呼称であるが他にロクロ土師器、須恵器系土師器とも呼ばれ土師器に類似する胎土、質感を持ちロクロ成形された後、酸化焰焼成される土器である。本遺跡の土師質土器はロクロ目は明瞭に残らないが底部の回転糸切痕や高台のナデにロクロ使用をうかがえる。高台を有する碗は体部内弯し良く腰を張る。口縁はわずかに外反させている。高台は付け高台で外方へ強く張り出す。小形の碗は前者の大形品に類似するが内面黒色処理している。小皿は体部の張りが少なく、ロクロ目も明瞭でない。底部は回転糸切のままであるが、不規則な切離しであり、47-8に至っては切離面が凹面となっており糸切痕が乱れていることから木口によるナデ痕であるかもしれない。中形の坏は体部腰囲の張りを持たず直線的に外反するなど他と異なる。

羽釜はロクロ成形、体部下半をヘラケズリ調整後酸化焰焼成される。口縁部は内弯し、鐔は小さく断面はほぼ三角形であり、北武蔵では田中前遺跡（文50）、10、13号住居、大久保山遺跡（文51）例がこれに相当しよう。本住居の器種組成は碗と小皿を主体としており、中世的な器種組成に近づく。

黒書土器観察表

No	出土地	文字数	文字	器形	産地	墨書の位置	遺存度	備考
1-3	埋没谷1	1	稜	須恵器蓋	南比企	つまみ上面	つまみのみ	
1-27	埋没谷1	1	稜	須恵器坏	南比企	底部	底部1/2	
1-17	埋没谷1	1	稜	須恵器坏	南比企	底部	体底1/2	㊦記号アリ
1-38	埋没谷1	1	稜	須恵器坏	南比企	底部	底部のみ	
2-1	6~7号住居	1	榎	須恵器坏	南比企	底部	底部のみ	
7-9	7号住居	2	□男	須恵器壺	南比企	底部	底部のみ	㊦記号アリ
7-8	7号住居	2	□門	須恵器坏	南比企	底部	底部のみ	
1-9	埋没谷	2	上田	須恵器碗	南比企	底部	体底1/3欠	
1-41	埋没谷1	1	?	須恵器坏	南比企	底部	底部小片	
9-2	9号住居	1	?	須恵器坏	南比企	体部	体部小片	記号か

いているといえるが、時期の決め手となる遺物を全く欠いている。浅野春樹氏（文52）による羽釜の分類ではⅠ類Cの範疇に相当し比定年代を10世紀後半より11世紀前半代と幅広く想定されている。群馬県の様相とは細部で異なるが中尾遺跡、清里陣場遺跡の羽釜等と対比でき綿貫綾子氏（文53）による時期区分ではⅣ～Ⅴ期に当ると考えられ、10世紀第4四半期から11世紀第1四半期に想定されている。おおむねS J 23の位置する時期も両氏の比定期間に当ろうが、本地域では編年的に対比できる資料がきわめて少ないため前者の幅広い時期に想定しておきたい。

2. 墨書土器

塩西遺跡からは墨書痕の認められた土器が10点出土している。すべて須恵器破片で、S J 6、7、9、埋没谷Ⅰより検出された。文字の遺存状況は風化が進んでいるため不鮮明で、字義の判読にはさらに検討を加える余地がある。須恵器の器種は坏8点、蓋1点、壺1点である。蓋はつまみ上面に記されるが、他は底部8点、体部1点である。墨書文字は「榎」又は「稜」と思われるものが5点、先の文字が不明だが「□男」・「□門」と「上田」の2文字記されたものが各1点ある。他の2点は文字のつくり一部分を残す半欠品のため字義を特定できない。「榎」と「稜」は草書体・楷書体に近いものがある。これらの墨書の意味するところは茫洋としているが本遺跡の位置する時代の社会的・政治的状況を反映するものであろう。当地方は中・近世以降郡域が大きく変動し、しかも現在消滅した男衾郡をはじめ比企・大里の郡域を接する地域であった。後世の郡域変動と資料的な乏しさを加え、古代の郡領域を明らかにすることは現時点では困難で、郡下の郷里に至ってはさらに困難な状況にある。

江南町では荒神脇遺跡から「廣」「白」「田□」と判読または推定される墨書土器が6点検出されている（文1）。両遺跡で同意の墨書は無いが「上田」と「田□」は文字の前後が異なり字義も異なるのだろうが「田」のみが共通している。荒神脇遺跡の墨書は土師器坏が含まれる。墨書土器は識字者の存在を示すものであるが、塩西、荒神脇遺跡から硯は未だ発見されていない。隣接する岩比田遺跡から円面硯が発掘されている（文37）が墨書土器は1例も報告が無く、出土していないようである。

出土数の多寡・有無が直にその遺跡の特性を示すものとは思われないが近接するほぼ同時代の集落間のヒエラルキとして新たな問題となり派生していく素地を残している。

3. 塩西遺跡試料 火山灰同定報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

貴、江南町教育委員会殿より御依頼のありました、塩西遺跡試料の鉱物分析及び屈折率測定が終了しましたので、結果を御報告いたします。

1. はじめに

江南町塩西遺跡は、江南台地と呼ばれる台地上に位置する。江南台地は、関東平野西縁の丘陵につづく台地群の1つで、比企丘陵と荒川に挟まれた東西に細長い台地である。台地は、江南砂礫層の堆積面であり（高村ほか，1978）、下末吉面に対比されている（丸田，1975）。江南砂礫層の上位には川本粘土層、風成の褐色風化火山灰層（いわゆるローム）が堆積する（高村ほか，1978。）

塩西遺跡は、上記風成ローム層から旧石器が出土する。本分析は、遺跡における遺物包含層を含む風成ローム層の層序の確認と対比を目的とする。また、遺跡において風成ローム層の下位に観察された褐色粘土層の岩石学的特徴より粘土の起源についても考察する。

2. 試料

試料は、塩西遺跡内の露頭断面（A地点とする）において地表から地表下約1 mまでの風成ローム層を5 cm連続で採取した20点の中から1点おきに選んだ奇数番号とNo.20の試料計11点と、A地点から少し離れたB地点の粘土層より採取した奇数番号の試料4点の合計15点である。試料採取地点の柱状図を図1に示す。

3. 分析方法

上記の目的の手段として本分析は示標テフラと鉱物粗製を用いる。試料の処理過程は以下の通りである。

試料約40 gを超音波洗浄装置により分散、分析篩を用いて水洗し径1/16mm以下の泥分を除去する。乾燥の後、篩別を行い径1/4 ～ 1/8 mmの砂分をテトラブromoエタン（比重約2.96）により重液分離、重・軽鉱物をそれぞれ偏光顕微鏡下で同定した。火山ガラスは便宜上軽鉱物に入れ、形態分類は、遠藤・鈴木(1980)に従った。また、テフラの同定精度向上のため火山ガラスの屈折率測定も行なった。測定方法は、新井(1972)に従った。

4. 結 果

(1) A地点試料（表1・図2）

a. 重鉱物組成

試料は全て、斜方輝石と単斜輝石の両輝石が多く、他に不透明鉱物と少量のカンラン石・角閃石を含む。重鉱物組成の層位的な変化は、両輝石と不透明鉱物に認められる。両輝石は、No. 20からNo. 17にかけて増加、No. 17からNo. 7に向かっては緩やかな減少、これより上位ではやや増加傾向を示す。不透明鉱物は、これとほぼ逆の変化を示す。

b. 軽鉱物組成

試料中には、火山ガラス・長石と微量の石英が含まれる。火山ガラスは、No. 11～7にB型およびC型の比較的顕著な濃集が認められる。火山ガラスのA型とA'型はNo. 13より下位に向かってやや増加傾向を示す。E型とF型はNo. 1に比較的多い。長石は、特に層位的な変化は認められない。

(2) B地点試料（表2・図3）

a. 重鉱物組成

試料は、全て不透明鉱物が非常に多く、他に角閃石と少量の両輝石を含む。角閃石には下位に向かって増加傾向が認められる。

b. 軽鉱物組成

長石が多く、少量の石英を含む。火山ガラスはほとんど含まれない。軽鉱物組成の層位的な変化は認められない。

5. 考 察

(1) 示標テフラについて

A地点の試料No. 11～7に濃集するB型およびC型の火山ガラスは、形態がいわゆる屋根瓦状・カマボコ状のものと小気泡の集まった塊状のものが混在すること、また試料No. 9のB型とC型の火山ガラスの屈折率が $n_{1.500} \sim 1.504$ を示すこと、さらに風成ローム層の上部という産出層位から南関東において広く分布が認められている立川ローム最上部ガラス質火山灰(UG: 山崎, 1978)に由来するものと考えられる。UGは、約1.3～1.4万年前に降灰したと考えられ(町田ほか, 1984)、北関東の示標テフラである浅間火山起源の浅間一板鼻黄色軽石(YP: 新井, 1962, 1971)の細粒部に相当する可能性があると考えられている(町田ほか, 1984. 鈴木ほか, 1987) また、現在栃木県など関東北東部においてもほぼ同じ層位に同様のガラス質テフラが認められており(パリノ・サーヴェイ株式会社, 未発表)、関東地方全域の約1.3万年前後における有効な示標テフラとなる可能性がある。本遺跡におけるUGの降灰層準は、ガラスの産状から試料No. 11付近と考えられる。

A地点の試料No.13より下位に多くなるA・A'型の火山ガラスは、形態がいわゆる偏平板状のバルブ型であることと層位部にUGの下位であることなどから、今から約2.1～2.2万年前に九州の始良カルデラより噴出した始良Tn火山灰(AT:町田・新井, 1976)に由来すると考えられる。しかし、本遺跡における降灰層準は、ガラスの産状から試料No.20よりも下位にあると考えられる。

(2) 層 序

a. A 地 点

遺跡のある江南台地は、位置的に大宮台地と藤岡・前橋などの群馬県の台地との中間にあることから、風成ローム層の岩石学的な特徴も両者の特徴あわせもっていると考えられる。本遺跡の風成ローム層における両輝石の多い重鉱物組成は、大宮台地のAT降灰層準より上位の立川ローム層上半部および関東北西部の上部ローム層(新井, 1962)に共通する。その中で本遺跡のカンラン石の量比が両者の中間程度を示している。

示標テフラからは、UGの降灰層準より試料No.5～12採取層は武蔵野台地のいわゆるソフトローム層と呼ばれる立川ローム第Ⅲ層にほぼ対比される。ただし、武蔵野台地でのUGは第Ⅲ層の上部に降灰層準のあることが多いのに対し、本遺跡ではUGは試料No.5～12に降灰層準がある。したがって、武蔵野台地の第Ⅲ層の上限と下限が本遺跡の層の上限と下限にそのまま対比されるとはいえない。本遺跡におけるATについては降灰層準が不明なため、対比の鍵とはならない。可能性としてATの降灰層準が試料No.20より下位の暗褐色の層の中にあるとすれば、その層は、大宮台地の立川ローム層の中部および関東北西部の中部ローム層(新井, 1962)の上限にある暗色帯にほぼ対比される。また、その暗色帯は層位的には武蔵野台地の立川ローム層第2暗色帯(BBⅡ)に近いことがATにより確かめられている(町田・新井, 1976)。したがって、概括的に試料No.13～20層は、武蔵野台地の立川ローム層の第Ⅳ層第Ⅵ層ぐらいに対比される。なお、試料No.4より上位の黒褐色の層は、層相とUGの層準からいわゆる黒ボク層とよばれる約1万年前以降の風化火山灰層である。

b. B 地 点

粘土中に多い不透明鉱物は、自形を呈する磁鉄鉱物がほとんどであり、また、不透明鉱物以外の比較的新鮮な自形の重鉱物や長石も認められることなどから、B地点における粘土は比較的新しい火山灰起源であると考えられる。

遺跡において本粘土層およびそれに連続する粘土層中には示標テフラが認められなかったので、粘土層の堆積年代については不明である。しかし、層位的にはATよりも下位であり、先に述べた川本粘土層に相当する可能性がある。川本粘土層は高村ほか(1978)により下末吉ローム層に対比されている。

表 1 塩西遺跡A地点試料重鉱物組成

試料 番号	重　　鉱　　物　　組　　成						同定鉱物粒数	
	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	不透明鉱物			その他
					A	B		
1		1 7 2	3 4	3	3 3	1	7	2 5 0
3	1 0	1 4 4	3 5	1	5 7		3	2 5 0
5	4	1 5 5	4 0	1	4 5	4	1	2 5 0
7	7	1 2 4	4 4		6 9		6	2 5 0
9	4	1 4 4	3 2	2	6 6		2	2 5 0
11	5	1 4 0	3 8	3	5 5	5	4	2 5 0
13	8	1 3 9	4 6		5 5		2	2 5 0
15	8	1 4 4	5 7	2	3 5	2	2	2 5 0
17	3	1 4 7	6 2	1	3 0		7	2 5 0
19	5	1 4 3	4 2	5	4 7	4	4	2 5 0
20	1 0	1 1 1	2 7	6	6 4	5	2 7	2 5 0

※ 数値は全て粒数.

表 2 塩西遺跡A地点試料軽鉱物組成

試料 番 号	軽 鉱 物 組 成									同定鉱物粒数
	火 山 ガ ラ ス						石 英	長 石	そ の 他	
	A	A'	B	C	E	F				
	無色	無色	無色	無色	無色	無色				
1		1	2 4	3	1	9		9 4	1 1 8	2 5 0
3		1	3 1	1 0		2		1 3 4	7 2	2 5 0
5			3 0	7	2			1 1 5	9 6	2 5 0
7			4 2	1 1				1 4 8	4 9	2 5 0
9		1	5 9	1 5	1			1 4 8	2 6	2 5 0
11	1	1	4 8	8	1			1 3 7	5 4	2 5 0
13	1	5	2 0	6		2	1	1 4 5	7 0	2 5 0
15	2	1 1	8	1				1 3 1	9 7	2 5 0
17	2	7	9				5	1 4 0	8 7	2 5 0
19	4	1 7	7	8			3	1 1 7	9 4	2 5 0
20	3	6	2				3	1 0 2	1 3 4	2 5 0

※ 数値は全て粒数.

表 3 塩西遺跡B地点試料重・軽鉱物組成

試料番号	重　　鉱　　物　　組　　成						同定鉱物粒数	
	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	不透明鉱物			その他
					A	B		
1	2	8	2	13	198		27	250
3		7		35	199		9	250
5		5	2	30	198	2	13	250
7		17	2	49	177	1	4	250

試料 番号	軽 鈦 物 組 成					同定鈦物粒数
	火 山 ガ ラ ス		石	長	そ の 他	
	A	B				
	無色	無色				
1			1 5	1 3 1	1 0 4	2 5 0
3	1	1	1 1	1 1 9	1 1 8	2 5 0
5			1 7	1 2 4	1 0 9	2 5 0
7		1	1 7	1 2 7	1 0 5	2 5 0

※ 数値は全て粒数.

引用文献

- 新井房夫(1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年. 群馬大学紀要自然科学編, 10, p. 1～79.
- 新井房夫(1971) 北関東ローム石器包含層—とくに前期旧石器文化層の諸問題. 第四紀研究, 10, p. 317～329.
- 新井房夫(1972) 斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定——テフロクロロジーの基礎的研究——, 第四紀研究, 11, p. 254～269.
- 遠藤邦彦・鈴木正章(1980) 立川・武蔵野ローム層の層序と火山ガラス濃集層. 考古学と自然科学, 13, p. 19～30.
- 町田 洋・新井房夫(1976) 広域に分布する火山灰——始良T_n火山灰の発見とその意義——, 科学, 46, P. 339～347.
- 町田 洋・新井房夫・小野静夫・遠藤邦彦・杉原重夫(1984) テフラと日本考古学——考古学研究と関係するテフラのカタログ——, 渡辺直経編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」, p. 865～928.
- 丸田英明(1975) 荒川沿いのリニアメントと変動地形. 「東京直下地震に関する研究(その2)」, 東京都防災会議, p. 55～65.
- 鈴木正章・山路 進・二宮修治・大沢眞澄・遠藤邦彦(1981) 立川ローム層最上部UG火山灰の微量成分元素存在量とその給源火山. 日本第四紀学会講演要旨集, 17, p. 112～113.
- 高村弘毅・寺田 稔・山口雅功・千沢祐之(1978) 北埼玉地域の自然環境について(第一報). 立正大学北埼玉地域研究センター年報, 2, p. 5～43.
- 山崎晴雄(1978) 立川断層とその第四紀後期の運動. 第四紀研究, 16, p. 231～246.

V. 結 語

今回の調査は塩西遺跡中央部に設定された大トレンチで、遺跡の空間的、時間的な広がりがある程度推測できる資料を得たと言える。発見された遺構を時期、時代順に追いながら、塩西遺跡を現時点で把握できる姿をまた、解明すべき問題点を述べてみたい。

旧石器時代は、塩西遺跡の最頂付近を中心とし、北東の第1次調査地点をも含んでおり、同時代の石器集中跡のあり方からキャンプサイト的な遺跡であったようだ。ローム層の堆積状況から南関東地方とは直接比較にならないため、個々の遺物群の検討が重要である。

縄文時代の遺構は検出されていないが、草期撚糸文土器群、条痕文系土器群をはじめとして、前期、中期、後晩期の土器がわずかに出土していることから、将来縄文時代の遺構が発見されるだろう。弥生時代の遺物、遺構は見つかっておらず、この時代は空白である。

古墳時代初頭になると塩西遺跡では多くの方形周溝墓、住居跡等が構築される。今回の調査では検出されなかったが、第1次調査では3基の方形周溝墓が発見されている。標高は76～78m付近である。古墳時代中期の住居は、前期集落の東側に位置するようで、埋没谷の位置する標高65m付近に3軒の住居跡が第1次調査で検出されている。後期の住居跡も中期のあり方に近いようで、カマドを持つ住居跡の検出は、S J 19がこれに当る。他にS J 22、24、26も同時期であろう。

本期に属する後期の古墳は、埴輪の検出から、八幡神社周辺に位置しており広く塩一帯から見ると、前方後方墳を持つ第1支群の周辺に分布する。これらの古墳は白色凝灰岩の切石を用いた横穴式石室の構造をもつ例がある。

奈良・平安時代では集落の中心が東方の斜面下位に移るようであり、住居の他に掘立柱建物の存在もうかがい知れる。この奈良期の遺物S J 6に良好な資料がある。また平安期の遺物は埋没谷1に一括の資料がある。これらの土器の中には墨書土器が混在しており、当時の郡制下の郷の解明にも影響すると思われる。平安時代の中葉頃には埋没谷1周辺にみるように集落が増加するようで、塩荒井地点や、和田川対岸の岩比田遺跡の繁栄を映すよう塩西遺跡にも集落の広がりが認められる。

奈良・平安時代で特徴的な事実は、下流域の野原荒神脇、熊野遺跡、宮脇遺跡と同様住居内に床下土壌を有する例が多い。この遺構の性格は不明だが岩比田遺跡では、あまり検出例がなく問題である。

また塩西遺跡では、荒井地点をはじめ鉄滓、羽口等を出土する住居跡や小鍛冶を行った住居の検出例があったことである。S J 23は平安末にかかる本遺跡では最終の住居となる。前代の立地と異なり丘陵頂部付近へ住居を構築している。中世以降は鎌倉時代後半から板碑青磁等の遺物が見られる。

常安寺は室町時代大永年間の創建と伝えられる。常安寺館が13世紀までさかのぼるとすれば土手ノ内遺跡の館跡と伴に、鎌倉末～室町時代にかけての在地領主の存在が浮び上るだろう。

以上のように塩西遺跡は、旧石器時代、古墳時代、奈良・平安時代、鎌倉・室町時代を主とする大規模な複合遺跡であり、江南町の歴史を知る上での貴重な郷土資料であり、また重要な問題をはらんでいる。

参 考 文 献

- 1 中島利沿 他 1974 『下新田遺跡・荒神脇遺跡・熊野遺跡』埼玉県遺跡調査会報告 第22集
- 2 江南町教育委員会 1983年調査・未報告
- 3 高木義和・栗嶋義明 1982年 『南大塚遺跡』 寄居町文化財調査報告第6集
- 4 奥野麦生 1984 「埼玉県東松山市雷原採集の先土器時代資料」『Shell Mound』第2号
- 5 滑川村 1984 『滑川村史』・通史編
- 6 寄居町 1984 『寄居町史』 原始・古代・中世資料編
- 7 金井塚良一 1976 『花見堂』嵐山町教育委員会
- 8 東松山市 1978 『東松山市史』資料編 第1巻
- 9 新井 端 他 1982 『塩前遺跡』江南村文化財調査報告 第3集
- 10 高野博光 1976 『寺山』埼玉県遺跡発掘調査報告書 第9集
- 11 小野美代子・他 1979 『越畑城跡』埼玉県遺跡発掘調査報告書 第20集
- 12 安岡路洋・三波国五郎 1966 『稻荷原』大宮市教育委員会
- 13 谷井 彪・他 1980 『舟山遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査報告 第9集
- 14 金井塚良一・植木 弘 1980 『金平遺跡』嵐山教育委員会
- 15 渡辺 一・金井塚厚志 他 1985 『鳩山窯跡群発掘調査概報』鳩山町教育委員会
- 16 金井塚良一・他 1969 『平松台遺跡』
- 17 植木 弘 1987 『行司免遺跡』嵐山町遺跡調査会
- 18 村松 篤 1987 『上本田遺跡の調査』第20回遺跡発掘調査報告会発表要旨
- 19 中嶋 宏・他 1982 『中郷』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第13集
- 20 a. 鈴木敏昭・他 1983 『台耕地 I』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第27集
b. 酒井清二 1984 『台耕地 II』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第33集
- 21 金子直行・他 1982 『衆生ヶ谷戸』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第12集
- 22 植木 弘 1987 『神山遺跡』嵐山町遺跡調査会報告 1
- 23 高木義和 1982 『東国寺東・平倉遺跡』寄居町文化財調査報告書 第7集
- 24 寺社下 博 1980 『万吉西浦遺跡』熊谷市教育委員会
- 25 花園村 1970 『花園村史』
- 26 今井 宏・他 1984 『屋田・寺ノ台』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第32集
- 27 植木 弘 1987 『古里古墳群 北田遺跡』嵐山町遺跡調査報告 2
- 28 寺社下 博 1982調査、同氏より教示を賜る
- 29 1982 『新編 埼玉県史 資料編 2』
- 30 金井塚良一 1968 『番清水遺跡』
- 31 金井塚良一 1960 「五領C区の発掘調査」『埼玉考古』 第3号
- 32 板野和信・他 1987 『下道添』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第67集
- 33 坂本和信・他 1986 『埼玉県古式古墳調査報告書』埼玉県史編さん室
- 34 坂本和俊 1986 「諏訪山29号墳」『埼玉県古式古墳調査報告書』埼玉県史編さん室

- 35 金井塚良一 1978 『吉見町史』上巻「第6節 古墳時代の展開・Ⅱ 竪穴住居址の変遷」
- 36 坂本和俊 1986 「雷電山古墳」『埼玉県古式古墳調査報告書』埼玉県史編さん室
- 37 金井塚良一・小淵良樹 1983 『岩比田』岩比田遺跡調査会
- 38 井上 肇 1979 『舞台Ⅰ・Ⅱ』埼玉県遺跡発掘調査報告書 第17・18集
- 39 塩野 博・他 1972 『鹿島古墳群』埼玉県埋蔵文化財調査報告 第1集
- 40 村松 篤氏に教示をいただく
- 41 金井塚良一 1979 「比企地方の前方後円墳－北武蔵の前方後円墳の研究(1) 』『埼玉県立歴史資料館紀要』第1号
- 42 亀井正道 1977 「踊る埴輪出土の古墳とその遺物」『ミュージアム』310号
- 43 坂詰秀一・久保常晴・野村幸希 1965 「埼玉県野原古墳群の調査－北武蔵における群集墳の
一様相について」日本考古学協会 第31回総会研究発表要旨
坂詰秀一・他 1969 「埼玉県大里郡野原古墳群」『日本考古学年報』17
- 44 a. 金井塚良一 1975 「比企地方の古墳群の形成」『吉見百穴横穴墓群の研究』
b. 金井塚良一 1976 「北武蔵の古墳群と渡米系氏族吉志氏の動向」『北武蔵考古学資料図鑑』
c. 原島礼二 1978 『東松山市と周辺の古代』東松山市史編纂調査報告 第13集
- 45 新井 端 1988 『本田・東台Ⅱ・上前原』江南町文化財調査報告 第8集
- 46 金子真土 他 1987 『埼玉の古代窯業調査報告書』 埼玉県立歴史資料館
- 47 渡辺 一 他 1988 『鳩山窯跡群Ⅰ』鳩山遺跡群発掘調査報告書 第1冊
- 48 今井 宏 他 1985 「赤沼第14支群の発掘」『研究紀要』 第7号 埼玉県立歴史資料館
- 49 金子真土 1982 「北武蔵の須恵器－7・8世紀の様相について－」『研究紀要』 第4号
- 50 市川 修 他 1977 「田中前遺跡」 埼玉県遺跡調査会報告書 第32集
- 51 長谷川厚 他 1980 『大久保Ⅰ』早稲田大学本庄校地方文化財調査報告 1
- 52 浅野春樹 他 1986 『古代末期～中世における在地系土器の諸問題』「神奈川考古 第21号」
- 53 綿貫綾子 他 1986 文-52に同
- 54 a. 高村弘毅・寺田稔・山口祐之・池本啓一・樋口政男・高橋健・辻本一美・上原富二男・
植田芳郎・保坂邦之・1979 「北埼玉地域の自然環境について(第1報)」立正大学北埼玉地
域研究センター年報第2号 同「(第2報)」第4号
b. 堀口万吉 1980 「埼玉の地形と地質」埼玉県市町村誌 第20号
c. 埼玉県 1974 「土地分類基本調査・熊谷」
- 55 石岡憲雄 他 1981 『六反田』岡部町教育委員会
- 56 石坂 茂 他 1986 『荒砥北原・今井神社古墳・荒砥青柳』群馬県教育委員会

圖 版

真 寫 上 空 遺 跡 西 塩



第 23 号 住 居 跡

第23号住居跡・同カマド跡





第1図 塩西Ⅱ遺跡・遺跡周辺空中写真



第2图 塩西Ⅱ第1号住居跡



第3図 塩西Ⅱ第4号住居跡・第3号住居跡



第4図 塩西Ⅱ第4号住居跡・埋没谷1



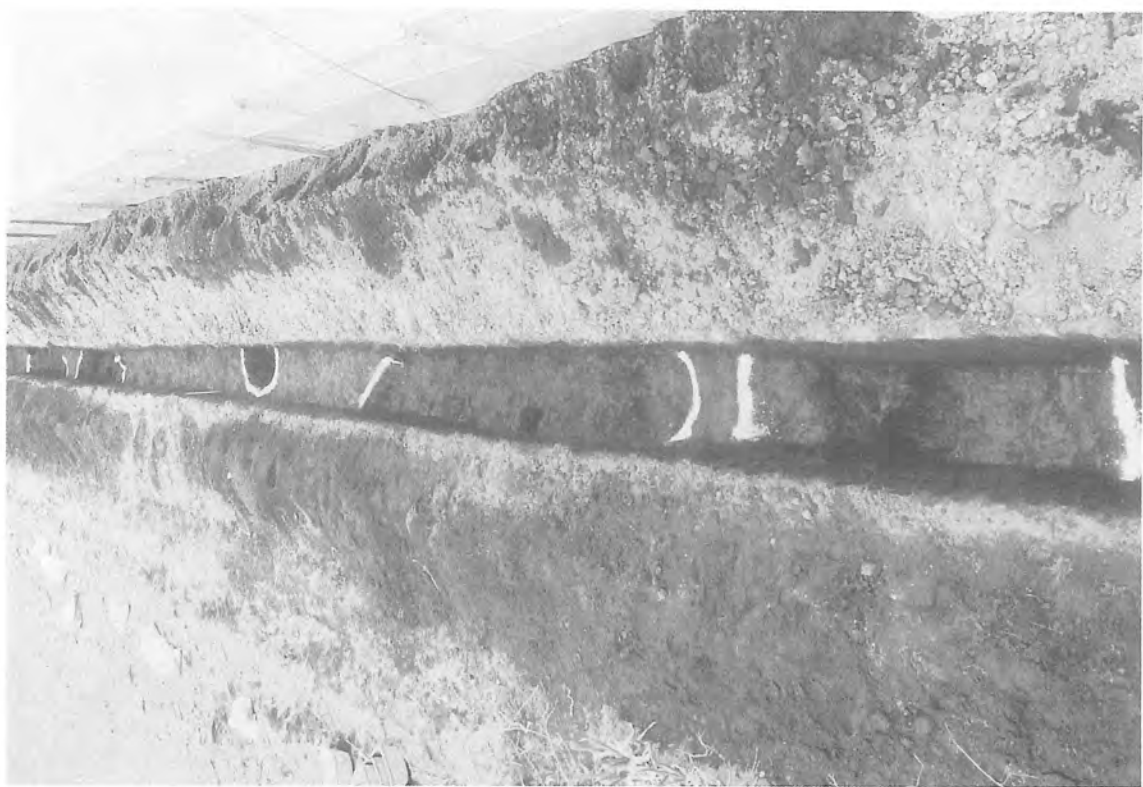
第 5 図 塩西Ⅱ溝・第11号住居跡完掘状態



第 6 図 塩西Ⅱ埋没谷 1・祠跡完掘状況



第 7 図 塩西Ⅱ第 1 号住居跡床下土壌土層・掘立柱痕跡



第 8 図 塩西Ⅱ第 9 号住居跡・第13～15号住居跡



第9図 塩西Ⅱ第17号住居跡～20号住居跡トレンチ・第18号～20号住居跡



第10図 塩西Ⅱ 常安寺館土塁



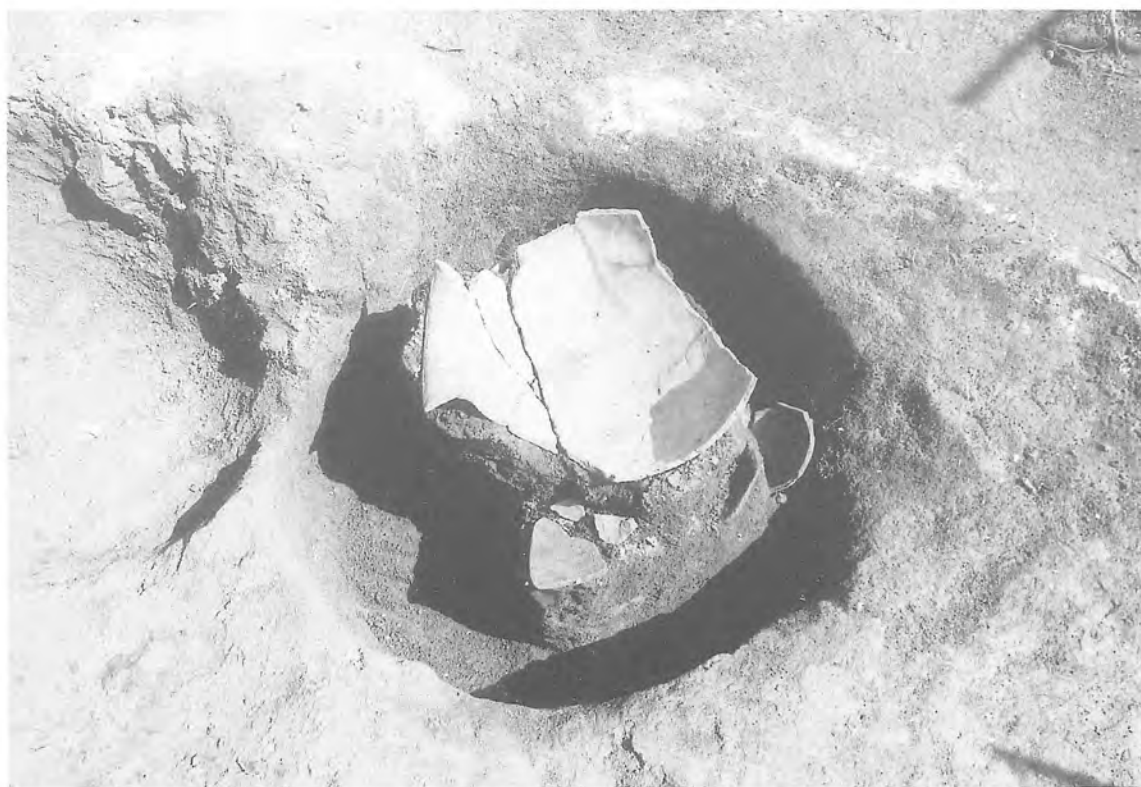
第11図 塩西Ⅱ 2号井戸トレンチ・埋没谷1遺物出土状態



第12図 塩西Ⅱ 2号井戸裏込石組・土層



第13図 塩西Ⅱ第21～22号住居跡・発掘作業風景



第14図 塩西Ⅱ第21号住居跡・遺物出土状態



第15図 塩西Ⅱ第16号住居跡・22号住居跡



第16图 塩西Ⅱ第23号住居跡



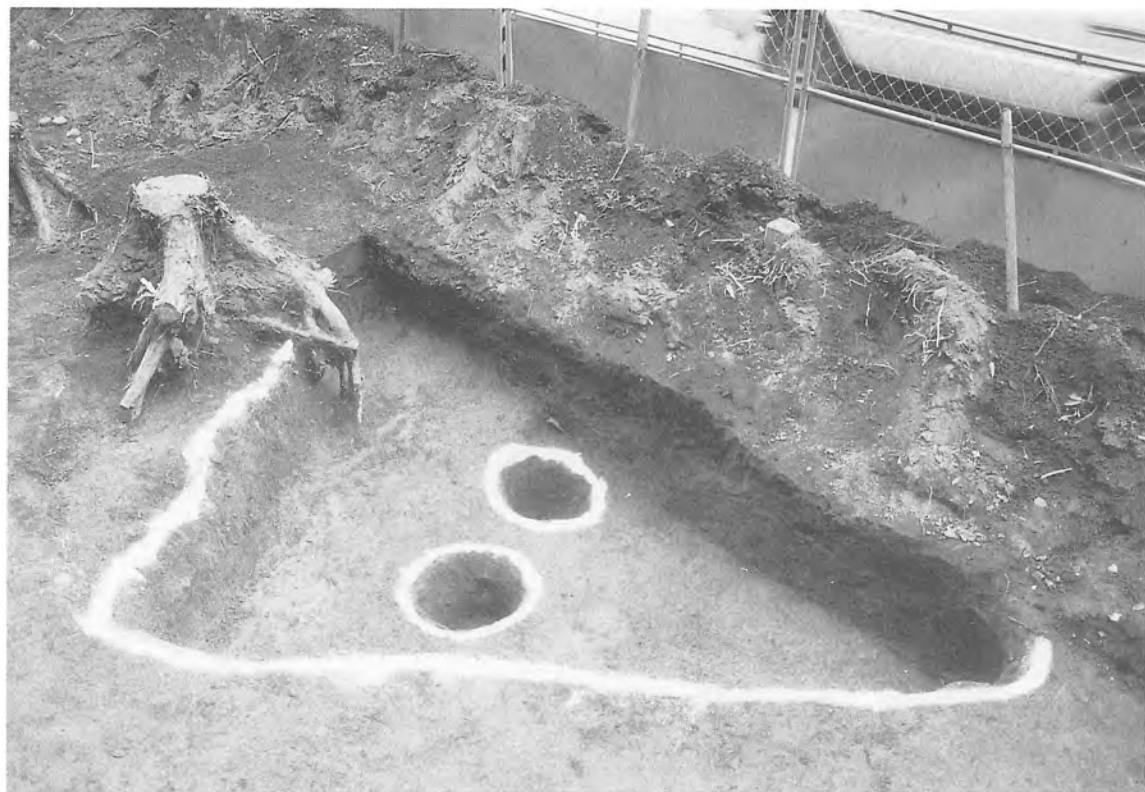
第17図 塩西Ⅱ第23号住居跡・カマド跡



第18図 塩西Ⅱ第23号住居跡・カマド跡



第19図 塩西Ⅱ第23号住居跡・カマド跡 発掘作業風景



第20図 塩西Ⅱ第24号住居跡・焼土壇



第21図 塩西Ⅱ第25号住居跡・埋没谷4



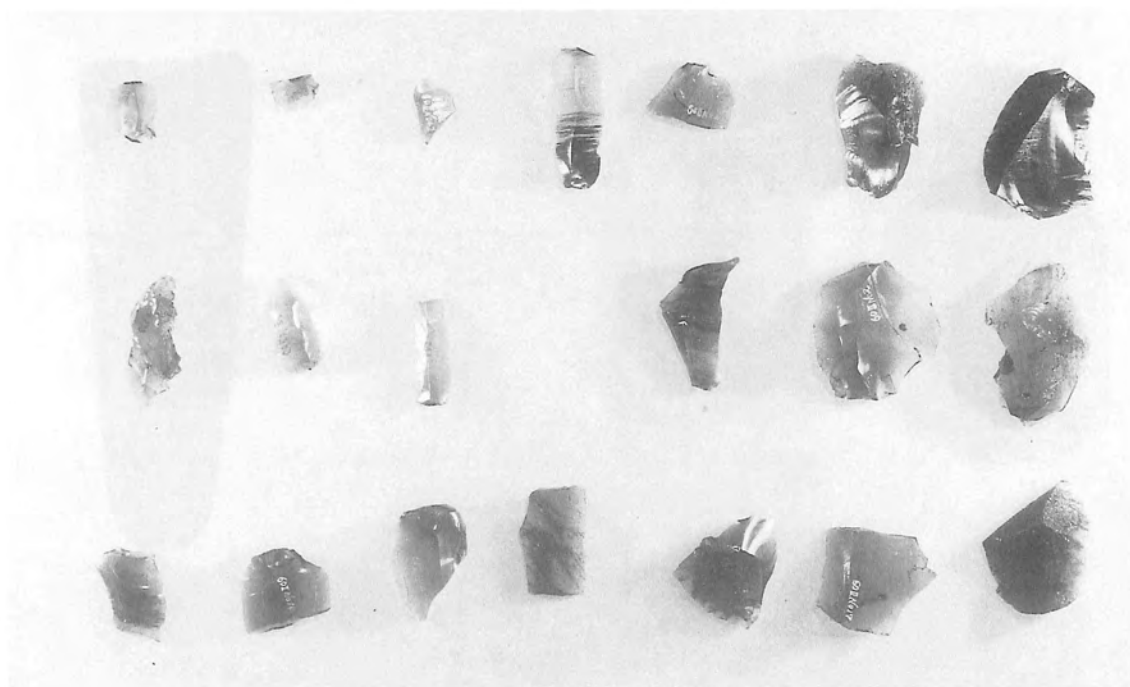
第22図 塩古墳群Ⅱ－4号墳・埋没谷Ⅳトレンチ



第23図 塩西Ⅱ第1号～4号住居跡の調査・防護柵の効果



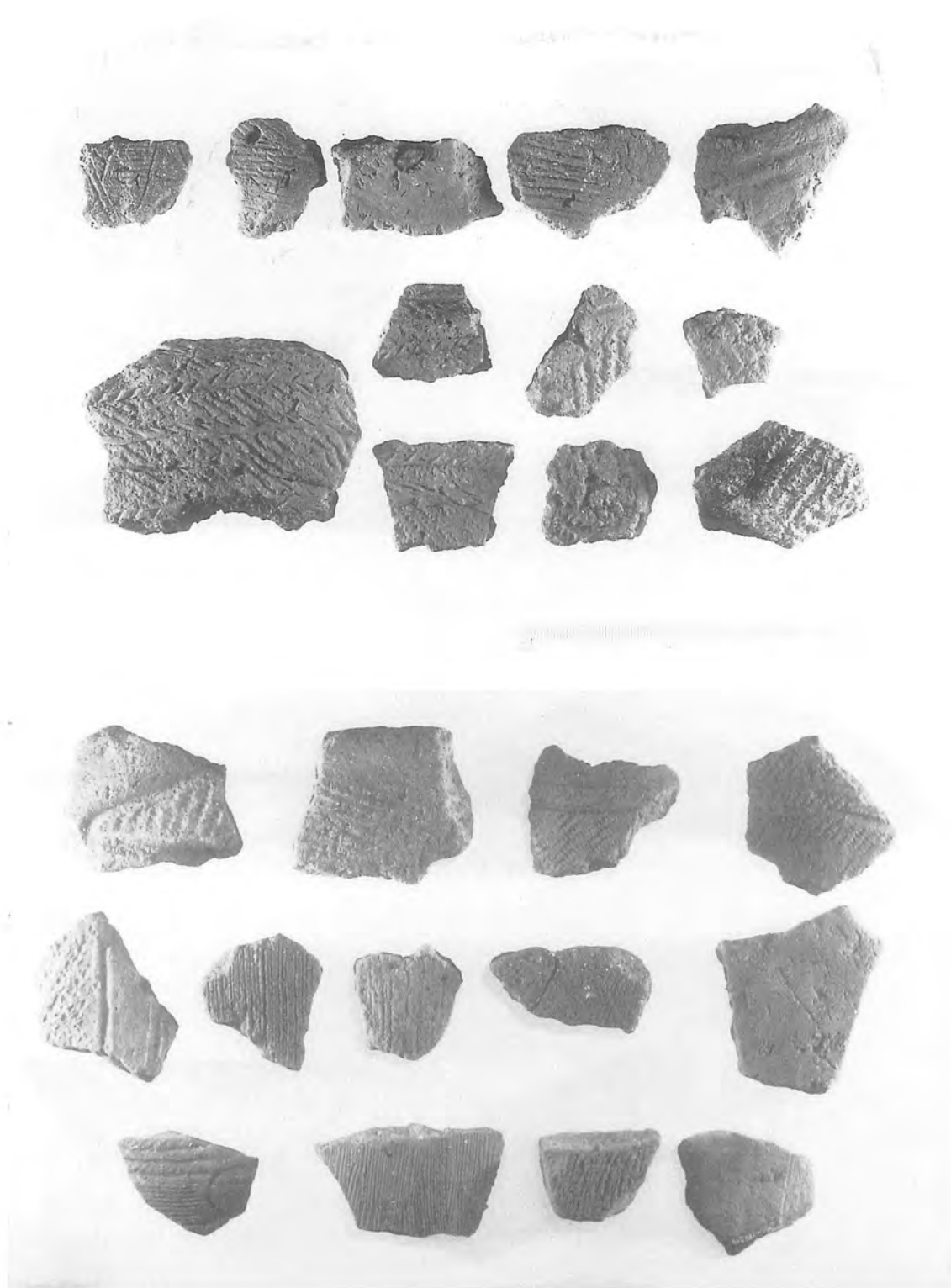
第24図 塩西Ⅱ第5号～6号住居跡



第25図 塩西Ⅱ遺跡出土黒曜石・剝片



第26图 塩西Ⅱ遺跡出土石器



第27図 塩西Ⅱ遺跡出土縄文土器



1-4



3-5



3-1



7-1 |



1-18



7-2



7-4

第28図 塩西Ⅱ遺跡出土土器



6-5



6-6



6-2



6-4



6-3



6-10



6-12



6-11



16-1



18-3



21-5



22-4



22-6



24-1



第30図 塩西Ⅱ遺跡出土土器



23-2



23-3



23-1



23-5



23-6



23-10



23-7



23-9



23-8



第31図 塩西Ⅱ遺跡出土遺物



埋 1 - 2



埋 1 - 5



埋 1 - 6



埋 1 - 3



埋 1 - 8



埋 1 - 7



埋 1 - 15



埋 1 - 23



埋 1 - 20



埋 1 - 43



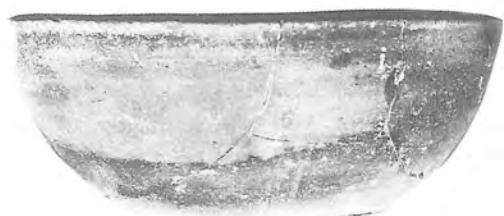
埋 1 - 21



埋 1 -11



埋 1 -9



埋 1 -12



埋 1 -10



埋 1 -16



埋 1 -24



埋 1 -22



埋 1 -2



埋 1 -17



埋 1 -25



埋 1 -29



埋 1 -19



1-6



3-5



6-13



6-3



7-1



7-2



7-6



7-9



16-1



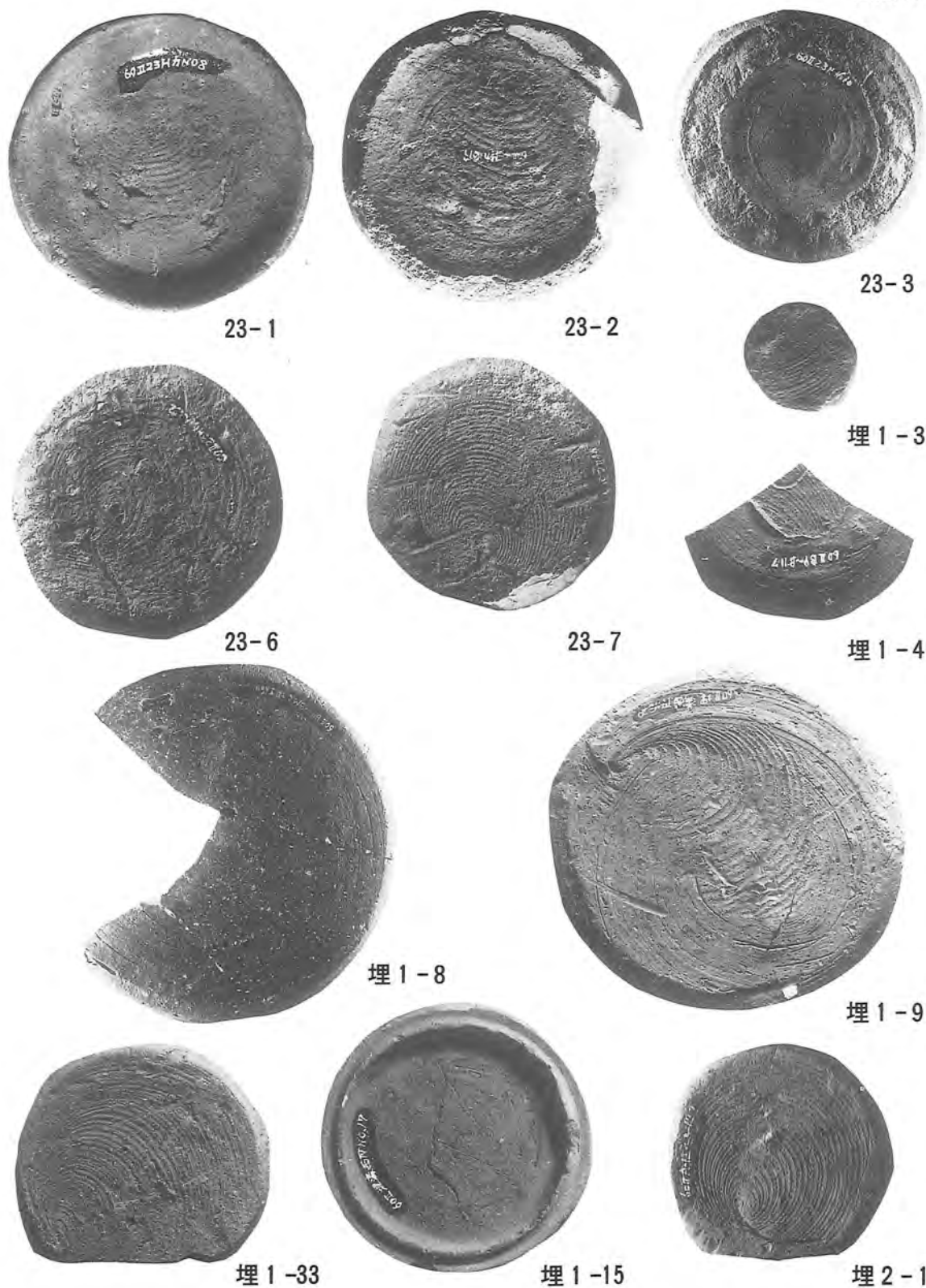
17-1



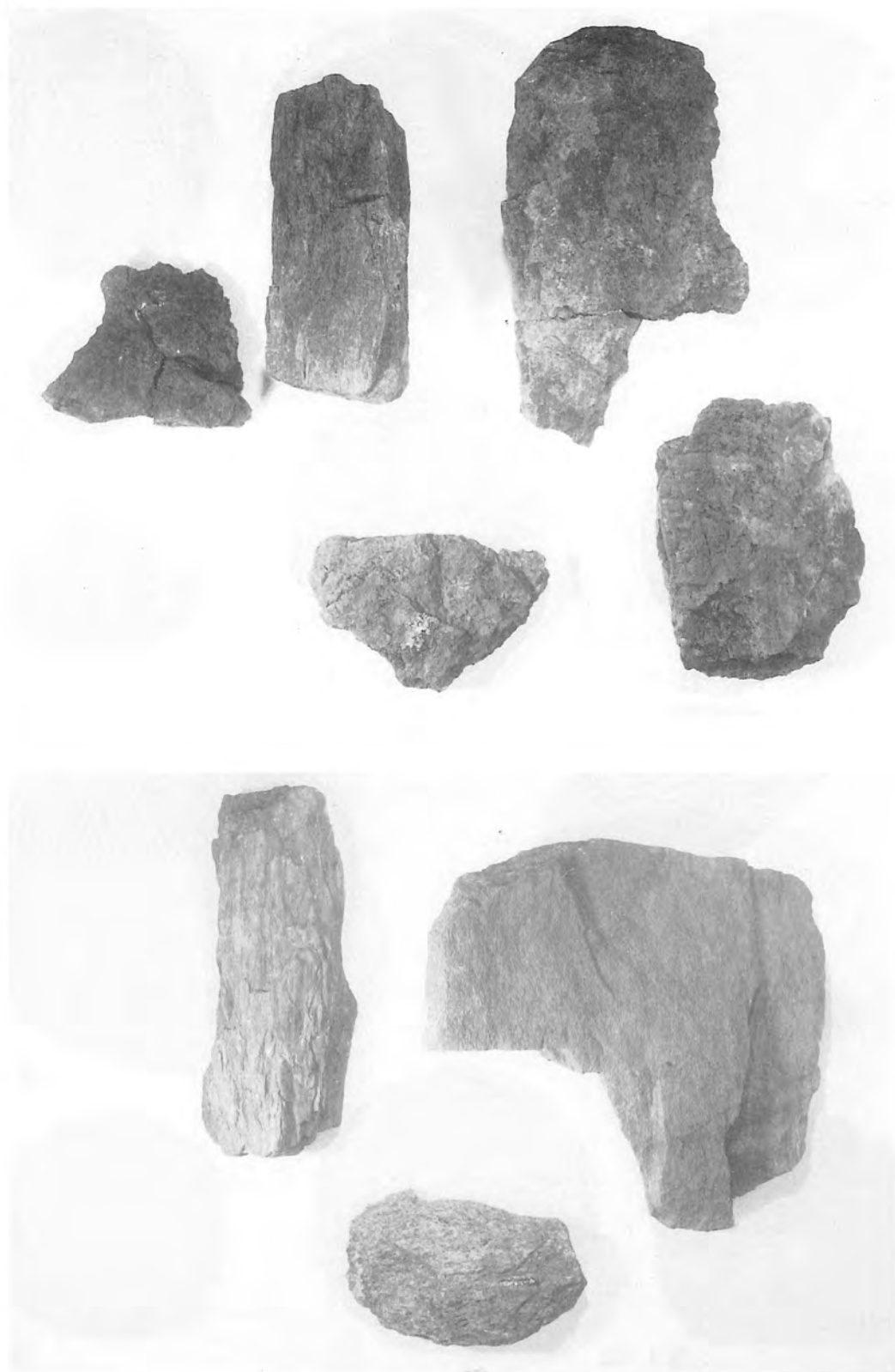
埋 1-32



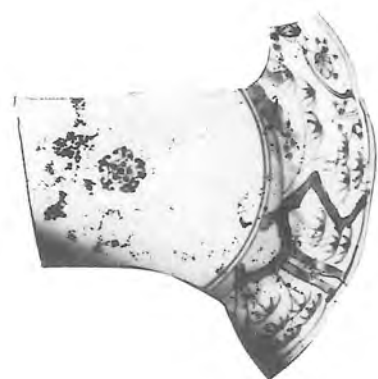
20-1



第35図 塩西Ⅱ遺跡出土土器底部



第36图 塩西Ⅱ第23号住居跡出土石材



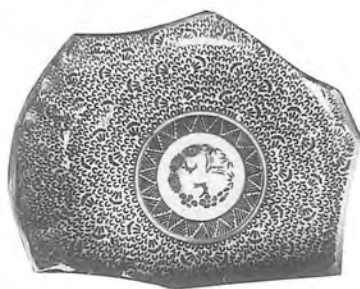
22



25



27



23



29



30



3



18

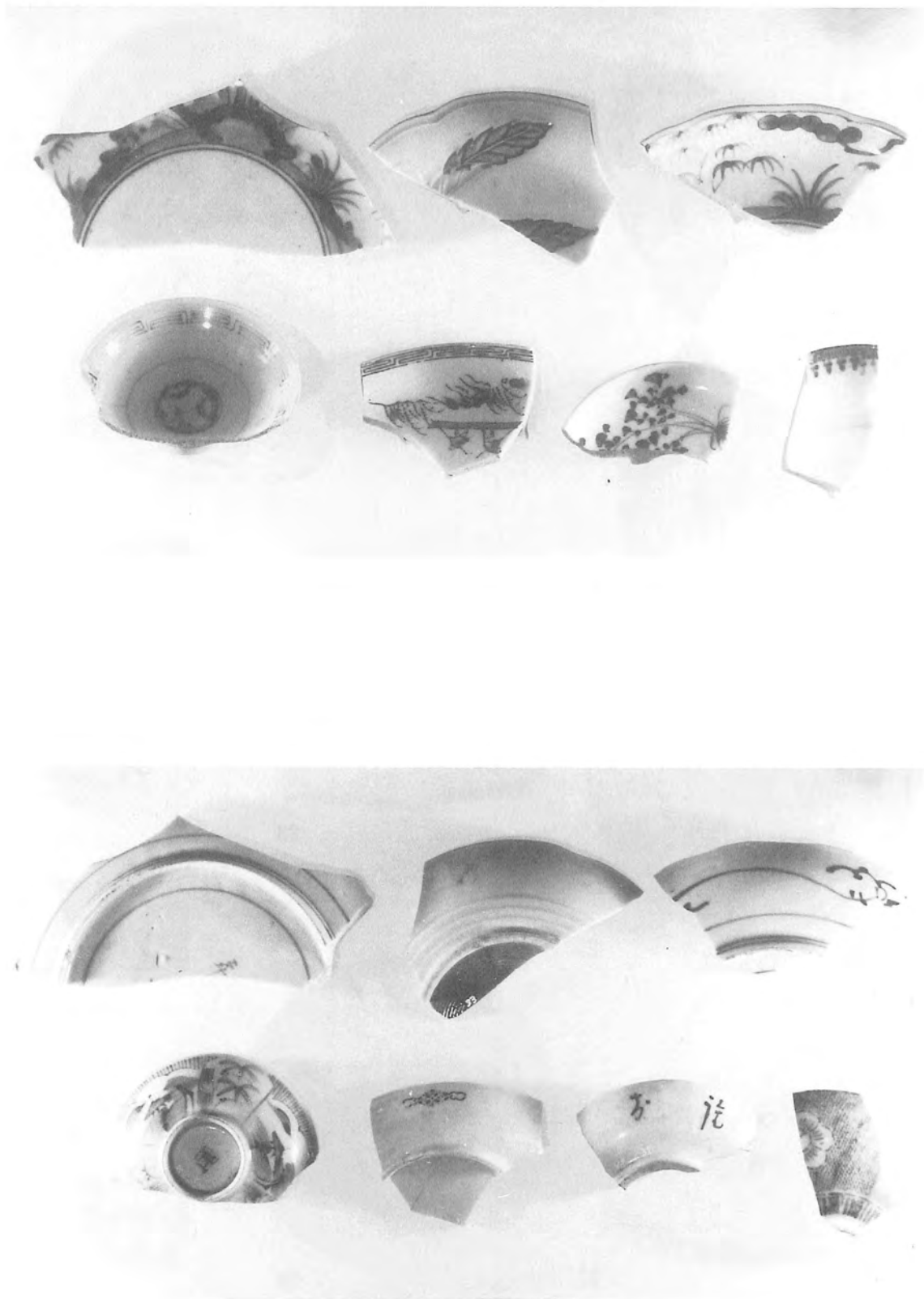


11



13

第37图 塩西Ⅱ遺跡出土陶磁器



第38图 塩西Ⅱ遺跡出土陶磁器



44



43



31



45



34



48

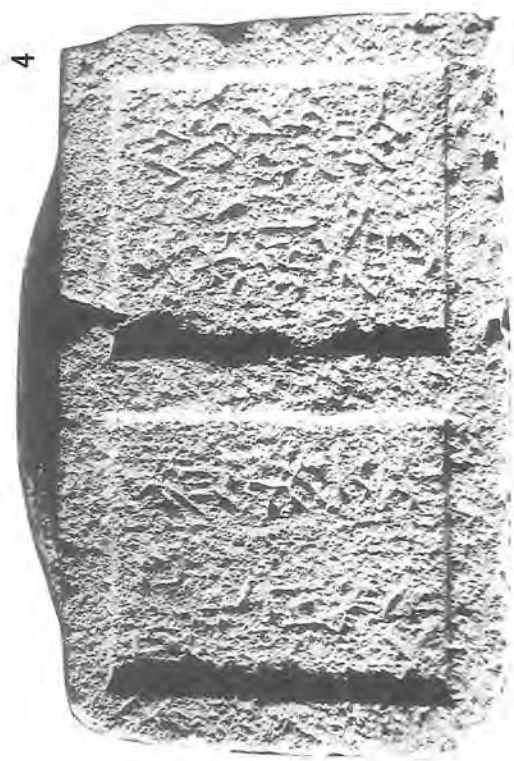


46



47

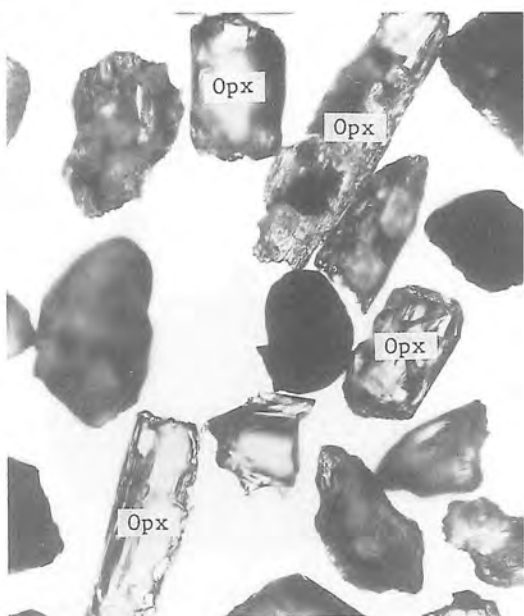
第39図 塩西Ⅱ遺跡出土陶磁器



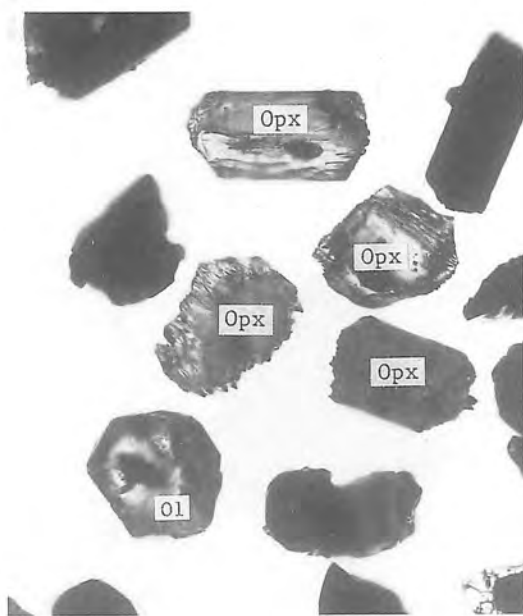
第40图 常安寺館出土 宝篋印塔基部



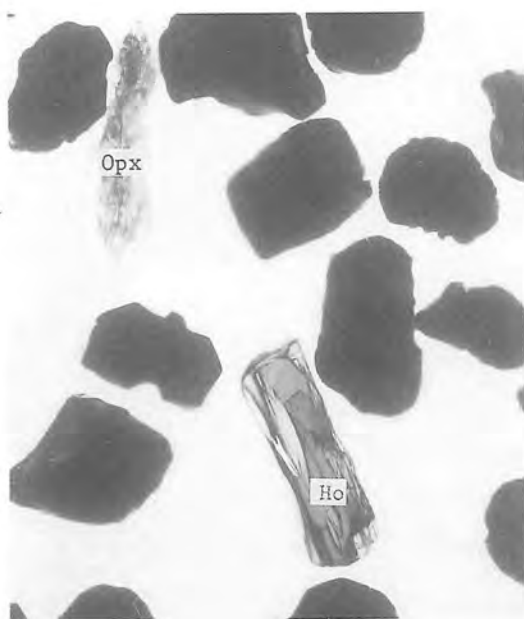
第41図 塩西Ⅱ遺跡出土遺物・作業風景



A地点 試料No.1
(ネガNo.13)



A地点 試料No.20
(ネガNo.15)



B地点 試料No.1
(ネガNo.17)



UGの火山ガラス
A地点 試料No.9 (ネガNo.14)

Ol : カンラン石. Opx : 斜方輝石. Ho : 角閃石. 0.1 mm



平成元年 3 月 25 日印刷

平成元年 3 月 31 日発行

江南町文化財調査報告第 9 集

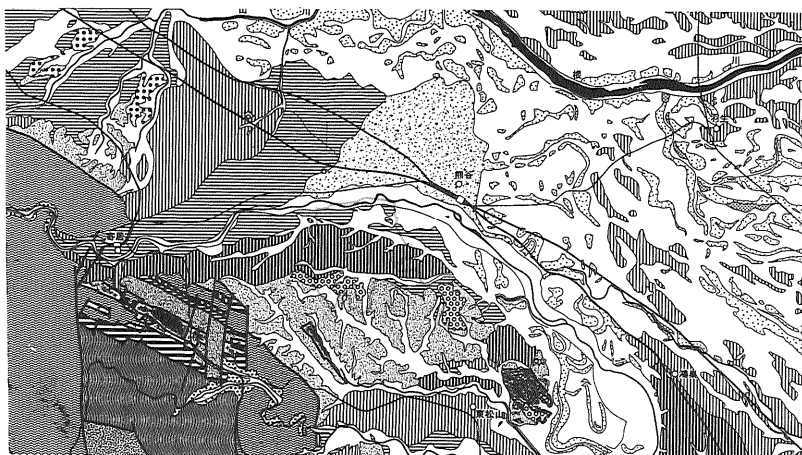
塩西遺跡Ⅱ発掘調査報告書

編集・発行 千360-01 埼玉県大里郡江南町大字柴9番地1号
江南町教育委員会
TEL (0485) 36-1521(大代表)

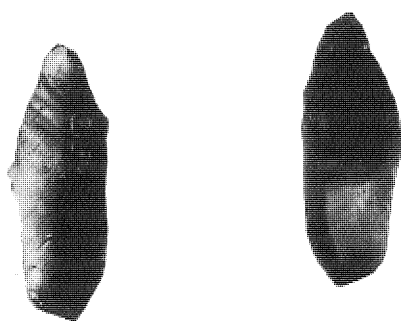
印刷・製本 千360 埼玉県熊谷市宮町2-72
関印刷株式会社
TEL (0485) 21-0237(代表)
FAX (0485) 25-1596

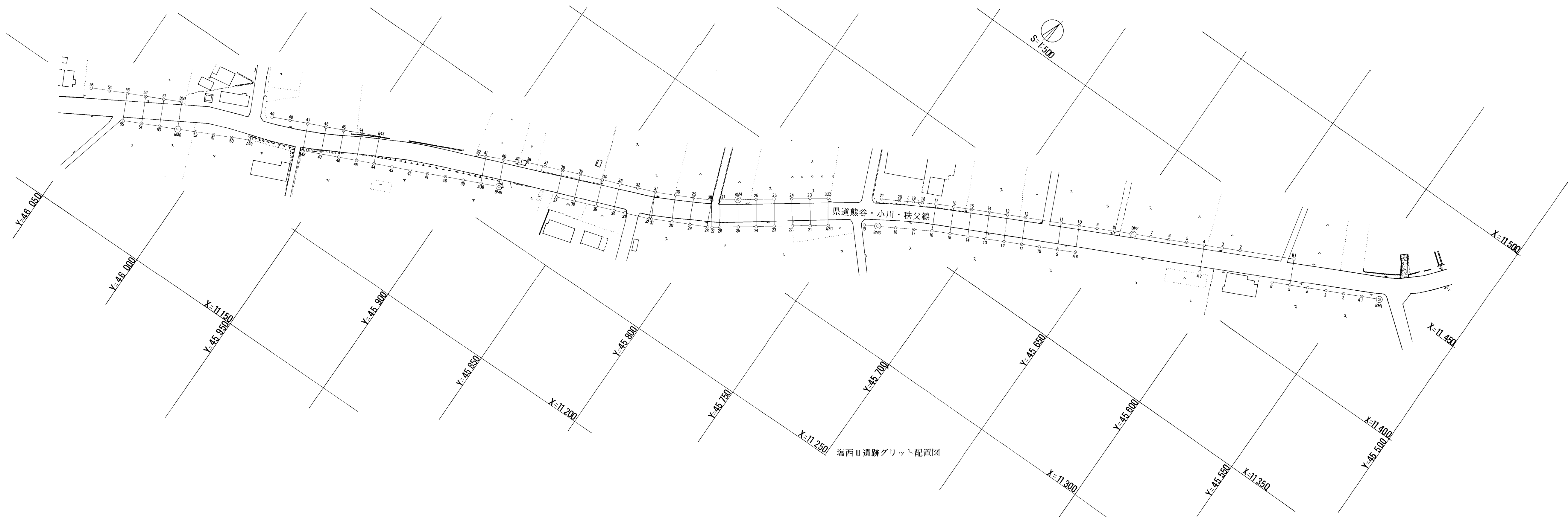
江南町文化財調査報告書 第9集(塩西Ⅱ) 正誤表

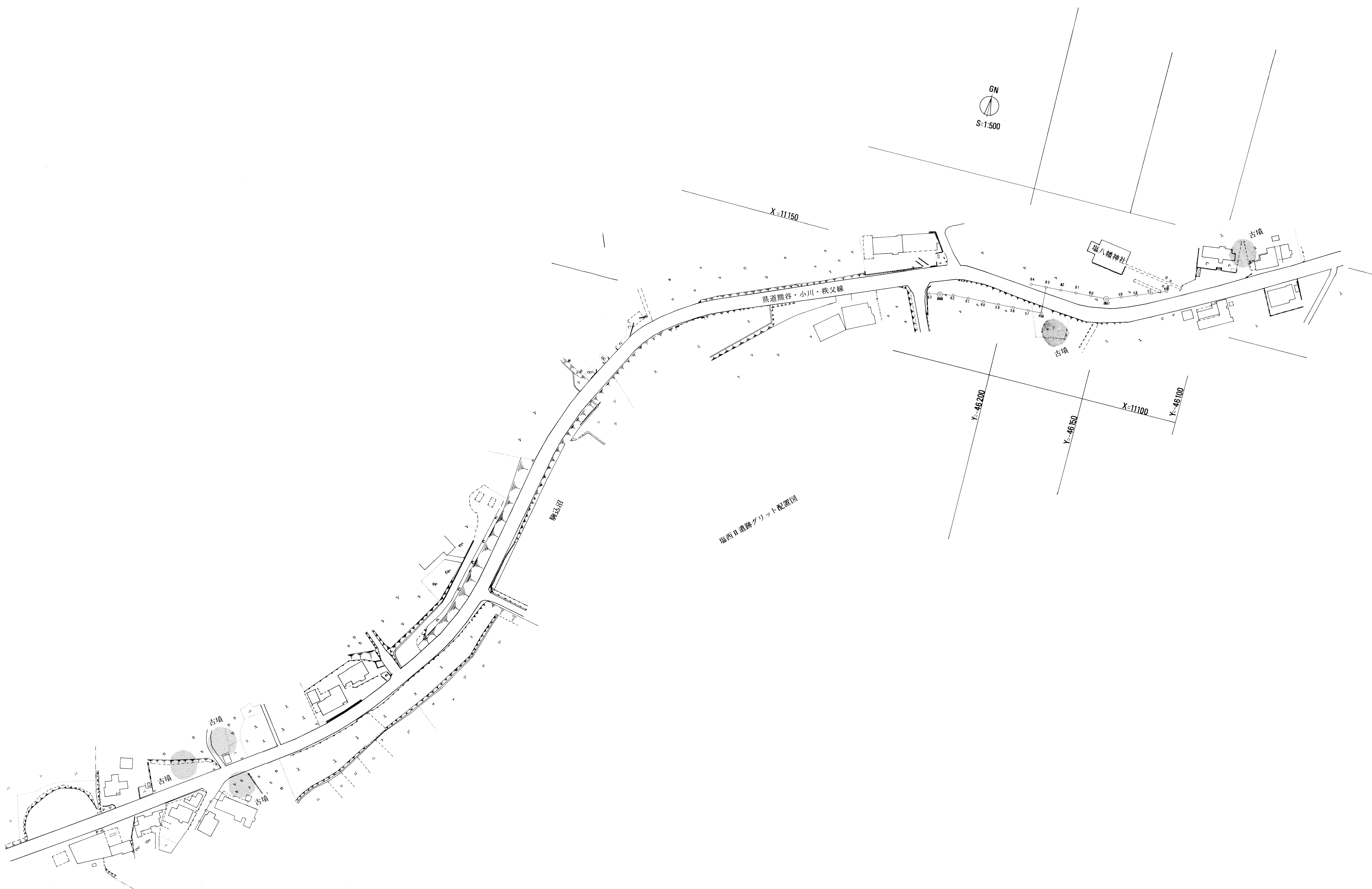
ページ	行数	誤	正
15	7	(第5図) (第5図) 第3図	第5図
37	26	N- ° -E	N-86° -E
45	24	B-	B-57
55	27	BM、A	BM8、A-56
図版30		右下の番号なし	23-14

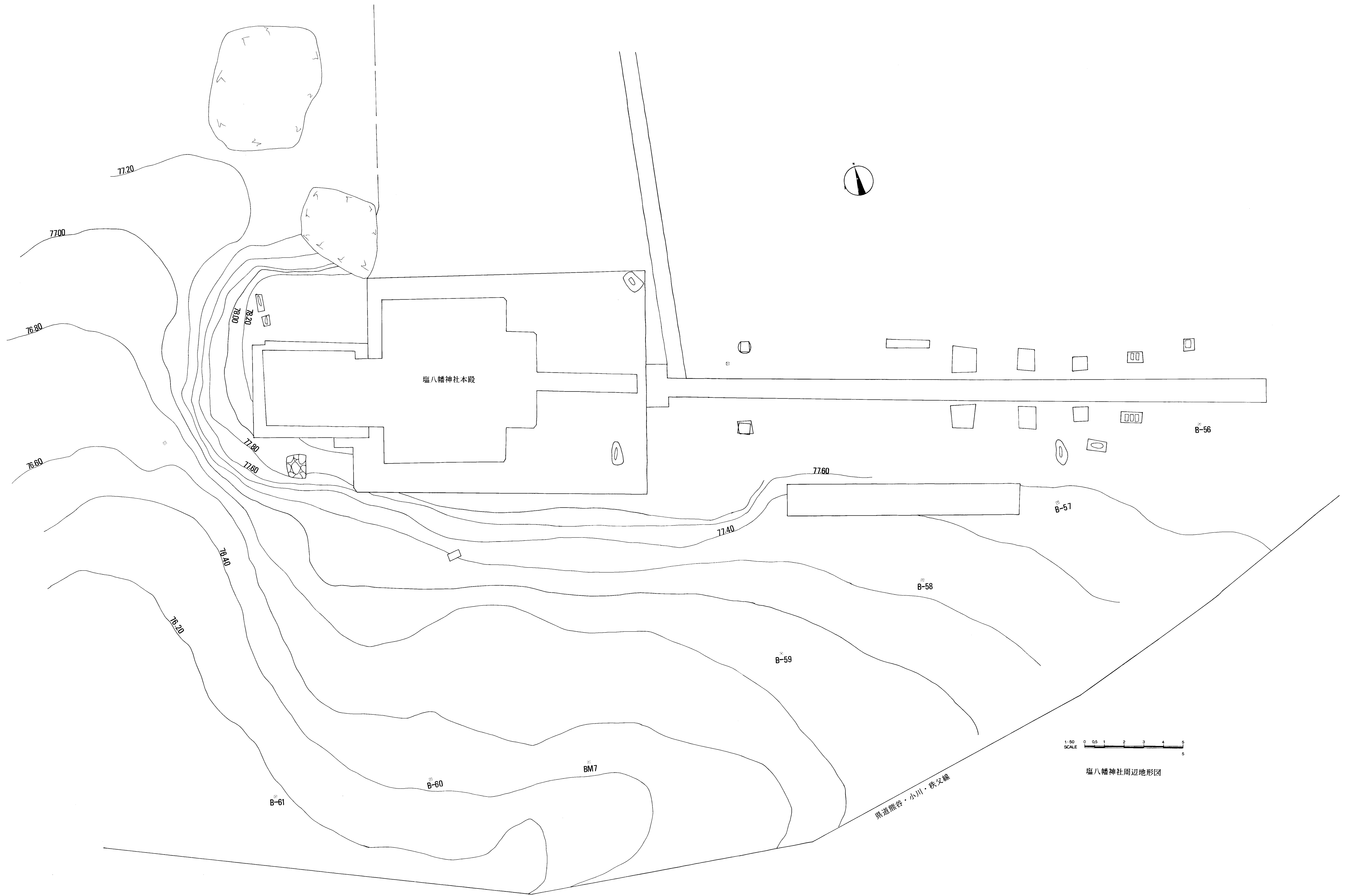


第4図 江南町の地質図









塩八幡神社本殿

B-56

B-57

B-58

B-59

BM7

B-60

B-61

県道熊谷・小川・秩父線

1:50
SCALE

塩八幡神社周辺地形図

